

江別市

ついでしかり

対雁2遺跡(4)

—石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成13・14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡風景（新石器人遺跡より） N→S



調査風景 S→N



地層断面・南北ライン (65-148-E~68-148-E) NE→SW



地層断面・東西ライン (67-144~67-145) NE→SW



石製品・土製品



クマと見られる土製品



クマと見られる土製品

例 言

- 1 本書は、石狩川改修工事に伴い財団法人北海道埋蔵文化財センターが江別市対雁2遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。対雁2遺跡の調査報告書として4冊目となる。
- 2 本書は平成13・14年度の調査成果を収録し、発掘範囲の重複する平成11年度調査成果の一部も改めて検討の上再録している。11・13年度成果の一部は既刊の報告書に発表したが、本書の内容を正式の報告とする。
- 3 調査は当財団第2調査部第5調査課(13年度、課長三浦正人)・同第4調査課(14年度、課長岡)が担当した。同課の調査員三浦・鈴木 信・西脇対名夫・古田裕史洋・酒井秀治が調査業務を分担し、その指示のもと財団臨時職員が作業にあたった。
- 4 当財団が酪農学園大学環境システム学部の「地域実習」を受け入れたことに伴い平成13・14年9月に延べ10名の同学部生が、また平成14年7月に北海学園大学人文学部生1名が同学部の「ボランティア活動論」授業の実習として、それぞれ無償で発掘作業を補助した。
- 5 平成13・14年度の¹⁴C年代測定は株式会社地球科学研究所、古環境調査はバリノ・サーヴェイ株式会社、また14年度測量業務の一部は株式会社シン技術コンサル、遺物実測図作成業務の一部は株式会社日立エンジニアリングに委託しておこなった。
- 6 本書の執筆及び図表・写真の構成は目次に示した分担で調査員がおこない、同一項目の執筆者が複数の場合は本文中に括弧で文責を示した。編集は西脇が担当した。
- 7 本文中では主に文献の編者を表記する際に以下のような省略形を用いた。

石建：北海道開発局石狩川開発建設部、財団遺埋文：財団法人北海道埋蔵文化財センター、
教委：教育委員会、埋文：埋蔵文化財センターまたは埋蔵文化財調査センター

- 8 調査の実施にあたり下記の諸機関・諸氏の御教示・御協力を頂いたことを記して感謝する。
石狩川開発建設部江別河川事務所、江別市建設部土木事務所、江別市教育委員会、
独立行政法人北海道開発土木研究所、北海学園大学人文学部、北海道大学埋蔵文化財調査室、
酪農学園大学環境システム学部

青木 誠、青野友哉、赤石慎三、秋山洋二、大野哲也、飯田 基、石井 淳、石川 朗、
石川直章、石橋孝夫、石本省三、出穂雅実、伊藤兼平、稲垣和幸、乾 哲也、乾 芳宏、
上野秀一、右代啓視、白杵 勲、卜部信臣、上屋真一、遠藤龍蔵、大島直行、大谷敏二、
大津 直、大沼忠春、大林千春、大矢義明、葛西智義、柏木大延、加藤邦雄、加藤博文、
金盛典夫、兼平一志、川内谷 修、北澤 実、君 尹彦、木村英明、工藤研治、工藤 肇、
工藤義衛、工藤雅樹、熊木哲朗、小林幸雄、小杉 康、今野公顯、斎野裕彦、榎原正文、
坂本真弓、佐藤一志、佐藤和利、佐藤智雄、佐藤山紀男、佐藤嘉広、澤田 健、設楽博巳、
柴田信一、島原弘征、鈴木琢也、杉浦重信、瀬川拓郎、関 信行、関 秀志、関矢新一郎、
仙庭伸久、岡部真幸、高倉 純、高瀬克範、高橋 理、高橋和樹、高橋信一、高橋正勝、
高橋 誠、高間和儀、武田 修、田才雅彦、田中和夫、田中哲郎、田中利一、田中 實、
田村公一、田村俊之、丹治篤嘉、千葉英一、角田隆志、椿坂恭代、鶴丸俊明、寺崎廣史、

友田哲弘、豊田宏良、豊田寛大、直井孝一、長崎潤一、長町章弘、成田滋彦、西 幸隆、野中一宏、野村 崇、野村祐一、羽賀薫二、長谷山隆博、林 謙作、平川善祥、深澤芳樹、福田正宏、藤井誠二、松田 功、松田淳子、松田 猛、松谷純一、三浦孝一、三浦武司、宮 宏明、宗像公司、森 淳、森 秀之、森岡健治、森田知忠、守屋豊人、安井幸雄、藪中剛司、山田栢郎、山田昌久、山木 蔵、横須賀倫彦、吉田玄一、渡辺眞志、波部 学

報告書抄録

ふりがな	えべつし ついしかりにいせきかつこし							
書名	江別市 対雁2遺跡 (4)							
副書名	石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	財団法人北海道埋蔵文化センター調査報告書							
シリーズ番号	第193集							
編著者名	三浦正人・鈴木 信・西脇対名大・吉田裕史洋・酒井秀治							
編集機関	財団法人北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 江別市西野幌 685-1 電話(011)386-3231 Eメール mail@domaibun.or.jp							
発行機関	財団法人北海道埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成15年(西暦2003)年3月28日							
収録遺跡	所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
対雁2遺跡	江別市工業町28番地	01217	A-02-110	43度07分45秒前後	141度31分04秒前後	19990601~19990930 20010508~20011031 20020507~20021031	3,450 m ²	河川改修に伴う記録保存
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
対雁2遺跡	遺物包含地	縄文時代 晩期後葉、 続縄文時代 前期	土坑 焼土	135 792	土器 石器 動物形土製品	吉自然堤防中に形成された生活面245単位にわたる多層遺跡		

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登録番号。経緯度は世界測地系による。

目次

口絵

例言

報告書抄録

目次

I	調査の経緯	(三浦)	1
II	調査の方法		
1	調査範囲	(酒井)	7
2	土工	(酒井)	9
3	測量と記録	(酒井・吉田・西脇)	11
4	資料整理	(酒井・吉田・西脇)	13
5	保管	(酒井)	16
III	遺跡の環境	(西脇)	17
IV	遺構		
1	記載の方法	(酒井・西脇)	55
2	土坑	(酒井・鈴木・西脇・吉田)	57
3	焼土	(酒井)	90
4	集石・剥片集中・細円礫集中	(酒井)	137
V	遺物		
1	土器	(西脇)	167
2	石器等・石製品・土製品	(酒井)	261
3	焼成粘土塊	(西脇)	272
VI	自然科学的分析		
1	年代測定結果	(株式会社地球科学研究所・酒井)	297
2	対応2遺跡の自然科学的分析	(バリノ・サーヴェイ株式会社・西脇)	300
	引用文献		313
	写真図版	(吉田)	図版 II-1~V-22

挿入目次

I 調査の経緯

図 I-1 各年度の発掘範囲	4
----------------	---

II 調査の方法

図 II-1 発掘区の設定 (1)	6
図 II-2 発掘区の設定 (2)	7
図 II-3 掘削範囲	10

III 遺跡の環境

図 III-1 遺跡の位置	17
図 III-2 遺跡付近の地形	18
図 III-3 治水地形分類と遺跡の位置	20
図 III-4 地層断面図の変化	25
図 III-5 67 線土地層断面	27・29
図 III-6 67・69 線土地層断面	31・33・35・37
図 III-7 153 線半土地層断面	39
図 III-8 156 線半土地層断面	41
図 III-9 141 線・148 線半土地層断面	43
図 III-10 重機塚掘坑地層断面	51

IV 遺構

図 IV-1 土坑の位置	57
図 IV-2 土坑 (1)	59
図 IV-3 土坑 (2)	60
図 IV-4 土坑 (3)	63
図 IV-5 土坑 (4)	64
図 IV-6 土坑 (5)	67
図 IV-7 土坑 (6)	68
図 IV-8 土坑 (7)	71
図 IV-9 土坑 (8)	72
図 IV-10 土坑 (9)	75
図 IV-11 土坑 (10)	76
図 IV-12 土坑 (11)	79
図 IV-13 土坑 (12)	80
図 IV-14 土坑 (13)	83
図 IV-15 土坑 (14)	84
図 IV-16 土坑 (15)	87
図 IV-17 土坑 (16)	88
図 IV-18 焼土の分布	91
図 IV-19 焼土 (1)	92
図 IV-20 焼土 (2)	93
図 IV-21 焼土 (3)	94

図 IV-22 焼土 (4)	95
図 IV-23 焼土 (5)	96
図 IV-24 焼土 (6)	97
図 IV-25 焼土 (7)	98
図 IV-26 焼土 (8)	99
図 IV-27 焼土 (9)	100
図 IV-28 焼土 (10)	101
図 IV-29 焼土 (11)	102
図 IV-30 焼土 (12)	103
図 IV-31 焼土 (13)	104
図 IV-32 焼土 (14)	105
図 IV-33 焼土 (15)	106
図 IV-34 焼土 (16)	107
図 IV-35 焼土 (17)	108
図 IV-36 焼土 (18)	109
図 IV-37 焼土 (19)	110
図 IV-38 焼土 (20)	111
図 IV-39 焼土 (21)	112
図 IV-40 焼土 (22)	113
図 IV-41 焼土 (23)	114
図 IV-42 焼土 (24)	115
図 IV-43 焼土 (25)	116
図 IV-44 焼土 (26)	117
図 IV-45 焼土 (27)	118
図 IV-46 焼土 (28)	119
図 IV-47 焼土 (29)	120
図 IV-48 焼土 (30)	121
図 IV-49 焼土 (31)	122
図 IV-50 焼土 (32)	123
図 IV-51 焼土 (33)	124
図 IV-52 焼土 (34)	125
図 IV-53 焼土 (35)	126
図 IV-54 焼土 (36)	127
図 IV-55 焼土 (37)	128
図 IV-56 焼土 (38)	129
図 IV-57 焼土 (39)	130
図 IV-58 焼土 (40)	131
図 IV-59 焼土 (41)	132
図 IV-60 焼土 (42)	133
図 IV-61 焼土 (43)	134
図 IV-62 焼土 (44)	135
図 IV-63 焼土断面・集石	136

V 遺物

図 V-1 縄文土器 (1)	169
図 V-2 縄文土器 (2)	170
図 V-3 縄文土器 (3)	171
図 V-4 縄文土器 (4)	172

図 V-5	縄文土器 (5)	173
図 V-6	縄文土器 (6)	174
図 V-7	縄文土器 (7)	175
図 V-8	縄文土器 (8)	176
図 V-9	縄文土器 (9)	177
図 V-10	縄文土器 (10)	178
図 V-11	縄文土器 (11)	179
図 V-12	縄文土器 (12)	180
図 V-13	縄文土器 (13)	181
図 V-14	縄文土器 (14)	182
図 V-15	縄文土器 (15)	183
図 V-16	縄文土器 (16)	184
図 V-17	縄文土器 (17)	185
図 V-18	縄文土器 (18)	186
図 V-19	縄文土器 (19)	187
図 V-20	縄文土器 (20)	188
図 V-21	縄文土器 (21)	189
図 V-22	縄文土器 (22)	190
図 V-23	縄文土器 (23)	191
図 V-24	縄文土器 (24)	192
図 V-25	縄文土器 (25)	193
図 V-26	縄文土器 (26)	194
図 V-27	縄文土器 (27)	195
図 V-28	縄文土器 (28)	196
図 V-29	縄文土器 (29)	197
図 V-30	縄文土器 (30)	198
図 V-31	縄文土器 (31)	199
図 V-32	縄文土器 (32)	200
図 V-33	縄文土器 (33)	201
図 V-34	縄文土器 (34)	202
図 V-35	縄文土器 (35)	203
図 V-36	縄文土器 (36)	204
図 V-37	縄文土器 (37)	205
図 V-38	縄文土器 (38)	206
図 V-39	縄文土器 (39)	207
図 V-40	縄文土器 (40)	208
図 V-41	縄文土器 (41)	209
図 V-42	縄文土器 (42)	210
図 V-43	縄文土器 (43)	211
図 V-44	縄文土器 (44)	212
図 V-45	縄文土器 (45)	213
図 V-46	縄文土器 (46)	214
図 V-47	縄文土器 (47)	215
図 V-48	縄文土器 (48)	216
図 V-49	縄文土器 (49)	217
図 V-50	縄文土器 (50)	218
図 V-51	縄文土器 (51)	219
図 V-52	縄文土器 (52)	220

図 V-53	縄文土器 (53)	221
図 V-54	縄文土器 (54)	222
図 V-55	縄文土器 (55)	223
図 V-56	縄文土器 (56)	224
図 V-57	縄文土器 (57)	225
図 V-58	縄文土器 (58)	226
図 V-59	縄文土器 (59)	227
図 V-60	縄文土器 (60)	228
図 V-61	縄文土器 (61)	229
図 V-62	縄文土器 (62)	230
図 V-63	縄文土器 (63)	231
図 V-64	縄文土器 (64)	232
図 V-65	縄文土器 (65)	233
図 V-66	縄文土器 (66)	234
図 V-67	縄文土器 (67)	235
図 V-68	縄文土器 (68)	236
図 V-69	縄文土器 (69)	237
図 V-70	縄文土器 (70)	238
図 V-71	縄文土器 (71)	239
図 V-72	縄文土器 (72)	240
図 V-73	縄文土器 (73)	241
図 V-74	縄文土器 (74)	242
図 V-75	縄文土器 (75)	243
図 V-76	縄文土器 (76)	244
図 V-77	縄文土器 (77)	245
図 V-78	縄文土器 (78)	246
図 V-79	縄文土器 (79)・縄文土器 (1)	247
図 V-80	縄文土器 (2)	248
図 V-81	土坑の石器等 (1)	262
図 V-82	土坑の石器等 (2)・集石の石器等 (1)	263
図 V-83	集石の石器等 (2)	264
図 V-84	焼土・包含層の石器等 (1)	265
図 V-85	焼土・包含層の石器等 (2)	267
図 V-86	焼土・包含層の石器等 (3)	268
図 V-87	焼土・包含層の石器等 (4)	270
図 V-88	焼土・包含層の石器等 (5)	271

表目次

III 遺跡の環境

表 III-1	層面一覧 (67 線以上)	44-47
表 III-2	層面一覧 (69 線以上)	48・49
表 III-3	13・14 年度層面と 11・12 年度層名の対比	53

IV 遺構

表 IV-1 生活面一覧	138-142
表 IV-2 遺構一覧	143-155
表 IV-3 遺構土壌フローテーション成果一覧	156-165

V 遺物

表 V-1 遺物集計	273-278
表 V-2 掲載土器一覧	279-293
表 V-3 各類土器の出土層位	294
表 V-4 掲載石器等一覧	295・296

VI 自然科学的分析

表 VI-1 年代測定試料一覧 (地球科学研究所実施分)	297
表 VI-2 年代測定試料一覧 (パリノ・サーヴェイ実施分)	300

写真図版目次

II 調査の方法

図版 II-1 遺跡遠景	
図版 II-2 平成 11 年度の発掘	
図版 II-3 平成 13 年度の発掘 (1)	
図版 II-4 平成 13 年度の発掘 (2)	
図版 II-5 平成 14 年度の発掘 (1)	
図版 II-6 平成 14 年度の発掘 (2)	

III 遺跡の環境

図版 III-1 地層断面 (1)	
図版 III-2 地層断面 (2)	

IV 遺構

図版 IV-1 土坑 (1)	
図版 IV-2 土坑 (2)	
図版 IV-3 土坑 (3)	
図版 IV-4 土坑 (4)	
図版 IV-5 土坑の遺物 (1)	
図版 IV-6 土坑の遺物 (1)	
図版 IV-7 土坑の遺物 (3)	
図版 IV-8 土坑の遺物 (4)	
図版 IV-9 焼土 (1)	
図版 IV-10 焼土 (2)	
図版 IV-11 焼土 (3)	

図版 IV-12 焼土 (4)	
図版 IV-13 焼土 (5)	
図版 IV-14 焼土 (6)	
図版 IV-15 焼土 (7)	
図版 IV-16 集石	
図版 IV-17 集石の遺物 (1)	
図版 IV-18 集石の遺物 (2)	

V 遺物

図版 V-1 遺物出土状況・平成 11 年度の発掘	
図版 V-2 遺物出土状況・平成 13 年度の発掘 (1)	
図版 V-3 遺物出土状況・平成 13 年度の発掘 (2)	
図版 V-4 遺物出土状況・平成 14 年度の発掘	
図版 V-5 縄文土器の個体 (1)	
図版 V-6 縄文土器の個体 (2)	
図版 V-7 縄文土器の個体 (3)	
図版 V-8 縄文土器の個体 (4)	
図版 V-9 縄文土器の個体 (5)	
図版 V-10 縄文土器の個体 (6)	
図版 V-11 縄文土器の個体 (7)	
図版 V-12 縄文土器の個体 (8)	
図版 V-13 縄文土器の個体 (9)	
図版 V-14 縄文土器の個体 (10) ・ 絞縄文土器	
図版 V-15 土器の製作技術 (1)	
図版 V-16 土器の製作技術 (2)	
図版 V-17 土器の製作技術 (3)	
図版 V-18 土器の製作技術 (4)	
図版 V-19 焼土・包含層の石器 (1)	
図版 V-20 焼土・包含層の石器 (2)	
図版 V-21 包含層の石器・土製品	
図版 V-22 焼成粘土塊	

I 調査の経緯

1 調査要項

事業名	石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査		
事業委託者	北海道開発局石狩川開発建設部		
事業受託者	財団法人北海道埋蔵文化財センター		
遺跡名	対雁2遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-02-110）		
所在地	江別市工栄町28番地（石狩川河川敷緑地）		
調査期間	平成11年5月17日～平成12年3月24日（発掘6月1日～9月30日） 平成12年4月3日～平成13年3月30日（発掘5月8日～10月31日） 平成13年4月2日～平成14年3月29日（発掘5月7日～10月31日） 平成14年4月1日～平成15年3月31日（発掘5月7日～10月31日）		
調査面積	平成11年度 2,000m ² （上層部およびトレンチ調査） 平成12年度 2,400m ² 平成13年度 1,500m ² （下層部未了） 平成14年度 3,450m ² （平成13年度着手1,500m ² の下層部を含む）		
調査体制	平成11年度		
	第2調査部長		鬼柳 彰
	同	第3調査課長	西田 茂（発掘担当者）
	同	同 主査	三浦 正人（発掘担当者）
	同	同 主任	鈴木 信（発掘担当者）
	同	同 文化財保護主事	吉田裕史洋
	同	同 文化財保護主事	酒井 秀治
	平成12年度		
	第2調査部長		鬼柳 彰
	同	第3調査課長	西田 茂（発掘担当者）
	同	同 主査	三浦 正人
	同	同 主任	鈴木 信
	同	同 文化財保護主事	吉田裕史洋（発掘担当者）
	同	同 文化財保護主事	酒井 秀治（発掘担当者）
	平成13年度		
	第2調査部長		大沼 忠春
	同	第5調査課長	三浦 正人

1 調査の経緯

第2調査部	第5調査課	主査	鈴木 信
同	同	主任	西脇対名夫 (発掘担当者)
同	同	文化財保護主事	吉田裕吏洋 (発掘担当者)
同	同	文化財保護主事	酒井 秀治 (発掘担当者)
平成14年度			
第2調査部長			西田 茂
同	第4調査課長		三浦 正人
同	同	主査	鈴木 信
同	同	主任	西脇対名夫 (発掘担当者)
同	同	文化財保護主事	吉田裕吏洋 (発掘担当者)
同	同	文化財保護主事	酒井 秀治 (発掘担当者)

2 調査に至る経緯

石狩川の治水事業は、明治時代における北海道への政策的移住民の生活が、雪解け水や大雨後の洪水によって壊滅的打撃を受けたことに端を発している。治水事業への早急な動きを決定付けたのは、移住民の増加が著しくなっていた1989(明治31)年9月の大洪水である。石狩川中下流域は空前の大出水に襲われ、石狩低地は海のようになったと云われている。同年、北海道庁に「北海道治水調査会」が設置され、その調査事業を引き継いだ技師岡崎文吉は、1909(明治42)年「石狩川治水計画調査報文」を北海道庁長官に提出。翌1910(明治43)年からの第一期拓殖計画の根幹事業として、石狩川治水事業が本格的に実施される運びとなった。

岡崎は石狩川下流域の洪水量を「対雁水測所」(現在の江別市石狩大橋地点)で測定したが、その江別市域においても築堤・護岸・掘削・浚渫などの改修工事が、長期的観点に沿って幾度かの計画改定を経ながら実施されてきた。1917(大正6)年策定の計画では、対雁と篠津の大曲流部が直線化されることとなり、篠津地区においては1923(大正12)年着工で1933(昭和8)年には通水に至った。だが残された対雁地区の直線化計画は、その後しばらく実現を見なかった。

対雁地区においてこの直線化工事が具体化したのは、1970(昭和45)年からで、市の工業団地造成とも関連している。住民の住居移転が始まり、開校90周年を経ていた対雁小学校が移転したのは1972年9月のことであった。さらに石狩川の堤防と道道石狩沼田線(現在の国道337号)が切り替わり、当初からの計画であった堤防予定地に土が盛られ「対雁築堤」が造設されていく。広くとられた河川敷の一部では1975年から河川環境整備事業の一環として「高水敷整備」工事が着工された。石狩川河川敷緑地の整備が行われ、1981年に野球場・サッカー場・自由広場等が完成した。

このような治水事業の進行するなか、1981(昭和56)年8月上旬、台風12・15号による二度の大雨で、石狩川の中下流域において大洪水が発生した。この洪水は「五六水害」と通称され、石狩川水系に流入した総雨量は約40億トンとされている。この水害によって石狩川本流の整備計画は改定され、+2.00mの堤防嵩上げが実施されることになった。この嵩上げは軟弱地盤における堤防の安全度を高めるために「丘陵堤」として施工された。普通より傾斜の緩やかな「丘陵堤」の構築には多量の良質な土砂を必要とするため、対雁地区の高水敷部分の上砂を築堤盛土材として採取し「中水敷」の運動公園として再整備することとなり、工事は1987年から89・90年と順次進行した。

1991(平成3)年12月、築堤盛土材の採取にあたって、工事施工の立場にあった石狩川開発建設

部江別河川事業所から北海道教育委員会に対し、江別市教育委員会を經由して埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。協議の範囲は旧豊平川よりも上流側左岸の14万 m^2 である。協議を受領した江別市教委は、協議範囲が18世紀以降の江別発祥の地としての対雁（津石狩）番屋跡や対雁駅跡に近く、さらに1876（明治9）年の樺太アイス強制移住地にも近接しており、江別の歴史にとって重要な地点であることを念頭に、1992（平成4）年4月から北海道教育委員会の依頼に基づく埋蔵文化財所在確認調査を実施した。

所在確認調査は3回にわたって行われ、重機を使用して80-40-20m方格での試掘穴掘削を進めた。3回目の1992年10月21日から10月31日までの試掘調査は河川敷3.7万 m^2 を対象とするもので、当初は20m方格の重機調査を行ったが、終盤に縄文土器片を発見、急遽調査を範囲確認調査に改め、10m方格での包蔵地確認を行った。その結果、土器232点・石器等63点や焼土が検出され遺跡の所在が明確になった。念頭にあった江戸・明治期の関係は既に石狩川改修工事や「高水敷」整備で失われていたものの縄文時代の包蔵地約2万 m^2 を確認し、対雁2遺跡として周知された。

道教委は同年12月、この包蔵地については現状保存が望ましいがやむをえない場合は記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨、石狩川開発建設部に回答し、同建設部は石狩川治水の進捗上工事計画の変更は不可能と判断、この対雁2遺跡の発掘調査を1999（平成11）年度、財団法人北海道埋蔵文化財センターに委託した。当財団はこの事業を受託し、調査面積2万 m^2 に対しての当該年度の調査計画を立案し、6月から9月までの調査に着手した。

3 調査の経過

(1) 平成11年度（図版II-2）

調査計画の立案にあたっては江別市教育委員会が実施した範囲確認調査の成果をもとに検討し、2万 m^2 以上に及ぶこの遺跡をいかなる方法と工程で調査進行するかを話し合った。試掘穴の柱状図や写真によると黒色土が見られない粘土と砂質土の堆積であり、平成11年度は6月から4ヶ月の調査期間で調査面積2,000 m^2 という条件であった。そのため当該年度は遺跡の範囲と遺物包含状態のより詳細な情報と土層の状況を把握することを目的とした試掘的な発掘をすることが、今後の見通しを立てることに資するとの判断を下した。

このような計画から調査は2.5m \times 5mのトレンチの連続で進行し、東西方向の71・81線はほぼ連続、南北方向の142・150・158・166線は北から目的の地点まで延ばした（図I-1）。基本的には人力での掘削だが、20mごとに重機を併用した部分もある。遺構・遺物の検出層は粘土・シルト質土のために堅固で崩落しやすく、確認・検出作業は困難を極めた。トレンチ各所には噴砂もみられ極小規模の断層を形成し、焼土や土器の広がりや横断していることもある。各所に土坑や焼土の重複がみられ、最も多い箇所では11枚の焼土の重複を確認した。また調査区南辺中央部では、公園造成時の客土を除去した段階で遺物が目立ち始めた部分を遺物の広がりやに注意して精査し、土器集中1-3を確認した。

出土土器の多くは縄文時代晩期後葉に属するもので、最上層部から出土する一部や西辺に続縄文時代初頭のものがみられた。また、琥珀・石炭円礫やクマとみられる土製品なども出土している。

調査結果からは、調査着手以前に想定していた内容よりも相当密度が高く、西側に広がる様相も呈し規模の大きい遺跡であることが判明した。遺構・遺物の密集・散在の分布状況はある程度明らかになってきたが、検出密度が高い面で調査を停止し埋め戻したトレンチもあり、遺構・遺物が検出される範囲は面的にも深度的にも未確定となった。土層としては、平坦ながらも少しずつ波打って西側(旧

I 調査の経緯

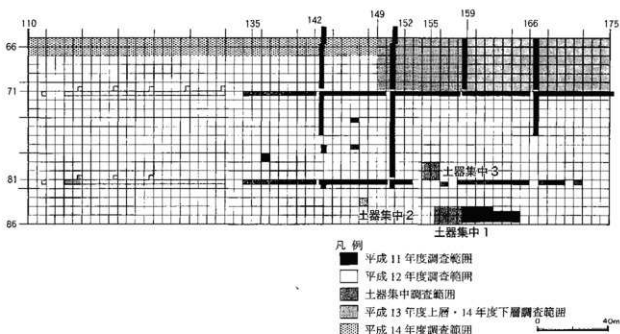


図1-1 各年度の発掘範囲

豊平川方向)へ傾斜していくものと推察した。年度内に一日記録類と出土遺物の整理を行い、平成12年3月に報告書として刊行した(財団道埋文編2000)。

報告書では、遺物包含層の深さが未確定であり、安全確保のため段階的な試掘が必要であること、包蔵地範囲も特に西側の限界について試掘を追加して再度判断する必要があること(同前書8頁)を指摘し、道教委文化課へも同内容の報告を提出した。

(2) 平成12年度

前年の試掘的調査をもとにした遺跡の評価から、調査計画としては後年度の調査に継続すべく、深度的にも対応できるよう検討した。具体的には、比較的遺構・遺物の密度の薄い北東側から、南北30m(65-71線)、東西80m(159-175線)の昨年度トレンチに囲まれた2,400㎡を対象とした(図1-1)。

調査は安全確保のため、人力作業部分では掘削壁の高さを1m以下に保ち進めた。166線より東側では予想通り遺構・遺物の密度が薄く、人力調査後に約1.5mずつ二段階に分けて重機掘削を行った。この段階ごとに人力で5x5mグリッドによる25%調査を行い、最深部では標高4m以下まで包蔵地の確認作業を続けた。西側では土坑・焼土・炭化物層・遺物の重複が顕著で、その相互の上下関係・同一面関係の把握と記録化、層序の認識に努め、遺物の包含をみなくなる標高7m以下まで作業した。出土遺物は縄文時代晩期中葉から後葉に属するものであった。また前年度の調査で確認し遺物点数の多さから作業を停止していた土器集中1と3の調査も併行し、この集中では前年度と合わせて約7万点の遺物を取り上げた。引き続き当年度着手範囲の記録類・出土品を整理し、年度末に報告書を刊行した(財団道埋文編2001)。また土器集中3遺物の本格的整理に着手した。

深部調査では遺物を確認することはできなかったが、標高4mほどの位置で自然木・クルミ殻などの年代測定資料を得た。AMS法による¹⁴C年代測定では、標高7m以上の縄文時代晩期の遺構・遺物層で2500年前、低位の自然遺物で2900年前と報告された(同前書VII章)。また、周辺部の探索で現石狩川の打線付近から縄文時代中期-晩期・統縄文・檜文土器を採集した。石狩川改修で既に掘削した部分や周辺に、当該期の遺跡が存在していたことを示すものであろう。

なお、包蔵地の西側への広がりを確認するため、新たな試掘調査を求めていた件については、北海道教育委員会と協議し、調査予算内で重機によるトレンチと人力での掘削土精査を行うこととなった。10月に実施した試掘の結果、従来の発掘必要範囲西辺から旧豊平川までの間のほぼ全域に土器・石器等・炭化物や焼土が分布することが判明した。この結果に基づき道教委は翌年1月、石狩川開発建設部に対して、西側110線までの概算12,500m²を要発掘範囲に取り込む旨を文書で通知した。同建設部からはこの部分についても現状保存困難であることが道教委に伝えられたと聞いている。したがって調査面積の全体は、当初の2万m²と合わせ約32,500m²となった(財団道埋文編2001の7頁)。

(3) 平成13年度(図版II-3・4)

2ヶ年の調査から、今年度は昨年度に続き南北30m幅で71線以北を西側に掘り進めることを計画した。ただ遺構・遺物の密集部からの継続調査となり、やや深くに包含層が傾斜していく様相も予測されること、作業人工の一部を採取したままになっていた焼土等の土壌の二次整理に充てること等を考慮して東西を149線までの50m延長に限り、調査面積を1,500m²とした(図I-1)。

調査が進むにつれ遺構・遺物の密集部は、予想を越えて152線の東側付近まで徐々に密度を落としながら続く様相を呈してきた。上坑94基・焼土ほか約470ヶ所など多数の遺構が重層的に検出され、これに伴う縄文晩期後葉の遺物も層位に応じて細かい変遷を示すことが次第に明らかになった。遺物の取上げ回数=とらえられた生活面は2.5×2.5mの小グリッドごとの最多で14面を数え、155線以東の密集部での平均でも8.5面に達した。また包含層の下限も予想外に深く、当初積算の1.5倍を超える土量を出さなければ当年度分の調査は終了しない状況が見えてきた。そこで、次年度に向けた残存部の状況把握のため深掘りトレンチを掘削し、繰越し作業量を推算して10月初頭に道教委文化課に資料送付した。10月中旬には石狩川開発建設部江別河川事務所に説明報告し、一定の理解を得た。

12月、石狩川開発建設部用地課への実績報告を兼ねた打ち合わせでは、この遺跡は作業安全上からも上下二段階での調査が望ましい旨報告し、今年度分は1,500m²の上層部調査との認識を示した。同建設部側もこれを了解し、上層終了・下層については来年度の調査ということで一致した。また来年度については、遺跡全体の地層掌握を目的として、67線以北の要発掘範囲西端までを対象とした調査を実施したいとの要望を伝え、概ね了承を得た。

なお13年度は発掘が未完の状態となったので、可能な範囲の整理を進める一方で11~12年度に整理を行った「土器集中3」の報告を中心とする報告書を刊行した(財団道埋文編2002)。

(4) 平成14年度(図版II-5・6)

前述した打ち合わせ等の経緯から、今年度の調査は、前年度下層部1,500m²と北側10m幅・西端まで195mの1,950m²、合計3,450m²を対象とした(図I-1)。東側の1,500m²は上層からの連続で何枚もの層がさらに西に傾斜していった。遺構・遺物も一部に集中を見せながら断続的に検出され、排土も約960m³にのぼった。手掘り調査の到達面は現地表から約1.5~2.5m深である。昨年度からの取上げ回数の通算は最大23面に達したが、遺物は縄文晩期後葉の範囲に収まるものであった。

新規着手の細長い西側部分ではまず25%調査を行ない遺構・遺物の濃淡を把握することとした。その結果をもとに、一定の上坑・焼土や遺物の検出があった148線付近や140~146線付近を中心に手掘り調査、遺構・遺物が希薄な部分は重機掘削を併用して調査した。現地表から約1.5m深を調査し、概ね140線以東で統縄文時代前葉包含層が重層し、135線以西では同後葉の遺物が僅かに出土した。

さらに、手掘りで達した標高6.5~7mより深い下層部の遺物包含状況を探るために、今年度調査区

1 調査の経緯

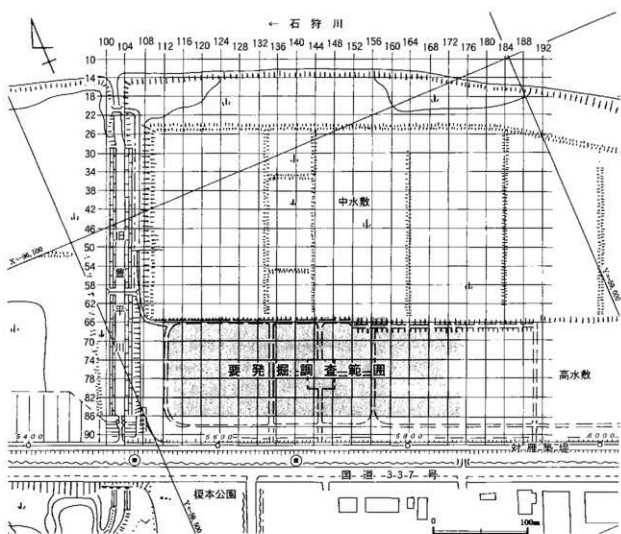
内に20mおきに重機で14個の試掘穴をあけ(図II-3)、掘り揚げ土を調査した結果、5ヶ所から遺物の出土をみた。出土層は遺物付着上等からみて標高3-5mの層で、この包含層の存在を発見直後に道教委文化課に報告、現地での指導を仰いだところ、当面の調査には影響がないことから確認のみに留め、今後の工事計画の深度を見て取り扱いを決める旨の口頭での通知を得た。

整理作業では13・14年度調査の記録類・遺物の整理を実施したほか、11・12年度に調査した「土器集中1」の土器復元・実測を進めている。

4 本書の内容

前述のような状況から、本書では平成13年度と平成14年度調査の合計3,450m²の範囲で検出した遺構と土器・石器等の遺物について報告する。

まずII章で当遺跡の調査の工程を概説、調査方法と遺物や図面・写真などの記録類の取り扱いについて説明する。III章では遺跡の位置・立地とその環境について触れる。IV章が遺構の事実報告、V章が遺物の報告である。VI章ではAMS法による¹⁴C年代測定と、土壌サンプルの分析による占環境復元についての結果を、分析者の原稿で報告する。



図II-1 発掘区の設定(1)

II 調査の方法

1 調査範囲

(1) 発掘区の設定

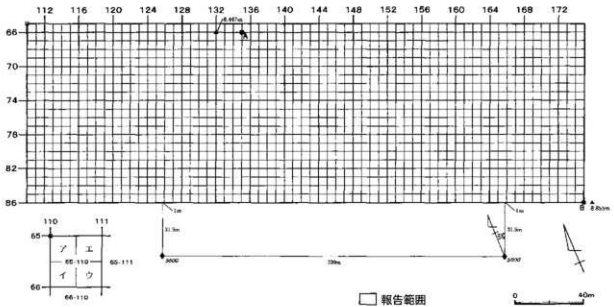
a 方格組みおよび経緯度と座標

発掘必要区域は人為的に整備された河川敷であり、石狩川築堤と平行に約100mの幅を有する高水敷に延長200mの範囲、約20,000m²とされていたので、発掘区の設定は以下に行った。

まず、この区域に築堤に平行・直交する5m間隔の方格を組み、それぞれの区画線に数字を与えた(図II-1)。将来的に全方向に調査範囲が拡大する可能性を考慮し、発掘必要区域の北辺を66線、南辺を86線、また西辺を135線、東辺を175線とした。なお、平成11・12年度の発掘調査および再試掘調査により要発掘調査範囲が北辺65線、南辺86線、西辺110線、東辺175線に拡大している(図II-2)。

5m発掘区(グリッド)の呼称は、方眼の北西角で交差する区画線を読む。発掘調査区域の北西角であれば65-110区となる。さらにこの5m方眼を2.5m四方に分割して、反時計回りに北西角からア・イ・ウ・エと呼ぶ小発掘区(小グリッド)を設置し、調査の便を図った(図II-2)。なお、平成13年度までは小グリッドをa・b・c・dとしていたが今年度より上記のように変更した。

平成11年度の調査着手に当たって、株式会社シン技術コンサルに委託して20m間隔の基準杭設置をおこなった。方眼設定の原点として石狩川左岸「対雁築堤」の基準線上のポイントを使用すること



図II-2 発掘区の設定(2)

II 調査の方法

とし、点間 200m の SP5800・SP5600 を選定した。SP5800 から N23°E に 31.5m で調査範囲南辺、ここから南辺を 1m 東行した点を 86-166 の交点とした。同様に SP5600 から振り出した点を確認修正点 (86-126 の交点) とした (図 II-2)。これを基本杭として 20m 方眼と範囲四隅に基準杭の打設を発注し、座標値と標高を得た。調査に必要な 5m 方格杭は、その都度自ら打設することとした。

上記方格の緯経度および平面直角座標 (平面直角座標系第Ⅱ系) は、図 II-2 中の 2 点 A・B で

A 66-135: 北緯 43 度 07 分 39.04498 秒、東経 141 度 31 分 14.22068 秒

X=96,658.037m、Y=-59,338.484m

B 86-175: 北緯 43 度 07 分 33.56540 秒、東経 141 度 31 分 20.69623 秒

X=96,828.373m、Y=-59,193.614m

である。この緯度・経度、平面直角座標は「日本測地系」に基づいたものである (図 II-1・2)。

測量法とそれに伴う測量法施行令・平面直角座標系の改正が平成 14 年 4 月 1 日から施行され、従来の「日本測地系」に基づいた座標は「世界測地系」に基づいた「日本測地系 2000」の座標に変更された。これに伴い上記の 2 点は下記のとおりに変更となった。

A 66-135: 北緯 43 度 07 分 47.83948 秒、東経 141 度 31 分 00.87826 秒

X=96,394.6809m、Y=-59,644.8276m

B 86-175: 北緯 43 度 07 分 42.36072 秒、東経 141 度 31 分 07.35343 秒

X=96,565.0169m、Y=-59,499.9618m

b 水準点

I 章で述べたとおり平成 12 年度の範囲確認調査の結果発掘必要範囲が西側へ拡大し、この範囲に発掘が及ぶこととなった 14 年度、新規範囲の基準杭打設が再びシン技術コンサルに委託されたのであるが、この際設置された基準杭の標高が 11 年設置杭から観測した結果よりほぼ 10cm 高くなるのが発掘開始後間もなく問題となった。これは言うまでもなく「2000 年度平均成果」による平成 14 年度の水準成果改訂を考慮した上での不一致である。11 年設置杭間の比高にほとんど変化がないことから凍上等の影響はほぼ無視できる模様であった。14 年度発掘の水準測量は、改訂以前 (11 年当時) の公共水準成果を 14 年度の観測結果に代入したものをを用いてとりあえず実施した。

発掘終了後にまとまったシン技術コンサルによる再調査報告では、両年度の水準与点とした一等水準点 No.8551 と基準杭 86-176 (距離約 4km) の比高は 2 次の測量の間に 0.098m 減少しており、水準点自体がこの間に下降したものの、詳しくは 11 年当時水準点の真の標高は公共水準成果より 0.035m 高く、14 年観測時のそれは 0.063m 低いものと結論された。この結論自体なお議論の余地があると思われるが、両年度の測量結果が整合しない以上、14 年度の観測値に 11 年当時の成果を代入した標高による現場での記録に意味がないことはほぼ明らかである。そのため、本書では 11 年度設置の

基準杭 86-176 の標高 8.855m

が真であり、なおかつ経年変化がないと仮定して、14 年度現地で記録した標高から 0.098m を減じた数値を報告している。この方法で実際上問題がない程度には 11 年度の記録と整合する模様である。

なお、上記の検証の過程で、平成 13 年度発掘のベンチマークとした 72-155 杭の標高が誤っていたことも判明した。13 年度に使用した同杭の標高 8.626m は、11 年度設置の基準杭 78-152 に 13 年 5 月当時記入されていた標高「8.651m」に由来するものであるが、78-152 杭の標高は 8.624m が正しい。そのため、本書では 13 年度に記録した標高から 0.027m を減じて平成 11 年の記録に整合させたが、昨年度の報告に掲載した地割断面図の標高 (財団道埋文編 2002 の図 III-4-6) は誤ったままである。

78-152 杭への誤標高の記入は当財団職員の手で11または12年度に行われたと考えられ、この2年次にわたり同杭付近で調査された土器集中3の報告(同前書Ⅲ・Ⅳ章)にも誤りが波及している可能性があるが、今のところ検証の手立てがない。

(2) 今年度報告の調査範囲

平成13年度に上層部分、14年度に下層部分の調査を行った北辺65線・南辺71線・東辺159線・西辺149線の1,500m²と、北辺65線・南辺67線・東辺149線・西辺110線の1,950m²を合わせた3,450m²が調査範囲である(図Ⅱ-2)。この範囲には平成11年度に行った143・150・158線半トレンチ調査部分を含み、トレンチ内遺構のすべて、および遺物の一部について報告済みであるが(財団道埋文編2000)、本書で改めて他の遺構との層位的な関係等を記載し、遺物全体の報告をおこなう。

2 土工

(1) 掘削

平成13年度は平成11年度のトレンチ調査により遺構・遺物の検出が予想されることから全面を手掘りによる調査を行った。土層観察のためのベルトを東西方向67・69線、南北方向153・156線半に設定した。土層が西側に向かって落ち込んでいくことが確認され、包含層がより深部へと続くことが予想されたので下層部分は次年度に継続調査を行うこととなった。そのため13年度調査終了時点で掘削面の養生を行い、14年度に下層部分の手掘り調査を継続した。

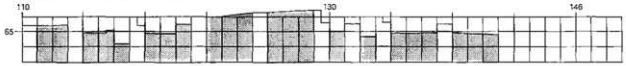
平成14年度に新たに着手した遺跡西側の1,950m²の調査では、まず135線以西に重機を用いて表土剥ぎを行った後、25%調査を兼ねた南北方向トレンチを手掘りにより9本入れ、遺構・遺物の密度を判断した(図Ⅱ-3)。その結果、手掘り区域・手掘りと重機を併用する区域・重機による遺構確認区域に分けて調査を行った。また、大深度部分の遺構・遺物確認のため重機を用いて4×4m、深さ4-5mの深掘り坑を14ヶ所あけた(図Ⅱ-3、図版Ⅱ-6)。大深度坑では壁面の精査・掘り上げた土砂の確認を人力で行った。北側は法面状に削平されているため深部に行くに従い遺跡範囲が広がることとなった。遺構・遺物の検出が続いたため、遺跡範囲外である64線まで調査を行った部分がある(図Ⅱ-3)。

人力掘削作業は主に移植鋤・ねじり鎌を使用して行った。遺構・遺物の検出状況に応じて竹へらや竹串を使用して遺構・遺物を傷つけないように掘削を行った。精査・清掃の際には前記のほかにも口ボウキ、ブラシ、エアブラシ等を用いた。また、移植ゴテでは掘ることが困難な場所や遺構・遺物の見られない範囲ではスコップやツルハシ等を併用した。

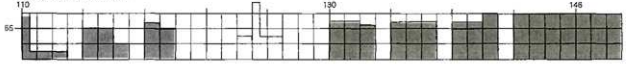
遺跡の上層部分は粘質土層であるため、乾燥すると非常に固く、塊状となり移植鋤等で細かく掘削することが困難となる。そのため、適度にじょうろや噴霧器を用いて散水を行い、調査終了時にはブルーシートをかけるなど乾燥しないような配慮を行って調査を進めた(図版Ⅱ-4)。また、調査の進行により深度が深くなるため、壁面の保護には気を使った。上層部は粘土質で乾裂のため壁面が崩落する危険性がある。そのため、常にブルーシートをかけて乾燥を防ぎ(図版Ⅱ-5)、一方で砂の多い下層部の崩壊を防ぐため壁面の上下に排水溝を設けて雨水を避けた。さらに遺跡の下層部分では地層が西側に傾斜し、きつい体勢での作業を強いられると共に(図版Ⅱ-6)、水を含むと滑りやすく天候により危険をともなった。そのため、排土道や通路に歩み板や麻袋を敷いて事故の防止に努めた。

II 調査の方法

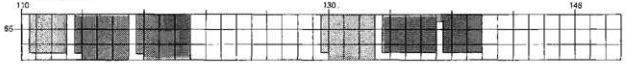
平成14年度トレンチ範囲・1回目重機範囲



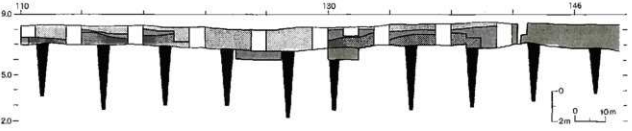
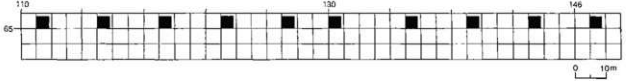
平成14年度手掘り範囲



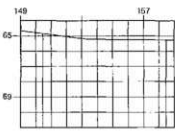
2回目重機範囲



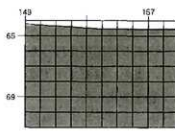
大深度掘削範囲



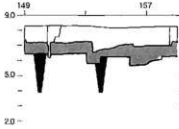
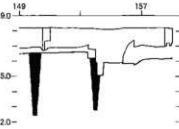
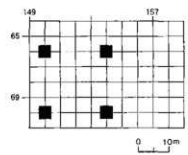
平成13年度手掘り範囲



平成14年度手掘り範囲



大深度掘削範囲



- 平成13年度手掘り範囲
- 平成14年度手掘り範囲
- 平成14年度トレンチ範囲
- 1回目重機範囲
- 2回目重機範囲
- 大深度掘削範囲

図 11-3 掘削範囲

(2) 越冬養生

遺跡は冬季には土壌の凍結・融解に曝されるため、発掘終了時には特に未発掘部分との境界に生じた壁面の養生に留意した。71線・149線の壁面では大型土嚢をあてがって隙間に小土嚢を詰め、67線の110-149線間の壁面は土砂で覆って法面とした。これらの上からブルーシートをかけて雨水や雪を防ぎ、壁面の崩落や土砂の流出がおきないようにした。13年度は調査中の包含層や畦・トレンチが越冬する事となり、上記の措置に加えてブルーシートをかけた上に土砂を盛る、断熱材または掘り起こして空隙を設けた緩衝層によって凍結・融解を緩和する、などの対策をとった。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

委託設置した基準杭をもとに5m方格の各交点に木杭を設置し、平面測量の基準とした。13年度は20秒目盛光学バーニヤのトランシットとグラスファイバー製巻尺を用いて打設したが、14年度は発掘範囲の高低差が大きくなったこともあり、光波測距機能のついた1秒単位デジタル表示のトランシットを用いた。平面測量はこの方格杭を基準として設けた簡易な水糸遣方からの手測りによった(図版1V-14)。

水準測量は自動レベルと5mm目盛のアルミスタフを用いて方格杭に基準杭を与点とする標高を入れ、方格杭と対象の比高を直接観測、または簡易な水糸遣方を作ってそれと対象の比高を手測りした。

測量の成果は基本的に20分の1スケールの図として記録し、1mm方眼のB3版セクションフィルムに鉛筆描きである。地層断面図、遺構等の平・断面図等を作成し、遺物出土状況等の詳細図を必要としたときは10分の1スケールとした。同一ないし隣接グリッド、あるいは同一取り上げ面に所在する遺構等は複数を一枚の図に描いた場合が多い。図面にはグリッド名・取上面・遺構名・日付・作成者等を記入した。(酒井)

(2) 野外撮影

a 撮影方法

発掘現場での撮影は、4x5フィールドタイプカメラに6x7用スライド式アダプターを付けたものをメインとし、35mm一眼レフカメラを補助的に用いた。必要に応じて4x5サイズのフィルムも使用した。同一カットを同じ条件(シャッタースピード・露出)で2コマ撮影し、それをもって1セットとした。

ほぼ全ての遺構を撮影し、遺物の出土状況なども各グリッドの層位ごとに行なった。また、進行状況の確認となる定点撮影も定期的に行なった。撮影に際しては、各被写体の出土位置・深度など必要な情報を入れることを考慮した。ブレ・ボケなどを防止する為に全ての撮影は、三脚・レリーズを用いて行なった。

b 撮影機材

各年度によって、撮影機材・フィルムは以下のように変化している。

平成11年度：Mamiya RZ67 PROII (T-MAX100・E100S)、Nikon F3 (E100S・GOLD100)

平成12年度：WISTA 45VX (T-MAX100・E100S)、Nikon F3 (E100S・GOLD100)

平成13年度：WISTA 45VX (T-MAX100・E100VS)

II 調査の方法

平成14年度：WISTA 45VX (T-MAX100・E100VS)

遺跡が広範囲にわたることと、トレンチ調査や25%調査など被写体に高低差が生じる為に、平成12年度よりアオリが使えるフィールドタイプの4x5カメラにし、普段はこれに6x7用のスライド式フィルムアダプターを付け使用した。

また、フィルムの使用頻度や収納スペースの観点から、平成13年度からは35mm一眼レフカメラでの撮影をやめ、全てを6x7サイズ(必要に応じて4x5サイズ)で行なうこととした。スライド上映などで必要なカットは35mmサイズに縮小デュープしている。

フィルムは、遺跡が全体にくすんだ土色で、坩土や土坑の覆土などの色変化が再現しにくいいため、発色性の強いものに替えた。

c 撮影データ

現場での撮影データは、撮影者が野帳にその都度記入した。平成13年度からは、デジタルカメラで同一カットを撮影し、写真台帳のデジタル化を図った。(吉田)

(3) 出上品の収集

a 掘り出し遺物

掘削作業中に掘り出された遺物は、同一層位、または同一遺構に属するものを一括して収集することを基本とした。ただし3年次、足掛け4年にわたる発掘の間に少なからず取り扱いの変更がある。

11年度のトレンチ調査では同一遺構の遺物はグリッド(調査方格)に関係なくまとめて収集していたが、13年度以降は遺構に属する遺物もいわゆる包含層の遺物と同様、小グリッドごとに収集・整理することとした。これは発掘年次を重ねるにつれ、遺構の大多数が掘上という平面的な構造であってその内外を判断することがそれほど有意なものと思われないこと、上坑の遺物も遺構と有機的関連をもつと思われる事例は稀であること、そして上坑自体の検出が必ずしも確実でないことなどが認識されたためである。13年度以降は地区(小グリッド名)と層位所見、取り上げ日付の3者が基本的な収集情報となり、所属遺構は層位所見の一種という扱いとなった。

11年度のトレンチでは「II-1層」から「III層」に至る地層名(財団遺埋文編2000の40頁)を層位情報として記録したが、やや広い範囲を発掘した13年度にはこの地層区分への対比が困難となり、III章で述べるように結局はこの区分を放棄するに至った。同時に、遺物は細分された各地層の内部から出土するのではなく、むしろ各層の境界に散布し、坩土などとともに旧地表に沿った一連の面を形成していることがほぼ明らかとなった。そこで13年度調査からは発掘中に認識される遺構・遺物の平面的な連なりを「取上面」と呼び、これを層位上の単位として取り上げをおこなった。取上面には小グリッドごとに通し番号をつけ、記録票を作成して取り上げ日付・遺物の出土標高の範囲・当該面の遺構などを記録した。しかしこの方針が徹底されたのは13年度の後半以降で、それ以前、特に遺構・遺物が希薄な地区では安易に11年度区分の地層名に託して収集したのもも多く、問題を残した。

収集情報ははじめ遺物を収めたポリ袋に記入したものがほぼ唯一で、一次整理に際してこれを台帳その他に転記していたのであるが、13年度に取り上げ面記録票が作られ、これと袋経由の情報を対照するとグリッド名の誤りと思われるものが稀でないことがわかった。14年度からは小グリッド名のアルファベットを五十音に変えて伝聞・転記の誤りを減らし、また取り上げ情報は水洗に耐える軟質セラミック製園工素材(商品名「彩玉ボード」)の荷札に記入して遺物とともに袋に入れ、台帳化

終了まで遺物に随伴するよう扱いを変えた。

なお遺構内の遺物に詳細に番号をつけて取り上げ、遺構図中に作成したドットマップもしくは出土状況図にその取り上げ番号や標高を記入したことがあるが、ごく少数の遺構に限られる。

b 土壌等

焼土の土壌に含まれる炭化物や集中して投棄された小剥片などは集中範囲の平面図を作成して標高を記入したうえ、土壌ごとポリ袋に採取し、その後の整理作業でフローテーションその他の方法により取り出している。グリッドによる分割はおこなわず、連続した集中範囲の土壌を一括している。

11年度トレンチでは例えば同一の焼土の中で特に骨片の多い部分のみ、あるいはベンガラ粒と思われるものの集まる部分のみ、というように現地で分別収集したことがあるが、整理の手数が増加するので13年度以降は遺構図に記録するにとどめた場合が大半である。

このほか数は少ないが、土坑底に収められた粘土塊などを周囲の土壌ごと石膏で固定して取り上げた事例がある。(西脇)

4 資料整理

(1) 図面等

原図には図面番号を赤の油性サインペンで記入し、遺構名などを記入したラベルを貼り付け、図面台帳の作成を行った。図面番号は平成13年度に「図400-608」、平成14年度に「図609-775」を与えた。原図は取り上げ面や遺構番号の確認、必要事項の記入、訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその箇所が確認できるように原図に書き込んでいる。その後、原図から1mm方眼の方眼紙に鉛筆で2倍図版の版下図となることを考慮した素図を作成した。この素図を元に墨入れを行い報告書挿入図の版下とした。

なお地層断面図など複雑な内容を表現する図面では、素図をスキャナーで取り込んだのちパソコン上で描画ソフト (Illustrator 9.0) により加工し、デジタルデータで多色刷挿入図の版下を作成したことがある。(西井)

(2) 出土品

a 掘り出し遺物

一次整理 掘り出された土器・石器等は、野外作業と平行して現地で水洗・乾燥・遺物台帳の作成・遺物カードの添付・注記作業を行った。水洗はボンドブラシや歯ブラシなどを使用して遺物に付着した土を洗い落とした。乾燥は遺物を新聞紙等をひいた乾燥かごに入れて、屋外もしくは遺物乾燥小屋の室内で行った。室内では除湿機などを用いて乾燥を促した。土器片のうち固結の弱いものは乾燥後にアクリル樹脂溶液 (パラロイド B72 の 7-15% アセトン溶液) に浸して硬化させた場合がある

水洗・乾燥の終了した遺物は収集の単位ごとに遺物名と点数を決定したうえで遺物番号を与え、遺物台帳に登録した。土器の点数は平成11年度には数えられる限りの破片数としていたが、13年度以降は直径3cmの円を切り抜いた厚紙製のゲージを用い、平面上に置いたときこれをくぐる小片は点数に入れないこととした。土製品および石器等の点数は数え得る限りの数とすることで扱いの変更はないが、土壌ごと採取した小剥片の密集を篩を用いて洗い出した場合、2mm目の篩に残るものを数えることで、プラスチック製のザルに入れて水洗する通常の掘り出し遺物と同程度の大きさのもののみ

II 調査の方法

を集計対象とした。

遺物台帳は年度ごとに、土器・土製品と石器等とに分けて作成している。平成11・13年度分についてはB5判の様式を印刷して手作業で記入し、11年度は内容の重複しない遺構遺物台帳と包含層遺物台帳の2者を、また13年度はグリッド別に全遺物を登録した台帳を作成した。平成14年度はパソコン上で表ソフト(Excel 2000)によりグリッド別の台帳を作成している。台帳には出土グリッドまたは遺構のほか遺物番号・取り上げ日・層位(取り上げ面等)・遺物名・分類・材質(石器等に限定)・点数その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は台帳と同一の内容を記入した遺物カードとともに遺物番号ごとにチャック付ポリ袋に納めた。遺物カードは土器等と石器等で色を分け、土器は朱紫色、石器等は白茶色とした。

土器の注記は11年度には微細なものを除く大多数の土器片に行った。13年度以降はゲージをくぐらない破片に注記し、台帳上の点数と注記片数とを一致させた。注記できなかった土器片は遺物番号ごとにポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。土製品・石器等は主にカードを同封した袋から取り出す必要のあるものに限って注記した。注記内容は遺跡名の略号「T」、出土グリッドまたは遺構、遺物番号で、11年度には層位も記入した。(酒井)

ニ 次 整 理 一次整理の終了した遺物を埋蔵文化財センターに搬入し、分類・材質の確認、接合、復元、図化、撮影などを行った。採用した分類の体系、図化・撮影対象の選択等についてはV章で述べる。

実測図は1mm目方眼紙に原寸大で作成し、剥片石器・土製品・石製品は原図のまま、土器・礫石器は3分の2に縮小した第二原図に墨入れを行い版下図とした。なお平成14年度には日立エンジニアリング株式会社に委託して復元した土器の一部のレーザー三次元計測を行い、そのデータから作成した正射投影画像に写図工がリタッチを加えたものを原図とした場合がある。

遺物の整理と平行して遺物台帳の修正を進め、その完了後平成11年トレンチのうち本年度報告の範囲と13年度の遺物についてもパソコンに入力した。また地層断面図・遺構図の整理に平行して現場で記録したグリッドごとの取り上げ面を相互に対比し、同一の生活面に属する遺構・遺物を確定する作業を進めた。帰属する生活面を特定できた遺物はパソコン上の遺物台帳にその情報を入力しうえて集計作業を行って遺物集計表を作成した。

整理終了後、接合した土器を新たな整理番号別に収納したほかは原則として各遺物を遺物カードを同封したチャック付ポリ袋に戻し、報告書に掲載した遺物は図番号順、それ以外は遺物名・分類ごとに遺物番号順に整頓し、プラスチックコンテナに収納した。報告書掲載石器には報告書名・図番号・図版番号を記したカードをも同封した。(酒井)

b 土壌

現場で採取した炭化物や骨片に富む土壌のうち、前項で触れたように小剥片の集中など洗い出して掘り出し遺物の整理に加えたものもあるが、その大部分は平成13年度から発掘事務所脇の屋外に専用の装置(いわゆるPROJECT SEEDS MODEL TYPE-1、椿坂1989b・上屋1990)を設置してフローテーション(浮遊選別)処理し、掘り出し遺物とは別の系列で整理を進めている。

土壌の乾燥は主に強風の日を避けて屋外でおこない、適宜攪拌したり直射日光に曝した場合がある。土壌重量が概ね採取時の8割未満になった時点で搬入した水道水を用いて処理し、浮遊物は2.00mmおよび0.425mm、残渣は1.41mm目の篩(椿坂1989a)により回収した。回収物は火気と化石燃料由来の汚染を忌むのでオイルヒーター等で暖房した屋内で風乾させ、その後埋蔵文化財センターの室内で適宜ルーベ・実体顕微鏡等を用いながら土壌から遺物を選別した。

本書で報告する調査範囲の土壌はすべて14年度までに一次処理を終え遺物の選別に入っているが、選別された自然遺物の同定は未着手である。本書ではIV章で処理した土壌と選別された遺物の量について記載し、またV章で選別された土製品の一部を紹介し、土壌の採取された遺構の性格を判断する材料としたにとどまる。なお14年度の整理でフローテーション残渣からかなり大きな土器片が選別され、接合・円化された事例が見られたので、やむを得ず注記ゲージより大きな土器片のすべてを台帳登録して注記接合を試みたが、本来掘り出して回収されるべきものであり今後このような事態を避けたいと考えている。

なおフローテーションで回収した炭化物の一部を年代測定に供しており、その結果を本書VI章に収録している。(西脇)

(3) 写真

a スタジオ撮影

撮影方法 光量の安定性、色再現の忠実性などの理由からストロボを用いて撮影を行っている。

土器片や石器などは、トヨ無影撮影台を使用し俯瞰撮影を行った。その際、遺物は発砲スチロールや脱脂粘土などで傾きを調整した。

平成14年度からは、石器の撮影においても立面撮影を行った。俯瞰撮影や遺物実測図では表現出来ない情報(立体感・質感・加工痕や使用痕の強弱など)を写し込むことが可能となった。逆に俯瞰撮影での表現が有効な遺物に関しては、従来通りの俯瞰無影撮影を行った。

復元土器は、撮影台に白い背景紙を垂らして立面撮りを行なった。集合写真など、撮影台に遺物が乗り切らない時は、背景紙を床に直に垂らしての撮影となった。

平成14年度からは、背景紙からデコラ板(無反射で蛍光塗料を使用していないもの)に替えた。これにより背景が以前より白く抜けやすく、ポジフィルムで特に感じられた紙の繊維感がなくなった。

復元土器の撮影においては、特に立体感を表現することに留意して行なった。また、実測図では表現出来ない質感を出すようなライティングを心掛けた。

立面撮影全般に、普段我々が見る時の自然な角度内での撮影を心掛け、写真を見る者に不自然感を与えない構図を目指した。

現場での撮影と同様に、同じ条件(ライティング・シャッタースピード・露出)で2コマ撮影し、それをもって1セットとした。

撮影機材 ストロボ機材は、3200W/Sのジェネレーター(コメットCA3200)を2-3台、発光部(CA32H)を2-6灯、ディフューザーは、ライトバンク・アンブレラを使用した。集合写真など撮影が広範囲にわたる時は、天井吊り下げの大型ライトバンクを用いた。

カメラは、WISTA45VXに6x7用スライド式アダプターを付けて使い、フィルムはプロローネーサイズのT-MAX100とE100Sを使用した。必要に応じて同フィルムの4x5サイズも使用した。

b 現像

フィルム現像 カラーリバーサルフィルム・カラーネガフィルムは外注している。モノクロフィルムに関しては、自動現像機(ILFORD ILFOLAB FP40)での自家処理となっている。

この機械は、プロローネーサイズまでのロールフィルムに対応していて、35mmの場合パトローネからフィルムの先端を出し、そこにリーダーを貼り付け機械に流し込む。プロローネーの場合は、ダークボックスの中でフィルムを巻き取り、専用のマガジンに先端を出した状態で入れ、同様に流し込む。

II 調査の方法

同時に2本の現像ができ、約15分ほどで乾燥まで仕上げる。フィルムはバトローネやマガジンに入っているのが、全暗黒にしくなくても処理できる。また、ほぼ一定の現像がなされるため品質も安定する。ペーパー現像 モノクロ写真の焼き付けも自動現像機 (ILFORD ILFOLAB MG2950) での自家処理となっている。写真図版用の焼付けや密着焼きを行なっている。

この機械は、印画紙を露光した後流し込むと、約1分で乾燥まで仕上げて出てくる。これもほぼ一定の条件での現像となるため、露光時間の増減による仕上がりの予想がしやすい。

c 保管・管理

写真台帳 写真台帳はパソコンに入力しデジタルデータ化して管理している。平成13年度からは、現場で同一カットをデジタルカメラでも撮影し、その画像を貼り付けた台帳を作成している。前年度までのものは、フィルムスキャンで画像を取り込み貼り付けている。

平成14年度からは、文字データファイルに画像データを貼り付けていたのから、画像データを別フォルダーにJPEG形式で保存したものと、文字データファイルの画像領域をリンクさせる形式に移行した。これによりデータ量の圧縮と作業スピードの高速化が図られた。

写真台帳をデジタルデータ化し管理することにより、写真の検索が瞬時に行なえる。また、画像を画面上で見ることが出来るため、不必要にオリジナルのフィルムに触れる機会が減少し、フィルムの劣化・破損などを防ぐことが出来る。

フィルム アルバムは、コスモスプリントファイルを用いている。フィルムには1コマずつ番号をつけ、フィルム種類ごとの連番で管理している。

フィルムに触れる時は必ず手袋を着用し、油分からの変色・劣化やカビの発生を防いでいる。また、同一条件で撮影した2コマのうち1コマはオリジナルフィルムとして使用しないようにしている。使用頻度や貸し出し依頼の多いカットに関しては、デューブを作成し対応している。

アルバムは全ての調査・整理作業が終了した後、定温・定湿に保たれた特別収蔵庫に保管される。**フォトCD** カラーフィルムの劣化・退色に対応すべく、報告書に使用したカットについては、フォトCDに焼き付けている。フォトCDは外注しており、主にブローニサイズのカラーリバーサルフィルムからの焼き付けとなっている。

E6処理されたリバーサルフィルムの耐久性について確実なデータがない今、フォトCDに焼き付けて、色情報をデジタルデータとして保存するのが最良と思われる。(吉田)

5 保管

今回の報告に関する図面等・写真・出土遺物は2003年3月現在、道立北海道埋蔵文化財センターで保管している。図面等は全てA2版図面ファイルに調査年度・北埋調報番号・遺跡名をつけて収納している。写真アルバムは全ての調査・整理作業が終了した後、定温・定湿に保たれた特別収蔵庫に保管される。出土遺物に関しては、復元された土器は調査年度・北埋調報番号・遺跡名・遺構名・図番号を記したラベルを貼り展示収蔵庫に保管されている。復元に至らなかった土器片や石器等・フローテーション成果等はコンテナに収納する。コンテナには調査年度・北埋調報番号・遺跡名・遺物名・分類・収納番号を記したラベルを貼り、掲載されたものは展示収蔵庫、未掲載のものは収蔵庫に保管されている。また、報告書掲載遺物については前記のほか遺構名・図番号などを記入したラベルを貼り、今後の活用へ備えた。

III 遺跡の環境

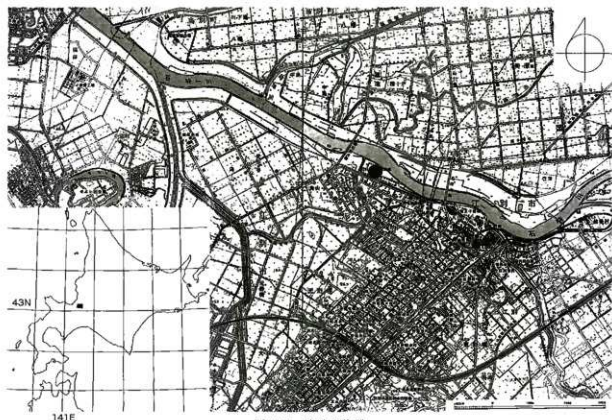
1 位置

(1) 所在

対雁2遺跡は北海道島中央部の西寄り、日本海に近い平野の中に、島内最大の河川である石狩川に面して所在する(図III-1、図版II-1)。

遺跡所在地の地籍は江別市工業町28番地である。この町名と地番は土地区画整理にともなう換地の結果1978(昭和53)年に登記されたもので、それ以前この土地は対雁という行政町名の中にあつた。1992(平成4)年に埋蔵文化財包蔵地として周知される際に旧地名を尊重して名称が決定され、同じ町名を冠する「対雁遺跡」との混同を避けるために「2」という連番がつけられた。

土地区画整理は工業町という工業団地の造成にともなうものであったが、この事業はさらに1970(昭和45)年以降本格化した石狩川の大規模な改修に連動していた。石狩川の南岸にあつた対雁の集落は立ち退いて河川敷地が設定され、その外縁に築堤が建設された。河道の拡幅と直線化のため集



図III-1 遺跡の位置

図III-2 瀬津付近の地形



落の跡地は大きく切り取られ、新たに石狩川左岸の高水敷となった旧集落南側の地下に、さらに後年の改修事業にもなつてこの遺跡が発見されたのである。この間の変遷については、昨年度の報告書に収録した航空写真（財団道埋文編 2002 の図版 III-1-6）を参照していただければ明瞭である。

明治年間に対雁の地に集落が形成されたのは、札幌を流れる豊平川がここで石狩川に合流し、開拓の進む北海道内陸と札幌とをつなぐ水運の要衝をなしたところによるところが大きい。1954（昭和 29）年に本格的な水路切替がおこなわれるまで豊平川は遺跡のすぐ北西側で石狩川に注いでおり、その河道は今も世田豊平川という名称で残っている。したがって旧豊平川と石狩川の合流点に臨んで遺跡が所在すると言って誤りではないのだが、少々ややこしいことに、200 年ほど前までは江戸時代の記録に「ツイシカリ川」という名称で現れる小さな川の川尻がここにあったに過ぎず、19 世紀初頭頃の洪水を境に豊平川がそのツイシカリ川の河道に流れ込むようになったことがわかっている。

「ツイシカリ」は言うまでもなくアイヌ語地名であつて、語頭のツは「もとの」「もうひとつの」といった意味をもつアイヌ語 *tu* であろうとみられている（榊原 1998）。「もとのイシカリ」という地名の意味するところは、しかしまひとつ明らかでない。この問題を含め、遺跡の人文的な環境についてはすでに刊行した報告書で再三紹介してきたところであるので、参照いただければ幸いである（財団道埋文編 2000・2001・2002）。

(2) 地形

対雁 2 遺跡は石狩川下流域に発達した沖積低地の中にあり、周囲は人為的な治水がなければ石狩川やその支流の洪水が及ぶ氾濫原である。しかし石狩川水位の観測が始まった 1879（明治 12）年から築堤建設の進む 1970 年代までの約 100 年間に、対雁の旧集落のあった地点が実際に冠水したことは一度もなかったらしい（財団道埋文編 2002 の 17 頁）。氾濫原中にありながらも事実上の離水域であるという点に、遺跡付近の地形的な特徴が見られる。

現代の改変が進む以前の地形を窺う目的で 1966・71（昭和 41・46）年撮影の航空写真から平成 11 年度に作製した地形図を図 III-2 に再掲した。遺跡は石狩川と世田豊平川の合流点付近から湾曲しながら南西方向へ伸びる微高地の地下に発見されたこと、この微高地がさらに石狩川へ向かって扇状に張り出し、遺跡から約 400m 先で侵蝕崖となつて終わっていることが知られる。

石狩川開発建設部の治水地形分類（石建編 1979a,b）ではこれを自然堤防としている（図 III-3）。旧豊平川河道に沿って形成されたその形状、後述するその地質からみても説得的な分類である。ただ上述のとおり、この地形が近年になって発達した可能性は小さい。微高地の頂部は標高 9m を超える高さで延長約 2km にわたって続いているが、近代の対雁水測所の観測では高水位の記録は 8m を少し上回る程度であり（例えば財団道埋文編 2000 の表 II-1）、19 世紀後半以降に微高地部分の堆積量が侵蝕を上回った可能性はまずない。また 19 世紀初頭の豊平川の流入以前には、そもそも自然堤防を発達させるだけの営力がツイシカリ川になつたとみられる。結局この微高地については、近世以降のそれとはやや異なる環境下で形成された古地形とみなす必要があるように思われる。

次節以降で述べるとおり、当財団の発掘調査そのものによって、前 1 千年紀の後半を中心とする 1,000 年ほどの間に、この場所で標高 8m 以上まで頻りに水成層が形成され、またその堆積の間を縫って焚火などの人間活動がおこなわれたことが明らかになった。水域と陸域が目まぐるしく交替するさまは、まさに形成中の自然堤防の状況を示しているとみてよいであろう。現代の河川敷整備で微高地の頂部が 50cm から 1m も削られた模様であるのですべてがこの時期の所産であるとは言い切れないとしても、自然堤防の発達した時期が判明した一例としてよいのではないと思われる。

III 遺跡の環境

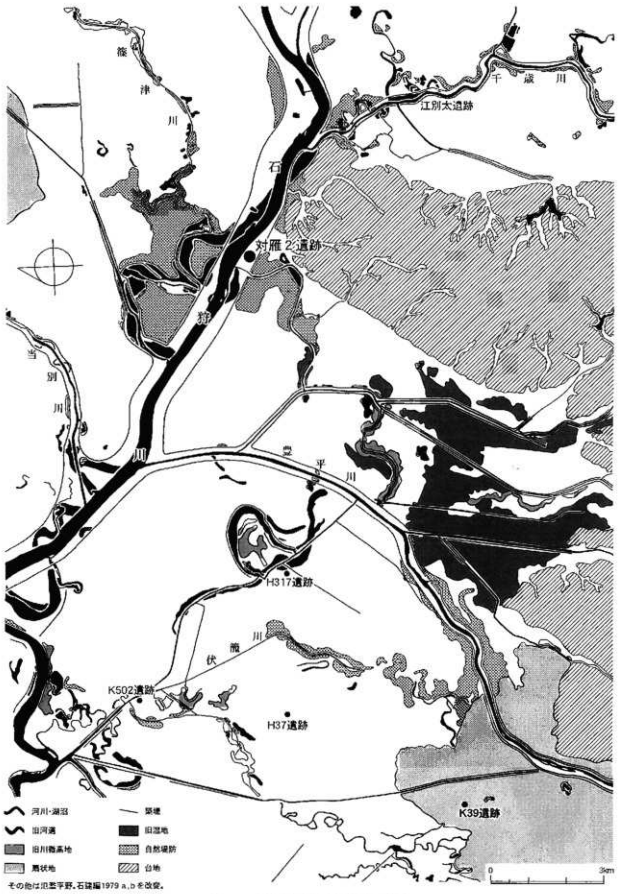


図 III-3 治水地形分類と遺跡の位置

豊平川が扇状地の発達した中流域から下流の沖積低地へと流れ出る付近に新たな堆積物が形成されやすく、河道が不安定になりがちであるのは近世に始まったことではないであろう。18世紀以前にも、豊平川が19-20世紀のものに近い流路をとった時期が何度かあったと思われる。伏龍川以西の扇状地は遅くとも統縄文時代半ばより前に形成を終えたとみられており（大丸1989の597頁）。遺跡形成の当時豊平川下流が東側に大きく振れる条件が整いつつあったらしい。そして札幌市西南部の広大な山地を集水域とする豊平川本流の流入が、対雁付近に自然堤防の発達をうながすことは想像できる。しかしそれだけでは、同じ条件が実現した19世紀以降の豊平川下流で大規模洪水が頻発していない事実を説明できない。

可能な説明の一つは、遺跡の形成された時期の海水準が高かったため、石狩川河口から流路延長で30数kmと海岸に近いこの付近でも堆積基準面上昇を招いたとみることであろう。あるいは、相対的に同じことであるが、当時から現在までの間に海水準の低下と河川の下刻が進み、自然堤防のある地形面が段丘化したとみてもよい。これらの場合、付近の低地全体にわたって当時の水位が現在より高かった痕跡が認められるはずである。しかしより海岸に近い沖積低地に位置し、年代上対雁2遺跡と重複する部分のある札幌市のH37遺跡（同市埋文編1996・1998）では標高5m前後を掘り込み面とする竪穴住居跡が発見され、やはり同時期の同市H317遺跡（同前編1995）では標高3m以下の旧地表で河道に沿って生活痕跡が見られた。H37遺跡と対雁2遺跡とは12kmほど、H317遺跡とは8kmほど離れているに過ぎないので、甚だしく不平等な沈降を仮定するのではない限り、当時の堆積面が19世紀以降より特に高かったと考えることは困難であろう。H37・H317遺跡の花粉化石を検討した山田悟郎は統縄文時代初期の地層で針葉樹花粉の出現率が高く冷涼な気候が示唆されることを述べており（山田1998）、高海水準はむしろ擦文時代に想定されることを指摘している（同1995）。また対雁2遺跡よりも上流の氾濫原に所在する江別市江別太遺跡では、旧千歳川の河道中に標高-1m前後まで打ち込まれた統縄文時代中頃の杭が複数発見されているが（同市教委編1979）、これは付近の現千歳川水面（標高2m弱）よりもかなり深く、やはり当時の水位がそれほど高くはなかったことを示唆している。

結局今のところ、対雁付近の自然堤防の成因はやや特殊なものであろうという漠然とした指摘ができるに過ぎないが、この自然堤防の延長のように見えるものはさらに近代の石狩川本流を越えて、篠津川下流にまで連なっている（図III-3）。規模・勾配の小さい篠津川が多量の堆積物をもたらしたことは考えにくいので、これを石狩川による再堆積をこうむっているにせよ相当部分が古豊平川由来の堆積物で構成された地形と考えざるをえず、そしてそれが同じ古豊平川の形成した伏龍川沿いの自然堤防とならんで、石狩川下流の沖積低地の中で砂丘を除けばもっともまとまった築高地を形成していることが注目される。この地形が遺跡そのものを内包しているだけに、その発達の過程を今後さらに究明する必要があると考えている。

2 地層

(1) 既往の地層区分

対雁2遺跡の地層の最上部は外見上概ね無構造、壁状の粘土質のシルトで構成されるが、深度が増すにつれ堆積物の粒度の幅が増えて砂を含むようになり、堆積構造の内眼的観察が容易になる。現地表からの深さが約1mを超えると北東方向の走行、北西方向の傾斜が顕著に認められる（図版III-1）。土色は標準土色帳（小山・竹原1967）との比較で概ね色相10YRから2.5Yの範囲、粘土・シルト主体の部分では明度4-6で彩度1-3、砂質の部分では明度2-5で彩度1-2を呈することが多い（口絵1）。

平成11年度の発掘ではこの走行・傾斜の明瞭な部分をIII層、その上位にあるものをII層、これらを覆って現地表を構成する近現代の人為層をI層とする大区分が設けられ、II層はさらに最大で10単位に細分された。12年度の発掘でもこれが踏襲され、「II層までは(略)水平に近い堆積状況をしている。III層は西方向に向けて落ち込んでいく土層を示している。II層とIII層の層界は不整合面となっている。」(財団道埋文編2001の53頁)との概括がおこなわれた。しかしこの2年次の記載の間にはいくらか矛盾がある。

12年度の概括を文字通りに受け取れば「不整合面」は傾斜不整合の関係であり、上位の「II層」は「III層」の傾斜と無関係に水平に成層していると解されるが、11年度発掘では「II-2-上層(略)西側に向かって落ち込んでいく」「II-2-中層(略)調査区の西端付近で急激に落ち込んでいく」「II-2-下層(略)西側では落ち込んで確認できなかった」(同前編2000の40頁)との記述から、細分されたII層の各部層が傾斜していたことが明らかであるから、12年度報告に言う「水平に近い」の意味が曖昧になると同時に、傾斜した部層間の層境界はII・III層間の「不整合面」とどれほど違うのかという疑問が生じる。実際、12年度の地層断面図には「II-2-中」「II-2-下」間に不整合としか考えられない線が描かれ、「II-2-下」の部層は明らかに傾斜した堆積を見せている(同前編2001の図III-2-2)。

このように地層記述の一貫性に疑問が生じるのは、おそらく11・12年度に分層が基本的に文化層区分であり、しかもそれが不徹底であったためである。例えば「II-1層(略)粘土層」が場所によっては「砂層(略)により4層に分かれ」(同前編2000の40頁)たり、「II-2-中1層」が「II-2-上層に近い土質を示」(同前編2001の54頁)したりするように、地層を構成する堆積物の如何は本質的に地層の区分を左右していない。むしろ一貫していたのは「炭化物や遺物、焼土から」(同前編2000の40頁)「焼土や遺物・炭化物などの検出状況から」(同前編2001の54頁)分層する立場であったとみられる。文化財調査である以上文化層区分をおこなうこと自体は正当であるが、文化層のないところでは「分層できない」(同前書54頁)のが当然である。問題は、この当然の禁欲が実行されたのは「II-2-中層」の再細分についてだけで、その他の大部分で文化層区分が別の観点からおこなわれた区分と合成された点にある。たとえば「II-2-中(2)層」の焼土F-41は、同層とその上位のII-2-中(1)層との境界に存在するが、「III層」の焼土F-31はIII層の中に存在する(同前編2000の図III-3・5)。この違いは堆積物の境界に形成された旧地表の生活面をその核心とする文化層と、地質的な層相で設定した自然層とを漠然と等価に扱っていることを意味するのであるが、それをそのようには認識できず、ただIII層の細分がまだ不十分である結果とのみ受け止めていたのである。

このような状態で迎えた13年度の発掘を下層に進めるにつれ、遺構・遺物の連続的な出土によって追跡される「II層」中の旧地表が北西へ傾斜しており、したがって「II層」の層厚が北西へ向かって急激に増加することが明らかになった。このため1章で述べたとおり予定の作業量では発掘を完了できず、深部の発掘を14年度へ繰り越す結果となったのであるが、同時に11年度発掘のトレンチ断面(同前書の図III-5)で「III層」と判断したものの一部を「II層」に改めざるを得ないことが明らかになり、ひいてはこれまで「III層」として扱ってきたものの全般について、「II層」との区分が正当かどうかという疑問が浮上することになった。「西方向に向けて落ち込んでいく」のは「III層」だけではないことが確実になり、「粘質土と砂の互層」(財団道埋文編2001の53頁)であることも「III層」の特徴というより深部の堆積物の特徴であることが明らかになったからである。

残る分層の根拠は不整合の存在であるが、これもすでに述べたように「II層」と「III層」の境界面だけの特徴ではないうえに、粒度の幅の小さい浅部の堆積物の中で不整合を認識することはそれほど容易でないという問題がある。例えば12年度の67線地層断面図において161線の少し西、69線

断面で160線の少し西で、層厚の大きな変化がないにもかかわらず「II-2-中」層の細別が突然不明になること（同前書の図III-2-1・2）は、そこに不整合が存在したのではないかという疑いを抱かせる。果たしてそうであれば、その東西の「II-2-中層」はすでに別の地層なのであるが、そうした問題が検討されていないのは、遺構・遺物の集中部分で旧地表と思われるものが平坦であったという文化層区分の知見が、留保をつけずに遺構・遺物の希薄な区域へも敷衍されたことを意味するように思われる。

再検討の不可能な問題を蒸し返すのは不毛だが、12年度発掘の「不整合面」は、上から順に水平に設定してきた文化層区分と、それを踏めて堆積物に従って引いた自然層区分との境界であって、より水平に成層する地層と傾斜する地層との境界がそこに実在したわけではないのではないか、という疑問を払拭することは難しい。少なくとも13年度発掘以降、遺跡の地層中に特別に注目すべき一連の境界面を見出すことができないので、本書では近現代の人為層であるI層と、その下位にあるII層とを区別するとともに、「III層」という区分は用いないことにした。

(2) 層面の認定

上記のような分層上の問題が表面化した13年度発掘の後半以降、遺構・遺物の新旧を正しく把握するためにどのように地層を認識し、記録すべきかが再考された。遺跡の地層全体を一貫して記述するためには遺構・遺物の有無に直接左右されない、堆積学的方法での体系化が必要であることは明らかであり、まず堆積の構造を明らかにし、その後に遺構や遺物によって把握される生活面ないし文化層がその構造とどのような関係にあるかを記録すべきものと思われた。すでに報告してきたとおり、当遺跡の遺構・遺物は地中に全く不規則に存在するのではなく、一定の面をなして出土する傾向がある。これが概ね旧地表面であること、そこに生活の痕跡が残された後で堆積が進み、新たな地表面を形成することによって遺構・遺物の累重が起こるらしいこと、上下の生活面を隔てる堆積物は例外なく遺物に乏しく、従って人為的に盛られたものではないことなどは見当がついていたので、この間歇的な自然堆積の休止を地層断面上で特定し、それぞれの休止に対応する遺構・遺物を明らかにすることを目標に地層の観察を再開した。

13年度の報告で述べたように（財団道埋文編2002の21・22頁）、自然の営力による堆積が休止するということは、つまり風や水流が甚だしく弱まることによってそれまで浮遊していた細かく軽い粒子までが地表や水底に沈積することであると考えられる。具体的には、当遺跡の堆積物の中で細粒な成分である粘土・シルトの粒子のみが集まったものが一連の地層として観察されれば、その上面を堆積の休止面とみなすことができるであろう。この考え方に沿って検討したところ、果たして地層断面には、浅部ではほぼ水平だが深部に向かって北西の傾斜を強め北東に走行を持つ粘土・シルト層が多数認められ、その主要なものの上面を図化して記録した（同前書の図III-4-6）。この知見から、13年度の報告書では従来「II-1層」「II-2-上層」と呼ばれた肉眼的構造に乏しい堆積物はおそらく相当多数の、それも場所によって層序の異なる休止面を含み単一の「地層」とはみなしがたいこと、「II-2-中層」以下についても平成11年度の158線半トレンチでの分層と12年度のそれとは完全には整合しない可能性があることなどを述べた（同前書27・30頁）。

このような経緯の後に着手した14年度の地層記述では前年度の立場を踏襲しようとしたが、実際にはさらに観点の修正を迫られることになった。その直接の契機は新規に発掘した110-149線間の東西195mに及ぶ67線地層断面の検討である。この断面には細粒堆積物の成層がほとんど無数に見られ、そのすべてを記録することは現実的でないとされた。同時に、休止面より概して急な傾斜で折れ線状に斜め上方にのびる侵蝕面の存在が断面の所々で注意された。

侵蝕面には固有の堆積物がともなわないのでその存在に気付くまでに多少の経験が必要であったが、緩やかな曲線を描く休止面の細粒層が侵蝕によって突然断ち切れ、侵蝕面の上位側には別の単位の休止面や下位側とは様相の異なるラミナが形成されて明らかな不整合をなしているのも、ある程度検討を加えれば認定は困難ではない。このような侵蝕面が堆積の断絶を意味していることは間違いなく、その上下を別の単位の堆積物として扱うことができる。そこで149線以西の67線地層断面ではこの侵蝕面をできるだけ漏れなく記録し、さらにその侵蝕面より下位側にある休止面のうち最も上位のものも図化することを原則とした。この2種の面を認定することで最低限の地層区分を果たすこととしたのである。14年度に掘り下げを加えた13年度着手範囲の地層断面を上記のような観点で見直してみると、やはり149線以西と同様な侵蝕面が見られた。その一部は明らかに13年中に掘削した浅部へ続き、堆積の休止面を破壊していたと思われる。13年度、および149線以西で図化の方針を定める以前に作製した14年度の断面図にはこの侵蝕がほとんど記録されておらず、休止面の認定が正確でなかったことは間違いない。

思うにほど切り立ったものでない限り、侵蝕面はその断面上の姿のまま地表あるいは水底に露呈しているわけではなく、侵蝕され崩落した土砂にその上端近くまで覆われているのが普通であろう。侵蝕の上端には当然ながら堆積の休止で形成された旧地表があり、そこにある粘土やシルトは、急激な侵蝕がおさまると同時に侵蝕面を覆った崩落土砂の斜面を覆って再堆積を始める。これも一種の休止面には違いないから、地層断面で眺めた時にはある箇所では休止面の細粒堆積物が不明瞭になり、そこを境に傾斜が変化するが、休止面そのものは続いているように見える。ここで下手側の細粒堆積物のやや下位にある侵蝕面を認識できなければこれを一連の休止面と考えがちであり、13年度と14年度前半の断面図にはこのような誤認がかなり含まれていると思われる。

侵蝕面の上部が細粒で粒度の幅も小さい堆積物中にある場合、その正確な上限を肉眼で確認することは困難である。しかし常にそうであるというわけでもなく、侵蝕面の上端とその下位側最上位にある休止面とが一致し、その直上を一連の堆積物が覆っていると見える場合がしばしばある。この堆積物の下面が別の不整合に連なっていればこの一致は新しい侵蝕による偶然ということになるが、今のところその実例と思われるものは観察していない。つまりこれは先ほど想定したような、侵蝕面とその上端にある休止面との関係であるように思われる。考えてみれば、砂を主体とする深部の堆積物の上面が、次単位の堆積までほとんど侵蝕を蒙らずに初生的な形状を保つというのはありそうもないことである。むしろ、浅部の堆積面と深部の侵蝕面という二種の面が常に一つの単位をなして旧地表を形成しているからこそ、それを基底として形成される堆積物の傾斜が常に浅部で弱く深部では強くなるのだ、と表現したほうが当たっているかもしれない。

このように、堆積の休止にともなって必然的に二種の面が生じ、そのセットが堆積の境界面を構成するのではないかというのが、比較的深部まで発掘を進めた14年度の経験から帰納される内容である。それは単に、上記のような関係では侵蝕面と休止面との時間差を直接に示すものがなく、性格の異なる二者をまとめて単一の面として扱うことに実際上の問題がないということではない。侵蝕は地層の中ではなく地表または水底に発生するという前提から、ある侵蝕面の上限が堆積面と一致していれば、その堆積面は間違いなく堆積の休止面であり、たとえその上に新しい地層が整合に堆積しているように見えてもそこに旧地表として無堆積のまま経過した時間が想定できる点が重要である。言い換えれば、その上面が休止面と見える細粒の堆積物も、それのみでは単に砕屑物を運ぶ営力が非常に小さくなったことを示すに過ぎず、侵蝕面との接点が確認されてはじめて堆積が休止し、時間的空白を生じたことを確実に推論できるということである。

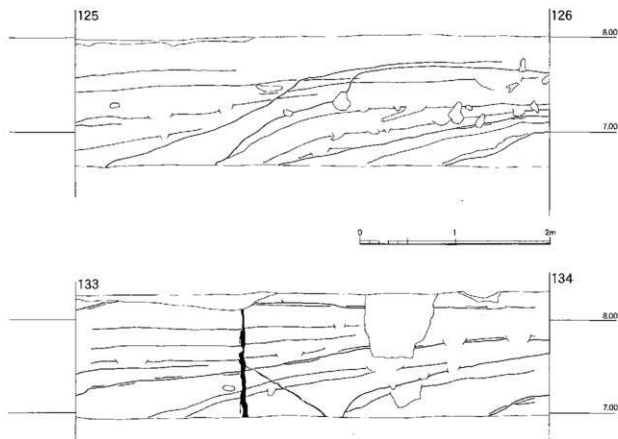


図 III-4 地層断面図の変化

したがって、もし一貫してこのような二部構成の層面で地層を区分することができれば、堆積構造の中に年代差、つまり時間的な空白を見出そうとする遺跡の発掘調査にとって望ましいと言えるだろう。とは言えこうした理解に達したのは14年度発掘の終盤であり、現地での記録はそれぞれの時点での認識を反映した不統一なものとなった。図 III-4 は14年度に同じ箇所を発掘の初期と末期に作成した断面図の比較である。新旧の断面図に共通する層面はむしろ少ない。目につく細粒層を特に選択せず描いた旧図（淡線）は、層面の数が多いが侵蝕面の多くを見逃しており、不整合に気付かず安易に層面を連続させる傾向にあること、侵蝕面と休止面の境界にある傾斜の変化を記録している場合も、侵蝕面そのものを辿らずその上下にある堆積面に注意を奪われていることなどが見て取れる。

(3) 堆積の状況

以上のような経緯のもと、2年次にわたって作製した地層断面図に編集を加えて図 III-5-9 に示した。土色に着色した範囲がⅡ層である。暗い土色で表示したのは平成13年度発掘の前半までに作図した範囲を示し、中程度の暗さは13年度後半、明るい土色は14年度に図化した範囲を示す。橙色・紅色は遺構断面、稲妻状の墨塗りや噴砂脈、細い墨線は株痕ほか自然の攪乱である。淡い灰色は1層、濃い灰色は試掘および発掘調査にともなう攪乱で、30mおきに1層が落ち込んでいるのは河川敷公園整備の際の暗渠工である。図 III-5・7 に見るように、正確には同じ位置に断面を設定できていないことが噴砂脈のずれに明瞭に表れているが、すでに対照の不可能な2年次の層面を無理に整合させる意味はないと思われるので、Ⅱ章で述べた水準の補正を加えたのみで機械的に接合した。両年次の図が

重複する箇所では14年度のを優先した。場所にもよるが14年度の図が13年度に比較して西方向へずれているという印象を与えるものとなっている。これはおそらく14年度の調査方が新規の測量にもとづくことと関連するとともに、13年の図化後に断面に沿って排水溝が掘られた箇所ではこれを避けて10cmほど北側に断面を設定せざるを得なかったことなどの影響もあると思われる。

赤および紫の線は侵蝕面である。面下の堆積物と明らかな不整合をなす場合は赤、侵蝕が細粒の堆積物の上面で止まって準整合に近い状態となる部分を紫で示した。13年度の断面図では侵蝕面をほとんど見落としているが、図の注記や写真から想定される侵蝕面の位置を赤破線で記入してある。また青線は侵蝕面の上端に連なる堆積の休止面で、粘土またはシルトからなる薄い堆積物の上面である。同一線上断面の中で侵蝕面との連続が確認できなくても、交差する他の断面に追跡してそのことが確認できる場合には青線としてある。しかし14年度図化部分以外では侵蝕面の観察が不十分であるためにほとんど特定できない。また先に述べた準整合の関係では、面下に見られる細粒堆積物が侵蝕面と等時的なものでないことは侵蝕がそこからさらに上位に達していることで判断されるのであるが、地層の走行方向の断面でのみ観察した場合にはこの判断は不可能である。図III-8にはこのような面がいくつか現れており、一応紫線で示しておいたが本来青線とするべきものも含まれる可能性がある。

緑線も細粒の堆積物の上面で、堆積休止面と思われるが侵蝕面との等時性を確認できないものである。新しい侵蝕面が先行する侵蝕面を完全に破壊してしまうこともあると考えられるので、たとえ侵蝕面との接点が観察できなくても実際には無堆積面であるという可能性が残る。特にその面に遺構が形成されていれば一旦田地表として露呈したことはほぼ間違いのない。しかし遺構がないという場合、これまでの発掘範囲内にないからと言って同じ面の全体にないても判断できないので、ここでは遺構の有無によって色分けすることはしなかった。なお67・69線上に位置し、層面との関係が明確な遺構は表III-1・2に記入してある。

以上3種の面に上位のものから通し番号を与えて命名した。番号は67線上断面・69線上断面のそれぞれについて与え、順に67-または69-をつけることで区別する。侵蝕面とそれに連なる休止面には同じ番号を与え、番号の後に前者はa、後者はbを付した。これら確実な無堆積を示す層面は、想定上のものを含むとは言え延長245mの67線上で145面に達した。69線上では編集時に追加した3面を除いても149-159線の範囲に71面を観察しており、67線上の同じ範囲で58面を命名したのは過大でないと思われる。次に侵蝕面への連続が確認されない休止面は、その直上位にある無堆積面と同じ番号を与え、小数点以下にさらに通し番号を付けて次の無堆積面までの同種の面を命名した。たとえば67-35a面と67-36a面の間にあるこの種の面2枚は上から67-35.1面、67-35.2面と呼ばれる(図III-5a)。以上を合わせて、命名した面数は67線上で275面、69線で155面あり、各面の所見を表III-1・2に記載した。なお67・69線上の面の一部は153線半・156線半の地層断面によって対比することができ、その関係も表III-1・2に示してある。

青色の線、つまりほぼ確実な無堆積面の下に見られる細粒層は概して薄く、厚さ3cmを超えるものは少ない。これがそれ以下のより粗粒な堆積物を覆う状況はマッドドレイブと表現してよさそうである。土坑の覆土など人為的な堆積物中にはマッドドレイブを攪乱した結果と思われる粘土質シルトの塊を見る場合が多い。一方緑線で示した不確実な休止面では、青線と同様なマッドドレイブを伴うものがある一方、表III-1・2に記入したように面下に複数の細粒層が細かい緩化を繰り返す場合や、やはり複数の細粒層が複合した結果か10cm近い厚さをもつ粘土・シルトを伴う場合もあって一様でない。細粒層の細かい復復や肥厚はおそらくそれが堆積の休止期間に侵蝕面上にやや時間をかけて形成された再堆積物であることを示唆しているよう。これら再堆積物らしき細粒層は灰色に還元されてい

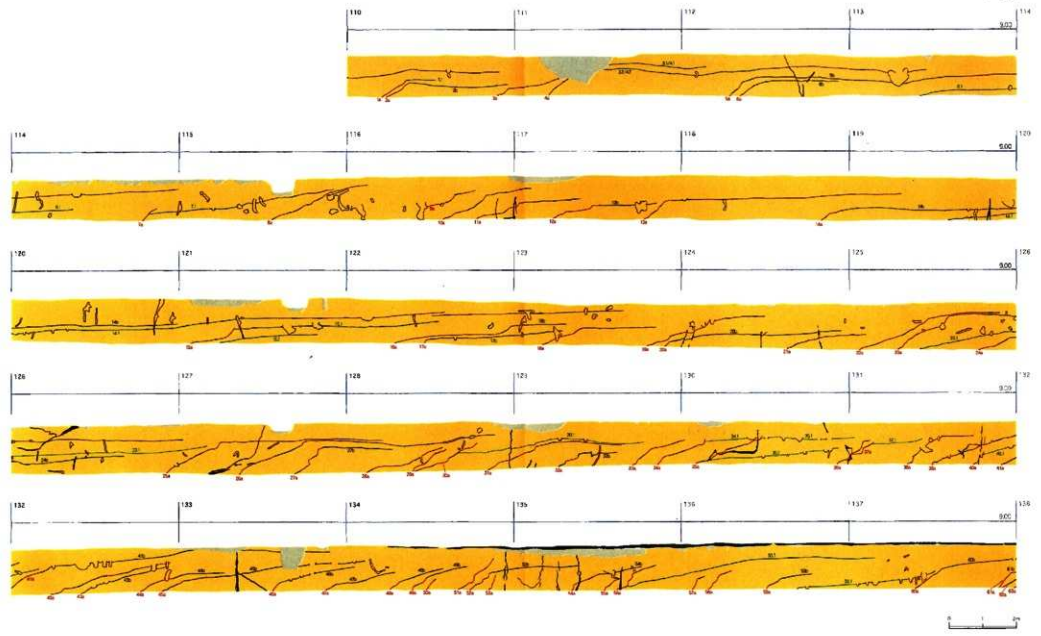


图 11-5a 07 段上地層断面 (1)

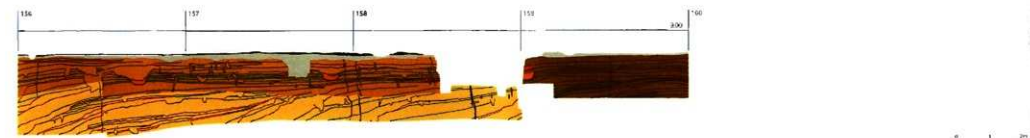
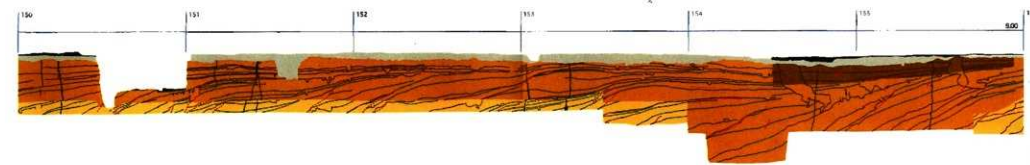
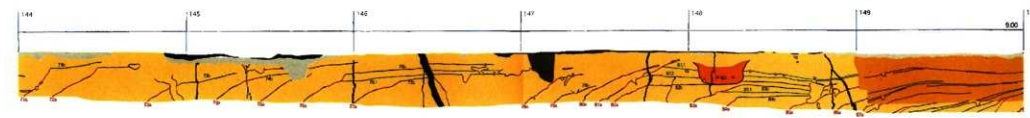
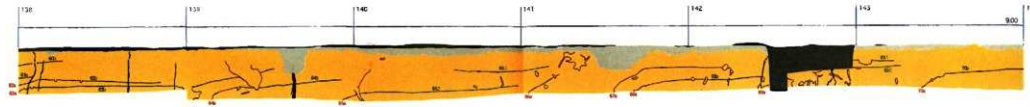


图111-5b 67号+地層断面 (2)

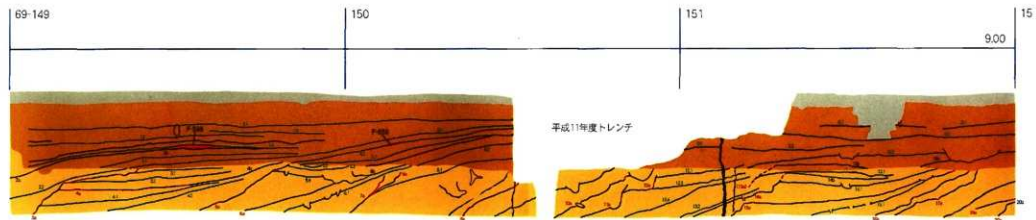
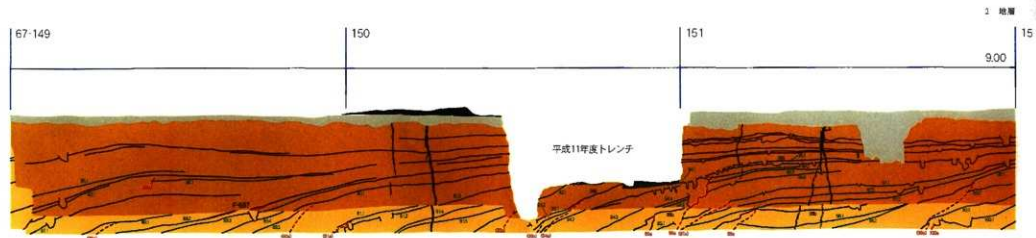


図 III-4a 67・69号土地層断面 (1)

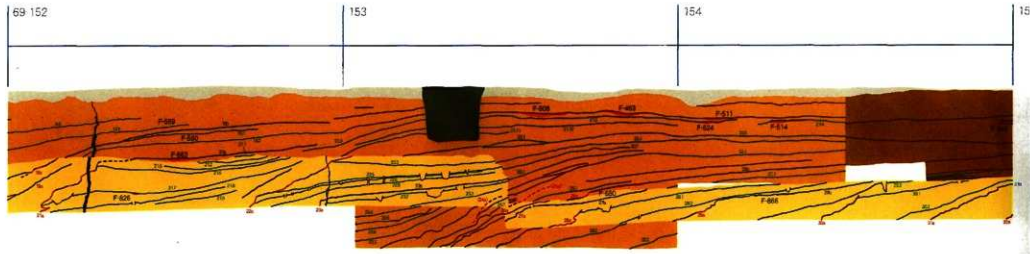
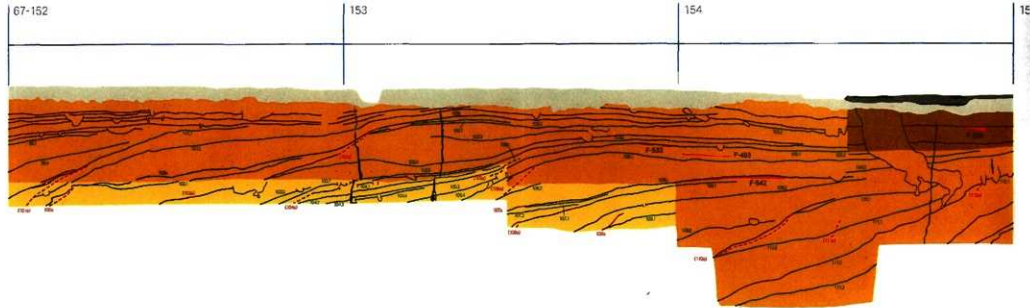


图 11-46 67-69 号二地層断面 (2)

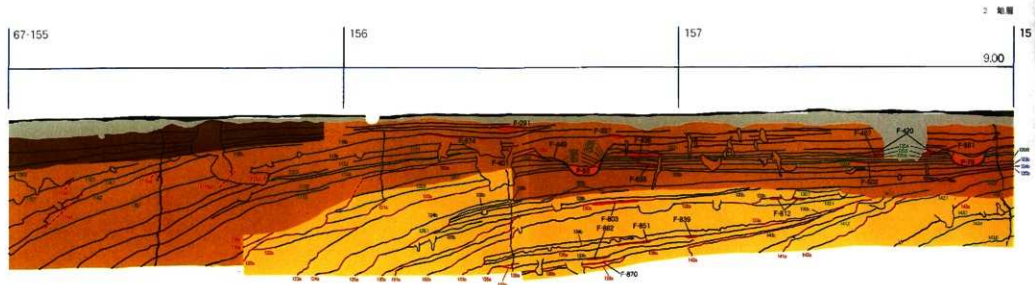
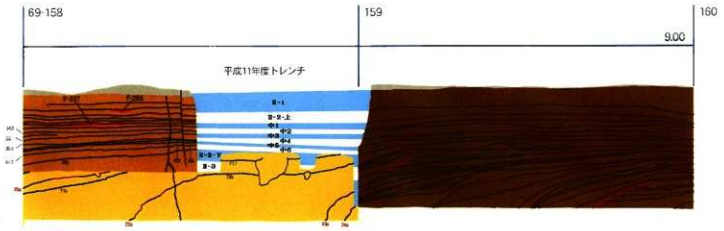
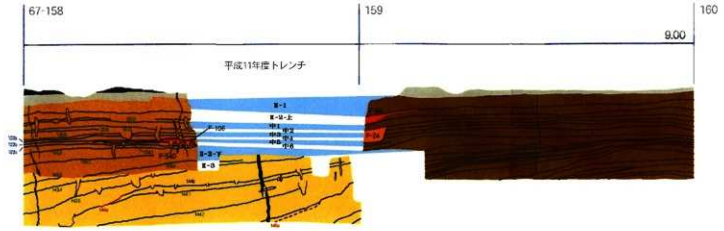


图 111-46 67、69 号土地層断面 (3)



図III-60 67・69号土壌断面図(4)

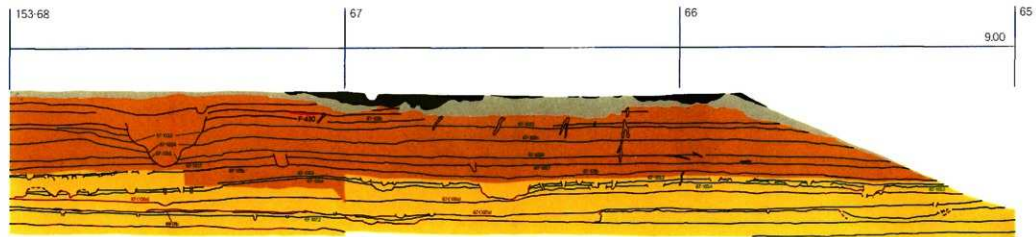
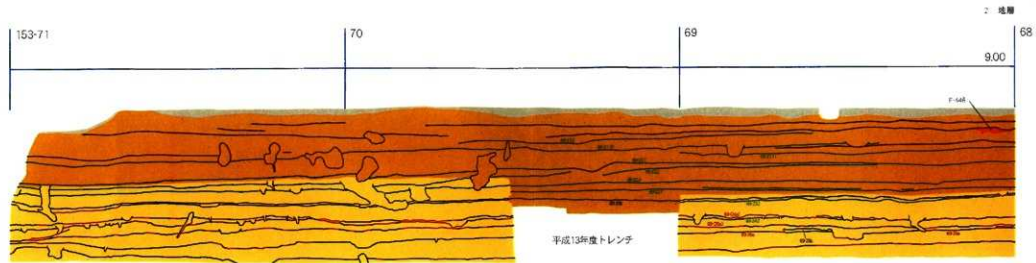


図 III-7 153 段平上地層断面

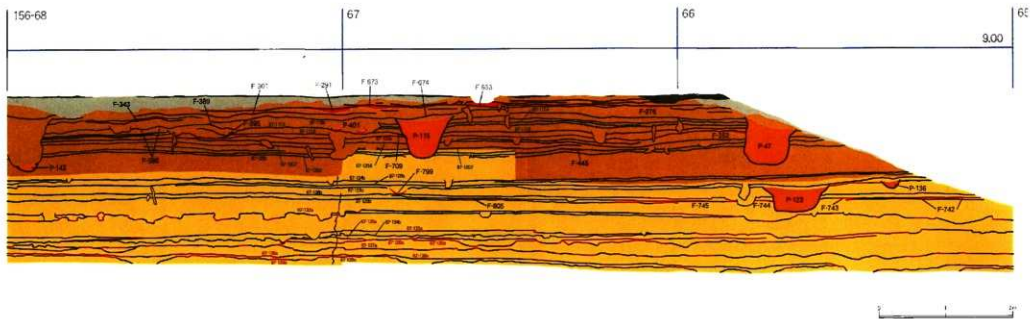
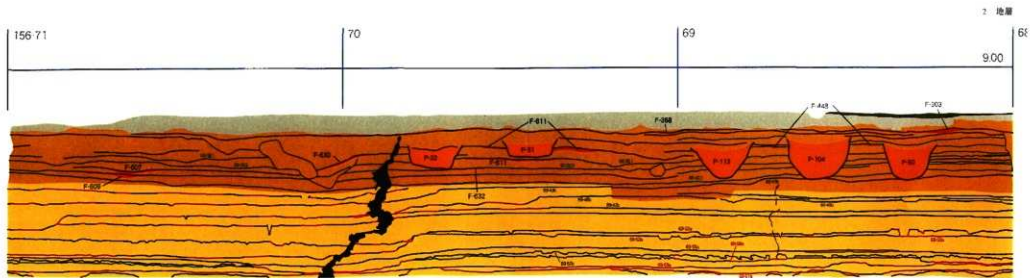


圖 111-8 156 線半上地層剖面

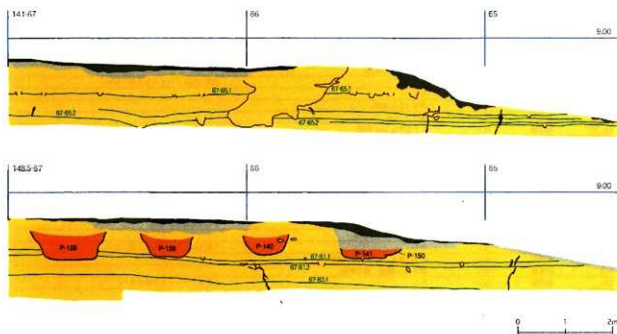


図 III-9 141 線・148 線半上地層断面

る場合が多く、含まれていた有機物が酸素の乏しい地中ないし水中で分解されたことを考えさせるのに対し、無堆積面下のそれは黄褐色ないし黄橙色を呈し、より酸化的な環境を示唆することが多い。今後はこのような類型化を進めて再堆積面と初生的な堆積面との区別を徹底し、堆積構造の理解を整頓する必要があると思われる。

なお茶色の線は肉眼で上下に比較して細粒の堆積物を確認できなかった面と、そのような休止を示唆する層の有無について記録のない面とをまとめた。堆積物の粒度や色調の不連続な変化、遺構・遺物の面的出土、植物の根痕を含む土壌化痕跡など様々な根拠で認定した面を一括している。その傾斜・走行の傾向は上記の3種の面と合致し、かなりの程度まで地層の構造を反映していると思われるが、層序の体系に正確に位置づけることは困難で、名称は与えていない。

以上図表の説明が長くなったが、地層断面を通過して、遺跡の地層が調査方格に概ね平行・直交する走行と傾斜を示すことが明らかであるとともに、その形成が場所により一様には進行していないことが窺われる。67線上下では128区、134区、147区、151区、155-157区など、69線上下では151-152区、155-157区などに狭い間隔で侵蝕面が出現し、堆積の北西方向への付加が停滞したことがわかる。また156線半断面では69-70区に侵蝕面の累積があり、やはりそれ以北に比べて堆積の進行が遅れたことを示す。おそらくこのような平面的な停滞の結果、同一地点に反復して同程度の厚さの堆積物が形成され、一方では生活面の累重を明瞭にする結果をもたらしているが、他方このように跛行的な地層形成のため地点間で遺構・遺物の帰属する旧地表面を対比する作業は単純でなく、原則として無堆積面そのものを連続的に検出していくことによってしか確定できないことが理解されよう。

また、侵蝕面の認識によって堆積構造の理解に変更をきたしたとは言え、少なくとも侵蝕を受けていない範囲では各単位の堆積物が傾斜の方向に沿って著しい厚さと粒度の変化を示し、ごく僅かな位置の違いで碎屑物を運んだ流れの速度に大きな差があったとみられること、したがってこの流れは風でなく水流であり、その速さの変化方向に直交する流れの軸をもっていたであろうことについては、昨年度の報告での推論（財団道埋文編2002の30頁）を変更する必要がないようである。推定される

III 道路の環境

表 III-1 断面一覧 (67 線上)

区 画	の 断 面 の 名 称	形 状 上 の 特 徴	基 下 の 組 成 材 質 等	注 意
14	未発掘	なし	なし	もう少し上位に達する可能性あり。
1.1	未発掘	なし	厚さ 0.5cm 前後。	
2a, 2b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
3a	未発掘	なし	なし	上層は泥よりいくらか上昇しない。
4a	未発掘	なし	なし	
3.14.1	未発掘	なし	厚さ 0.5cm 前後。	
3.14.2	未発掘	なし	厚さ 2-3cm。	
5a, 5b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
5a, 6b	未発掘	なし	b 下に厚さ 0.5-1cm。遺跡上位程度するか。	
6.1	未発掘	なし	厚さ 2cm 前後。遺跡調査。	
7a	未発掘	なし	なし	さらに上位に達する可能性あり。
7.1	未発掘	なし	厚さ 1-2cm。左端は遺元や中継部。	
8a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
9a	未発掘	なし	なし	さらに上位に達する可能性あり。
10a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
11a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
12a, 12b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
13a	未発掘	なし	なし	上層は泥よりいくらか上昇しない。
14a, 14b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1-2cm。遺跡調査。	
14.1	未発掘	なし	厚さ 3cm 前後。遺跡調査。	
15a	未発掘	なし	なし	上層もう少し上の可能性あり。
15.1	未発掘	なし	厚さ 3cm 前後。	
15.2	未発掘	なし	厚さ 1-2cm。	
16a, 16b	未発掘	なし	b 下に厚さ 2cm 前後。	
17a, 17b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1-5cm。	
18a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
19a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
20a, 20b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
21a	未発掘	なし	なし	
22a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。
23a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。
23.1	未発掘	なし	厚さ 1-10cm。左下へ傾い。遺跡調査。	
24a, 24b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	厚さ 5-10cm のシルト質細粒砂層に炭味なトラフ状クロスラミナ。
25a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。
26a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。前下 3-20cm の細粒砂層にトラフ状クロスラミナ。
27a, 27b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
28a	未発掘	なし	なし	
29a	未発掘	なし	なし	
30a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
32.1	未発掘	なし	厚さ 1-10cm。遺跡調査。	12V 線を通じた付近から若干は泥の厚層部か。
31a	未発掘	なし	なし	32a 箇との中央付近。厚さ 10cm ほどの細粒砂層にトラフ状クロスラミナ。
33a, 33b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1-3cm。	
33a	未発掘	なし	なし	
34a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
34.1	未発掘	なし	厚さ 3cm 前後。遺跡調査。	
35a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
35.1	未発掘	なし	厚さ 2cm 前後。遺元や中継部。	
35.2	未発掘	なし	厚さ 0-6cm。遺跡調査。	
36a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。
37a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。
37.1	未発掘	なし	厚さ 1-2cm。	
38a	未発掘	なし	なし	上層は泥よりいくらか上昇しない。
39a	未発掘	なし	なし	
40a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
41.1	未発掘	なし	左下へ傾く 5cm に達し。遺跡調査。	
41a, 41b	未発掘	なし	b 下に厚さ 2cm 前後。	133 線付近から 2 号は別の厚層部か。
42a	未発掘	なし	なし	
43a, 43b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
44a, 44b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
45a, 45b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1-2cm に達し。遺跡調査。	
46a, 46b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
47a, 47b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1-2cm。	
48a, 48b	未発掘	なし	b 下に厚さ 2-4cm。遺元や中継部。	
49a, 49b	未発掘	なし	b 下に厚さ 2cm 前後。	
50a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。
51a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。
52a, 52b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1-2cm。	
53a	未発掘	なし	なし	上層は泥ばこれよりよと思われる。
54a, 54b	未発掘	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
55a	未発掘	なし	なし	上層は確認しがたい。

表 III-1 続き

番号	母岩上の名称	断面上の産出	母下の顕微鏡植物	所見
56a	未定製	なし	なし	ト胎も少し下の可能性あり。
56.1	未定製	なし	厚さ 1cm 前後、還元や中層等、少し下に厚さ 3-3cm の副粒堆積物があり、右上へ向かって表面に区別困難となる。	136 歳半付近から右は別の堆積面か。
57a	未定製	なし	なし	
58a	未定製	なし	なし	
59a, 59b	未定製	なし	b 下に厚さ 0.5cm 前後。	
59.1	未定製	なし	厚さ 5-10cm、還元層等。	
60a, 60b	未定製	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
61a, 61b	未定製	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
62a, 62b	未定製	なし	b 下に厚さ 1-2cm、還元や中層等。	
63a, 63b	未定製	なし	b 下に厚さ 2-3cm、還元層等。	
64a, 64b	未定製	なし	b 下に厚さ 1-2cm。	
65a	未定製	なし	なし	上層は確認しがたい。
65.1	未定製	なし	厚さ 0.5-2cm、還元層等。上下に還元層等な厚さ 1cm 前後の副粒堆積物あり。	
65.2	未定製	F 947 141 層+断面に F 913・919	厚さ 0.5-1cm。	粘土の形成面であるので固化した副粒の植物層は上下に数枚あり、この層が特に顕著であるわけではない。
66a	未定製	なし	なし	ト胎も少し下の可能性あり。
67a	未定製	なし	なし	
68a, 68b	未定製	なし	b 下に厚さ 0.5-1cm。	
69a	未定製	なし	なし	
69.1	未定製	なし	厚さ 0.5-1cm。	11 年産トレンチの丸い一面の面がどうも不明。 69 歳より上位である可能性もある。
69.2	未定製	なし	厚さ 0.5cm。	
70a, 70b	未定製	なし	b 下に厚さ 1-2cm。	
71a, 71b	未定製	なし	b 下に厚さ 1-2cm。	
72a	未定製	なし	なし	上層は確認しがたい。
73a, 73b	未定製	なし	b 下に厚さ 0.5-2cm。	
74a, 74b	未定製	なし	b 下に厚さ 0.5-1cm。	
75a	未定製	なし	なし	上層はぼぼこれよりと想われる。
76a, 76b	未定製	なし	b 下に厚さ 0.5-1cm。	
76.1	未定製	なし	厚さ 1cm 前後。	
77a, 77b	未定製	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
78a	未定製	なし	なし	上層はぼぼこれよりと想われる。
79a, 79b	未定製	なし	b 下に厚さ 1cm 前後。	
80a	未定製	なし	なし	
81a	未定製	なし	なし	
81.1	未定製	なし	厚さ 1cm 前後。	
81.2	未定製	なし	厚さ 1-2cm。	
82a, 82b	未定製	なし	b 下に認めらる副粒層位を合わせるよう厚さ明確でない。	
83a, 83b	未定製	なし	b 下に厚さ 2cm 前後、還元や中層等。	84a 面との間に特殊なトランプ状クロマチンのある副粒堆積物が見られる。
83.1	未定製	なし	厚さ 2-3cm。	
84a, 84b	未定製	なし	b 下に厚さ 1-3cm。	
85a	未定製	なし	なし	
85.1	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後。	
86a	未定製	なし	なし	
86.1	対応なし	なし	厚さ 0.5-2cm。	
87a	未定製	なし	なし	
87.1	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後。	
(88a)	対応なし	なし		想定上の堆積面。
88.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
(89a)	対応なし	なし		想定上の堆積面。
89.1	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後、還元層等。	
89.2	対応なし	F 957	厚さ 1-2cm。	
89.3	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
89.4	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後、還元や中層等。	
89.5	対応なし	なし	厚さ 1-2cm、右下へ向かって還元層等。	
(90a)	対応なし	なし		想定上の堆積面。(91a)との間にトランプ状クロマチンのある副粒堆積物が見られる。
90.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
(91a)	対応なし	なし		想定上の堆積面。
91.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm、還元や中層等。	
91.2	対応なし	なし	厚さ 5cm、還元層等、副粒堆積物が存在している可能性あり。	
91.3	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後。	91.2 面と同一かもわからない。
91.4	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
91.5	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
(92a)	対応なし	なし		想定上の堆積面。
92.1	対応なし	なし	左下に厚さ 4cm に達する、還元層等。	
(93a)	対応なし	なし		想定上の堆積面。
93.1	対応なし	なし	厚さ 3-4cm。	
93.2	対応なし	なし	厚さ 2-3cm、還元や中層等。	
(94a), 94b	対応なし	なし	b 下に厚さ 3cm 前後。	(94a)の存在はほぼ確定だが層は想定。
94.1	対応なし	なし	厚さ 2cm に達し還元層等。	

III 遺跡の環境

表III-1 続き

名 称	母 土 上 の 名 称	断面上の遺構	基下の副柱基礎物	注 記
94.2	対応なし	なし	厚さ 8cm 渡し遺瓦破片等。	
94.3	対応なし	なし	厚さ 2-3cm。	
94.4	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
94.5	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後。	
95a, 95b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1-2cm、遺瓦破片。	
95.1	対応なし	なし	厚さ 2-3cm、遺瓦や中踏石。	
95a, 95b	対応なし	なし	b 下に厚さ 0.5cm 前後。	
96.1	対応なし	なし	厚さ 0.3-1cm。	
96.2	対応なし	なし	厚さ 0.3-1cm。	
96.3	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
96.4	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
(97a)	対応なし	なし		想定上の構造物。
97.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
97.2	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
97.3	対応なし	なし	厚さ 0.5-2cm。	
98a, 98b	対応なし	なし	b 下に厚さ 2-3cm、2 部位整合するらしく下平巻瓦破片。	98a の存在は確定だが形状は想定。
98.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後、遺瓦や中踏石。	
98.2	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
(99a)	対応なし	なし		付随物の存在はほぼ確定だが形状は想定。
99.1	対応なし	なし	厚さ 0.5-1cm。	
99.2	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後、遺瓦や中踏石。	
99.3	対応なし	なし	厚さ 3cm。	
99.4	対応なし	なし	厚さ 0.5cm 前後。	
100a	対応なし	なし	なし	
100.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
(101a)	対応なし	なし		想定上の構造物。
101.1	対応なし	なし	厚さ 3-7cm。	
101.2	対応なし	なし	厚さ 1-3cm。	
102a, 102b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1-2cm。	102a の存在は確定だが形状は想定。
102.1	対応なし	下 75%	厚さ 0.5-2cm。	
(103a), 103b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1-2cm。	(103a) は想定上の仮構造物。
103.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
103.2	21.11	なし	厚さ 2-4cm。	103.3 との間にトラフ状クロスミナの発達する層一中踏石あり。
103.3	22.1	なし	厚さ 2cm 前後。	103.4 との間にトラフ状クロスミナの発達する層一中踏石あり。
103.4	22.4	なし	厚さ 2cm 前後。	
103.5	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後、右下へ向かって遺瓦破片。	
103.6	22.7	なし	厚さ 2cm 前後、遺瓦破片。	
103.7	対応なし	なし	厚さ 1-3cm、右下へ向かって遺瓦破片。	
(104a)	対応なし	なし		付随物の存在はほぼ確定だが形状は想定。
104.1	対応なし	なし	厚さ 2-3cm、遺瓦破片。	
104.2	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
104.3	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
104.4	対応なし	なし	厚さ 1-2cm、遺瓦や中踏石。	
104.5	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
(105a), 105b	23a, 23b	なし	b 下に厚さ 3-4cm。	(105a) の存在はほぼ確定だが形状は想定。
105.1	対応なし	F-533	厚さ 1cm 前後。	105b と同一。
105.2	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
105.3	対応なし	なし	厚さ 3cm 前後、遺瓦や中踏石。	
105.4	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
(106a)	対応なし	なし		付随物の存在はほぼ確定だが形状は想定。
106.1	対応なし	なし	厚さ 1-3cm。	
106.2	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
106.3	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
107a, 107b	(25a)	F-542	b 下に 1-2cm。	
107.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm、遺瓦破片。	
107.2	対応なし	なし	厚さ 2-4cm、遺瓦破片。	
(108a)	対応なし	なし	厚さ 3-5cm、遺瓦破片。	後述物の存在はほぼ確定だが形状は想定。
108.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
108.2	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
109a	対応なし	なし	なし	
109.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm。	
109.2	対応なし	なし	基下に厚さ 4cm に達する、遺瓦破片。	後述物の存在はほぼ確定だが形状は想定。
(110a)	対応なし	なし		後述物の存在はほぼ確定だが形状は想定。
110.1	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後。	
110.2	対応なし	なし	厚さ 1-5cm、右下に厚い。	(111a) との間にトラフ状クロスミナのある層一中踏石あり。
(111a)	対応なし	なし		後述物の存在はほぼ確定だが形状は想定。
111.1	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後。	
111.2	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
111.3	対応なし	なし	厚さ 1-2cm、基下に同様の副柱層を 2 枚あり整合した状態で遺瓦や中踏石。	
(112a)	対応なし	なし		空地上的仮施設。

表 10-1 続き

番 号	66 線上的名称	断面上の遺構	地下の埋込埋遺物	備 考
112.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm.	
(113a)	対応なし	なし		埋込物の存在はほぼ確定だが層は想定。
113.1	対応なし	なし	厚さ 1-3cm.	
(114a)	対応なし	なし		断面上の埋込物。
114.1	対応なし	なし	厚さ 2cm 未満。	
114.2	対応なし	なし	厚さ 1-5cm.	
(115a), 115b	対応なし	なし	b 下に厚さ 3cm 未満。	(115a)の存在はほぼ確定だが層は想定。
115.1	対応なし	なし	厚さ 1-4cm.	
(116a), 116b	対応なし	F-674	b 下に厚さ 2cm 未満。	(116a)の存在はほぼ確定だが層は想定。
(117a), 117b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1-4cm.	(117a)の存在はほぼ確定だが層は想定。
117.1	対応なし	なし	厚さ 1-2cm.	
117.2	対応なし	なし	厚さ 2-4cm. 2 単位に分かれるか。	
117.3	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
117.4	36.1	15b 線断面直に F-401	厚さ 2cm 前後。	
117.5	36.5	なし	厚さ 1-2cm.	
117.6	対応なし	なし	厚さ 1-3cm.	
118a	対応なし	なし	なし	
119a	対応なし	なし	なし	
120a	対応なし	F-421	なし	断面部分に不整合が存在することは確実。
120.1	対応なし	なし	厚さ 4cm 未満。	
120.2	対応なし	F-436	厚さ 1cm 前後。	
120.3	対応なし	なし	厚さ 1cm 未満。	
120.4	対応なし	F-420 P-79 断面直に	厚さ 1cm 前後。	
120.5	対応なし	F-401・351	厚さ 1cm 未満。	
120.6	対応なし	なし	厚さ 0.5-1cm.	
120.7	対応なし	F-435	厚さ 1cm 未満。	
120.8	対応なし	F-502	厚さ 1cm 未満。	
120.9	42.1	なし	厚さ 1cm 未満。	
121a	対応なし	なし	なし	
122a, 122b	43b	なし	b 下に厚さ 1cm 未満。	122a 層との間にトラフ状クロスラミナのあるシルト質層が砂層あり。
123a	対応なし	なし	なし	124 層との間のシルト質層が砂層に類似したトラフ状クロスラミナが見られる。
124a, 124b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1-2cm.	
124.1	対応なし	F-406	厚さ 1cm 前後。	
125a, 125b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1cm 未満。	
126a	45a, 45b	なし	厚さ 2cm 前後。	15b 線断面直に埋込物に類似する。
127b	対応なし	15b 線断面直に F-421・12b	厚さ 1-3cm. 2 単位以上混合している可能性あり。	15b 線断面直に埋込物に類似する。
128b	47b	なし	厚さ 1-4cm. 左下に向かって薄く埋込物。	15b 線断面直に埋込物に類似する。
128.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。埋込物。	
128b	対応なし	なし	厚さ 1cm 未満。	15b 線断面直に埋込物に類似する。
130a, 130b	対応なし	F-503	b 下に厚さ 1-2cm.	
131a	対応なし	なし	なし	
132a, 132b	52a, 52b	F-412	b 下に厚さ 4cm 前後。	132a との間のシルト質層が砂層にトラフ状クロスラミナ。
133.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
133a	55a	なし	なし	
134b	57b	なし	厚さ 2-5cm. 埋込物。	地下の埋込物に類似して埋込され大きく穴打つ。15b 線断面直に埋込物に類似。
135a, 135b	58a	b-439・451	b 下に厚さ 1cm 未満。埋込物。	
136a	対応なし	なし	なし	
137a, 137b	対応なし	F-502	b 下に厚さ 1cm 前後。埋込物。	
138a	61a, 61b	F-570	なし	
139a	対応なし	なし	なし	
140a, 140b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1-2cm. 埋込物。	
141a	対応なし	なし	なし	
141.1	対応なし	なし	厚さ 1-3cm.	
141.2	対応なし	なし	厚さ 3-5cm.	
142.1	対応なし	なし	なし	
142.2	対応なし	なし	厚さ 1cm 未満。	142.2 との間に不整合が存在するか。
142.3	対応なし	なし	厚さ 1-2cm.	
143a	対応なし	なし	なし	
143.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
143.2	対応なし	なし	厚さ 1-2cm.	143.3 と同一か。
143.3	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後。	143.2 と同一か。
143.4	対応なし	なし	厚さ 1-2cm.	143.5 との間のシルト質層が砂層にトラフ状クロスラミナ。
143.5	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後。	
144a, 144b	対応なし	なし	b 下に厚さ 1-2cm.	
144.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後らしいがそれ以下の埋込物との境界不明瞭。	
144.2	対応なし	なし	厚さ 1-2cm らしいがそれ以下の埋込物との境界不明瞭。	
145a	対応なし	なし	なし	

III 遺跡の環境

表III-2 層面一覧 (69 線上)

番号	対応	遺物の名称	層面上の遺物	出土の状況/特徴	備考
1.1	対応なし	なし	なし	あり、還元や酸化層、	
1.2	対応なし	なし	なし	あり	
1.3	対応なし	なし	なし	あり、還元や酸化層、2層目が覆合するが、	
1.4	対応なし	F-559	なし	あり、還元や酸化層、	
2a, 2b	対応なし	なし	なし	下に厚さ 3cm 前後、還元や酸化層、	
2.1	対応なし	なし	なし	あり	
2.2	対応なし	なし	なし	厚さ 1cm 前後、左下に向かって還元や酸化層、	
3a	対応なし	なし	なし	なし	
3.1	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
3.2	対応なし	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	
4a, 4b	対応なし	なし	なし	下に厚さ 1-2cm、	
4.1	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、漂白層、	4.2 面との間に埋められたトラフ状ロスタミナのある層-中粒砂あり。
4.2	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
4.3	対応なし	F-659	なし	あり	
5a	対応なし	なし	なし	なし	6a 面との間に埋められたトラフ状ロスタミナの層-中粒砂あり。
5.1	対応なし	なし	なし	厚さ 2-3cm、右下へ向かって還元や酸化層、	6a
5.2	対応なし	なし	なし	厚さ 1-2cm、還元や酸化層、	
5.3	対応なし	なし	なし	厚さ 1-2cm、	
5.4	対応なし	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	6a 面との間に埋められたトラフ状ロスタミナの層-中粒砂あり。
6a, 6b	対応なし	なし	なし	下に厚さ 2cm 前後、	6b
6.1	対応なし	なし	なし	厚さ 2-6cm、右下へ向かって還元層、	6a より 6b より厚い、11a より上部だが不連続、同よ。
6.2	対応なし	なし	なし	あり、還元や酸化層、	6.1 面と同ーか。
7a	対応なし	なし	なし	なし	
8a	対応なし	なし	なし	なし	
8.1	対応なし	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	9a 面との間に埋められた厚さ 50cm 前後で層-中粒砂あり、トラフ状ロスタミナが露出。
9a	対応なし	なし	なし	なし	
9.1	対応なし	なし	なし	あり	10a より埋められた層-上位だが正確な位置づけは不明。
10a	対応なし	なし	なし	なし	
10.1	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
10.2	対応なし	なし	なし	あり	
10.3	対応なし	なし	なし	あり	同よ。
11a	対応なし	なし	なし	なし	
12a	対応なし	なし	なし	なし	
12.1	対応なし	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	
12.2	対応なし	F-559	なし	厚さ 3cm 前後、	
12.3	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
13.1	対応なし	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	
13a, 13b	対応なし	なし	なし	下に厚さ 1-2cm、	埋め物の存在はほぼ確定だが埋め物なし。
13.1	対応なし	なし	なし	厚さ 1-2cm、	
14a, 14b	対応なし	なし	なし	下に厚さ 1-2cm、	
14.1	対応なし	なし	なし	厚さ 1-3cm、	
15a	対応なし	なし	なし	なし	
15.1	対応なし	なし	なし	厚さ 1-2cm、左下へ向かって還元層、	
16a	対応なし	なし	なし	なし	
17a	対応なし	なし	なし	なし	
18a, 18b	対応なし	なし	なし	下に厚さ 1-2cm、	
18.1	対応なし	F-560	なし	あり	
18.2	対応なし	なし	なし	あり	
19a	対応なし	なし	なし	なし	
20a, 20b	対応なし	なし	なし	下に厚さ 1-3cm、	
21a, 21b	対応なし	F-563	なし	a F にあり、	21b が埋め物に埋められたことはほぼ確定だが埋め物なし。
21.1	対応なし	なし	なし	あり	
21.2	対応なし	なし	なし	厚さ 1-2cm、	
21.3	対応なし	F-524	なし	厚さ 1cm 前後、	
21.4	対応なし	F-514	なし	厚さ 1cm 前後、	
21.5	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
21.6	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
21.7	対応なし	F-826	なし	厚さ 1-3cm、右下へ向かって還元層、	
21.8	対応なし	なし	なし	厚さ 1-2cm、左下へ向かって還元層、	
21.9	対応なし	なし	なし	厚さ 4cm 前後、	
21.10	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
21.11	103.2	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	
22a	対応なし	なし	なし	なし	
22.1	103.4	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	
22.2	対応なし	なし	なし	厚さ 1cm 前後、	
22.3	対応なし	なし	なし	厚さ 3cm 前後、	
22.4	103.5	なし	なし	厚さ 1-2cm、	
22.5	対応なし	なし	なし	厚さ 1-2cm、	
22.6	対応なし	なし	なし	厚さ 4-6cm、還元層、	
22.7	103.7	なし	なし	厚さ 2-3cm、	
22.8	対応なし	なし	なし	厚さ 3-5cm、還元層、	
23a, 23b	105a, 105b	なし	なし	下に厚さ 1-3cm、	23b または 23.2 と同一か。
23.1	対応なし	なし	なし	あり	
23.2	対応なし	なし	なし	厚さ 4-10cm、右下へ向かって還元層、埋め物層を含むが、	
23.3	対応なし	なし	なし	厚さ 1-3cm、還元層、	
23.4	対応なし	なし	なし	あり	
23.5	対応なし	なし	なし	あり	
23.6	対応なし	なし	なし	あり	
23.7	対応なし	なし	なし	あり	
24a)	対応なし	なし	なし	なし	固定上の埋め物。

表 III-2 続き

番号	67層上の名称	断面上の遺構	直下の埋設物	所見
24.1	対応なし	なし	あり	
24.2	対応なし	なし	厚さ 2cm 前後	
24.3	107a, 107b	なし	なし	断面上の鉄線面
25.1	対応なし	なし	あり	
26a, 26b	対応なし	F-60D	b下に厚さ 1~2cm	
27a, 27b	対応なし	なし	なし	
27.1	対応なし	なし	厚さ 1~2cm	
28a	対応なし	なし	なし	
28.1	対応なし	なし	厚さ 1~2cm	28.2面との間にトラス状クロスタジアムのある中粒砂層
28.3	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後	
29a, 29b	対応なし	F-66B	b下に厚さ 1cm 未満	
29.1	対応なし	なし	あり	29bと同一か
29.2	対応なし	なし	あり	
29.3	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後	
30a	対応なし	なし	なし	
30.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 未満、還元や中継層	30.2との間に鉄線面が生ずる可能性あり
30.2	対応なし	なし	厚さ 1~2cm	
31a, 31b	対応なし	なし	b下に厚さ 3cm 前後	
32a, 32b	対応なし	なし	b下に厚さ 2~3cm	
32.1	対応なし	なし	あり	
32.2	対応なし	なし	厚さ 2~3cm	
33a	対応なし	なし	なし	
33b	対応なし	なし	なし	
34.1	対応なし	なし	あり	
34.2	対応なし	なし	あり	
34.3	対応なし	なし	あり	
35a, 35b	対応なし	なし	b下に厚さ 1cm 前後	
36a	対応なし	なし	なし	
36.1	117.4	156 級半断面に F-611	あり	
36.2	対応なし	なし	厚さ 1~2cm	
36.3	対応なし	なし	厚さ 1~2cm	
36.4	対応なし	なし	厚さ 1cm 未満	
36.5	117.5	156 級半断面に 632	厚さ 1cm 前後	
37a, 37b	対応なし	なし	b下に厚さ 1~2cm	37a面の直上に厚さ 30cm 前後の埋設物あり、埋設物トラス状クロスタジアム見られる
38a, 38b	対応なし	なし	b下に厚さ 2cm 前後、左下に還元面	
38c	対応なし	なし	なし	
40a	対応なし	F-95Z	なし	
41a	対応なし	なし	なし	
42a	対応なし	なし	なし	
42.1	120.9	なし	厚さ 1~2cm	
42.2	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後	
43a	127a, 127b	なし	厚さ 1~2cm	67層・156 級半断面で埋設面に接続
44a	対応なし	なし	なし	
45b	128a	F-65E	厚さ 2~3cm	156 級半断面で埋設面に接続
46a	対応なし	なし	なし	
47a	128b	なし	厚さ 0.5~1cm	156 級半断面で埋設面に接続
47.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後、還元層	
47.2	対応なし	なし	あり	47a または 47.1 と同一か
48a	対応なし	なし	なし	
49a, 49b	対応なし	なし	b下に厚さ 1~2cm	
50a, 50b	対応なし	なし	b下に厚さ 1cm 前後	
51a, 51b	対応なし	F-93E	b下に厚さ 2cm 前後	
53a, 53b	132a, 132b	なし	b下に厚さ 1cm 前後、その下に目詰りして厚さ 0.5cm 前後の埋設物あり、両者の間に生ずる面となるらしい	53b と 56b の間にトラス状クロスタジアムの層状な埋設物が見られる
53c, 53d	対応なし	なし	b下に厚さ 1~2cm	
54a	対応なし	なし	なし	
55a	133a	なし	なし	
56a	対応なし	なし	なし	
57b	134b	なし	厚さ 3cm 前後、還元層、熟成後の水質で濃く色付く	156 級半断面で埋設面に接続
58a	135a, 135b	なし	なし	156 級半断面で埋設面に接続
59a, 59b	対応なし	なし	b下に厚さ 0.5~1cm、還元面	
60a	対応なし	なし	なし	
61a, 61b	138a	なし	b下に厚さ 1~2cm	
62a	対応なし	なし	なし	
63a, 63b	対応なし	なし	b下に厚さ 0.5~1cm	
64a, 64b	対応なし	なし	b下に厚さ 0.5mm	
65a	対応なし	なし	なし	
66a, 66b	対応なし	なし	b下に厚さ 1cm 前後	
67a, 67b	対応なし	なし	b下に厚さ 3~4cm、埋設物状さむか	
68a, 68b	対応なし	なし	b下に厚さ 1cm 未満	
69a, 69b	対応なし	なし	b下に厚さ 1cm 前後	
70a	対応なし	なし	なし	
71a, 71b	対応なし	なし	b下に厚さ 1cm 未満、直下の埋設物一二次と推定して厚さ 4~5cm に見える	
71.1	対応なし	なし	厚さ 1cm 前後、直下の埋設物と推定し 2cm 前後に見える	71b または 70a 面に接続する可能性あり
72a, 72b	対応なし	なし	b下に厚さ 2cm 前後	
73a	対応なし	なし	なし	
74a	対応なし	なし	なし	

流れの方向に直交する67・69線上断面で砂質の堆積が厚い部分にしばしばトラフ状のクロスラミナが観察される(表III-1・2)こともこの推論を裏付ける。そして少なくとも現在の石狩川河道とは全く異なる方向をもつこの水流を、古豊平川のものともみなすことが自然であると思われる。

67線上断面において、II層上面の標高が最も低くなる125線付近から西では侵蝕面の出現が概して疎らになる。侵蝕面相互が水平方向に5m以上も隔たる箇所が見られるようになり、先に注意した堆積の停滞部とは対照的な様相を示している。I断面のみの観察で結論するのは高早であろうが、水成の堆積物に現れたこのような変化は、石狩川との合流点付近における古豊平川の河況の変化と無関係であるとは考えにくい。14年度の発掘では130線付近から西で遺構・遺物はかなり稀であったことと考えあわせれば、今後は遺跡の盛衰と河川環境の変化との関係を究明する視点からの調査も必要となるものと予想される。

(4) 深部の堆積

以上のように堆積構造の理解がある程度進んだ結果、遺跡形成当時の地表面が侵蝕面に沿って下方へ、すなわち洪水期における古豊平川の水面までは続いていたであろうと考えられるようになったので、II章でも触れたように人力掘削の終了面からさらに重機による坪掘りをおこない、遺構・遺物の有無を確認することを試みた(図版II-6)。地形の項で述べたように当時の平常の水位が現在より目だって高かった可能性は小さく、したがって遺跡付近の現石狩川水面に相当する標高2m以下まで掘り下げることが必要であるとも考えられたが、深部は崩れやすい砂礫であって危険が伴い、地下水の影響も懸念されたので、ひとまず目下の河川改修計画で切土が見込まれる標高4m前後までの状況の確認を目標とした。試掘坑の位置は図II-3に示すとおりであり、このうち3箇所の南西側壁面の図を反転して掲載した(図III-10)。これは崩壊を防ぐため傾斜をつけた試掘坑の壁面に現れた層面を64・66線に平行な垂直面に投影したもので、このような垂直断面が実在するというわけではない。

断面の上部では侵蝕面・堆積面とも例外なく北西方向に傾斜しており、これらは浅部に現れる侵蝕面やそれを覆う再堆積面に連なるものとして理解できる。しかし深度が増すにつれ傾斜の弱い層面が現れ、標高4m前後から下ではほぼ水平に近く、薄い礫層を伴う侵蝕面(64-130坑・64-139坑)を見ることができる(図版III-2)。これらは斜面の崩壊、つまり主に堆積物に働く重力の作用によって理解される上位の層面とは異なり、堆積物を水平方向に押し流す水流の作用で生じたものと考えられる。ほぼ同じ高さに規模の大きいトラフ状のクロスラミナと思われるもの(66-154坑)が見られることもこの見方を支持するであろう。これらの侵蝕面を基底として堆積する礫混じりの砂層は増水時の流路内に形成されたものとみてよいと思われる。水流の衰えあるいは静止にともなってこの砂層はシルト質の堆積物に覆われるが(64-130坑・64-139坑)、この堆積面もそのままでは保存されず、旧地表から連なる侵蝕に切り込まれる場合がある(64-139坑・66-154坑)。したがってこれらのほぼ水平な地層は、洪水時には水面上に現れる洲の堆積物であると考えるのが妥当であろう。

すでに地形の項で、遺跡が古豊平川の自然堤防とみられる地形の中に形成されていることを述べた。とは言えその微高地の平面形からみて、遺跡は想定される古豊平川の凸岸側にあり、通常自然堤防の発達するとされる凹岸にはない。13年度の報告でも、顕著な側方付加を示すこの微高地の地層が、自然堤防よりむしろ流路の凸岸側に発達するポイントバー(蛇行洲)のそれに類似することを疑問として挙げた(財団法人文編2002の30頁)。今年度の試掘の結果からみると、遺跡の地層の深部には確かに流路内で形成された洲の構造がみられるものの、この洲は主に河岸斜面上方からの堆積物供給によって次第に北西方向へ移動していると考えられる。これは河川の蛇行そのものによって生成

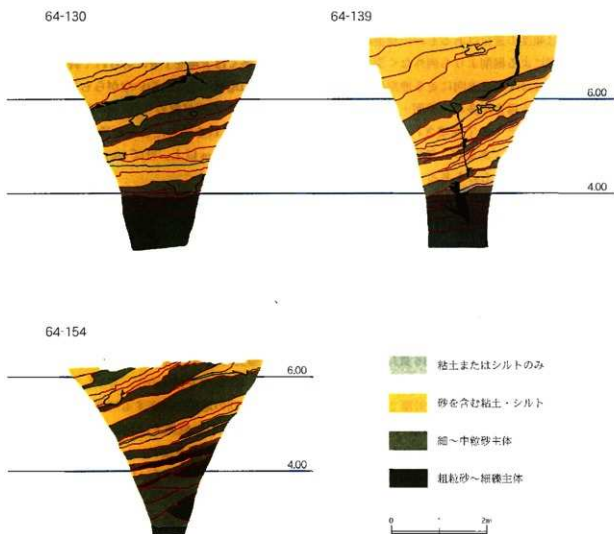


図 III-10 重機坪壺坑地層断面

する典型的なポイントバーとは性格の異なる堆積の機構である。

洪水時の水面からおそらく6m以上も上の河岸にまで土砂を運び上げた洪水こそがこの地形の発達の主因であり、蛇行はむしろその結果であったということになる。その意味で、この遺跡の位置する地形を自然堤防と表現するのがやはり正しいようである。もともと、自然堤防は流路外の地形であるという定義に立ち戻れば、古豊平川に向かって降っていく斜面は流路内ということになるであろうから、多くの侵蝕面と再堆積層からなるこの部分は自然堤防の一部とは言いがたい。侵蝕面上端、すなわち流路の外縁よりも外側の、洪水時の溢流による堆積面を保っている部分が問題なく自然堤防と呼ぶべき地形であり、そしてこれまでの知見では、遺物はともかく遺構のほとんどはこの狭義の自然堤防の部分に残っているとみることができる。

(5) 噴砂・土壌凍結

すでに述べたように、図 III-5-9 に現れる稲妻状の墨塗りほとんどが地震時の液状化現象によって生じた噴砂脈である。例外は67・69線上の158線半付近に見られるI層を切る亀裂で、これは平

成 11 年度の発掘以後にトレンチの壁に沿って生じたずれ落ちである。

噴砂脈は頻度の変化はあるものの発掘範囲の全域に認められる。断面で観察すると、重機掘りを含めて発掘による削削よりも例外なく深い位置から連なり、多くは上端を I 層に切られて終わっている。平面ではほぼ南北方向に走る地割れとして観察され、概ね地層の走行に沿いながらもそれよりも西方向に振れる場合が多い。平面・断面とも分岐・収斂と端部の尖滅が認められ、中-極粗粒砂を主体に細礫を交えたもので充填されている。割れ目の幅、およびこれを挟んだ層面の段差は 3cm を超えない場合が大半であるが、稀には伸張方向に直角に測って幅 10cm 以上、ほぼ 10cm に達する高低差をもたらしているものもある（図 III-5a および図版 III-1、146 区）。

149 線以西では II 層の最上部で急激に上方へ向かって放散するように見える噴砂脈が認められ（図 III-5a、126 区）、地震当時の地表がこの直上にあつたことを示すものかとも考えたが、断面の検討によれば倒木痕など上層密度の低い部分で拡散したもののようである。噴砂丘と思われるものも一切確認できず、概して遺跡の形成時期よりは新しいものが多いと判断される。

札幌市北東部の沖積低地の遺跡群でも従来多くの噴砂脈が確認されており、新旧少なくとも 2 回の地震に関係するものとみなされている（同市埋文編 1998 の 20 頁）。新しい噴砂は同市 K502 遺跡で 1739 年降下の樽前 a 降下軽石（曾谷・佐藤 1980）とみられる火山灰層を切っていることが報告され（同市埋文編 1999 第 3 分冊の 16 頁）、同市 H317 遺跡では徳文時代中頃の第 5 号堅穴住居跡の床面のすぐ上に古い噴砂に由来するとみられる砂層が発見された（同市埋文編 1995）。こうした事例と地理的に近く地質的にも類似する対羅 2 遺跡の噴砂は、これら 2 回の地震に対応する可能性が高い。

一方、札幌市 K39 遺跡の北海道大学構内における発掘で検出された統縄文時代前半頃の噴砂（伏島・平川 1996 の 15 頁）に対応するものは今のところ確認することができない。しかしすでに述べたように、本遺跡では縄文・統縄文時代当時の堆積物の上面が完全には残っていない可能性が高いので、観察された噴砂脈の一部がそこまで遡る可能性も保留しておく必要がある。

噴砂以外の後生的な構造として、土壌凍結の痕跡が観察された。II 層の最上部のほとんど砂を含まない部分では、焼土遺構の焼け土が概ね径 2cm 以下の塊状となって間に焼けていない土が入り込み、焼け面の範囲が曖昧になる現象が普通に経験された。これは土壌の凍結と融解による攪乱と考えられる。砂を挟む下部の地層ではこの攪乱は顕著でなく、砂が凍上を抑制していると思なされる。こうした凍結痕跡はおそらく遺跡形成時から累積したものであるが、遺構が少なく単調な地層断面をもつ 153 線以西で観察すると現地表に平行して I 層の下面から 40cm 前後の厚さで凍結・融解の結果と思われる土壌の塊状化を見ることができる。現代の河川敷造成後にも凍結・融解による遺跡浅部の攪乱が進行しているものとみなされ、おそらく植生の状況にも影響されるところがあるのであろう。

(6) 地層区分の対比

この章の最後に、11・12 年度の報告で記述された地層区分と 13・14 年度のそれとの対比について述べる。この問題については昨年度の報告書でも簡単に触れたが（財団道埋文編 2002 の 30-31 頁）、その際に試みた断面図の合成（同前書の図 III-4・5）には II 章 2 節で述べたとおり標高の誤りが含まれていたため、それを修正して新たに 67・69 線上における地層断面の合成をおこない（図 III-7）、これにもとづいて本書の層面と 11・12 年度地層との対応関係を想定し、表 III-3 に一覽として示した。

要点としては、11・12 年度に「II-1 層」「II-2-上層」として報告したものは前項までに述べた層序の体系に正確に位置づけることが困難であるが、「II-2-中層」とその細別、「II-2-下層」「II-3 層」はほ

表 III-3 13・14年度層面と11・12年度層名の対比

	13・14年度	11年度	12年度	備考
	120.3 面	「II-2-中 (1) 層」上面		
	120.5 面	「II-2-中 (2) 層」上面		
	120.9 面	「II-2-中 (3) 層」上面		120.9面は11年度「II-2-中 (3) 層」上面を介して69-36.1面に対比されるが、13・14年度の所見では69-42.1面相当であり、整合しない。
67 線上下の対比	122b 面	「II-2-中 (4) 層」上面		122b面は11年度「II-2-中 (4) 層」上面を介して69-36.4面かそのやや上に対比されるが、13・14年度の所見では69-43b面相当であり、整合しない。
	124b 面	「II-2-中 (5) 層」上面		
	124.1 面かそのやや下	「II-2-中 (6) 層」上面		
	130b 面または 142.2 面	「II-2-下層」上面		
	143.3 面かそのやや上	「II-3 層」上面		
	143.5 面付近		「II-2-下層」上面	
	144b 面かそのやや上		「II-3 層」上面	
	144.2 面付近		「II 層」上面	
	34.3 面より上	「II-2-中 (2) 層」上面		
	36.1 面	「II-2-中 (3) 層」上面		36.1面は11年度「II-2-中 (3) 層」上面を介して67-120.9面に対比されるが、13・14年度の所見では67-117.4面相当であり、整合しない。
	36.4 面かそのやや上	「II-2-中 (4) 層」上面		
69 線上下の対比	43b 面か 45b 面	「II-2-中 (5) 層」上面		43b面は11年度「II-2-中 (5) 層」上面を介して67-124b面に対比されるが、13・14年度の所見では67-122b面相当であり、整合しない。
	47.2 面かそのやや下	「II-2-中 (6) 層」上面		
	66b 面	「II-2-下層」上面	「II-2-中 3 層」付近か	
	71.1 面	「II-3 層」上面	「II-2-中 5 層」上面	
	72b 面		「II-2-下層」上面	
	73a 面付近		「II 層」上面	

ば本書の層面との関係を判断することができ、各「層」が北西側へどの程度伸張するかも推定が可能である。「II-2-中層」は侵蝕されない旧地表を挟む安定した堆積物としてはほぼ 156 線までの範囲でしか分布せず、「II-2-上層」もおそらく 156 線を大きく北西側へ超えて広がることはないと思われる。

問題は、11年度の158線半トレンチ北西壁の断面図に記録された「層」の一部が12年度の67・69線土地層断面に現れる同名の「層」と整合しないようにみえる点にある。12年の「II-2-下層」「II-2-中6層」は11年の「II-3層」「II-2-下層」よりそれぞれ下位にあるように思われ、また12年の「II-2-中4層」「同5層」は11年の「II-2-下層」または「II-3層」に対比される可能性が高い。こうした不整合は地層の上層になるほど目立たなくなるが、69線上下では「II-2-上層」と「同中層」の境界さえ11年と12年の間でよく一致するようには見えない。

12年度の「層」の命名は、11・12両年度の発掘範囲にまたがる遺構を根拠におこなわれており、少なくとも11年度トレンチの南東壁面における層区分と12年度のそれは一致するはずである。したがって11年のトレンチ内で同一「層」の遺構とされたものは、実際には異なる層準のものを含んでいたのではないかという疑問が生じる。遺構を島状に残しながら掘り下げた11年度の調査(図版II-2)では狭いトレンチ内とは言ってもそうした誤認が起こりえたとみるべきであろうか。次章以下では11・13・14の3年次にわたる調査を統合して同一生活面の遺構・遺物と思われるものをまとめながら報告しているが、11年トレンチ内のもの、特に遺物の層序については調査ときに認定された同一「層」の関係を修正する手段がなかった。

以上やや冗遠な説明となったが、既往の地層区分を維持することが実際上困難であり、混乱を避けるために本書で別体系の層序を採用せざるを得ない事情を理解していただけるものと思う。

IV 遺構

1 記載の方法

(1) 取上面

II・III章でも述べたとおり現地調査の段階では地層の正確な把握が困難であったため、同一発掘区内の掘り下げで遺構・遺物が面的にまとまって検出されるたびにこれを「取上面」と称し、それを実務上の層位として遺構の記録と遺物収集を行った。取上面には小発掘区ごとに通し番号をつけ、○囲み数字で命名している。その設定のつど取上面記録票に13年度は代表的な遺物の標高とその取上面に帰属する遺構を、また14年度は加えて東西方向の隣接小発掘区における取上面の対応関係を記入した。

本章では必要に応じて現地調査の記録からそのまま転載した取上面を用いながら記載を進める。特に土坑はかなり削平してから検出した場合が多く、検出面を地層や後述する「生活面」に対比する作業にあまり意味が認められないので、主に取上面によってその層位を記述した。現地での記録もれ等の事情により遺構の検出面が取上面の間や上に位置する場合には○間・○上という記載を行った。

(2) 生活面

二次整理作業の中で、発掘区ごとに設定した取上面の対応関係を吟味し、遺構の共有関係や遺物の標高から一連の取上面とみなされるものをまとめて「生活面」を設定した。これはつまり遺構・遺物に基づいて認定した単一旧地表面であるが、地層断面の検討によって認定しIII章で記載した層面とは必ずしも一致しない。層面の間に多数の生活面が存在することもあれば、全く存在しないこともある。また、断面上の遺構から生活面と層面との一致が判明する場合もある。表IV-1に生活面を構成する小発掘区ごとの取上面と、生活面と層面との対応関係を記載している。

生活面の編成にあたっては複数の小発掘区にまたがる焼土・炭化物等と現場における小発掘区間の同一取上面の情報を重視した。焼土・炭化物等が上下に重なる場合は原則として各々を別の生活面とした。遺物のみ検出した取上面が重なっている場合は1つの生活面としてまとめた場合がある。また、小発掘区間の同一面の情報が無い場合においては遺構・遺物の検出標高や層面を目安として生活面の広がりをつまえている。こうした室内での判断に際しては層面をまたがないこと、各小発掘区の取上面の順序に矛盾が起きないことを前提とした。

生活面には上位のものから通し番号をつけ、1~245面を設定した。できる限り広範囲に同一生活面を追求することに努めたが、基本的に層面と同様の走向・傾斜を有することから一般に東へ向かうほど上下の生活面が接近し、対応を確定できなくなることが多かった。そのため南北方向には概ね発掘範囲全体にわたって認定できるが、東西方向では小発掘区で2-6区間ほどの広がりとして捉えられた生活面が多い。

IV 遺構

遺跡の形成された年代を測定するために平成13年度にF-598(生活面111)・463(生活面137)・622(生活面191)・425(生活面195)・527(生活面213)、14年度にF-756(生活面1)・736(生活面21)から検出された炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行い $1740\pm 40\sim 2560\pm 30$ yBPの年代を得た(VI章)。また、11年度に行った測定でF-50(生活面132)・58(生活面189)・120(生活面211)から $2470\pm 60\sim 2560\pm 60$ yBPの年代を得ており(財団道埋文編2000)、13・14年度発掘区内において生活面1~213の範囲では $1740\pm 40\sim 2560\pm 60$ yBPの年代幅があることがわかった。

平面的な遺構である焼土・集石・剥片集中・細円礫集中は記録された取上面への帰属が確実であるので生活面の決定にも問題はなく、同一生活面ごとに編成して図を掲載した。

(3) 図の表現・縮尺等

土坑の図は40分の1で掲載している。遺物の出土状況は必要に応じて20分の1図としたところもある。土坑出土土器の8分の1実測図を添えた場合がある。焼土等は80分の1図を掲載している。焼土断面図は特徴的なものを選び40分の1で示した。集石は20分の1で図示している。

平面図の表現は、太実線内が焼土で、濃網は現地性の焼土(焼け範囲)、薄網は廃棄焼土である。細実線内網掛けは薄いものから濃いものへ順に粘土・ベンガラ検出範囲・剥片集中を表す。粗い砂目は細円礫集中、細かい砂目は噴砂である。炭化物が密集する範囲は長破線・疎らに散布する範囲は短破線・微細骨片の範囲は点線で表現している。焼土内では焼成の進み具合により太実線→1点破線→2点破線として状況を表した。また、集石・剥片集中で範囲の示せないものは集石が▲、剥片集中が▼で位置を示している。(酒井)

(4) フローテーション成果

遺構土壌のフローテーション成果を表IV-3に掲載している。現地で採取した土壌は年度ごとに通し番号をつけ、これを単位としてII章で記載の要領により処理した。調査の手順に応じて同一遺構・層位の土壌が複数の処理番号に分かれた場合があるが、表ではそれらを合算して示した。

試料の量を示す意味で処理前土壌の風乾重量を記したが、13年度に土壌の一部の計量に使った体重計が狂っていることが処理後に判明した。この場合風乾土壌重量を括弧に入れて示している。また処理後の選別対象の量を示す意味で浮遊物・残渣の重量を示した。浮遊物のうち0.425mm目篩の遺物は草の根等を除去するのが困難であるので、粒の粗い2.0mm目篩の浮遊物から混入物を除いた重量のみ記入しているが、土壌重量と比較して炭化物の多寡を窺うことができる。炭化物から選別された種子の種同定・定量等は未実施であり、後年度に報告する予定である。

炭化物・骨・土器・石器等の重量は0.1g単位デジタル表示の電子天秤で量った。また土器の点数はII章で述べたように径3cmを超えるもののみ数えた。0.0gと表示しているのは微量ながらも選別されたことを示し、選別されなかった場合は「なし」と記入している。土器の点数欄が「0」となっているのは径3cm未満の土器片のみ選別されたことを意味する。石器類の重量は石材の別、打製石器・磨製石器の別等を問わない総量で、黒曜石の重量はその内数である。これらの数値は残渣重量と比較して炭化物以外の微細遺物の多少を窺うことができる。骨の種・部位等の同定も未実施であり、次年度以降に報告の見込みである。

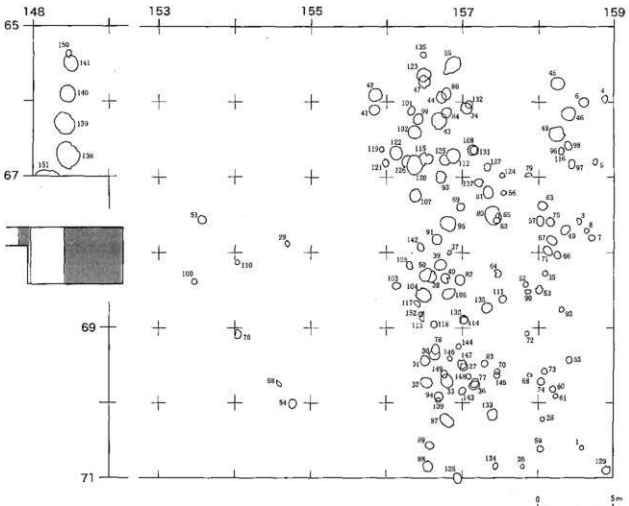
土製品は主に不定形の焼成粘土塊(図版V-22)である。土器片・焼けた高師小僧等との区別に努力したが細かいものでは困難であり、土器との区別に迷うものは土器片として扱った。ベンガラとしたのは赤みの強い鉱物質の粒であるが、真正のベンガラであるかどうか検討したわけではない。また

明らかに石炭と考えられる粒子が選別される場合があったが、その性質からして炭化物との区別が徹底できたわけではない。石狩川の河成層には石炭の砂礫が少量含まれていて当然であるが、I層との接点をもつ遺構から選別されており、近現代の混入物である可能性も排除できない。同様に、F-709から鉛のような概誤を呈する非鉄金属の塊が1点選別されているが、この遺構は地層検討用の畦にかかっており、I層の断面から落下した可能性が否定できない。以上は一応表示したものの、いずれもその有無と量に問題のある微細遺物である。 (西脇)

2 土坑

(1) 概要

平成11・13・14年度に検出されたものを合わせると、135基が確認されている。調査は11年度がP-1・3-8、13年度がP-26-120、14年度がP-121-152を行っている。土坑は覆土と包含層の土色・土質が似通っているものが多く検出は困難であった。そのため、土坑は焼土・炭化物との切り合い、遺物の出土状況、周囲との乾き方の差などから検出作業を行った。このような状況により、土坑の上面部分は調査中に気付かず削平してしまったものが多いと考えられる。



図IV-1 土坑の位置

今報告範囲で土坑が集中して検出される範囲は 156-158 線付近と 148 線の 2ヶ所である。まばらではあるが、153-155 線からも検出されている (図 IV-1)。周囲から検出される遺物などから考えると土坑の構築時期は 153-158 線の 129 基が縄文晩期中～後葉、148 線の 6 基が縄文初頭頃にあると思われる。

土坑の規模・平面形は構築面が確認できないものが多いので検出面で確認したものだが、長径 0.5m 以下の小型のものが 44 基、長径 0.5-1m の中型のものが 71 基、長径 1m 以上の大型のものが 11 基、削平・未調査等により不明なものが 9 基である。148 線の範囲に分布する土坑は P-150 を除きすべて大型のもので未調査部分のある P-151 も大型に分類されるものである。平面形は楕円形に分類されるもの 40 基、円形に分類されるもの 86 基、削平・未調査等により不明なもの 9 基である。

今回検出された土坑の性格としては土壌墓の可能性を考えられるものがあったが、明確に墓と確認されるものは無かった。土坑内からは P-28・35・96 等のように土器片が出土するもの、P-30・49・56・67 のように礫・礫石器が出土するもの、P-92・95・118・146・152 のように灰白色粘土が検出されるものがある。覆土については一部の土坑でフローテーションを行い、骨片・ベンガラ・炭化物・土器片・石器等が検出されている (表 IV-3)。

以下、各土坑についての説明に入る。位置・規模については表 IV-2 を参照されたい。(酒井)

(2) 153 線～158 線

P - 1 図 IV-2・図版 IV-1。70-158-ウ区を調査中に炭化物の混入する円形のプランを確認した。半歳して掘方を確認した。円形で平坦な底面をしている。構築面は不明であるが、検出面よりは上位であると考えられる。

P - 3 図 IV-2。67-158-ウ区を調査中に F-108 (生活面 194) を検出し、それを切る掘り込みを検出した。また、土器片が掘り込み内にあることが確認された。158 線のメインセクションにかかっていたことから壁面を精査したところ確認面から約 0.2m 上位から構築されていることが確認された。土坑西側は壁面の崩落により確認することができなかった。

P - 4 図 IV-2。65-158-ウ区を調査中に F-89 (生活面 194) を切る掘り込みとして検出した。土坑北側は調査中に削平してしまい、西側は確認トレンチにより範囲がわからなくなってしまった。

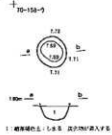
P - 5 図 IV-2。66-158-ウ区を調査中に F-103 (生活面 193) を切る掘り込みとして検出した。南北方向に細長い楕円形で平坦な坑底面をしている。焼土周囲にある小ピットと同様のものである可能性がある。

P - 6 図 IV-2。65-158-ウ区・66-158-エ区を調査中に周囲との土質の異なる円形のプランを確認した。ほぼ円形の平坦な坑底面をしている。遺構西側は噴砂による断層により 5cm ほど落ち込んでいる。本来の構築面は不明であるが、上位に位置する F-62 (生活面 193) を切っていないためさほど深くはならないと考えられる。

P - 7 図 IV-2。67-158-ウ区を調査中に F-116 (生活面 211) を切る掘り込みとして検出した。円形ですり鉢状の坑底面をしている。覆土は焼土粒・炭化物が混入する流れ込みと見られる。F-116 に土器を設置するために掘られた小ピットと同様のものである可能性がある。

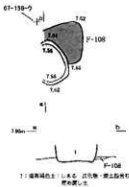
P - 8 図 IV-2。67-158-ウ区を調査中に F-116 (生活面 211) を切る掘り込みとして検出した。円形で平坦な坑底面をしている。覆土は焼土粒・炭化物が混入するが埋め戻しか流れ込みかは判断できなかった。掘り込み面は F-116 よりも上位と考えられるが、上位に位置する F-75 (生活面 194) を切っていないためさほど深くはならないと考えられる。

P-1



1: 掘削開始時に土を掘り入れする

P-3



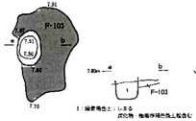
1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-4



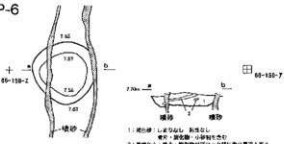
1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-5



1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-6



1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

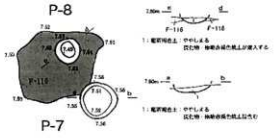
70-158-2

67-159-7

67-158-3

67-159-4

P-8



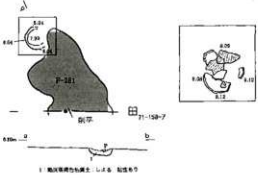
1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-7



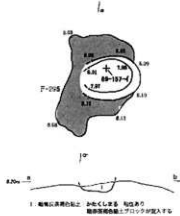
1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-26



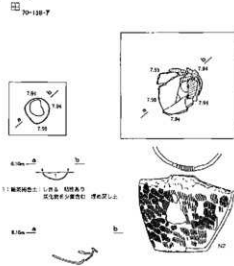
1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-27



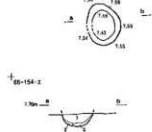
1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-28



1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

P-29

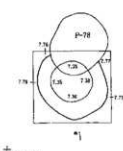


1: 掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ、掘削開始時に土を掘り入れ

図 IV-2 土坑 (1)

IV 遺構

P-30

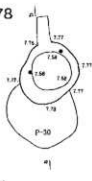


EP-150-9

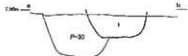


1. 掘削後部：しるほ、堅性なし
2. 掘削前部：コンクリート層あり。しるほ、硬さあり。掘削後部より掘削される

P-78

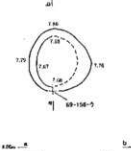


EP-150-9



1. 掘削後部：しるほ、堅性なし。掘削前部よりコンクリート層掘削の少量認められる

P-31

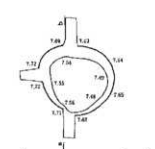


EP-150-9

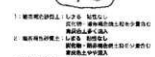


1. 掘削後部：しるほ、堅性なし
2. 掘削前部：コンクリート層あり。しるほ、堅性なし

P-32

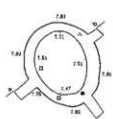


EP-150-9



1. 掘削後部：しるほ、堅性なし。掘削前部：掘削後部より少量認められる。掘削前部より掘削される
2. 掘削前部：しるほ、堅性なし。掘削前部：掘削後部より少量認められる。掘削前部より掘削される
3. 掘削前部：しるほ、堅性なし。掘削前部：掘削後部より少量認められる。掘削前部より掘削される

P-33

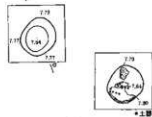


EP-150-9



1. 掘削後部：コンクリート層あり。しるほ、堅性なし。掘削前部より掘削される
2. 掘削前部：しるほ、堅性なし。掘削前部より掘削される

P-35

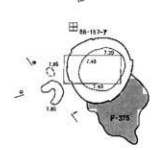


EP-150-9



1. 掘削後部：しるほ、堅性なし。掘削前部より掘削される。掘削前部より掘削される。掘削前部より掘削される。掘削前部より掘削される。

P-34

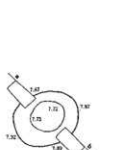


EP-150-9



1. シート：厚さ20mm程度の硬質材料あり
2. シート：厚さ15mm程度の硬質材料あり
3. シート：厚さ10mm程度の硬質材料あり
4. シート：厚さ5mm程度の硬質材料あり

P-36



EP-150-9



1. 掘削後部：コンクリート層あり。しるほ、堅性あり

図 IV-3 上坑 (2)

- P - 2 6 図 IV-2・図版 IV-1. 70-157-ウ区②面を調査中に F-281 (生活面 129) を切る掘り込みとして検出した。壁面に沿って落ち込んだと見られる土器片 (整理番号 13-461 ほか) が検出されている。上坑東側は遺構確認トレンチにより削平してしまった。
- P - 2 7 図 IV-2. F-295 (生活面 150) を切る掘り込みとして検出した。東西方向に長い楕円形をしている。覆土には焼土ブロックが混入しており埋め戻されたものと考えられる。掘り込み面は不明であるが、上層観察からこの面よりは上位から掘り込まれたものと思われる。
- P - 2 8 図 IV-2・図版 IV-1. 70-158-ア区⑤面を調査中に 1 個体の土器片 (個体番号 N2) がまともな状態で検出された。土坑壁面に沿うように土器片が出土している。土器の出土状況から見て、掘り込み面はこの面よりやや上位であると考えられる。人為的な掘り込みかどうかは断定できない。(酒井)
- P - 2 9 図 IV-2. 67-154-ウ区④面調査中に土器が割った状態で検出された。土坑の可能性を考慮して断面観察を行なった。覆土は包含層に比べ粘質があり締まりはない。壁面・床面には炭化物が貼り付いており、覆土との境は明瞭であった。土器の検出状況から、掘り込み面は検出面よりやや上位と推測される。(吉田)
- P - 3 0 図 IV-3・図版 IV-1. 69-156-ウ区⑦面・エ区⑦面を調査中に P-31・32・33・78 とともに F-379 (生活面 191) を切る掘り込みとして検出した。当初 P-78 とともに 1 つの土坑と考えられたが、トレンチを入れて確認したところ P-30 が P-78 に切られている 2 つの土坑であることが確認された。検出状況から見て掘り込み面は F-379 よりも上位であると考えられるが攪乱のため不明である。ほぼ円形で平坦な坑底面を有する。坑底面やや上の土坑中央部付近から加工痕のある礫 3 点 (P-30-1-3)・礫 2 点が集まった状態で出土している。P-30-3 は P-33 出土の礫片 (P-33-1) と接合する。覆土は埋め戻されたものと考えられる。遺物の出土状況から見て、土坑の可能性を考えられる。
- P - 3 1 図 IV-3. 69-156-ウ区⑦面・エ区⑦面を調査中に P-30・32・33・78 とともに F-379 (生活面 191) を切る掘り込みとして検出し、半裁して調査を行った。坑底面はほぼ円形で平坦と思われるが東側は掘り過ぎにより確認できなかった。覆土の堆積状況から見て掘り込み面は F-379 よりも上位であると考えられる。
- P - 3 2 図 IV-3. 69-156-ウ区⑦面・エ区⑦面を調査中に P-30・31・33・78 とともに F-379 (生活面 191) を切る掘り込みを検出した。トレンチを入れて調査を行い不整形で平坦な坑底面を検出した。平面形は南北方向にやや長い楕円形をしている。覆土の状況から掘り込み面は F-379 よりもやや上位であると考えられる。
- P - 3 3 図 IV-3. 69-156-ウ・エ区⑦面を調査中に P-30・31・32・78 とともに F-379 (生活面 191) を切る掘り込みとして検出した。トレンチを入れて調査を行い楕円形で平坦な坑底面を検出した。平面形は南北方向にやや長い楕円形である。検出状況から掘り込み面は F-379 よりも上位であると考えられる。出土した礫片 (P-33-1) は P-30 出土の礫と接合することから同時期のものと考えられる。覆土は埋め戻されたものと考えられる。(酒井)
- P - 3 4 図 IV-3・図版 IV-2. F-375 (生活面 191) を切る掘り込みとして 66-157-ア区⑤面で検出したが、坑壁に沿って落ち込んだものとみられる土器片 (66-157-a-011、整理番号 13-22) によって判断すると掘り込みは同区③面がそれ以上から始まるらしい。ほぼ円形の平坦な底面をもち、細かい分層の困難な覆土が覆っている。
- 遺構の西側に接して 66-156-エ区⑥面に小規模な廃棄焼土層が記録されている。これが P-34 によって掘り上げられた F-375 由来のものであり、遺構の形成面を示すのであるとすると、土坑の本来の深さはほぼ 0.5m であったことになる。(西脇)

P - 3 5 図 IV-3・図版 IV-1。68-158-ア⑦面調査中、F-384（生活面 189）由来の炭化物を切って暗茶褐色の円形のプランを確認した。また、壁面に沿うように土器片（個体番号 N30）も検出している。覆土には F-384 のものと考えられる焼土粒・炭化物粒を含む。遺物の出土状況・F-384 との関係から掘り込み面は検出面より上位と推測される。（吉田）

P - 3 6 図 IV-3。69-157-イ⑤面の調査中に炭化物の広がる範囲を検出し、これをほぼ円形状に切る掘り込みとして確認した。トレンチを入れて壁面の確認を行った。底面はほぼ円形で平坦である。この遺構の構築面はもう少し上面であったと思われる。（酒井）

P - 3 7 図 IV-4・図版 IV-1。68-156-エ区⑤面ほかの調査中、やや大きな土器片（67-156-c-015・68-156-d-012、整理番号 13-187）が立った状態で検出されたことから、これらを横断するように断ち割りを加え、小規模な落ち込みの壁に沿って土器片が立っていることを確認した。2つの土器片は同一個体であるが、67-156-c-015 はその天地がほぼ垂直方向であるのに対して、68-156-d-012 は破片の天地方向が水平に近い。人為的な掘り込みであるかどうかは断定困難であった。

P - 3 8 図 IV-4・図版 IV-2。P-39・40 とともに 68-156-d 区⑤面で F-448（生活面 188）を切る掘り込みとして検出した。真上に形成された焼土 F-302・303（生活面 128）は同区②面にあり、掘り込み面はそれより高くなることはないであろう。

半載して調査中に雨水が流れ込み坑壁の一部と地層断面上部が崩壊した。半載の残り部分を調査中に別の土坑（P-50）と切り合っていることに気付いたが、すでに地層の観察が不可能で問題を残した。概ね円形の平坦な坑底を有し、細分の困難な覆土で埋まっている。一応は P-50 の項で述べるとおり P-38 のほうが古いものと考えられる。わずかに出土した土器片は覆土の上部で P-50 の中央へ向かって傾斜した状態で発見されているので、むしろ P-50 に属するものと見たほうがよいかもかもしれない。

P - 3 9 図 IV-4・図版 IV-2。P-38・40 とともに F-448（ただし焼き火面本体ではなく、その周囲の炭化物層。生活面 188）を切る掘り込みとして検出した。四分して調査したが、断ち割っていないので坑底部は多少掘り足りなかった可能性があり、P-38 などと比べて底が小さく丸い実測図となっている点に疑問がないでもない。覆土は二三の単位に区分できそうであるがそれらの境界は不明瞭で、比較的急速な埋没を示唆する。

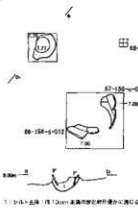
当区④面の焼土 F-330（生活面 131）はこの土坑の真上に位置し、ちょうど P-39 の掘り方におさまるように形成されている。埋まりきらない P-39 の窪みを利用して火が焚かれた可能性があり、あわせて掘り込み面の位置を示唆するものがある。

P - 4 0 図 IV-4・図版 IV-2。P-38 と同様、半載して調査中に雨水が流れ込み坑壁の一部が崩壊した。やはり四分して掘ったが断ち割りは加えておらず、掘り方形状については P-39 同様の問題がある。この遺構の上位には 68-156-エ区④面に焼き火面をもつ焼土 F-331（生活面 131）があり、P-40 の掘り込み面がそれより高くないことを示している。

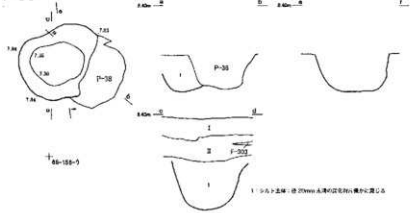
P - 4 1 図 IV-4・図版 IV-2。66-155-エ区③面の少し下位で P-42 と並んで検出したが、掘り込み面はもう少し高いと推察される。小トレンチを入れて掘り方を確認して図化した。平面不整形の丸底、最下部にマッドドレイブ塊を含む人為層らしいものが見られたが、埋め戻しがおこなわれたかどうか明確でない。

P - 4 2 図 IV-4・図版 IV-2。P-41 とほぼ同一深、65-155-ウ区①面の少し下で検出した。底面は東西に長い楕円形で P-41 より少し深く、坑口の開きもより大きい。P-41 より多少深い位置に掘り込み面があったかもしれない。覆土上部の薄いシルト・砂互層（cd 断面 7、8 層）から下は壁面の崩壊ないし埋め戻しで比較的急速に埋まったように思われる。

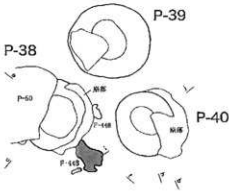
P-37



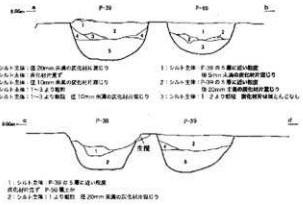
P-50



+ 66-158-1



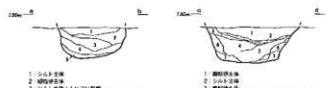
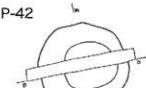
+ 66-157-7



+ 66-157-1



P-42



- 1: 50cm土層
- 2: 50cm土層
- 3: 50cm土層、径 100cm 高瀬の底に於ける土層の中心部
- 4: 1.5m土層
- 5: 50cm土層、径 100cm 高瀬の底に於ける土層の中心部

- 1: 50cm土層
- 2: 50cm土層
- 3: 50cm土層
- 4: 50cm土層、径 100cm 高瀬の底に於ける土層の中心部
- 5: 50cm土層、径 100cm 高瀬の底に於ける土層の中心部
- 6: 50cm土層
- 7: 50cm土層、径 100cm 高瀬の底に於ける土層の中心部

+ 66-158-2

P-41

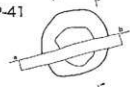
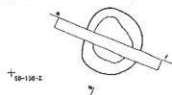


図 IV-4 土坑 (3)

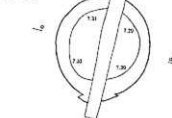
IV 遺構

P-44



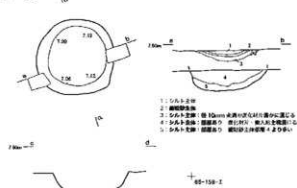
± 66-156-2

P-43



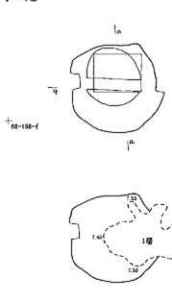
± 66-156-3

P-45

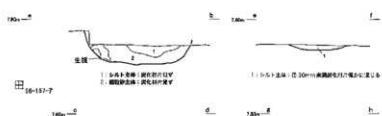


± 66-156-2

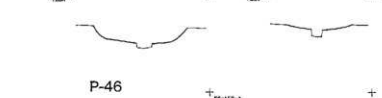
P-48



± 66-156-4

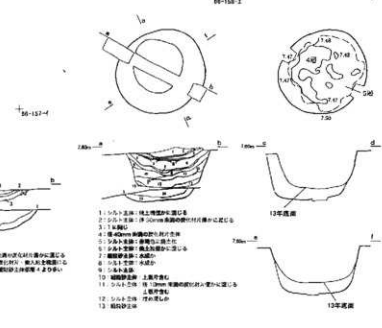


± 66-157-7



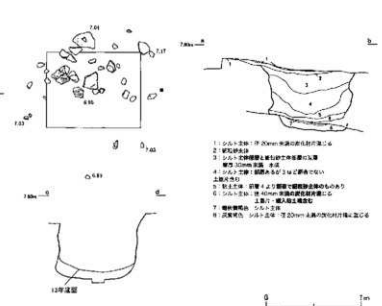
± 66-157-4

P-46



± 66-156-2

P-48



± 66-156-4

图 IV-5 土坑 (4)

P - 4 3 図 IV-5、P-44 と並んで 66-156-d 区⑩面で確認した。土の乾き方が周囲の砂主体の地層より遅いことから遺構であると気付いた時点ですでに相当削平してしまっていた。隣接する焼土 F-373 (生活面 191) 周囲に掘り残した範囲では底面からほぼ 35cm の立ち上がりを確認され、掘り込み面はさらに上位であったと推定される。円形の平坦な底面を有し、当遺跡の晩期土坑としては大きい部類である。

P - 4 4 図 IV-5、P-43 と同じく土の乾き方によって 65-156-ウ区⑦面付近で検出し、小トレンチで断ち割って確認した。この時点ですでにほとんど掘り飛ばしてしまっており、わずかに坑底が残っていたに過ぎない。

P - 4 5 図 IV-5、65-158-イ区⑥面で検出し、小トレンチを入れたうえで P-43 のように坑底のみを残す遺構とみて一旦調査を終えたのであるが、さらに約 30cm 掘り下げた時点でほとんど同じ位置に丸い掘り込みの輪郭が現れた。断ち割りが不足していたことに気付き、同じ位置にトレンチを復元して確認しなおしたところ、ほぼ円形で丸みがある真の坑底が当初の認識より約 30cm 下にあることが判明した。その後の他の土坑での経験から言って、はじめに調査した薄く淘汰のよい層群 (ab 断面 1-3 層) は比較的坑口に近い位置に形成された水成堆積物であると考えられ、掘り込み面は当初の検出面からそれほど離れていないものと思われる。

P - 4 6 図 IV-5、66-158-ア区⑧面標高 7.55m 付近で掘り込みの覆土が同心円状に確認され、小トレンチによる断ち割りを行った。覆土上部に炭化材片が敷き詰められたように出土する面があり (ab 断面 4 層)、その直下は斑状に焼土化していた (同 5 層)。この焼土・炭化物層は土坑外の焼土遺構とは連続せず、この位置に中心をもつものである。土坑が埋まり切る前の浅い窪みの中で火が焚かれたとみてよいであろう。

一旦調査を終え周囲の掘り下げをおこなったが、平成 14 年度に遺構下を掘削したところ再び掘り込みの輪郭が確認され、測点を復元して調査・実測した結果ほぼ確実に P-46 の掘り残しと判断された。13 年度の調査では土坑北西側の掘り方を把握できなかったことが明らかであり、多少南北に長い不整形で平坦な真の坑底が 15cm 近く下位で確認された。

P - 4 7 図 IV-6、65-156-ウ区④面で焼土 F-352 (生活面 181) を調査した際、その一部が攪乱されていることに気付いたのであるが、その攪乱が整った掘り方をなすことを認めたのはさらに 30cm 近く掘り下げた同区⑦面であった。幸い遺構の半ばが地層記録用の畦にかかっていたのでその断面を精査したところ、坑壁は F-352 よりさらに 30cm 近く上まで立ち上がっていることが知られた。不整形な円形の丸底、ほぼ 80cm の深さを有する。覆土は幾つかの単位に分け得るがその境界は曖昧で、崩壊または埋め戻しにより比較的急速に埋没したように見受けられる。

P - 4 8 図 IV-5・図版 IV-3、ほぼ掘り込み面で検出できた土坑の一つである。66-158-ア区⑧面に炭化材片の散布する範囲が認められ (ab 断面 1 層)、これを半截するように方形の断ち割りを設けて約 10cm 掘り下げたところ、炭化材混じり層から少しずれた位置で土坑の輪郭が見出された。同じ断面に沿ってさらに小トレンチを入れて掘り方を確認した。覆土の上部は比較的淘汰のよいシルトと細粒砂の互層 (ab 断面 3 層) で水成層と考えられる。底近くに炭化材片混じりの薄い粘土質シルト層 (同 6 層) があり、この中に土器片や搬入粘土塊などの遺物が含まれているのが目立った。

この層を除くと汚れない砂質シルト層に達したのでこれを坑底とみなして一旦調査を終えたが、14 年度になって遺構下を掘削したところ再び丸い掘り込みの輪郭が認められ、測点を復元して調査・実測した結果 P-48 の掘り残しと考えざるを得なくなった。当初底面と考えた砂質シルト層は坑壁の下部が崩壊して形成されたものとみられ、真の坑底は約 10cm 下位にあって他の土坑と同様に丸み

を帯びて壁へと移行することが知られた。北側の壁の位置も13年度調査では正確に把握できていなかった可能性が高い。(西脇)

P-49 図IV-6・図版IV-3. 67-158-イ区⑦面調査時に礫が立った状態で検出された。土坑の可能性を考慮し断面観察を行なった。その結果、この土坑より下位のF-282(生活面131)を切っており、覆土にもこの焼土由来の焼土粒・炭化物粒・骨片などを含んでいた。包含層に比べ、粘質があり壁面・床面ともに締まっていたのでその差は明瞭であった。床面は円形を呈し壁面へとほぼ垂直に立ち上がる。覆土の堆積状況から人為的埋め戻しが行なわれたと推測される。遺物の出土状況、断面観察から掘り込み面は検出面と同一と考えられる。(吉田)

P-50 図IV-4. P-38の調査中にこれと切り合う土坑の存在に気付いた。その時点ですでに切り合い部分を掘り終えていたのでP-38との先後は不明確であるが、両者の上位に形成された焼土F-302・303(生活面128)はP-50の中心へ向かって傾いている。2つの焼土の形成時点ではP-50が浅い窪みとして残る一方、P-38の痕跡は地表に残っていなかったものらしい。この点P-50のほうが新しいとみるのが妥当のようである。断ち割りを施さずに調査した68-156-工区内での所見ではP-50の底は確認面から約40cm下と思われたが(ab、ef断面)、その後156線半の地層断面を精査すると底面はさらに10cmほど下位にあることが知られた(cd断面)。また同じ断面で見ると掘り込み面は68-156-ア区内で⑤ないし⑥面にあったらしい。(西脇)

P-51 図IV-6. 67-153-ウ区②面調査時に暗茶褐色の円形のプランを確認した。覆土は粘質があり、明らかに検出面より上位のものが均一に堆積する。床面から壁面へは緩やかに立ち上がりボウル状を呈する。覆土の状況から掘り込み面は検出面のやや上位と推測される。

P-52 図IV-6. 68-157-工区⑦面調査時に、炭化物粒・土器片を含み周辺よりやや鈍い土色の円形のプランを確認した。形状は床面から壁面へと緩やかに立ち上がるボウル状を呈した土坑である。掘り込み面は覆土に上層に存在していた炭化物を含むことから、検出面よりさらに上位であると考えられる。

P-53 図IV-6. 68-157-ウ区⑦面・工区④面調査時に炭化物粒・骨片を含む円形のプランを確認した。覆土は粘質があり堆積状況から自然崩落したことが窺える。床面から壁面へは緩やかにその後ほぼ垂直に立ち上がる。157線地層観察用ベルトから、掘り込み面と検出面は同一であることが確認された。

P-54 図IV-6. 69-154-ウ区⑤面・70-154-工区④面調査時に炭化物を多く含む層の落ち込みを確認した。土坑の可能性を考慮して土層観察を行なった。覆土は検出面より上位の土で構成されており粘質もある。床面・壁面ともに明確である。掘り込み面は確認面の炭化物を含む層が切られていないことと断面観察からこの層の直下であると考えられる。(吉田)

P-55 図IV-6. 69-158-ア区⑩面の調査中にF-471に伴う炭化物が円弧状に切れているのが確認された。そのため、周囲を精査したところほぼ円形の掘り込みを検出したことからトレンチを入れて土坑であることを確認した。底面は円形ではほぼ平坦である。掘り込み面は確認できなかった。(酒井)

P-56 図IV-6・図版IV-3. 67-157-ア区⑤面で2点の礫石器(P-56-1・2)が重なって検出され、周囲に炭化材片や焼土粒を含む覆土が認められたので半載して調査した。P-62などに似た小さな土坑で楕円形の底面をもつ。(西脇)

P-57 図IV-6. 67-158-イ区⑩面・67-157-ウ区⑦面調査時に、周辺に比べやや砂質の高い円形のプランを確認した。覆土にはごく微量の炭化物を含み均一に堆積していた。平面は北東-南西に長軸をもつ長楕円形を呈し、底面は平坦で垂直ぎみに壁が立ち上がる。(吉田)

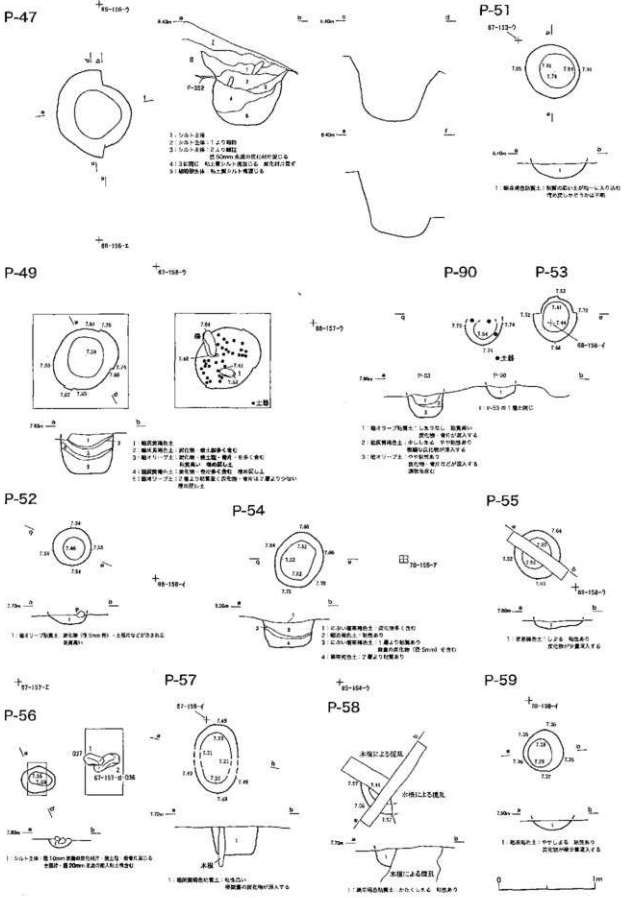


図 IV-6 土坑 (5)

P - 5 8 図 IV-6. 69-154-ウ区⑤面の調査中に周囲とは異なる土質の円形の範囲を確認した。トレンチを入れて確認したところ木根による攪乱を受けていることがわかった。攪乱により底面の形状は不明である。

P - 5 9 図 IV-6. 70-158-イ区②面を調査中に周囲の包含層とは異なる土質の円形の範囲が検出された。半裁して調査を行い、丸底状の底部から立ち上がる壁面を確認した。掘り込み面は確認できなかった。

P - 6 0 図 IV-7. 69-158-イ区②面を調査中に P-61 とともに周囲の包含層とは異なる土質の円形の範囲が検出されたので半裁して調査を行った。上位の層ではこの範囲を確認できなかったことからほぼこの面が構築面であると考えられる。円形で丸底状の底部である。

P - 6 1 図 IV-7. 69-158-イ区②面を調査中に P-60 とともに周囲の包含層とは異なる土質の円形の範囲が検出されたので半裁して調査を行った。上位の層ではこの範囲を確認できなかったことからほぼこの面が構築面であると考えられる。覆土中から多くの遺物が出土しているが、埋め戻された際に混入したものと思われる。円形で平坦な底面である。(酒井)

P - 6 2 図 IV-7. P-56 を確認したのとほぼ同一面、隣接の 67-157-イ区⑤面で複数の焼土とそれを覆う薄い炭化物層が検出された。炭化物の散布を取り除くと、そこに F-476・477・488(生活面 195) の 3 基の焼土と、これらと切り合う 2 基の小土坑が発見された。土坑の掘り方は炭化物層の上からは明確な形で認められず、従って 2 つの土坑は焼土群と形成面を共有するとみて問題ない。F-478(生活面 126)、およびこれを覆う F-477 を切り、P-65 に切られる。gh 断面では F-476 があるいは P-62 の掘り上げ土かと思われる炭化材片・焼土粒混じりの再堆積層を覆っているのが見られた。(西脇)

P - 6 3 図 IV-7・図版 IV-3. F-496(生活面 211) の焼成面の縁が検出できたことにより掘り込み面が検出できた。1 層に含まれていた土器が土坑中央に滑り込むように堆積していたこと、土坑埋土の 2 層の上面にある F-496 の焼成面断面が 3 層上面に沿って屈曲していることから土坑埋土が陥没し、その空隙が 20cm 以上あったと考えられる。3 層上部からは礫が 2 個出土した。小児の墓と考えてもよさそうである。(鈴木)

P - 6 4 図 IV-7. 68-157-ア区③面で炭化材片混じりの地層(ab, cd 断面 1 層)が環状に分布するのを認め、その環の内部から土器片がややまとまって出土したことから遺構の存在を予期して小トレンチによる断ち割りをおこなった。その結果同区④面に炭化材片の濃密に散布する面があつて盃状に落ち込んでおり(ab, cd 断面 3-5 層)、掘り込みがあるとすればその下であることが判明した。

炭化物面は焼土 F-393・487(生活面 188)に連なるものであったのでこの 2 つの焼土の調査後さらに断ち割りを加えて、炭化物層の流れ込んだ窪みの中央に土坑を確認し、小トレンチ沿いに四分して調査した。径の割に深く、他に例のない形状の掘り方である。

その後の調査で P-64 の下位に倒木痕があることが確認された。68-157-ア・工区の大半に及ぶ窪みはむしろこの倒木の形成したもののみたほうがよいようで、P-64 はその窪みの中に掘り込まれたと考えられる。形状が特殊で覆土下部に空隙が多いなど人為的なものかどうか疑わせる点もあるが、覆土と遺構外の地層との不整合は明瞭であり、倒木痕の一部とは考えられない。

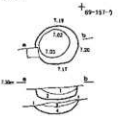
P - 6 5 図 IV-7. 検出の状況は P-62 の項に述べたとおりである。P-65 は P-62・F-478 を切り、P-62 に切られる F-477 よりも新しいが、F-476 との新旧は不明である。(西脇)

P - 6 6 図 IV-7・図版 IV-3. 掘り込み面の特定はできなかった。1 層の底面が検出面から緩やかに落ち込み楕円状を呈していることから掘り込み面は直近の 68-158-ア区①面と考えられる。

P - 6 7 図 IV-7. 掘り込み面の特定はできなかった。1 層の底面が検出面から緩やかに落ち込み

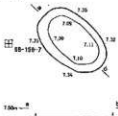
- 掘鉢状を呈することから掘り込み面は直近の 67-158-ア区①面と考えられる。2層が坑壁崩落による堆積ではないことから開口時間が短いと考えられる。またたき石片 1 点 (P-67-1)・礫 1 点が坑底から出土したこと、P-63 のように坑壁が垂直であることから墓を想定してもよさそうである。(鈴木)
- P - 6 8 図 IV-7。69-157-ウ区⑩面の調査中に F-462 を検出し、それを楕円形に切る範囲を検出した。覆土には F-462 (生活面 218) のものと思われる焼土・炭化物が流れ込んでいる。楕円形で平坦な底面である。焼土周囲に造られる土器を掘るための小ビットと同様のものかもしれない。(酒井)
- P - 6 9 図 IV-7。67-156-エ区⑦面直下で炭化材料混じりの覆土 (ab 断面 2 層) が環状に認められた。規模が小さくトレンチを入れるのがためらわれたことから、半載するように方形の断ち割りを設けて少し掘り下げ、輪郭を把握しようとしたががえって不明瞭となる模様であったので、それ以下は通常の半載調査をおこなった。周囲の地層と覆土の差が小さく、断ち割りも徹底しなかったため特に坑底については正確に把握できたか懸念が残る。(西脇)
- P - 7 0 図 IV-8。69-157-イ区⑪面の調査中に周囲の包含層とは異なる土質のほぼ円形の落ち込みを検出したことから半載して調査を行った。平成 13 年度に底面だと考えられた面は平成 14 年度の調査で掘り足りなかったことが確認された。そのため再調査を行い、掘鉢状の底面を確認した。
- P - 7 1 図 IV-8・図版 IV-3。掘り込み面の特定はできなかった。1 層の底面が検出面から緩やかに落ち込み掘鉢状を呈していること、67-158-イ区⑫が焼成面である F-490 (生活面 218) の炭化物散在面から掘り込んでいることから、掘り込み面は 67-158-イ区⑫面と考えられる。
- P - 7 2 図 IV-8。69-157-エ区⑫面を調査中、円形の落ち込みを確認した。半載したところ円形で掘鉢状の底面が確認された。掘り込み面を確認することはできなかった。
- P - 7 3 図 IV-8。69-158-イ区⑬面を調査中、土質の異なる円形の落ち込みと土器が立った状態で検出されたことから半載して調査を行った。円形で平坦な底面を確認した。上面に位置する F-462 (生活面 218) を切っていないことから掘り込み面はこの面からそれほど変わらないものと考えられる。
- P - 7 4 図 IV-8。69-158-イ区⑬面を調査中、土質の異なる円形の落ち込みを確認したことからトレンチを入れて調査を行った。楕円形で平坦な底面を確認した。上面に位置する F-462 (生活面 218) を切っていないことから掘り込み面はこの面からそれほど変わらないものと考えられる。(酒井)
- P - 7 5 図 IV-8。掘り込み面の特定はできなかった。1 層の底面が検出面から緩やかに落ち込み掘鉢状を呈していることから掘り込み面は直近の 67-158-イ区⑬面と考えられる。(鈴木)
- P - 7 6 図 IV-8。69-154-ア区⑭面で同心円状の落ち込み堆積を検出した。69-153 区内は 13 年度の調査で気付かずに破壊している。覆土下部に遺構北東側にやや偏って炭化材料の散布が認められ、その上に水成と思われる白っぽい粘土がちの堆積物が形成される。少なくともこの粘質土から上は自然に埋積したものであろう。(西脇)
- P - 7 7 図 IV-8。69-157-イ区⑯面で周囲の包含層とは異なる焼土粒・炭化物を含んだ楕円形の落ち込みを検出したため、半載して調査を行った。ほぼ円形の平坦な底面である。壁面に F-512 (同区⑦面、生活面 137) が確認でき、覆土に含まれる焼土粒・炭化物はこの焼土のものと考えられる。
- P - 7 8 図 IV-3。69-156-ウ区⑰面・エ区⑱面を調査中に P-30・31・32・33 とともに F-379 を切る掘り込みとして検出した。当初 P-30 とともに 1 つの土坑と考えられたが、トレンチを入れて確認したところ P-78 が P-30 を切る 2 つの土坑であることが確認された。円形で平坦な坑底面を有し、平面形はほぼ円形と考えられる。切り合い・検出状況から掘り込み面は P-30・F-379 より上位であるとされる。(酒井)
- P - 7 9 図 IV-8。67 線上の地層断面図作成中に発見した時点でほぼ半分が失われていた。焼土

P-70



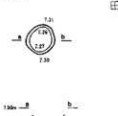
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 2: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況、掘削時の位置、掘削土質の状況
- 3: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 4: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-71



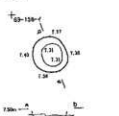
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 2: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-72



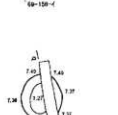
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-73



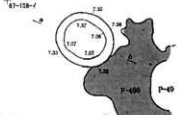
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-74



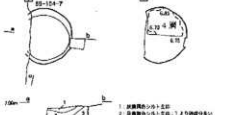
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-75



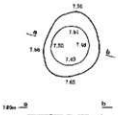
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 2: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-76



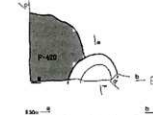
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 2: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 3: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 4: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 5: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-77



- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-79



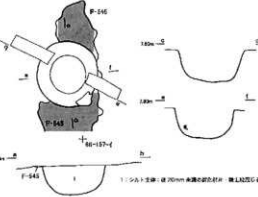
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 2: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-76



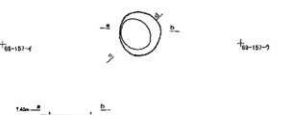
- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 2: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 3: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 4: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-82



- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

P-83

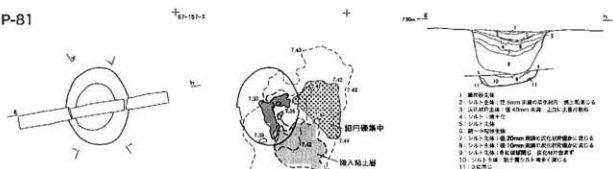


- 1: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 2: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 3: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 4: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況
- 5: 掘削時の位置、土質、掘削方法、掘削土質の状況

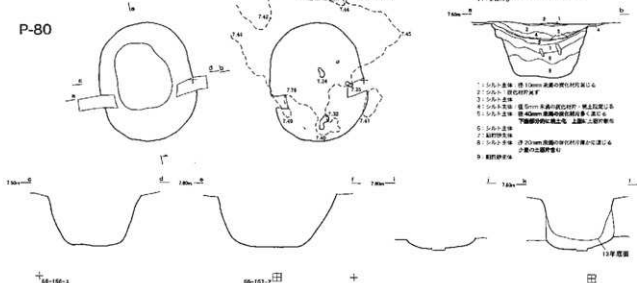
図 IV-8 土坑 (7)

IV 遺構

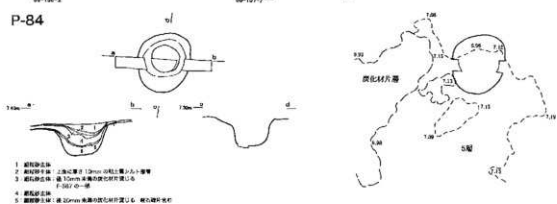
P-81



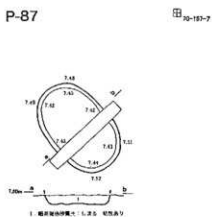
P-80



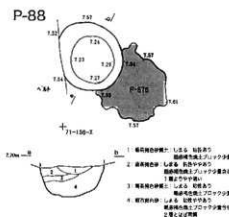
P-84



P-87



P-88



P-89



図 IV-9 土坑 (8)

F-420 (生活面 189) を切るが、形成面は 66-157-ウ区③面^③でこの焼土とほぼ同一と考えられる。P-96-98 などに似て、比較的小型で浅い土坑とみられる。

P - 8 0 図 IV-9. 67-157-ア・イ区⑦面^⑦で落ち込みに堆積した地層が同心円状に 2ヶ所確認され、P-80 および 81 と命名して断ち割りをおこなった。P-80 で断面の上部に炭化材片のやや濃密に散布する面が認められ(ab 断面 5 層)、その後これが坑外へ続いて P-81 内まで連なっている(gh 断面 11 層)ことが知られた。従ってこの面を土坑形成直後の地表とみなしてよく、かつ 2つの遺構は非常に近接した時期のものであることが判明した。しかも土坑内では炭化材面の直下が部分的に焼土化している(gh 断面 4 層)。従って炭化材は二次的に土坑の窪みに流入したのではなく、2つの窪みを中心に火が、それもほとんど同時に焚かれて生じたものと考えられる。

南北に長い不整形の底面をもつ。炭化材面より下の、狭義の覆土とみるべき部分からは目立つた遺物が出土していない。P-80 は当遺跡の土坑としては規模の大きいものなので墓穴である可能性なども考慮してやや慎重に調査したが、坑底には全く遺物がなく、特殊な堆積物も見られなかった。

P - 8 1 図 IV-9. 検出の状況は P-80 の項で述べた。P-81 では炭化材面付近の様相がやや複雑で、まず坑口の南側、径 50cm ほどの範囲に円磨の進んだ細礫が炭化材片よりやや上位に散布しているのが見られた。またそれより下位の坑口南東側にはやはり径 50cm ほどの範囲にわずか 5mm ほどの厚さで搬入品と思われる白色の砂混じり粘土の層が観察された。これと炭化材片の面の上下関係は微妙であるが、少なくとも材片散布の中心部をなす炭化物の密集部分(gh 断面の 3 層)では、その上に密接して粘土層が存在するように見受けられた。炭化材面より下位でほとんど遺物が出土していないことは P-80 と同様である。

平成 14 年度に遺構下を掘削したところ再び丸い掘り込みの輪郭が認められ、測点を復元して調査・実測した結果 P-81 の掘り残りと考えざるを得なくなった。北東-南西方向に長い真の坑底は P-80 とほぼ同じかそれを上回る深さにあることが判明したが、やはり底面付近では遺物皆無であった。

P - 8 2 図 IV-8. 68-156-エ区⑤面^⑤ほかで焼土 F-545・546 (生活面 195) を切る掘り込みとして検出した。小トレンチを入れて壁面を確認したのち半載して断面を図化した。円形の平坦な底面を持つ。覆土は一樣であり、坑口部に特徴的な中窪みの堆積が見られなかった点から言えば、掘り込み面はおそらくもつと上位にあったであろう。(西脇)

P - 8 3 図 IV-8. 69-157-イ区⑨面^⑨の調査中に周囲の包含層とは異なる土質のほぼ円形の落ち込みを検出したことから半載して調査を行った。平成 13 年度に底面だと考えられた面は平成 14 年度の調査で掘り足りなかったことが確認された。再調査を行い、円形で平坦な底面を確認した。(酒井)

P - 8 4 図 IV-9. 66-156-エ区⑫面^⑫で P-85・86 と並んで同心円状に堆積する覆土を認めて検出したのであるが、精査の結果 P-86 より下位(⑬面)に掘り込み面をもつことが明らかになった。小トレンチを入れた結果、土坑の掘り込み面を覆って炭化材片と軽石の礫片が目立つ薄い層(ab 断面の 5 層)が堆積しており、この上に間層を隔てて焼土 F-587 (同 3 層、生活面 212) が形成されている。同じ F-587 は後述するように P-86 の掘り込み面を直接覆っているので、P-84 は P-86 より下層の遺構と判断される。材片・軽石の散布面より下位の狭義の覆土(ab 断面の 6 層)が薄く、遺構の窪みが掘り込み面より上位にまで強く反映されているために P-86 等と同じ深度で遺構の所在が認められたものである。なお炭化材は遺構外に散布の中心をもつよう、P-46・80・81 などのように土坑上で形成されたものではないらしい。

P - 8 5 図 IV-10. 65-156-ウ区⑨面^⑨ほかで同心円状に堆積する覆土を認め、断ち割りで上部壁面を確認してから半載調査した。覆土の上部に炭化材片混じりの層(ab 断面 7 層)に覆われた現地性

の焼土(同8層)があり、この土坑でも遺構上の窪みで火が焚かれたものと考えられる。他の土坑での経験から言えば遺構上での焚き火はほぼ埋積が終わった段階で行われているので、それより上位の覆土(ab断面1-5層)は掘り方と直接関係しない新しい攪乱の中に堆積したものである可能性もある。この部分がそれ以下の堆積を不整合に覆っているように見えること、およびこの部分で坑壁の傾斜が変わり、検出面での平面形が目だてて不整となっていることはこの推測を裏付けるようである。従って、遺構の掘り込み面は攪乱のため詳しく確認できないとみなすのが妥当かもしれない。

平成13年度に一旦調査を終えたが、14年度に土坑周囲を掘り下げたところ地層断面と直交する方向に掘り足りない部分があることがわかり、再度壁面の検出をおこなった結果、遺構の約4分の3周にわたって坑壁下部に立ち上がりのやや急な部分があることが判明した。この部分は概ね構築当初の壁面のまま遺存している可能性がある。

P-86 図IV-10. 65-156-ウ区⑨面で焼土F-586(生活面212)を切り、F-587(生活面212)に覆われる掘り込みの輪郭を検出し、小トレンチで断ち割って半截断面図を作成した。F-587の断面でも地層を検討した結果、焼土を覆う炭化材片層だけでなく焼土化そのものが土坑の上面に及んでいることを確認したのでF-587より古いことは明らかである。比較的浅く小型、かつ概ね南北方向に長手の土坑である。(西脇)

P-87 図IV-9. 70-156-エ区⑧面を調査中に楕円形の土質の異なる範囲を確認した。そこでトレンチを入れたところ壁面の立ち上がりが確認された。掘り込み面は確認できなかった。

P-88 図IV-9. 70-156-ウ区⑤面を調査中にF-576(生活面196)を検出しこれを円弧状に切る部分が確認された。周囲を精査したところ土質の異なる円形の範囲を確認し、半截して調査を行った。覆土にはF-576に由来すると考えられる焼土粒が含まれている。

P-89 図IV-9. 70-156-ウ区⑤面を調査中に土質の異なる円形の範囲を確認し、半截して調査を行った。P-89に切られるF-607(生活面196)が同時に検出されたが、壁面にF-607が確認されることから同一面ではない。円形で平坦な底面である。掘り込み面は確認できなかった。(西井)

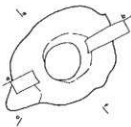
P-90 図IV-6. 68-157-ウ区⑦面・エ区④面の調査時に炭化物・骨片を含む円形のプランを確認する。覆土は粘質があり均一に堆積する。床面から壁面に緩やかに立ち上がるボウル状を呈する。157線地層観察用ベルトから、掘り込み面と検出面は同一であることが確認された。(吉田)

P-91 図IV-10. 67-156-ウ区⑨面で径50cmほどの範囲に炭化材片が散布しているのに気づき、土坑の存在を予期して小トレンチを入れたところ壁の立ち上がりが確認された。検出面における材片はやや希薄であり、焼土も確認されなかったので二次的に遺構の窪みに流入した炭化物と考えられる。その後、同区⑦面で記録した炭化材片の散布範囲のうち、不整形に散布が抜けている箇所がこの土坑の真上にあたることに気付いた(図)。この炭化材片が掘り方を覆っているのか、それとも土坑に切られているのかは確認できないが、掘り込み面がその付近にあったことが窺われる。(西脇)

P-92 図IV-10. 68-158-イ区⑧面調査時、F-615(生活面214)を切る暗茶褐色の円形のプランを確認する。粘質のある覆土が均一に堆積し、焼土粒や炭化物などの混入は認められない。覆土の堆積状況から検出面のさらに上位から掘り込まれており埋め戻された可能性が高い。(吉田)

P-93 図IV-10. 67-156-エ区⑦面で地層観察用の畦際に焼土F-449(生活面189)を検出し、その一端が落ち込みの中に潜り込んで行くように見受けられた。畦に沿って小トレンチを入れて断面を検討した結果、焼土は土坑に切れ、さらに土坑に重複して形成された株痕があつてその中に上位から土壌が落ち込んでいることがわかった。その後66-156-ウ区を調査したところ遺構北東側ではほぼ同区④面付近まで坑壁の立ち上がりを認めることができた。南北に長い楕円形の底面を有する。(西脇)

P-85

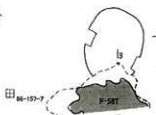
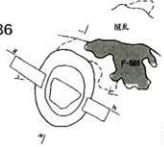


1.0m



- 1: シロト土層
- 2: シロト土層 厚 20mm 表面に黒色の付着層を有する
- 3: 灰土層
- 4: 腐植土層
- 5: 腐植土層 厚 4cm 程度
- 6: 腐植土層 厚 1.5cm 程度 表面に黒色の付着層を有する
- 7: シロト土層 厚 20mm 表面に黒色の付着層を有する
- 8: シロト土層 厚 20mm 表面に黒色の付着層を有する
- 9: シロト土層 厚 20mm 表面に黒色の付着層を有する
- 10: シロト土層
- 11: 灰土層
- 12: 砂土層
- 13: 腐植土層

P-86



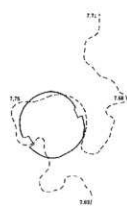
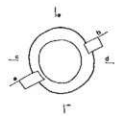
1.0m



- 1: シロト土層 厚 20mm 表面に黒色の付着層を有する
- 2: シロト土層 厚 1.5cm 程度 表面に黒色の付着層を有する
- 3: 灰土層
- 4: シロト土層 厚 2cm 程度
- 5: 腐植土層



P-91



P-92



1.0m

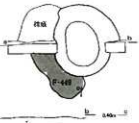


- 1: 腐植土層 L.F.500, 砂質土

P-93



P-93

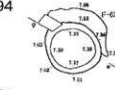


1.0m



- 1: シロト土層
- 2: 腐植土層 厚 10cm 表面に黒色の付着層を有する
- 3: 腐植土層 厚 10cm 表面に黒色の付着層を有する

P-94



P-94



1.0m

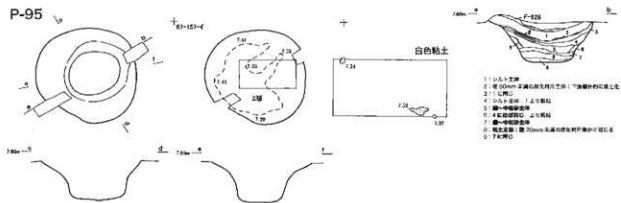


- 1: 腐植土層 L.F.500, 砂質土
- 2: 腐植土層 L.F.500, 砂質土

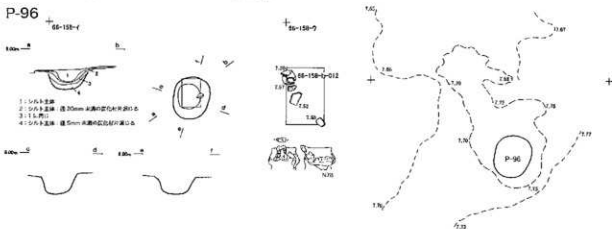
図 IV-10 土坑 (9)

IV 遺構

P-95



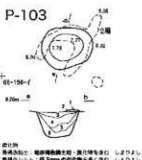
P-96



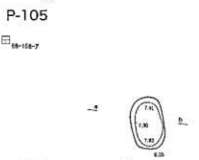
P-98



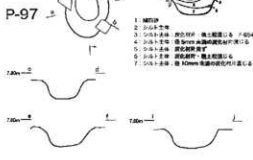
P-103



P-105



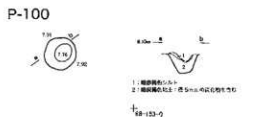
P-97



P-107



P-100



図IV-11 土坑 (10)

P - 9 4 図 IV-10. 69-156-ウ区④面を調査中に F-629 (生活面 196) を検出し、それを円弧状に切る土質の異なる円形の範囲を確認した。そこでトレンチを入れたところ壁面の立ち上がりを確認した。円形で平坦な底面である。掘り込み面は確認できなかった。(酒井)

P - 9 5 図 IV-11. 67-156-ウ区④面で焼土 F-628 (生活面 199) を検出し、その一部が落ち込みの中に潜っているように見受けられたので小トレンチによる確認をおこなったところ、焼土は土坑上の窪みに沿って落ち込んでいること、またその下位に間層を隔てて炭化材片の薄い層があり、その下面が弱く焼土化している (ab 断面 2 層) ことが判明した。従ってこの土坑でも遺構上の窪みで焼き火がおこなわれたことが窺われると同時に、F-628 はこの土坑とは一応別の遺構として扱ってよいと思われた。窪み内の焼き火面のすぐ上に搬入粘土塊ほか少量の遺物があったが、材片層より下の真正の覆土からは目立った遺物の出土はなかった。底面は東西に長い楕円形。壁の上部が朝顔状に開いていて、焼き火面以下の覆土は主に坑口部の崩壊で形成された可能性がある。

P - 9 6 図 IV-11. 66-158-イ区⑥面で炭化材片の散布する範囲が認められ、その中央の材片の濃密な部分の中に楕円形に散布が抜ける箇所が見られた。土坑とみなして半載し、炭化材面はこの土坑を覆って遺構中に落ち込んでいる (ab 断面 2 層) ことを確認した。坑口から 25cm ほど下でやや大型の礫が坑底の一部に現れ、これより深くは掘り込んでいないものと判断した。坑口の北端部で壺形の袖珍土器 (66-158-b-012、個体番号 N78) 1 個体が出土したのが注意された。

後述するようにこの土坑の真下で同じような規模の土坑 P-116 が検出されている。断ち割って確認していないので同一の遺構ではないかという疑いを払拭できないが、P-98・F-654 (生活面 194) を断ち割った小トレンチの断面にそれぞれ P-116 の壁面らしいものが現れていてそれが当区の⑥面付近でとどまっていることを根拠に、一応 2 つの土坑が重複したものと考えておきたい。

P - 9 7 図 IV-11・図版 IV-4. 66-158-イ区⑦面で焼土 F-654 (生活面 194) を検出し、その調査中に焼土を切る P-98 と焼土に覆われる P-97 を検出した。P-97 は F-654 を除去した直後に輪郭が認められ、断ち割って壁面を確認した。覆土上部には F-654 から流れ込んだとみられる炭化材片・焼土粒混じりの層 (ab 断面の 3 層) が見られる。

P - 9 8 図 IV-11. やはり F-654 (生活面 194) の除去直後に輪郭を認め、小トレンチを入れて壁面を確認し半載した。P-97 のような F-654 由来の覆土は見られず、また坑外北東側の⑦面に P-98 の掘り上げ土かと思われる希薄な焼土の堆積があってこれは F-654 を動かした結果とみなしうることから、この土坑は F-654 および P-97 より新しいものと判断した。しかし 3 者の形成面はほぼ同一であり、時間差は大きくないと考えられる。なお小トレンチの断面に後述する P-116 らしい落ち込みが現れていたが、図化の時点では自然の擾乱とみなしていた。

P - 9 9 図 IV-12. P-99・101・102 はいずれも 66-156-ア区⑥面付近で径 50cm 前後の炭化材片散布域によってほとんど同時に落ち込みの所在に気付いた。これら材片散布域の標高は P-99 が P-101・102 のそれよりも僅かに高く、従ってより上層のものとの可能性があるとみて最初に調査に着手したが、もとより遺構内の堆積であればその標高は決定的なものではない。

小トレンチで断ち割ったところ株痕に落ち込んだ土塊とみられるものが検出面から坑底の一部まで及んでいた (ab 断面 1・6 層)、従ってこの遺構自体、株痕に向かって周囲の地層が崩壊して形成された見かけの土坑であるとの疑いも生じる。径の割に深く、他の土坑とはやや形状が異なることも疑問である。ただ当初検出した材片の散布 (ab 断面 2 層) は株痕に先行して存在し、何らかの落ち込みに流れ込んだものと考えらるので、ここでは土坑として報告しておく。(西脇)

P - 1 0 0 図 IV-11. 1 層が土坑中央に滑り込むように堆積していたことから掘り込み面 (68-153-

IV 遺構

ア区③面)が検出できた。土坑埋土が陥没し、その空隙が10cm位はあったと考えられる。土坑容積が小さいことからヒトを埋葬したとは考えにくい。(鈴木)

P-101 図IV-12。検出についてはP-99の項に記した。断面を確認したところ、坑底から壁にかけて一部に株痕らしい擾乱が認められたが、平面図にはその範囲を記録するのを怠った。周囲の地層とは不整合な落ち込みであることは事実ながら、P-99と同様な問題をかかえ遺構と断言しかねる面がある。

P-102 図IV-12。P-99の項で述べたように炭化材片の散布によって土坑の存在を予想した。断ち割りの結果、材片は土坑上の窪みに流入したものであることが明らかとなった。遺物はほぼ皆無である。地層断面からみて掘り込み面は66-156-a区⑤面がそれ以上であろう。P-102の上位に形成された焼土F-653(生活面124)の焚き火面がP-102の中心部へ向かって傾いていることを重視すれば、掘り込み面は同区③面付近にあったとも考えられる。(西脇)

P-103 図IV-11。土坑周縁を取り巻くように焼土粒を含む粘土・炭化物が堆積していたので掘り込み面(68-156-ア区③面)が検出できた。5・6層は坑口部の崩落によるものであり、陥没を示していない。(鈴木)

P-104 図IV-12・図版IV-4。メインセクション用ベルトで残されていた68-156-ウ区⑤面を調査中にF-448(生活面188)とこれを円弧状に切る範囲を確認した。156線メインセクションに沿って半裁して調査を行った。156線メインセクションで確認したところ掘り込み面は検出面で問題ないようである。播鉢状の底面である。(酒井)

P-105 図IV-11。F-692(生活面128)の焼成面の縁が検出できたことにより掘り込み面(68-156-ア区③面)が検出できた。1層が土坑に充填されて土坑埋土は陥没みられない。(鈴木)

P-106 図IV-12。メインセクション用ベルトで残されていた68-156-ウ区⑤面を調査中にF-448(生活面188)とこれを円弧状に切る範囲を確認した。また、西側はF-545(68-156-ウ区⑦面、生活面195)を円弧状に切ることで確認した。北側は土坑に気付かず削平してしまった。掘り込み面は確認できなかった。(酒井)

P-107 図IV-11。67-156-ア区⑦面で焼土F-661(生活面189)と、これを切る落ち込みの輪郭を検出した。地層の傾斜に沿って小トレンチを入れて断ち割り、掘り方を確認した。坑底は掘り過ぎた部分があるが、概ね南北方向に長い楕円形であったとみられる。断面の地層は比較的一様であるので坑口に近い部分は掘り飛ばしたものとみなされ、同区⑤面で検出された焼土F-395・685(生活面135)周囲の炭化材片がP-107の上位を避けるように分布していることからみて、掘り込み面はその付近か、あるいはさらに上であった可能性がある。

P-108 図IV-12。66-157-イ区④面で炭化材片の散布する径50cmほどの範囲を認め、小トレンチを入れて下位に土坑のあることを確認した。掘り込み面は検出面よりも上と考えられるが、この上坑の上位に位置する焼土等はなく、判断材料を欠く。(西脇)

P-109 図IV-12。1層の堆積範囲より掘り込み面(69-156-ウ区⑧面)が特定できた。1層の灰白色粘土で2層を覆っていた。P-110・117と同じ構造である。粘土の量からそれ自体を貯蔵したわけではなく別な用途があるはずである。

P-110 図IV-12。1層の堆積範囲より掘り込み面(68-154-ア区⑥面)が特定できた。1層の灰白色粘土で2層を覆っていた。P-109・117と同じ構造である。粘土の量からそれ自体を貯蔵したわけではなく別な用途があるはずである。(鈴木)

P-111 図IV-12。68-157-ウ区⑧面で周囲とは異なる土質の円形の範囲を確認した。半裁して調

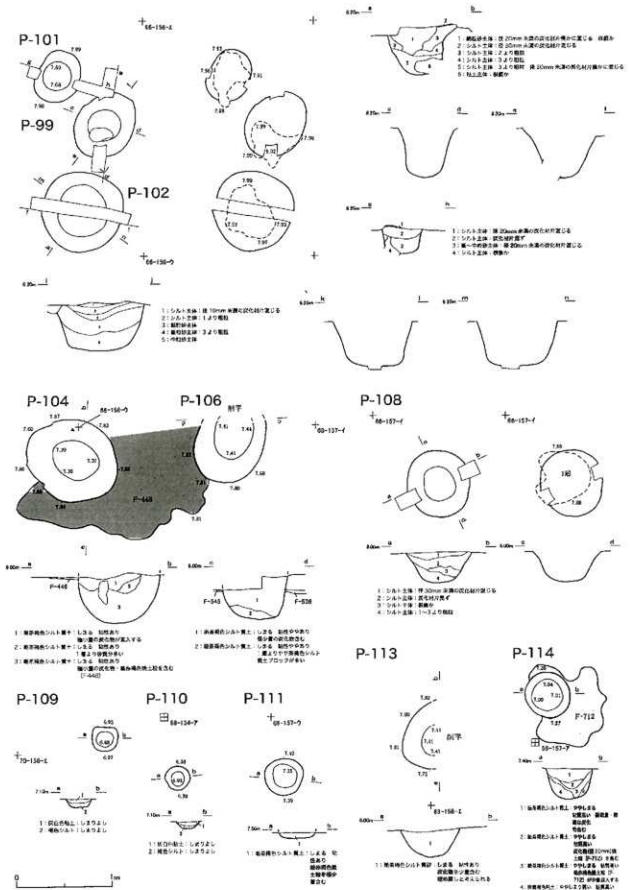


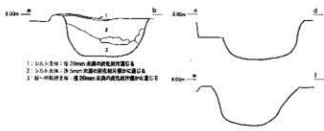
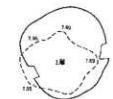
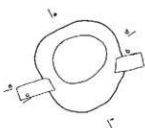
図 IV-12 土坑 (11)

IV 遺構

P-112

47-112-7

+



- 1: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 2: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 3: 坑中堆积物 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片

P-116

50-116-1

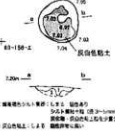
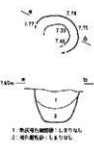
47-117-7

P-117

49-117-10

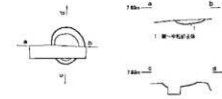
P-118

43-118-2



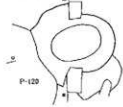
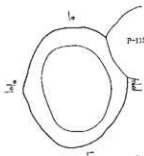
P-119

55-119-1



P-115

P-120



47-119-7

47-119-2

47-119-2



- 1: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 2: 坑中堆积物 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 3: 20x20 土坑 径 100mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 4: 20x20 土坑 径 100mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 5: 20x20 土坑 径 100mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 6: 20x20 土坑 径 100mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 7: 20x20 土坑 径 100mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 8: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片

- 1: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 2: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 3: 坑中堆积物 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 4: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 5: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片
- 6: 50x50 土坑 径 200mm 填土质较硬并夹有瓦片



图 IV-13 上坑 (12)

査を行ったところ皿状の底面をもつ土坑であることがわかった。上面は削平してしまい、わずかに坑底付近が確認できたものと考えられる。(酒井)

P-112 図 IV-13. 66-156-ウ区⑤面で周囲の旧地表とは逆の傾斜を示す炭化材片の散布範囲が見られた。土坑の伏在を予想して小トレンチで断ち割り、壁面を確認した。断面の観察では材片散布面の直下に掘り込み面があり、ほぼ完全に土坑が埋まった段階で炭化物が散布したものとみなされた。覆土には細かい部層を認めたいが、人為的な埋め戻しを示唆する特徴があるわけではない。(西脇)

P-113 図 IV-12. 156 線メインセクションで揺鉢状の底面をもつ落ち込みを確認した。東側は調査によって削平してしまった。そのため 156 線メインセクション用ベルト調査時に 68-156-イ区⑥面で掘り込み面を確認し、土坑の残存部分を検出した。(酒井)

P-114 図 IV-12. 68-156-ウ区①面・68-157-イ区①面、F-712 (生活面 219) 調査時に、この焼土を切る暗茶褐色のプランを確認する。覆土には焼土粒・炭化物が含まれており粘質もある。堆積状況から自然崩落と考えられ、土層観察からこの焼土検出面と同一かやや上位から掘り込まれたものと推測される。(吉田)

P-115 図 IV-13. 66-156-ウ区⑥面で焼土 F-709 (生活面 180) を切る掘り込みの存在に気付いた。地層観察用の畦に沿って小トレンチを入れ、156 線半以東を掘り上げて断面を精査したところ、坑口は 66-156-イ区⑤面付近にあって土坑上に炭化材片の散布 (素図 a-b 断面の 1 層) が見られたことが分かった。その後畦内に残った部分をほとんど横から掘るようにして調査したが、その過程で西側の壁面上部は別の落ち込みと切り合っており、炭化材片はむしろこのもう一つの落ち込みを覆うようにして分布することに気付いた。材片の広がり方から判断して P-115 はこの別土坑 (P-120) に切られていることが確かである。材片の散布は後に P-120 に重複して形成された焼土 F-674 (生活面 130) に混ざるものと判明した。やや長手の土坑であって長軸はほぼ東西方向にあり、掘り込みは深い。

P-116 図 IV-13. 66-158-イ区④面直下に同心円状に濃積覆土が認められ、半裁して断面を調査した。坑底を覆う炭化材片混じりの薄い層の上面からややまとまった量の土器片が出土した (66-158-b-023. 整理番号 13-66)。

すでに述べたとおりこの土坑は P-96 の真下に位置し、平面形と規模もこれに似通っている。P-96 の調査にあたって断ち割りをおこなっていないので、両者は同一の遺構ではないかという疑いを拭いきれないが、P-98 を断ち割った小トレンチの壁面に現れた P-116 と思われる落ち込みが当区の⑤面付近を掘り込み面としていること、F-654 (生活面 194) の断面でも同様の所見があることを根拠に、別遺構として報告しておく。(西脇)

P-117 図 IV-13. 68-156-イ区④面の調査時に灰黄褐色土の落ち込みを確認した。この西側約半分は包含層調査により消失していたため、その部分の土層観察も踏まえ土坑であることを確認した。覆土にはこの土坑より上位で検出した F-448 (生活面 188) 由来と考えられる焼土粒も含まれていることから、この焼土より上位からの掘り込みと考えられる。(吉田)

P-118 図 IV-13・図版 IV-4. 68-156-ウ区②面で周囲の土質とは異なる円形の範囲を確認した。半裁して調査したところ 2 層の灰白色粘土を検出した。灰白色粘土を取り上げたため底面に関しては不明である。(酒井)

P-119 図 IV-13. 66-156-イ区⑨面で円形の輪郭に気付き、小トレンチで断ち割って調査したがわずかに坑底を残すのみであった。出土遺物もない。

P-120 図 IV-13. 66-156-イ区⑤面で焼土 F-674 (生活面 130) の範囲を追求中に、同区南東隅で焼土とその周囲の炭化材片層が欠落することに気付いた。小規模な断ち割りを入れて断面を検討し

(gh断面)、この部分に落ち込みが存在して焼土がその中に潜っていることがわかったが、当遺跡の土坑としては例のない規模のものであるので一旦は倒木痕であろうと判断した。その後F-674の調査を済ませ、さらに数cm掘り下げた段階になって整った楕円形の輪郭からこれが遺構であり、すでにP-115との切り合いを確認していた落ち込みと一連のものであることを認めた。当初確認したF-674の欠落範囲は検出された遺構の輪郭とよく対応しており、この土坑の掘り込み面がF-674形成面付近にあったことは確実である。

すでに輪郭が明瞭となったので半截して覆土を吟味すると、途中炭化材片の集中する面が2枚認められ、そのいずれもおそらく坑外のF-674に連なっていたものとみなされた。この材片集中の下に焼土化は見られなかったので、上部が朝顔状に開く坑壁の形状と合わせて考えると、土坑の開墾後まもなくその縁で火が焚かれ、その後掘り方の上部が崩壊して土坑が埋まるにつれて大きく2回にわたって坑内に材片が流れ込んだものと思われる。なお掘り込み面における材片の散布が土坑のほぼ全周に及んでいることを重視すると、穴を覆うように置かれた木材、つまり蓋ないし屋根のようなものが燃えたという可能性も考慮するべきであろう。

P-80などに比べて隔絶した大きさというわけでもないが、今のところ当遺跡の縄文晩期地層中で最も大きな平面を有する長手の土坑で、長軸はほぼ南北方向にある。材片集中より下位の、埋積初期の覆土からは径5cm未満の土器片がいくらか出土したが、意図的に置かれた遺物や特殊な堆積物などはまったく認められなかった。

P-121 図IV-14、66-156-イ区⑥面の少し下で落ち込みの輪郭に気付き、156線沿いの断面を検討して人為的な掘り込みであることを確認した。13年度の掘り下げで66-155区内はほぼ失われ、辛うじて残った底面は概ね南北方向に長軸をおく楕円形を呈する。自然堆積とみて差し支えない覆土で埋まっている。坑口部に特徴的な薄いシルトと砂の互層が認められないことから、本来の掘り込み面はもっと上にあったとみてよさそうである。

P-122 図IV-14、P-121とほぼ同時に隣接する不整形の落ち込みに気付き、小トレンチで断ち割って確認した。底面は概ね南北方向に長い楕円形の平面を呈する。F-674(生活面130)の下位にあり、P-120より古いものであることは確実である。したがって多少傾斜した面に掘り込まれたことがほぼ確実で、土坑長軸は地表の傾斜に大体直交しているとみてよい。覆土上部に水成とみられるシルト質の薄層があり、この部分から上位は自然に流入したものとみて差し支えないであろう。それ以下の砂質の覆土には稀に土器片が含まれるが、人為的な埋め戻しであるかどうかは明らかでない。

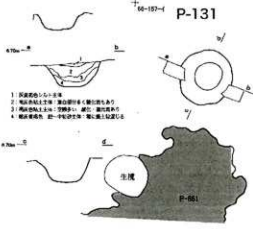
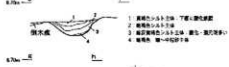
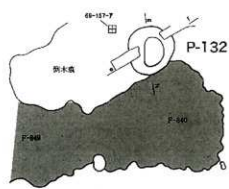
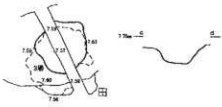
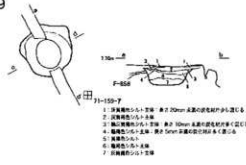
P-123 図IV-14・図版IV-4、65-156-ウ区⑦面の少し下で半円形に落ち込む薄いシルト層に気付き、小トレンチで断ち割って土坑であることを確認した。その後156線半の地層断面で検討した結果、P-84、P-136と同一面からの掘り込みであることが明らかである。かなり平坦な楕円形の底面をもち、その長軸は概ね南北方向、すなわち掘り込み面の傾斜に大体直交する方向にある。坑壁の上部が朝顔状に開き、覆土下部は坑口の崩落で形成された可能性が考えられる。覆土中の薄いシルト層以上は自然の水成堆積であろう。なお掘り込み面の斜面下手には廃棄焼土と思われるF-898(生活面217)がある。P-123は下層の焼土F-744(生活面223)を切るのので、F-898(生活面217)がこの土坑の掘り掘げ土である可能性もなくはない。

P-124 図IV-14、66-156-ウ区⑧面で記録したが、同⑤面ですで見えていた。河川敷緑地の暗渠の真下にあったので暗渠設置の際の攪乱と誤認して削平してしまい、67線の地層断面図にも記録されていない。小規模な土坑の底面を残すのみであった。

P-125 図IV-14、66-156-ウ区⑨面で炭化材片と焼土塊を含む覆土の輪郭を確認した。坑口東側

IV 遺構

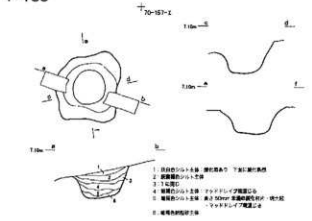
P-129



P-130



P-133



P-134



P-135

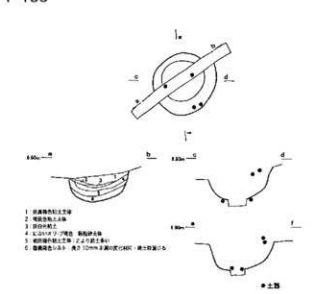


図 IV-15 土坑 (14)

を P-112 に切られている。底面は概ね円形で多少東西方向に長い。覆土は二三の単位に分け得るがその境界は曖昧で出入りがあり、人為的な埋め戻しらしく思われる。坑壁上部が開く傾向が弱い点からみて本来の掘り込み面はより上位にあったらしい。

P-126 図 IV-14. 66-156-イ区⑧面の直下で円形の輪郭を認め、小トレンチで断ち割って確認した。ほぼ円形、多少南北に長い平坦な底面をもつ。この遺跡の晩期土坑のうちでは規模の大きい部類に属するが目立った出土遺物はない。坑壁上部が全く開かず掘り込み面はもっと上位にあったとみて可であろう。F-674 (生活面 130) の下位にあり、P-120 に切られる。

P-127 図 IV-14. 66-157-イ区⑧面で検出、同じ面の焼土 F-791 (生活面 223) を切っている。平面規模の小さい割に深く、坑口近くまで空隙の多いシルト質の覆土で満たされている点で類例を見ない。断ち割っていないので掘方の認定にも多少問題が残る、樹木の株などの痕跡である可能性もなくはない。

P-128 図 IV-14. 70-156-ウ区⑧面で半円形の輪郭を認め、71 線以南に拡張して完掘した。北半は遺構の下部を残すのみ、南半も坑口部は 11 年度調査時に削平されていた。底面は南北方向に長い楕円形で、やはり恐らく旧地形の傾斜方向に直交して長軸がある。南側の坑壁は他よりも目立って傾きが緩い。覆土は境界の曖昧な二三の単位に分け得るが、埋め戻しまたは壁の崩落で比較的急激に埋まった印象を与える。

P-129 図 IV-15. 70-158-ウ区⑧面で検出した炭化材片の散布域中に乱れが認められたので、下位に遺構があることを予想して小規模な断ち割りを入れたところ、やや下位に再び炭化材片の集中 (ab 断面 3・4 層) が現れ、それが⑧面の焼土 F-858 (生活面 211) を切る落ち込み内に存在することが知られた。坑口部に焼土または炭化物集中の形成される他の土坑と同様なものと考えて調査したが掘り方はあまり整っておらず、規模の小さい割に底面の傾きが目につく。

11 年度調査で土壌試料の採取用に残した狭い畦部分での検出であるため周囲の状況が明らかでなく、倒木痕等の一部を誤認した可能性もなくはない。その場合坑口の炭化物とみたものは攪乱で持ち上がった F-858 の一部ということになるかも知れない。

P-130 図 IV-15. 68-157-イ区⑧面を調査中、そこだけ乾裂の生じる範囲が円形に認められ、小トレンチを入れて正しくこの範囲が土坑であることを確認した。P-114 の真下に位置するが、その底面と P-130 の間には⑧面の F-821・836 (生活面 223) が介在するので同一の遺構である可能性は否定される。同一面で隣接する F-842 (生活面 224) 周囲の炭化物散布はこの土坑に切られている。

いびつな円形ないし楕円形の平坦な底面をもち、壁はほとんど開かず立ち上がる。掘り込み面が⑧面にあった可能性も皆無ではないが、F-821・836 (生活面 223) の断ち割りではまったく気付かれていない。やはり⑧面から掘り込まれた浅い土坑で、壁が崩れる前に埋め戻されたとみるべきものによる。

P-131 図 IV-15. 66-157-ア区⑧面で同心円状に落ち込む覆土を検出した。同一面の焼土 F-840 (生活面 233) を切る。小規模で掘り方もあまり整っていない。覆土の大半は水成層と考えられ、埋め戻されることなく埋没したとみられる。

P-132 図 IV-15. 66-157-イ区⑧面で検出、P-131・137 と同一面の掘り込みで規模・覆土の様相とも似ている。ほぼ円形の小さな底面を有し、開口状態のまま自然の埋積に任せたとみられる。

P-133 図 IV-15. 70-157-ア区⑧面で不整形の落ち込みを認め、断ち割ってほぼ円形の土坑の坑口が崩れたものであることを確認した。覆土の最下部 (ab 断面 6 層) はこの崩落で生じたものかと思われる。覆土上部 (3 層以上) は水成層であろう。

P-134 図 IV-15. 70-157-イ区㉔面で炭化物と焼土粒を含む覆土の輪郭を認めて調査したが、小規模・不整形の掘方で、覆土が人為層らしいことを除けばあまり遺構らしいところはない。土坑であるとするれば13・14年度調査を通じて最も下層で確認されたものとなる。

P-135 図 IV-15. 68-157-イ区㉔面ですでに落ち込みが確認されていたが、掘り込みは同区㉔面からの形成とみられ、P-131・132・137と概ね同一面の土坑とみなされる。平面ほぼ円形で丸底、覆土は最下部を除いて水成堆積物らしい。底面付近で土器片が2点出土したが、特別の意義はなさそうである。

P-136 図 IV-14. 156線半の地層断面を検討中にP-84・123の掘り込み面に当たるマッドドレイブが小さな落ち込みに向かって崩れ落ちていることに気づき、65-156-A区内を同じ面(㉔面)まで掘り下げた結果、この落ち込みが比較的整った楕円形の掘り込みであることを確認した。小規模なものであるが、覆土に水成の粘土層(gh断面6層)を生じていることから、ある程度の期間にわたり穴として開口していた可能性が高い。

P-137 図 IV-16. 67-157-A区㉔面で不整な楕円形の落ち込みを検出して断ち割った。覆土の大半は株または根の痕跡と思われる粘土質の灰白色土で占められているが、精査するとその下に平坦な底面をもつ掘方が確認できた。埋没中の土坑の上に樹木が生育したものでなく、その攪乱は底面より下位に達している。P-131、132と同一面の遺構である。

P-142 図 IV-16. 67-156-イ区㉔面で輪郭を確認して調査したが底部付近を残すのみであった。楕円形の底面は他の多数例と同じく南北方向に長い。156線半の地層断面に見られるように、この土坑の真上にはかなり上位から倒木痕らしい攪乱が入り込んでいたため確認が遅れ、どの程度の深度から遺構の壁面が残っていたかは不明になってしまった。

P-143 図 IV-16. 69-156-ウ区㉔面、69-157-イ区㉔面の調査で炭化材片混じり層が落ち込み輪郭を検出した。掘り込み面はもう少し上位かもしれない。平坦な底面は多少南北に長い円形で、覆土の下半はマッドドレイブ塊の混じる人為層である。

P-144 図 IV-16. 69-156-エ区㉔面の検出中に発見され、この面に属する遺構とみてよいようである。底面の径20cmほどの小さな土坑で、最上部を除いて人為層と思われるもので埋まっている。

P-145 図 IV-16. 69-157-イ区㉔面を切る土坑として確認したもので、それより上位からの掘り込みである。ほぼ円形の土坑で下部はマッドドレイブ塊、上部は炭化材片の混じる人為層で埋まっており、覆土上部にはかなりの土器片や剥片が含まれていた。

P-146 図 IV-16・図版 IV-4. 69-156-エ区㉔面で焼土F-935(生活面225)の焚き火面直下に発見された小さな土坑である。覆土下部から板状の白色粘土塊がまとまって出土し、大きいものは長径が12cmほどあった。厚さはどれも1cm未満である。

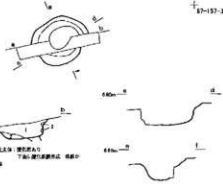
P-147 図 IV-16. 69-156-エ区㉔面ほかで確認された円形の土坑で、ほぼ構築面で検出できたものとみている。底面付近にはマッドドレイブ塊や炭化材片を含む人為層がみられるが、その上には粘土質の水成層(ab断面3層)があり、開口状態で置く可能性を示している。

P-148 図 IV-16. P-147より多少下位で確認しているが、同一面の遺構と考えて差し支えない。概ね円形、丸底で底面は想定される旧地表に平行した傾きを見せる。覆土の様相はP-147とよく似ている。

P-149 図 IV-16. P-148より多少深い位置で確認したものである。多少南北に長い底面はやはり旧地表に平行して傾き、覆土の構成もP-147・148に似ている。これら2つの土坑と同じ面から掘り込まれた可能性がある。

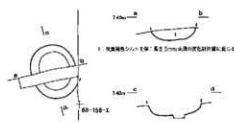
P-137

田 47-137-F



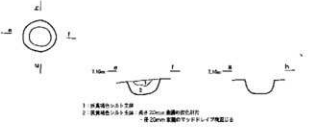
1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

P-142



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

P-144



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

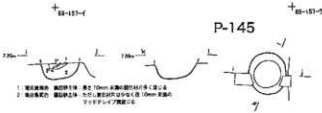
P-146



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

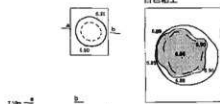


P-145



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

P-152



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

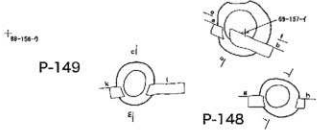
白色粘土

P-143

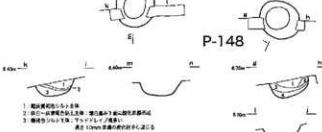


1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

P-147



P-149



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

P-148



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。



1. 坑底面は粘土層に掘削し、坑底面を平滑に仕上げ、坑底面に排水溝を設ける。
2. 坑壁はコンクリートで仕上げる。

図IV-16 土坑 (15)

P-152 図 IV-16・図版 IV-4. 68-156-イ区⑤面の炭化物散布を除去中に輪郭が見出されたもので、この面の遺構と考えられる。旧地表の傾斜方向にやや長い円形平面の浅い土坑で、底面に掘り込みより一回り小さい盤状の白色粘土塊が納められていた。厚さは 2cm ほどありそうである。底面ごと切り取って粘土塊を取り上げたので、坑底の詳細は不明である。(西脇)

(3) 148 線

P-138 図 IV-17・図版 II-6. 66-148-ウ区②面を調査中に土質の異なる円弧状の範囲を確認した。148 線セクションにかかっていたためこれに沿ってトレンチを入れて壁面の立ち上がりを確認した。円形で平坦な底面を有する。セクションベルト部分の 66-148-イ区②面で土坑の残存部の検出を行った。148 線セクションで土層断面を確認したところ 1-5 層は自然堆積によるものであろうと思われる。この堆積状況から見て土坑の掘り込み面は検出面からさほど変わらない位置であったと考えられる。直径約 1.7m、深さ約 0.6m と対雁 2 遺跡の中でもかなり大型の部類に入るものである。P-139・140・151 とほぼ同面から掘り込まれたと思われる。

P-139 図 IV-17・図版 II-6. 66-148-エ区②面を調査中に土質の異なる円弧状の輪郭を確認した。148 線セクションにかかっていたためこれに沿ってトレンチを入れて壁面の立ち上がりを確認した。セクションベルト部分の 66-148-イ区②面で土坑の残存部を検出し、円形の範囲を確認したことから、半裁して調査を行った。円形で平坦な底面を有する。土坑は自然に埋没したものと考えられる。土坑の堆積状況から見て土坑の掘り込み面は検出面 (66-148-イ区②面) からさほど変わらない位置であったと考えられる。長径約 1.7m、深さ約 0.5m と対雁 2 遺跡の中でもかなり大型の部類に入る。P-138・140・151 とほぼ同面から掘り込まれたと思われる。

P-140 図 IV-17・図版 II-6. 65-148-ウ区①面を調査中に土質の異なる円弧状の輪郭を確認した。148 線セクションにかかっていたためこれを精査したところ土坑の断面を確認した。65-148-ウ区では上面を削平してしまい、わずかな底面を検出したのみである。セクションベルト部分の 65-148-イ区②面で土坑の残存部を検出し、円形の範囲を確認したことから、半裁して調査を行った。楕円状の底部を有する。土坑は自然に埋没したものと考えられる。土坑の堆積状況から土坑の掘り込み面は検出面 (65-148-イ区②面) からさほど変わらない位置であったと考えられる。P-138・139・151 とほぼ同面から掘り込まれたと思われる。

P-141 図 IV-17. 65-148-ウ・エ区①面を調査中土質の異なる円弧状の輪郭を確認した。148 線セクションにかかっていたためこれに沿ってトレンチを入れて壁面の立ち上がりを確認した。また、P-150 に切られていることも確認した。南北方向に楕円形で平坦な底面を有する。土坑の上面は河川敷公園の周回道路により削平されており、掘り込み面の確認はできなかった。

P-150 図 IV-17. 65-148-ウ・エ区①面を調査中に土質の異なる円弧状の輪郭 (P-141) を確認した。148 線セクションにかかっていたためこれに沿ってトレンチを入れたところ、断面に P-141 を切る土坑を確認した。南北方向に楕円形で平坦な底面を有する。土坑東側はトレンチにより削平してしまい範囲は不明である。土坑の上面は河川敷緑地の周回道路により削平されており、掘り込み面の確認はできなかった。

P-151 図 IV-17. 66-148-イ区②面を調査中に土質の異なる円弧状の輪郭を確認した。67 線以南は次年度以降の発掘区のため、調査を行っていない。67 線セクションにかかっていたことからこれをセクションとして半裁を行った。規模が大きく底面を確認できなかったため、断面によって底面を確認した。平坦な底面をしているようである。断面の 6-8 層は埋め戻されたと考えられるが、1-5

層は自然埋没によるものと思われる。この堆積状況から見て掘り込み面は66-148-イ区②面と見てよいと考えられる。P-138・139・140とはほぼ同面から掘り込まれたと思われる。(酒井)

3 焼土

焼土は平成11年度89ヶ所、13年度462ヶ所、14年度246ヶ所の合計797ヶ所が検出されている。焼土の検出される範囲は140線より東側に多く分布し、これより西側にはまばらに分布する。特に153線以东から増えはじめ、156線以东では濃密な分布を示す(図IV-18)。焼土は半裁して焼成の状況を確認している。現地で焼成されたものと廃棄されたと考えられるものに分類される。現地で焼成されたものは624ヶ所、廃棄されたと考えられるものは167ヶ所、不明なもの6ヶ所である。焼土の近辺に直径10-20cm、深さ2-5cmほどの円形の小ピットが付属するものがある。この小ピットのある焼土を31ヶ所確認している。1ヶ所の焼土につき小ピットが1-8基確認されている。この小ピットは土器を据え付けるためのものではないかと考えられる。焼土の形成される場所としては平坦面や斜面を利用するもののほかに、土坑(P-46・80・81・85・95)の埋没途中の浅い窪みや、F-570・948等のように自然の落ち込んだ窪みを利用して、その中で焼土が形成されるものが見受けられている。特にF-570では細円礫を窪みの中に入れてその上面を利用している。

焼土に関しては生活面ごとに図示している。焼土とそれに伴う炭化物の広がる範囲から同一時期における生活面の広がりを確認できるからである。焼土の形成される場所は生活面114のように同一時期と考えられる面でも平坦な場所のほかに東西方向5mの距離で約1m西側へ落ち込む斜面を使用することもあることが確認できる。また、焼土の分布を生活面で見ると生活面123-240の範囲で焼土の形成される数が多いようである。

焼土上面の土壌を採取し、フローテーションにより内容物の収集を行った。フローテーションからは微細骨片・ベンガラ・炭化物・土器片・石器等・フレイクチップなどが検出されている(表IV-3)。表IV-2では各焼土におけるフローテーションの実施の有無について○×で記した。特に微細骨片・ベンガラを検出したものについては●を記した。その結果、現場で確認されたものを含め、白色の微細骨片が検出された焼土365ヶ所、ベンガラが検出された焼土46ヶ所が確認された。F-717ではベンガラの集中、F-88・427・459では炭化クルミの集中が検出されている。微細骨片の検出された焼土は生活面110以降の古い生活面に多い傾向(690ヶ所中347ヶ所)が見られ、生活面110以前の新しい生活面では検出される割合が少ない(107ヶ所中18ヶ所)ようである。

遺跡の形成年代を知るために焼土にかかわる炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行っている。今年度報告にかかわる部分においては平成11年度にF-50(生活面132)・58(生活面189)・120(生活面211)、13年度にF-598(生活面111)・463(生活面137)・622(生活面191)・425(生活面195)・527(生活面213)、14年度にF-756(生活面1)・734(生活面9)・736(生活面21)・886(生活面64)・892(生活面87)から検出された炭化物を用いて測定を行っている。なお、14年度にバリノサーヴェイ株式会社にて測定依頼したF-756(生活面1)・734(生活面9)・736(生活面21)・886(生活面64)・892(生活面87)の年代は年度内に成果を得ているが本書には未収録である。11年度報告分および今年度報告分(VI章)に掲載された測定結果から、これらの焼土には1740±40-2470±40yBPの年代が得られている。(酒井)

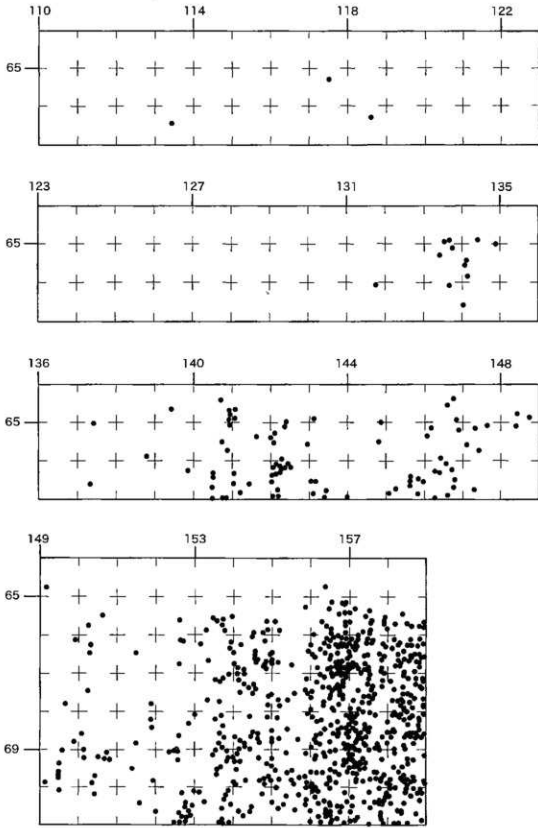


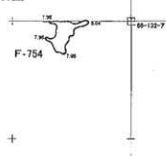
図 IV-18 焼土の分布

IV 遺構

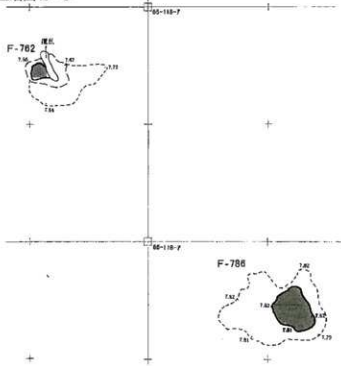
生活面 1



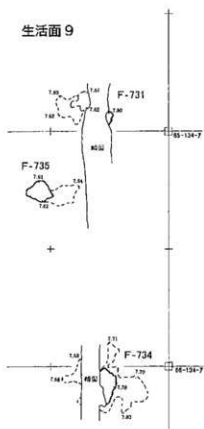
生活面 7



生活面 2・3



生活面 9



生活面 10~12

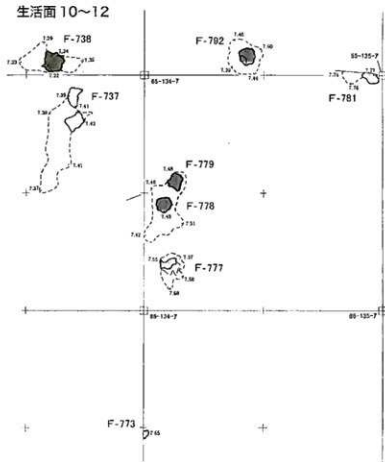


图 IV-19 烧土 (1)

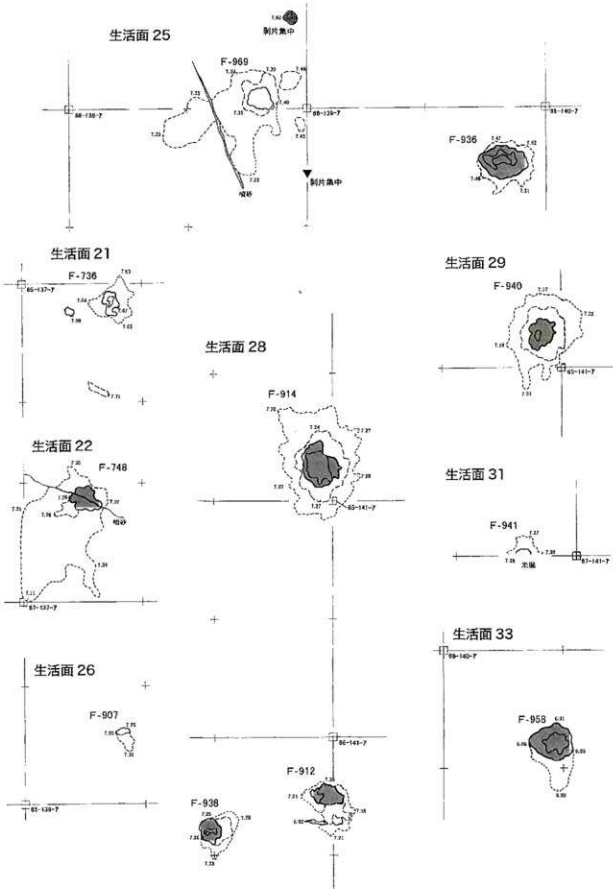
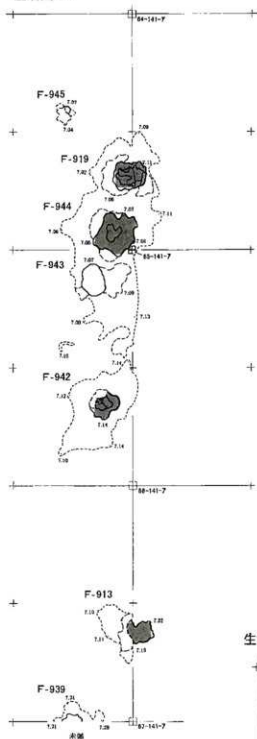


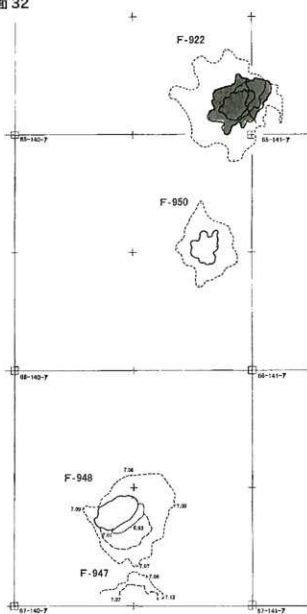
图 IV-20 施土 (2)

IV 透栞

生活面 30



生活面 32



生活面 34

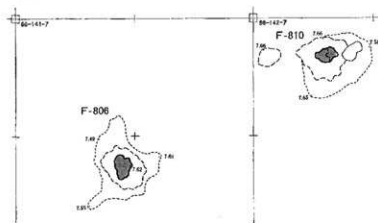
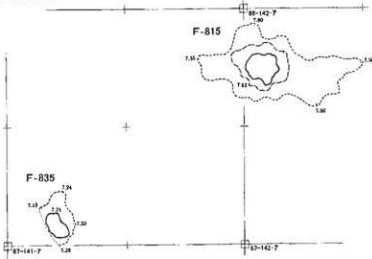
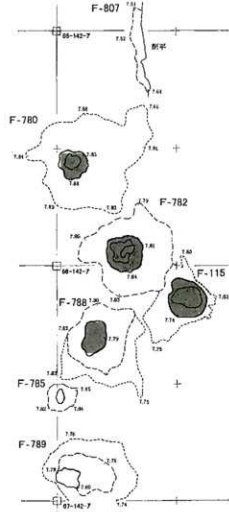


图 IV-21 烧土 (3)

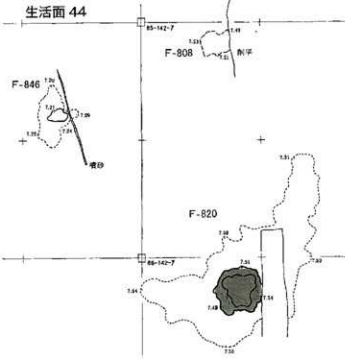
生活面 35



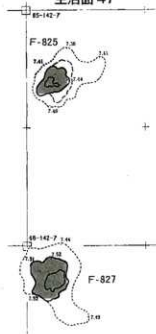
生活面 39~42



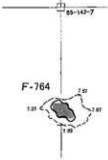
生活面 44



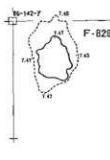
生活面 47



生活面 38



生活面 45



生活面 46

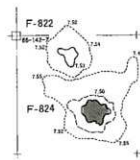
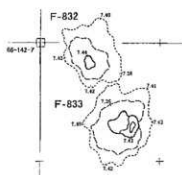


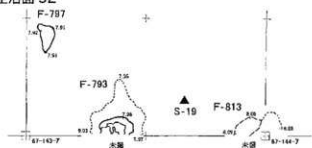
图 IV-22 烧土 (4)

IV 遺構

生活面 48



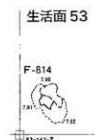
生活面 52



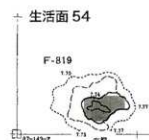
生活面 50



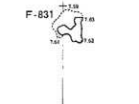
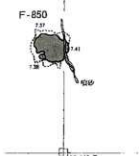
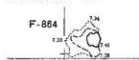
生活面 53



生活面 54



生活面 55~59



生活面 64~73

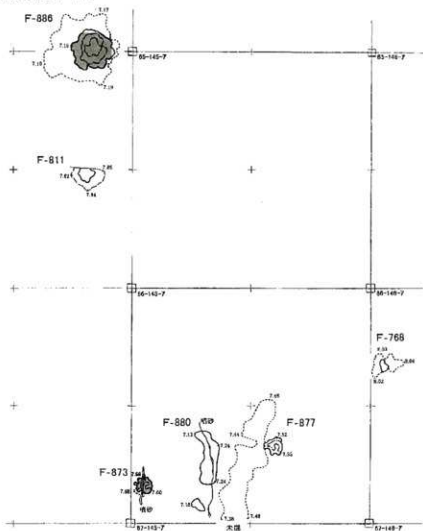
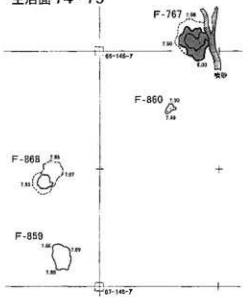
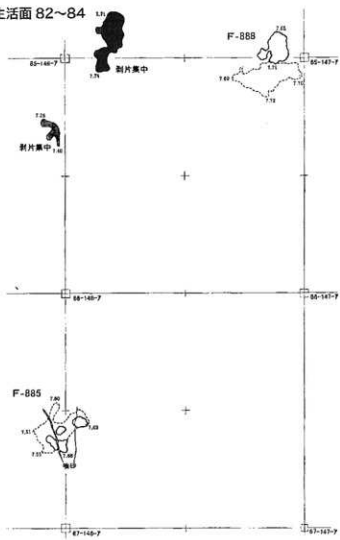


図 IV-23 焼土 (5)

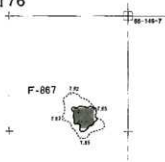
生活面 74·75



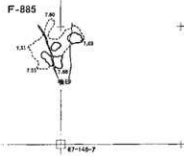
生活面 82~84



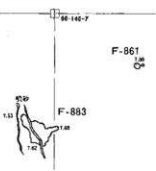
生活面 76



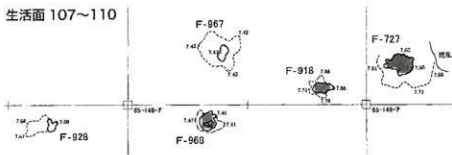
生活面 85



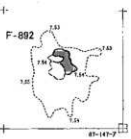
生活面 80·81



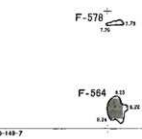
生活面 107~110



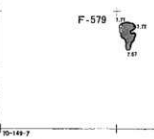
生活面 87



生活面 105·107



生活面 108



生活面 106

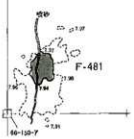
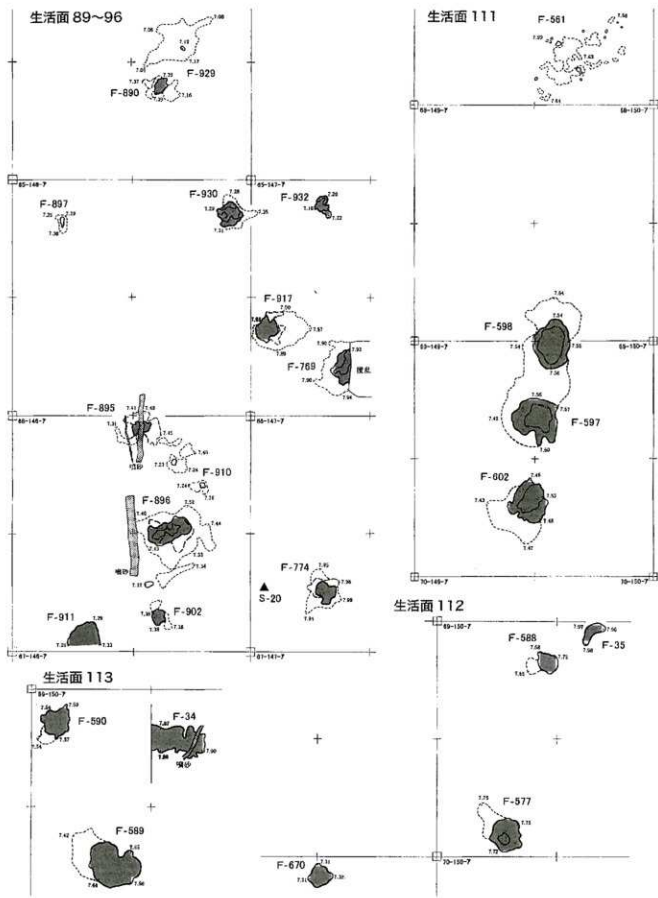
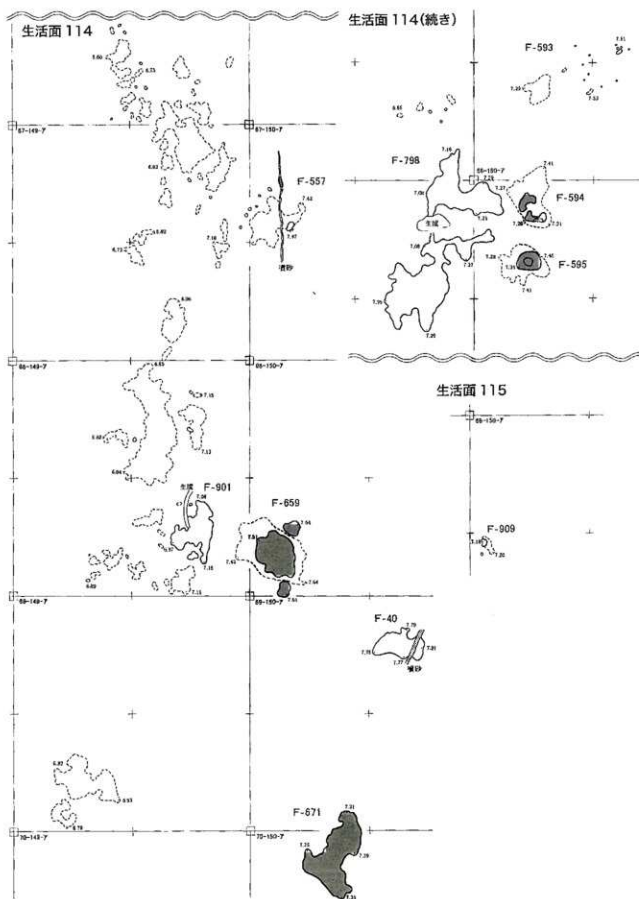


图 IV-24 烧土 (6)

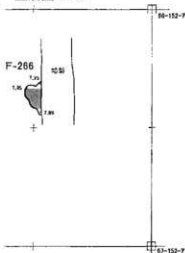
IV 遺構



図IV-25 焼土 (7)



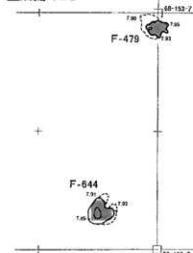
生活面 116



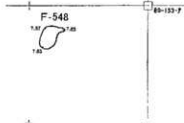
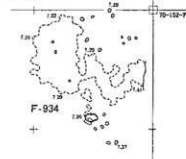
生活面 117



生活面 126



生活面 119



生活面 121・122

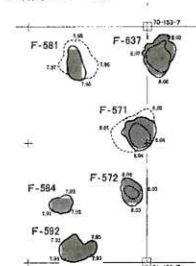


図 IV-27 焼土 (9)

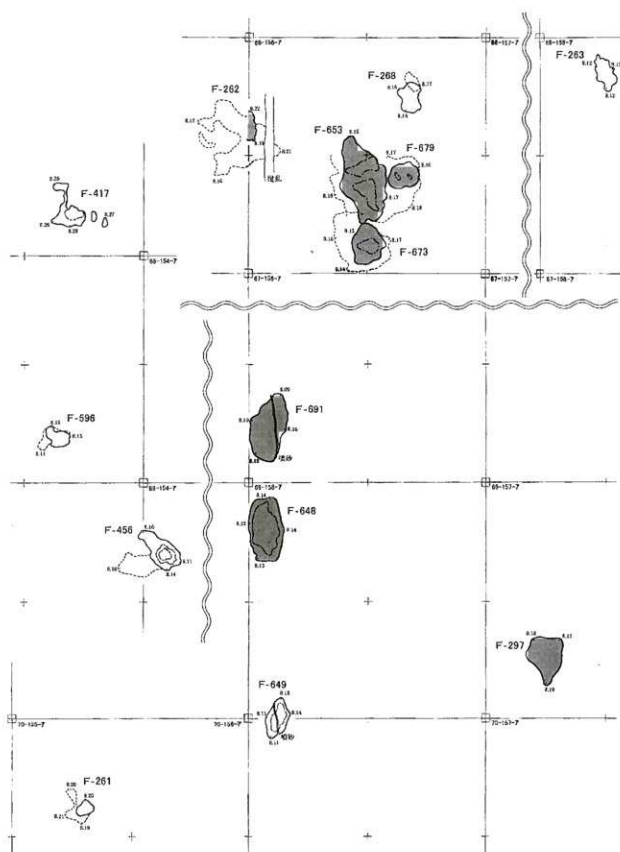


图 IV-28 烧土 (10)

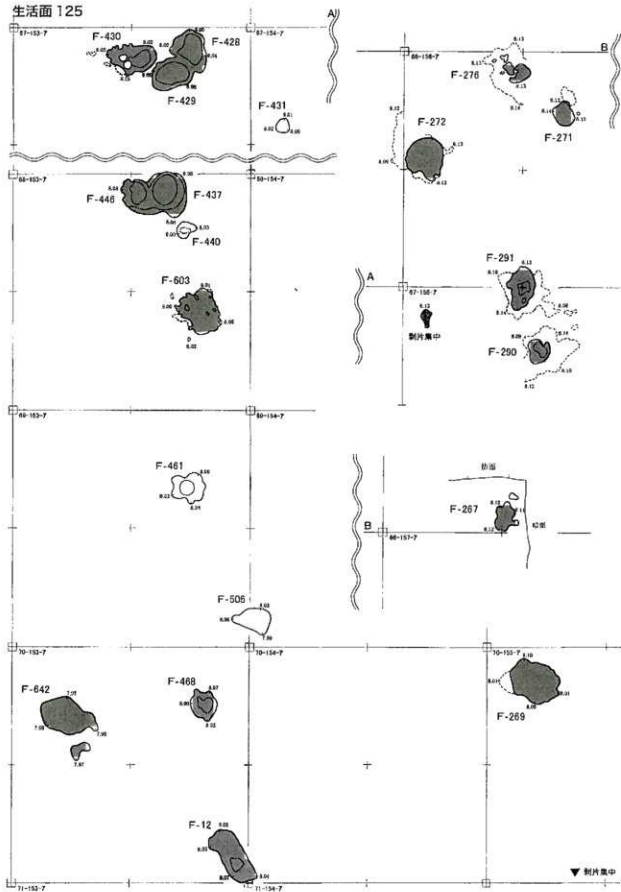
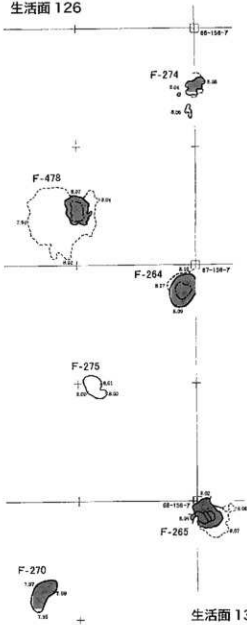
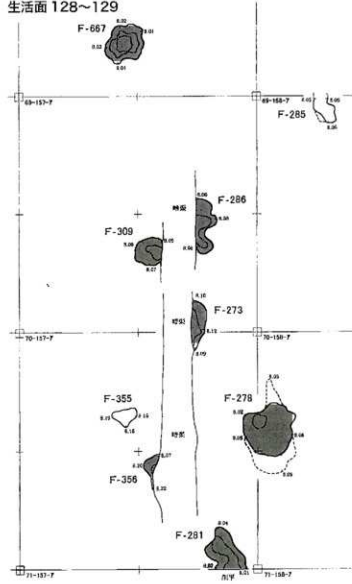


図 IV-29 焼土 (11)

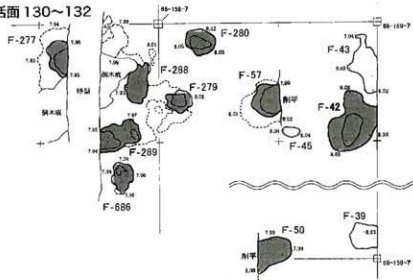
生活面 126



生活面 128~129



生活面 130~132



生活面 127

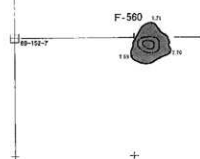


图 IV-30 烧土 (12)

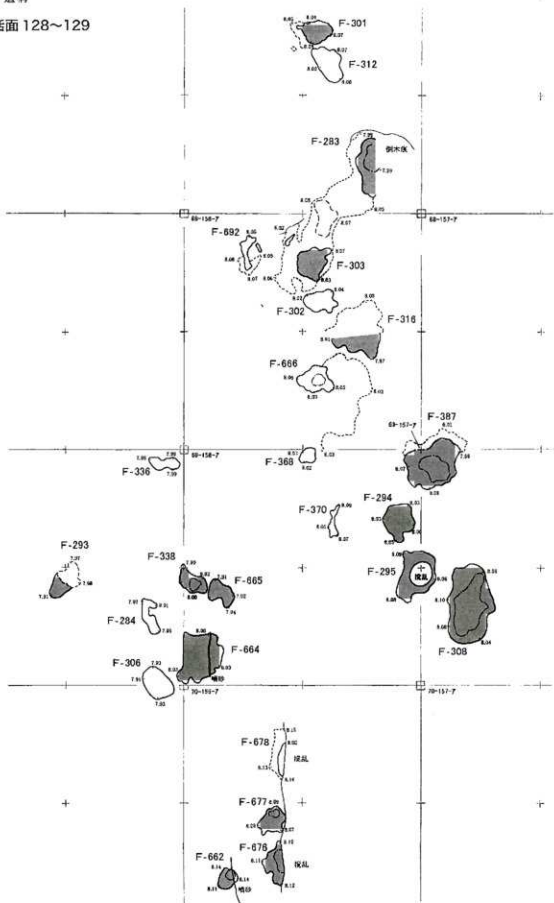


图 IV-31 坑土 (13)

生活面 130~132

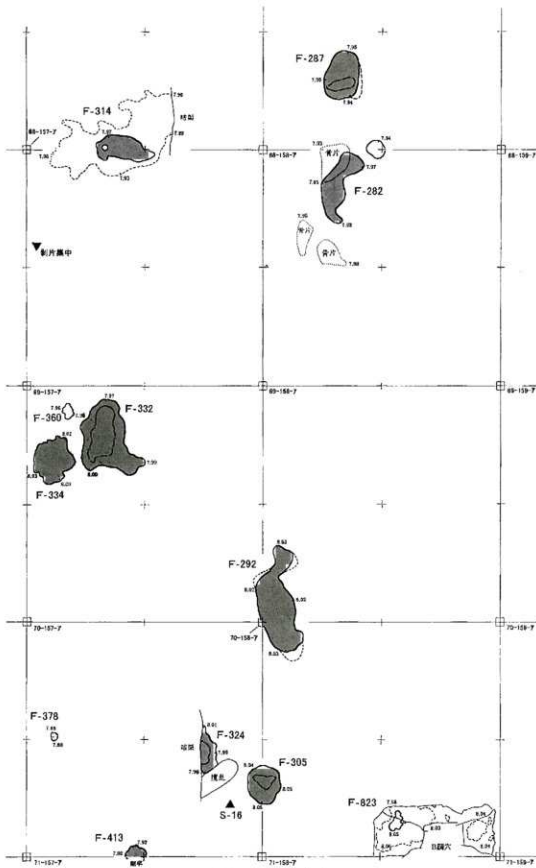
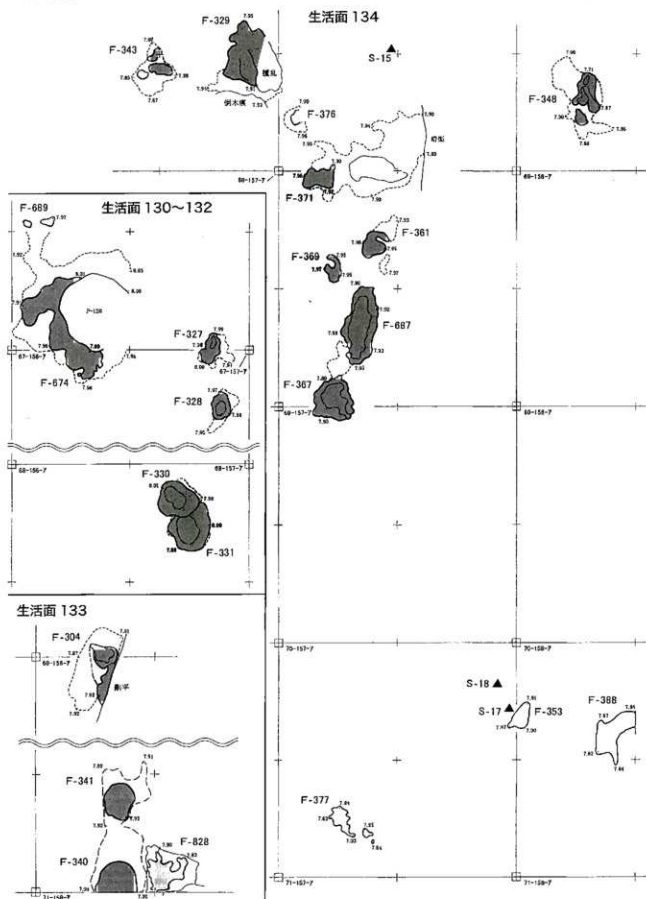
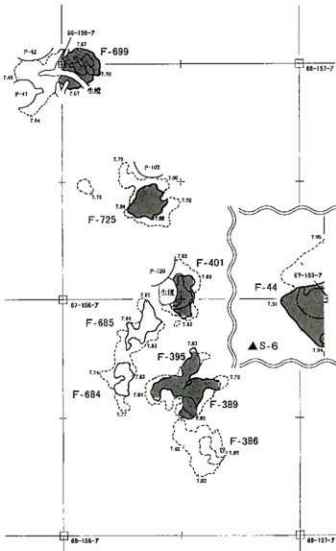


図 IV-32 焼土 (14)

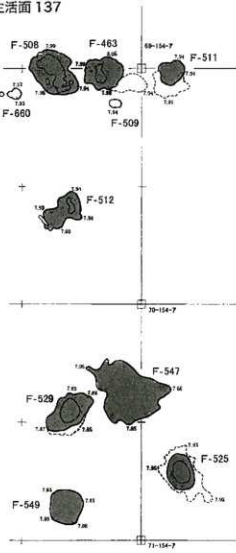


図IV-33 焼土 (15)

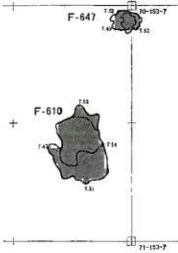
生活面 135



生活面 137



生活面 139



生活面 140

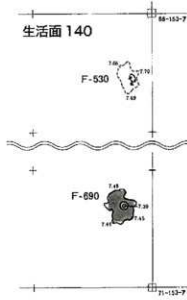
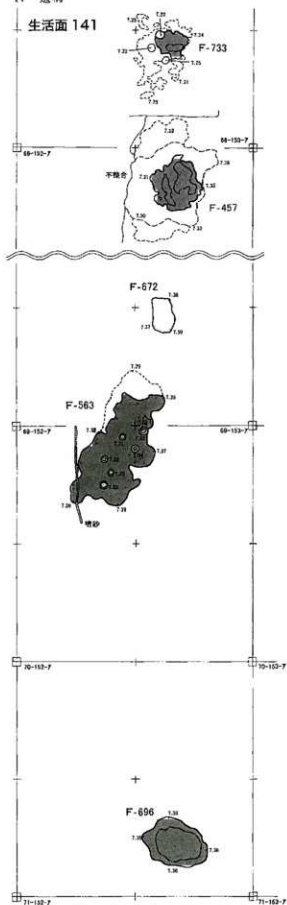


图 IV-34 烧土 (16)

生活面 141



生活面 142

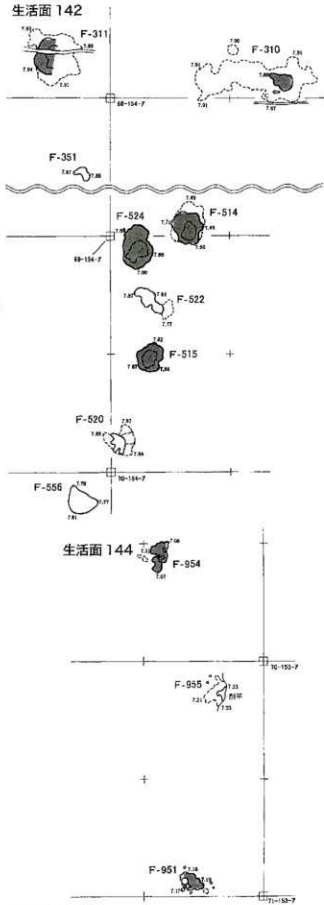


图 IV-35 烧土 (17)

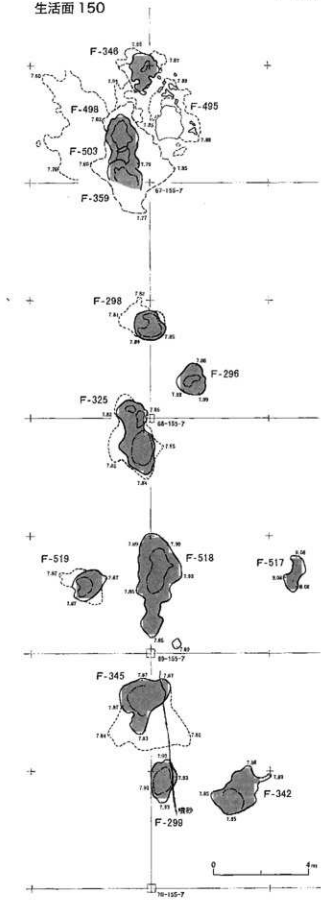
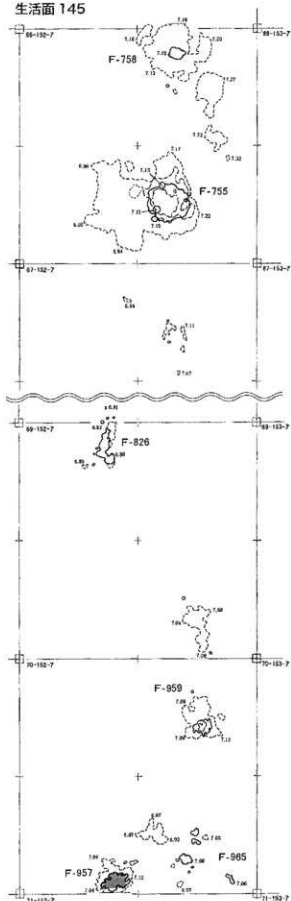
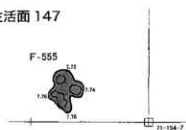


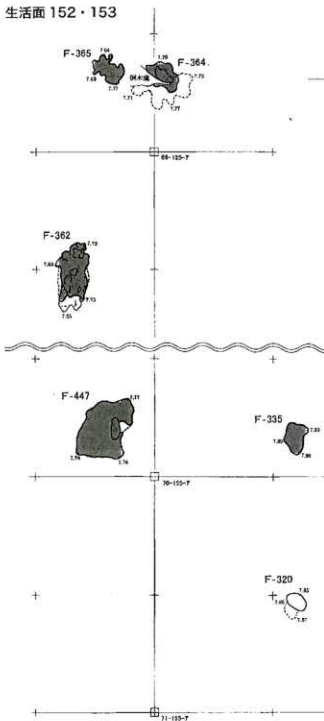
图 IV-36 烧土 (18)

IV 遺構

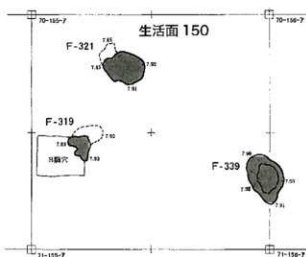
生活面 147



生活面 152・153



生活面 150



生活面 151

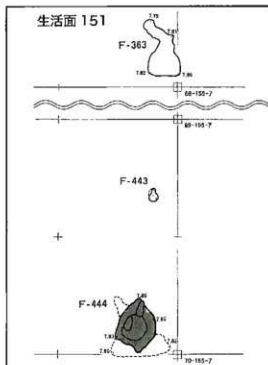
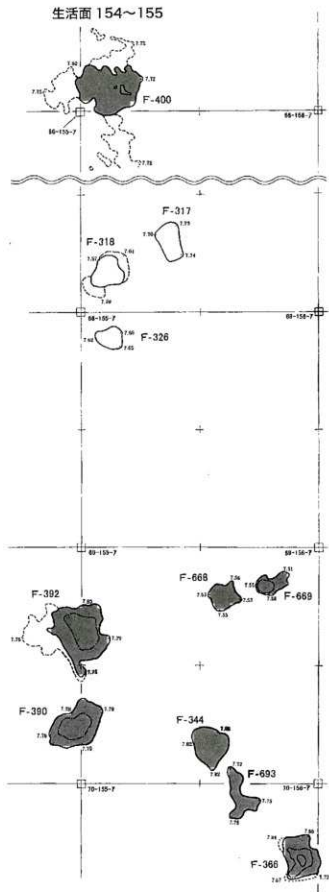
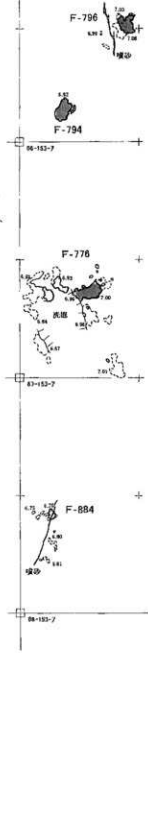


圖 IV-37 焼土 (19)

生活面 154~155



生活面 158



生活面 159

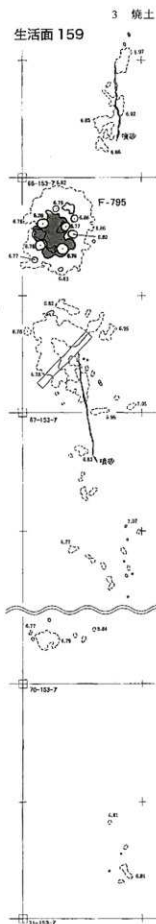


図 IV-38 焼土 (20)

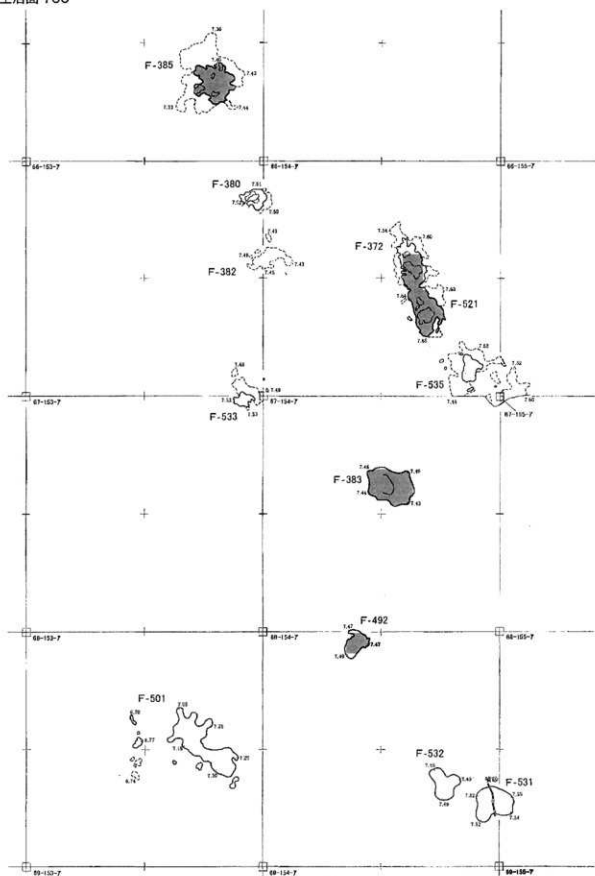


图 IV-39 坑土 (21)

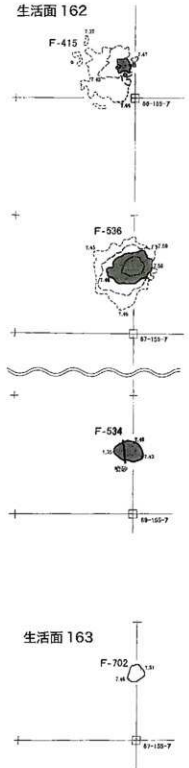
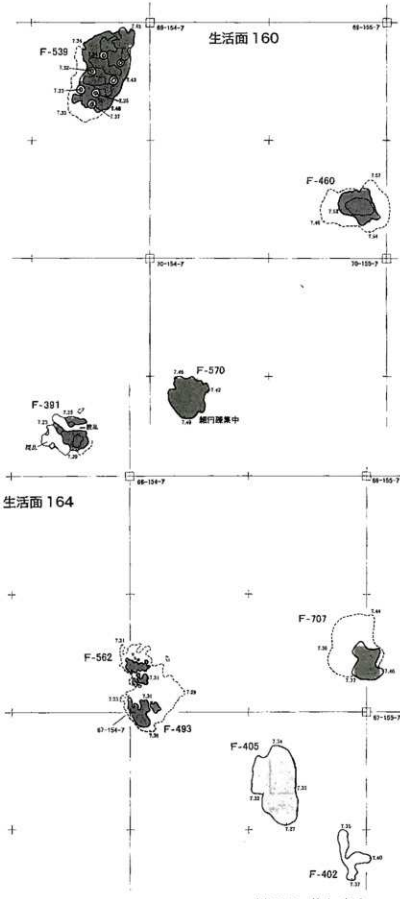
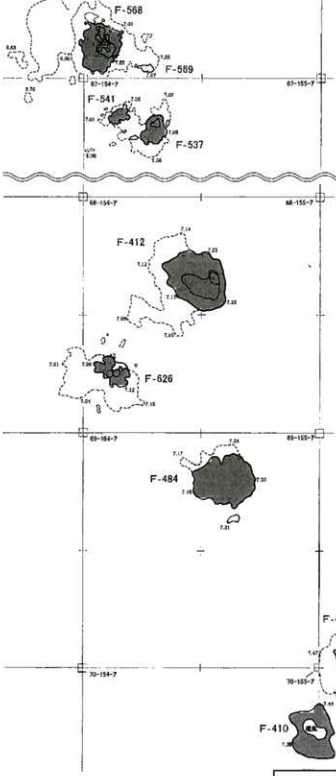


図 IV-40 焼土 (22)

IV 渡橋

生活面 166



生活面 167

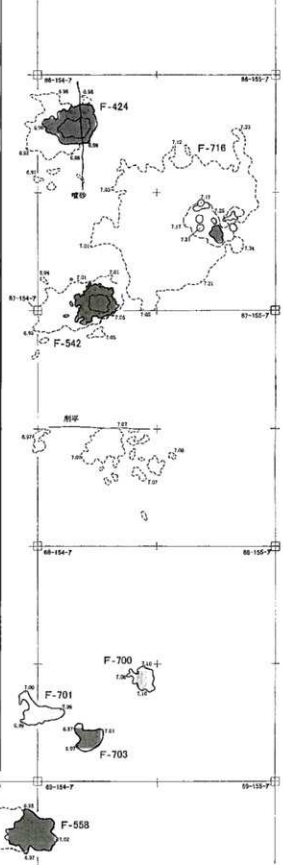


図 IV-41 焼土 (23)

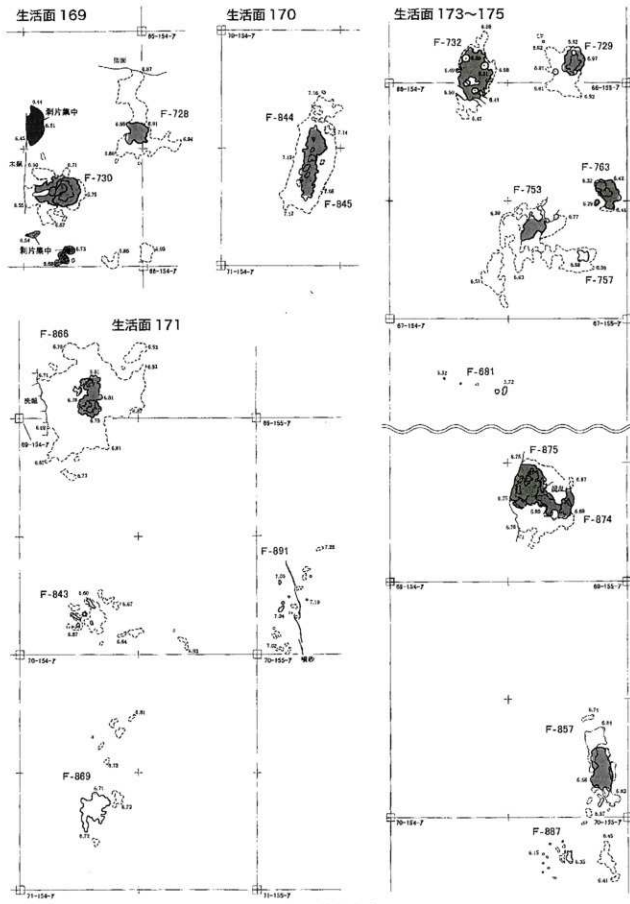


图 IV-42 施土 (24)

IV 遺構

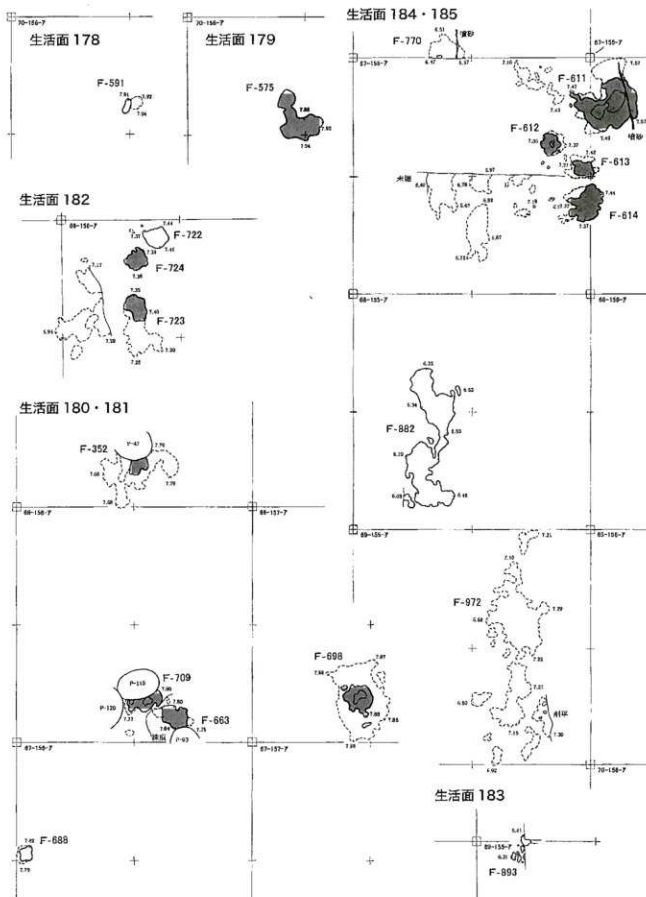
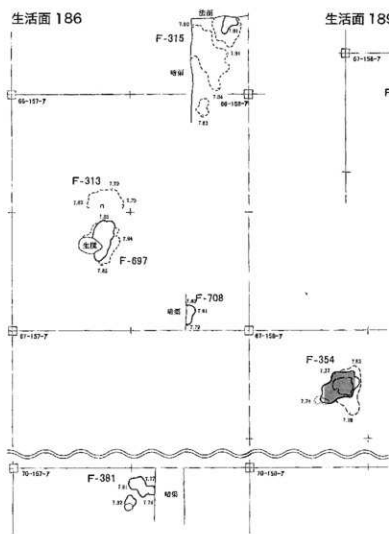


图 IV-43 烧土 (25)

生活面 186



生活面 189

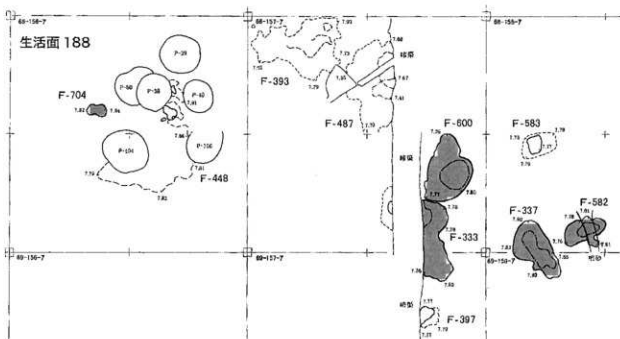
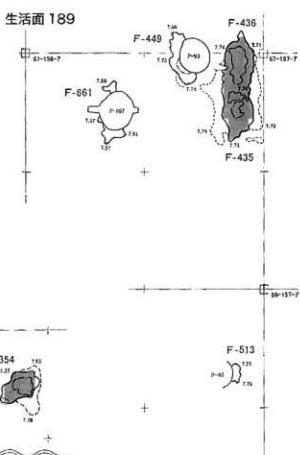


图 IV-44 烧土 (26)

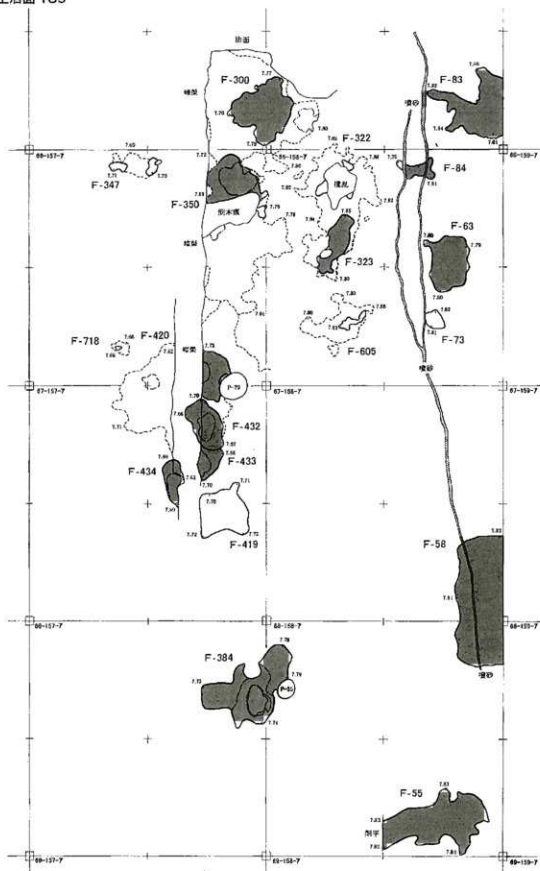


図 IV-45 坑土 (27)

生活面 190~192

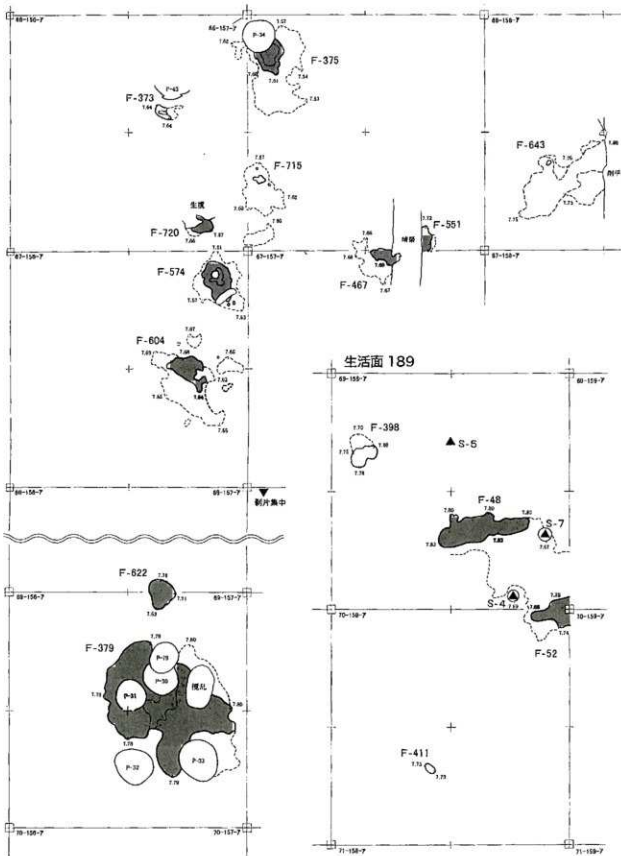
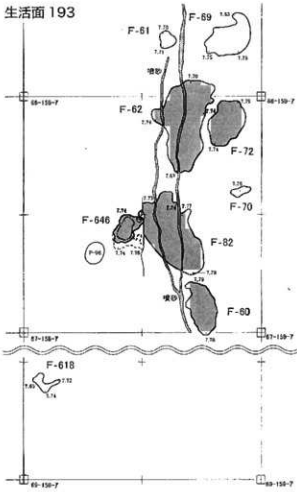
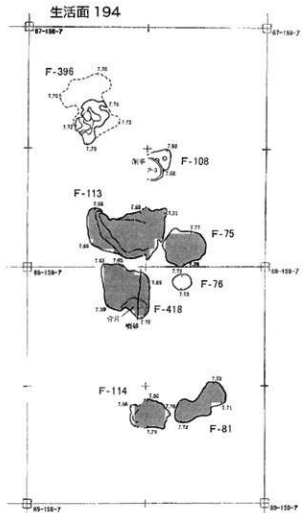


图 IV-46 烧土 (28)

生活面 193



生活面 194



生活面 194(続き)

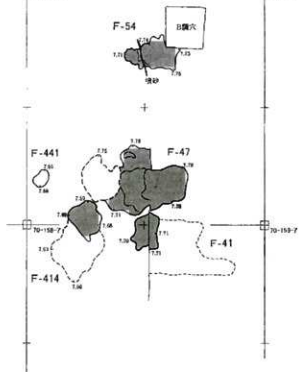
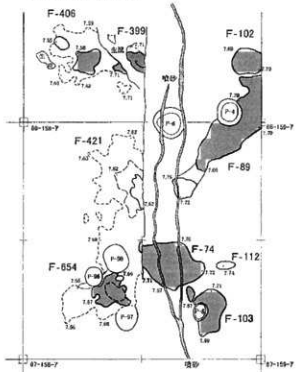


図 IV-47 焼土 (29)

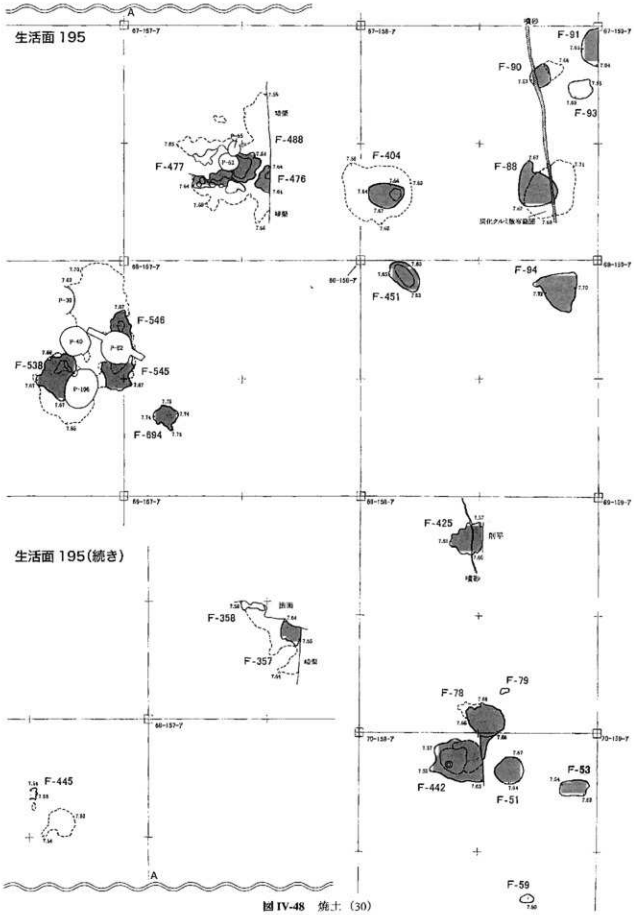
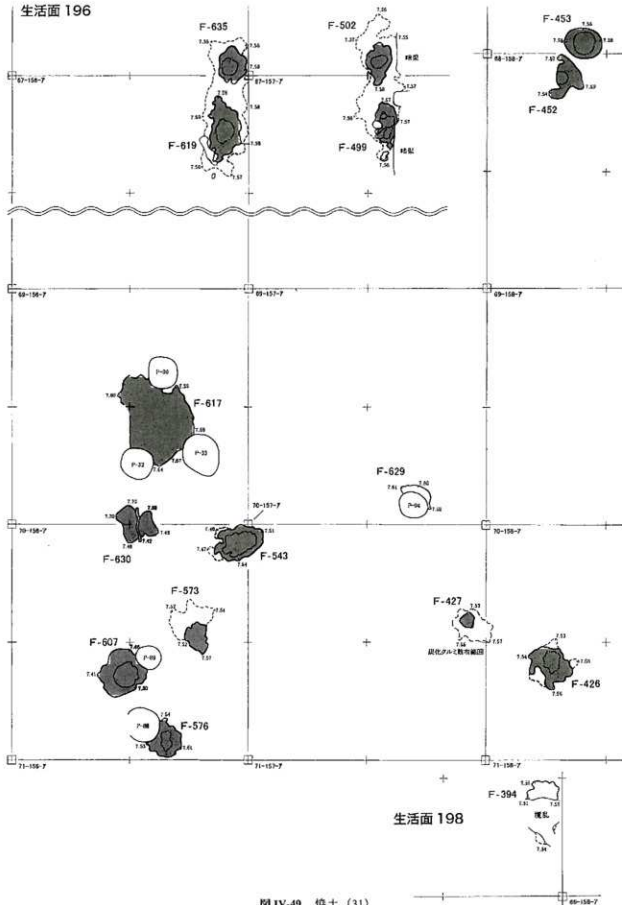


図 IV-48 焼土 (30)

生活面 196



图IV-49 烧土 (31)

生活面 199~201

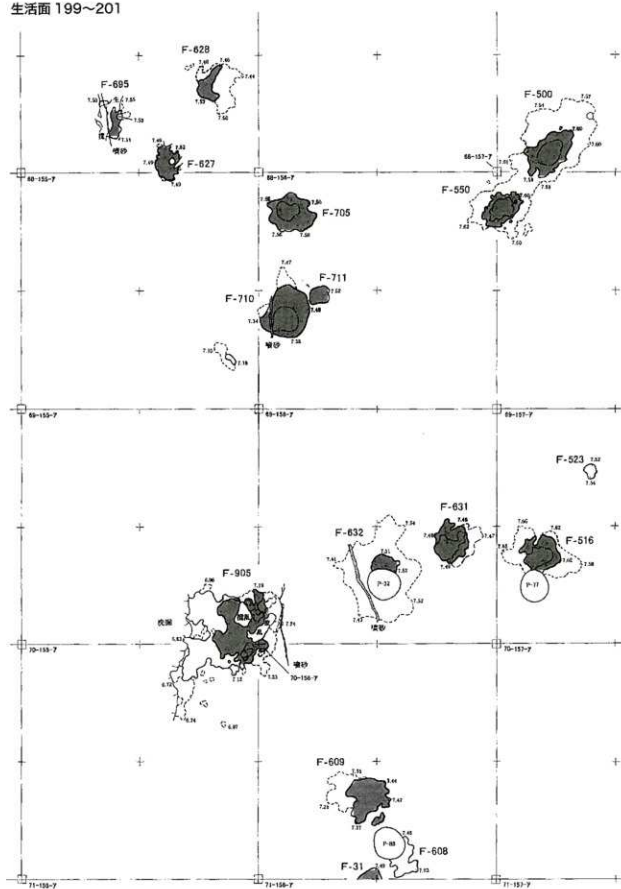
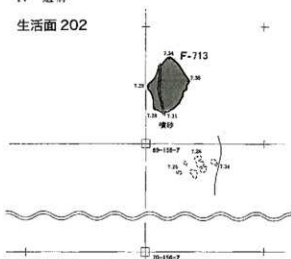


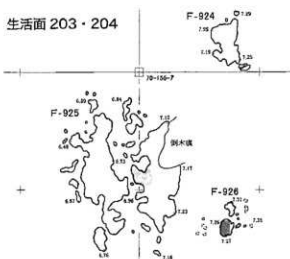
図 IV-50 焼土 (32)

IV 遺構

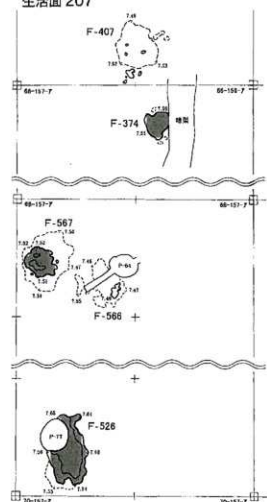
生活面 202



生活面 203・204



生活面 207



生活面 205・206

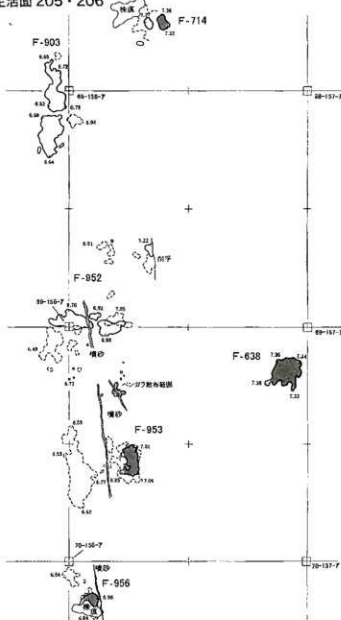
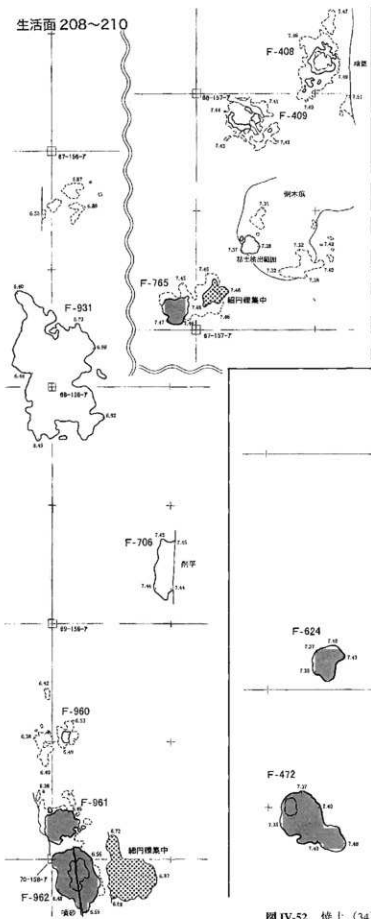


図 IV-51 施土 (33)

生活面 208~210



生活面 211

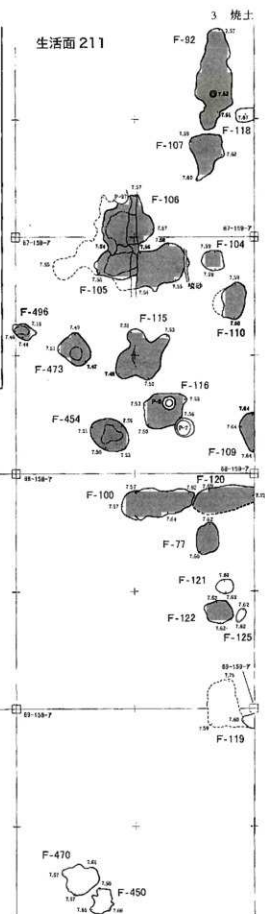


図 IV-52 焼上 (34)

IV 遊構

生活面 212・213

生活面 211

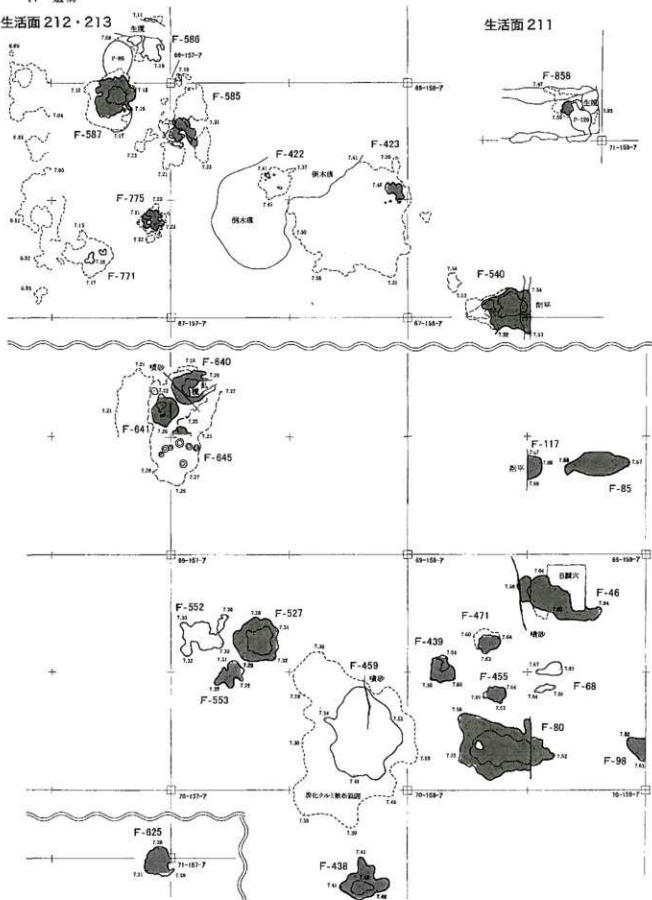
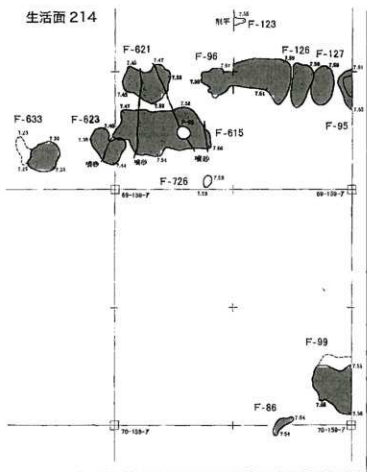
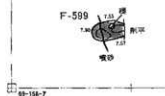


图 IV-53 编上 (35)

生活面 214



生活面 215



生活面 216

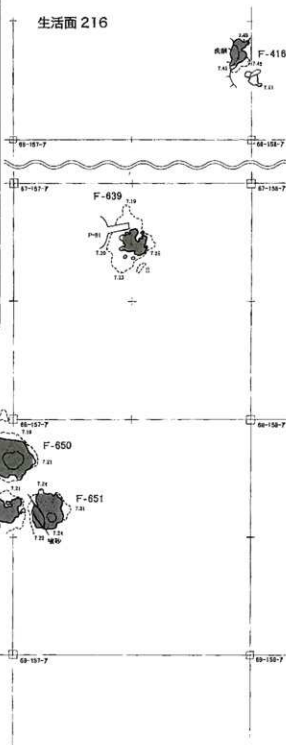


图 IV-54 烧土 (36)

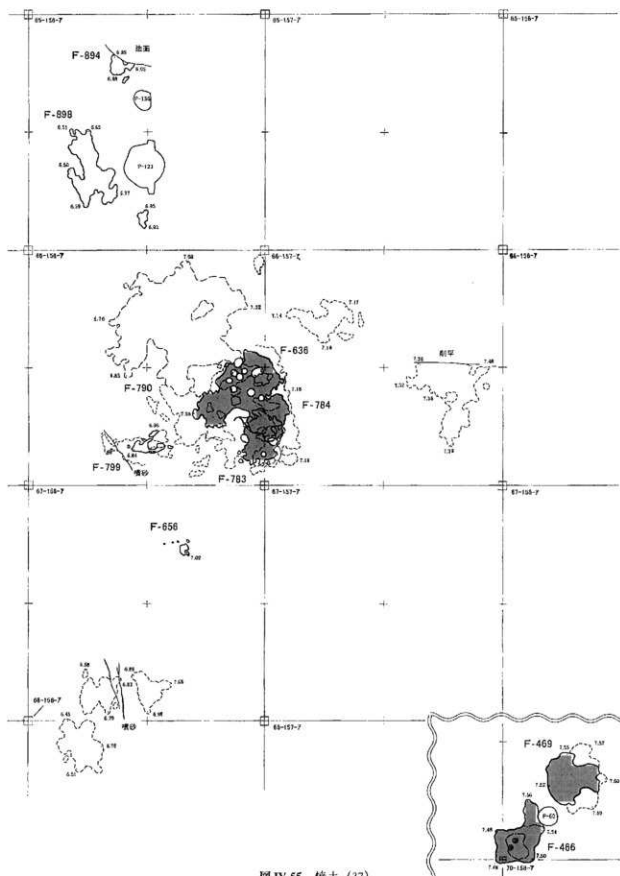


図 IV-55 焼土 (37)

生活面 218・219

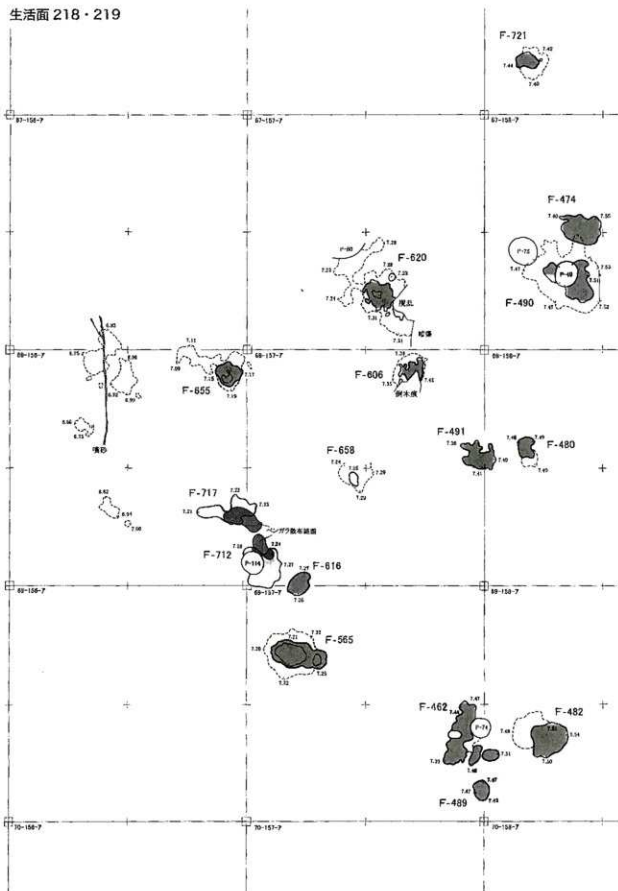
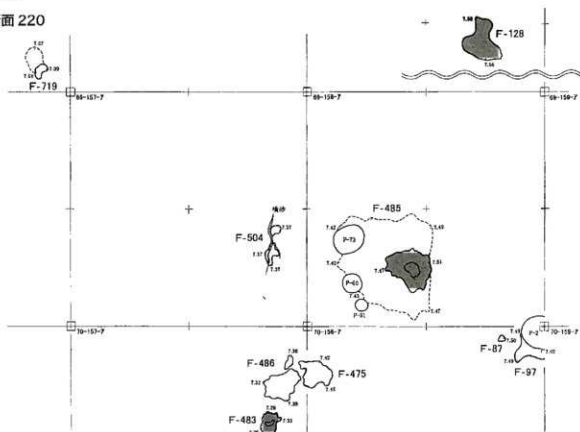


图 IV-56 烧土 (38)

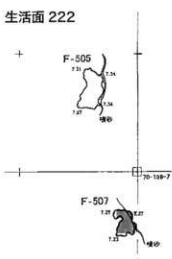
生活面 220



生活面 221



生活面 222



生活面 223

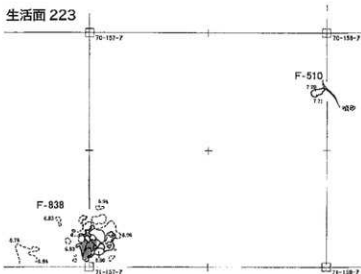


図 IV-57 焼土 (39)

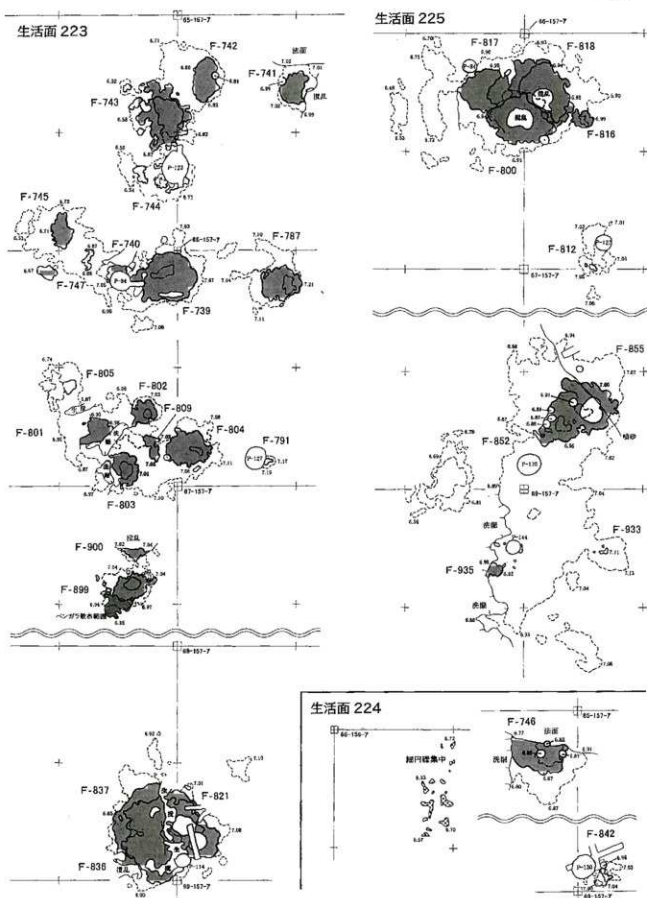


图 IV-58 领土 (40)

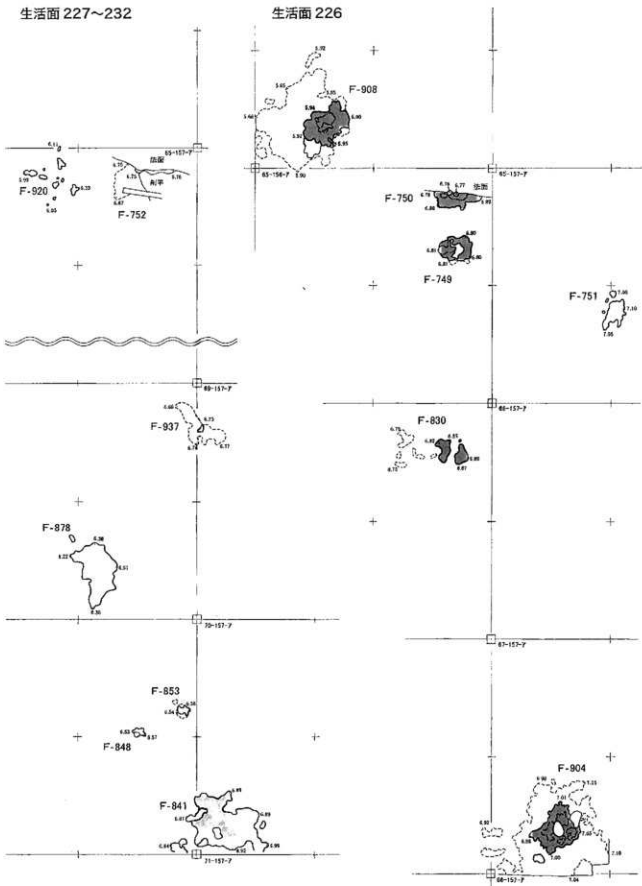
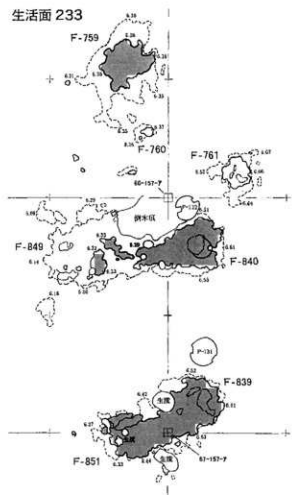
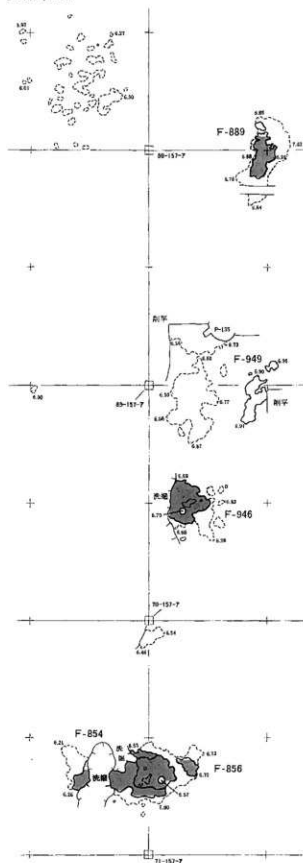


図 IV-59 海上 (41)

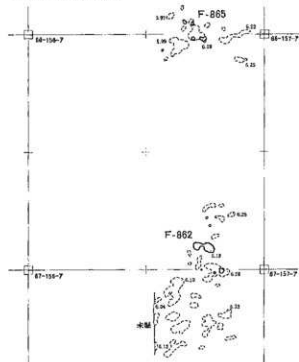
生活面 233



生活面 234



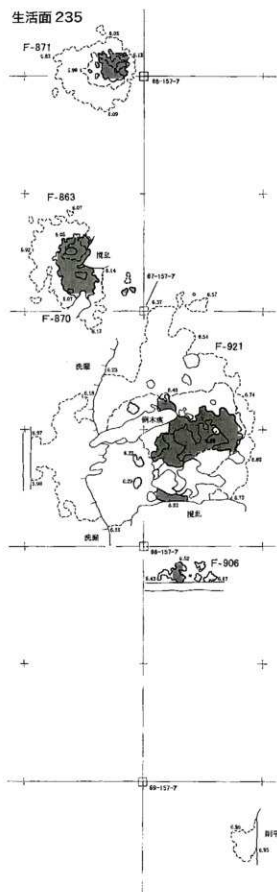
生活面 234(続き)



图IV-60 焼土 (42)

IV 遺構

生活面 235



生活面 237・238

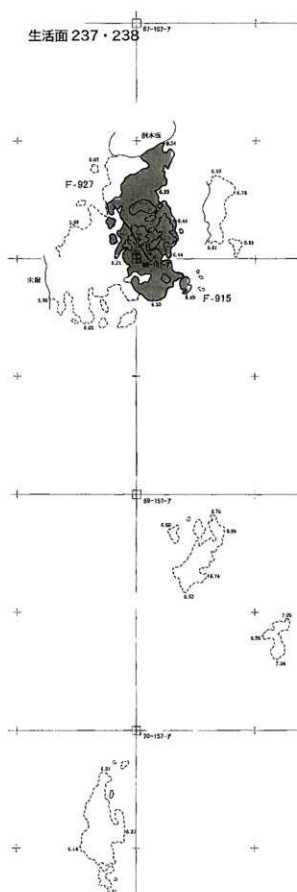
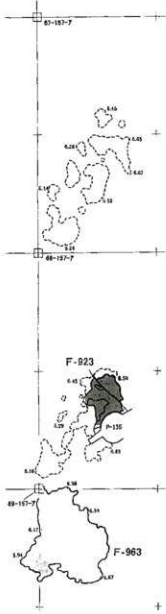
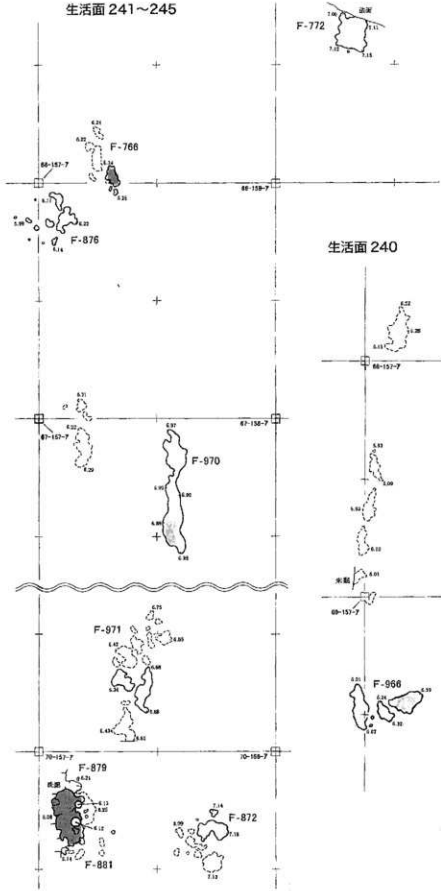


图 IV-61 烧土 (43)

生活面 239



生活面 241~245



生活面 240

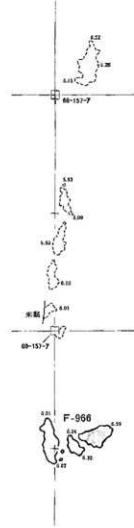
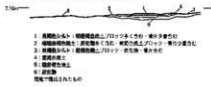


图 IV-62 烧土 (44)

IV 遺構

F-922 (生活面 32)



1. 掘削された、明確な境界線を持つコブツボコ(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
4. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
5. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
6. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
7. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

F-308 (生活面 128)



1. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
4. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

F-795 (生活面 159)



1. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
4. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
5. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
6. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
7. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

F-539 (生活面 160)



1. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
4. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
5. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
6. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
7. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
8. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
9. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
10. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
11. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
12. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
13. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

F-570 (生活面 160)



1. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

F-453 (生活面 196)



1. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
4. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

F-92 (生活面 211)



1. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
4. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

F-818 (生活面 225)



1. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(中央) 掘削部分
2. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
3. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分
4. 掘削された土壌(土壌層)の境界線(周辺) 掘削部分

0 20cm

S-4



70-158-7
中心部へ1m

S-5



68-158-7
中心部へ1m

S-7



S-16



71-158-7
中心部へ1m

S-18



70-158-7
中心部へ1m

S-19



S-20

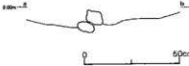


68-158-7
中心部へ1m

S-17



71-143-2



0 50cm

図 IV-63 鏡土断面・集石

4 集石・剥片集中・細円礫集中

集石は平成11年度に4基、13年度に4基、14年度に2基の計10基を検出している。拳大から人頭大の礫・礫石器が2-5個集まっているもの7基、軽石が多量に集中しているもの2基、黒曜石の原石・フレイクが集まっているもの1基が検出されている。軽石が集中していた範囲が掘り込みになる可能性があるが土坑とは見なさなかった。遺跡内の包含層からは自然礫は検出されないため礫は持ち込まれたものであると考えられる。剥片集中は10ヶ所確認されている。黒曜石のフレイクチップが集まっているものが8ヶ所と玉髄のフレイクチップが集まっているものが2ヶ所であった。細円礫集中は5ヶ所確認されている。直径2-10mmほどの円礫が集まっていたものである。F-570(生活面160)では自然の落ち込みにつめられ、焼けていた。検出された細円礫は遺跡内の包含層からは出土しないため、他の場所から持ち込まれたものと考えられる。剥片集中・細円礫集中については焼土とともにその位置を記している。

S - 4 図IV-64、69-158-U区(生活面189)を調査中、F-52と同一面で軽石が多量に集中しているのを検出した。直径0.2m程の範囲に152点の軽石が集中していた。浅い掘り込みを確認した。S-7と同様の構造である。

S - 5 図IV-64、69-158-E区(生活面189)を調査中に158線のセクション面にかかる形で検出された。F-54の直上にあたる面である。掘り込みなどは確認できなかった。たたき石1点(S-5-1)・台石1点(S-5-2)・礫2点が出土している。

S - 6 図IV-34、67-158-E区(生活面135)を調査中に黒曜石の原石・フレイク等が集まって検出された。掘り込みなどは確認できなかった。石礫片2点・スクレイパー片1点・原石2点・フレイク48点が出土している。

S - 7 図IV-64、69-158-U区(生活面189)を調査中、F-48と同一面で軽石が多量に集中しているのを検出した。直径0.2m程の範囲に124点の軽石が集中していた。浅い掘り込みを確認した。S-4と同様の構造である。

S - 15 図IV-33・図版IV-16、67-158-A区⑤面(生活面134)を調査中にたたき石3点(S-15-1-3)・台石1点(S-15-4)が集まっているのが確認された。調査途中の雨による壁面崩落の影響で現位置から移動してしまった。

S - 16 図IV-64・図版IV-16、70-157-U区④面(生活面131)を調査中にたたき石3点(S-16-1-3)が集まっているのが確認された。周囲に掘り込みなどは確認されなかった。

S - 17 図IV-64・図版IV-16、70-157-E区⑤面(生活面134)を調査中にS-18と隣接してたたき石2点(S-17-1・2)・礫1点が集まっているのが確認された。周囲に掘り込みなどは確認されなかった。

S - 18 図IV-64・図版IV-16、70-157-E区⑤面(生活面134)を調査中にS-17と隣接して砥石1点(S-18-1)・たたき石1点(S-18-2)・台石1点(S-18-3)が集まっているのが確認された。周囲に掘り込みなどは確認されなかった。

S - 19 図IV-64・図版IV-16、66-143-U区①面(生活面52)を調査中に礫2点が集まっているのが確認された。周囲に掘り込みなどは確認されなかった。

S - 20 図IV-64・図版IV-16、66-147-I区③面(生活面96)を調査中に礫3点が集まっているのが確認された。周囲に掘り込みなどは確認されなかった。(酒井)

IV 遊構

表IV-1 生活面一覽

生活面	界線(北・東)界	面積 (20年上)	居住 (戸数)	H11 用途	主用途	現況(北・東)界	用途 (20年上)	備考 (20年上)	H11 用途
1	66-113-7①(1)~7②	2,242.2	未定	未定	55	66-142-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
2	66-117-7①(1)~7②	13.2	未定	未定	56	66-142-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
3	66-118-7①(1)~7②	13.2	未定	未定	57	66-142-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
4	66-128-7①(1)~7②	30.1	未定	未定	58	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
5	66-136-7①(1)~7②	30.1	未定	未定	57	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
6	66-131-7①(1)~7②	36.1	未定	未定	58	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
7	66-131-7③	39.2	未定	未定	59	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
8	66-133-7①(1)~7②	41	未定	未定	60	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
9	66-133-7③	45	未定	未定	61	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
10	66-134-7①(1)~7②	46.47間	未定	未定	62	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
11	66-133-7③(1)~7②	46.47間	未定	未定	63	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
12	66-134-7①(1)~7②	46.47間	未定	未定	64	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
13	66-134-7③	46.47間	未定	未定	65	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
14	66-134-7⑤	50.51間	未定	未定	66	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
15	66-135-7①(1)~7②	52.1	未定	未定	67	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
16	66-135-7③	56.2	未定	未定	68	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
17	66-136-7①(1)~7②	56.2	未定	未定	69	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
18	66-136-7③	56.2	未定	未定	70	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
19	66-136-7⑤	56.2	未定	未定	71	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
20	66-136-7⑦	56.2	未定	未定	72	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
21	66-137-7①(1)~7②	59.1・59.2	未定	未定	73	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
22	66-136-7⑨(1)~7②	59.1・59.2	未定	未定	74	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
23	66-137-7③(1)~7②	59.1・59.2	未定	未定	75	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
24	66-137-7⑤(1)~7②	60.2	未定	未定	76	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
25	66-138-7①(1)~7②	61	未定	未定	77	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
26	66-138-7③(1)~7②	61	未定	未定	78	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
27	66-138-7⑤(1)~7②	61	未定	未定	79	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
28	66-140-7①(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	80	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
29	66-140-7③(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	81	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
30	66-140-7⑤(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	82	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
31	66-140-7⑦(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	83	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
32	66-140-7⑨(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	84	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
33	66-140-7⑪(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	85	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
34	66-140-7⑬(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	86	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
35	66-140-7⑭(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	87	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
36	66-140-7⑮(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	88	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
37	66-140-7⑯(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	89	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
38	66-140-7⑰(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	90	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
39	66-140-7⑱(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	91	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
40	66-140-7⑲(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	92	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
41	66-140-7⑳(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	93	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
42	66-140-7㉑(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	94	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
43	66-140-7㉒(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	95	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
44	66-140-7㉓(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	96	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
45	66-140-7㉔(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	97	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
46	66-140-7㉕(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	98	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
47	66-140-7㉖(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	99	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
48	66-140-7㉗(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	100	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
49	66-140-7㉘(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	101	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
50	66-140-7㉙(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	102	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
51	66-140-7㉚(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	103	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
52	66-140-7㉛(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	104	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
53	66-140-7㉜(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定	105	66-143-7①(1)~7②	69.2・70間	未定	未定
54	66-140-7㉝(1)~7②	63.1・63.2	未定	未定					

表 IV-1 続き

今年度	発給区・姓上層	発行 (円・千)	納付 (円・千)	H11 財政率	生息額 累積元・取上額	発行 (円・千)	納付 (円・千)	H11 財政率	
106	65-108-1イ(平)700-4イ(0)	-	-	-	127	65-107-1イ(0)	-	18.1	
	65-108-1イ(0)700-4イ(0)66-109-1イ(0)66-109-7イ(0)上								
	65-109-7イ(0)上								
107	65-107-1イ(0)65-108-7イ(0)上	31.1	1.1	上	-	-	-	-	
	64-109-7イ(0)								
108	65-107-1イ(0)上	81.1	91.7	上	118	65-104-1イ(0)上	109.2	182.1	0.1
	65-107-1イ(0)上								
109	65-107-1イ(0)上	81.1	81.9	上	129	65-107-1イ(0)上	-	182.1	0.1
	65-107-1イ(0)上								
110	64-109-7イ(0)	85.1	1.4	上	-	-	-	-	
	64-109-7イ(0)上								
	65-109-7イ(0)上								
111	65-109-7イ(0)	98.1	99.2	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
112	65-109-7イ(0)	98.1	99.2	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
113	65-109-7イ(0)	98.1	99.2	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
114	65-109-7イ(0)	89.2	49.3	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
115	65-109-7イ(0)	91.1	91.4	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
116	65-109-7イ(0)	-	-	-	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
117	65-109-7イ(0)	-	82	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
118	65-109-7イ(0)	-	12.3	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
119	65-109-7イ(0)	-	13.1	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
120	65-109-7イ(0)	91.1	92.2	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
121	65-109-7イ(0)	-	18.2	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
122	65-109-7イ(0)	-	-	-	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
123	65-109-7イ(0)	103.7	186	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
124	65-109-7イ(0)	106.4	189	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
125	65-109-7イ(0)	103.7	189	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
126	65-109-7イ(0)	103.7	189	上	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
127	65-109-7イ(0)	-	-	-	-	-	-	-	
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								
	65-109-7イ(0)								

IV 遺構

表 IV-1 続き

生野南	発掘区・段上	層位 (段上)	層位 (段上)	III 相対層	生野南	発掘区・段上	層位 (段上)	層位 (段上)	III 相対層
145	66-115-1①	102.1	103	21.7	B2上	66-115-1①	-	23.1-24.1	B2上
	66-115-1②								
	66-115-1③								
	66-115-1④								
146	66-115-1⑤	102.1	103	21.9	B2上	66-115-1⑤	103.2	106.1	-
	66-115-1⑥								
	66-115-1⑦								
	66-115-1⑧								
147	66-115-1⑨	103.2	-	21.0	B2上	66-115-1⑨	106.1	24.1-25.1	B2上
	66-115-1⑩								
	66-115-1⑪								
	66-115-1⑫								
148	66-115-1⑬	-	-	21.1	B2上	66-115-1⑬	-	-	-
	66-115-1⑭								
149	66-115-1⑮	103.2	-	21.4	B2上	66-115-1⑮	106.1	24.1-25.1	B2上
	66-115-1⑯								
	66-115-1⑰								
	66-115-1⑱								
150	66-115-1⑲	103.2	-	21.4	B2上	66-115-1⑲	106.1	25.1-26.0	B2上
	66-115-1⑳								
	66-115-1㉑								
	66-115-1㉒								
151	66-115-1㉓	103.2	-	22.2	B2上	66-115-1㉓	109.0	26.0	B2上
	66-115-1㉔								
	66-115-1㉕								
	66-115-1㉖								
152	66-115-1㉗	103.2	-	22.2	B2上	66-115-1㉗	109.0	26.0-27.1	B2上
	66-115-1㉘								
	66-115-1㉙								
	66-115-1㉚								
153	66-115-1㉛	103.2	-	22.2	B2上	66-115-1㉛	108.1	27.1-28.1	B2上
	66-115-1㉜								
	66-115-1㉝								
	66-115-1㉞								
154	66-115-1㉟	104.5	-	22.3	B2上	66-115-1㉟	-	28.1-28.2	B2上
	66-115-1㊱								
	66-115-1㊲								
	66-115-1㊳								
155	66-115-1㊴	104.5	-	22.2	B2上	66-115-1㊴	108.1	28.1-30.1	B2上
	66-115-1㊵								
	66-115-1㊶								
	66-115-1㊷								
156	66-115-1㊸	104.2	-	22.8-23.0	B2上	66-115-1㊸	111.1	30.2-31.0	B2上
	66-115-1㊹								
	66-115-1㊺								
	66-115-1㊻								
157	66-115-1㊼	104.1	-	23.0-23.2	B2上	66-115-1㊼	119.0	31.1-35.0	B2上
	66-115-1㊽								
	66-115-1㊾								
	66-115-1㊿								
158	66-115-1㋀	103.1	-	23.1-24.1	B2上	66-115-1㋀	119.0	34.7-36.1	B2上
	66-115-1㋁								
	66-115-1㋂								
	66-115-1㋃								
159	66-115-1㋄	103.1	-	23.1-24.1	B2上	66-115-1㋄	-	-	-
	66-115-1㋅								
	66-115-1㋆								
	66-115-1㋇								
160	66-115-1㋈	103.1	-	23.1-24.1	B2上	66-115-1㋈	-	-	-
	66-115-1㋉								
	66-115-1㋊								
	66-115-1㋋								

IV 遺構

表 IV-1 続き

主屋番号	発掘区・棟上表	層高 (07棟上)	幅高 (09棟上)	H11 対称層	主屋番号	発掘区・棟上表	層高 (07棟上)	幅高 (09棟上)	H11 対称層
218	64-136-1イ①	1220-1300 間	430-435間	B2-中F	234	60-136-1イ①	1370	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ②					60-136-1イ②			
	64-136-1イ③					61-136-1イ③			
	64-136-1イ④					62-136-1イ④			
	64-136-1イ⑤					63-136-1イ⑤			
219	64-136-1イ⑥	1260	430	B2-中F	235	64-136-1イ⑥	1380	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ⑦					64-136-1イ⑦			
220	64-136-1イ⑧	-	472-500 間	B2-中F	236	64-136-1イ⑧	510-535間	B2-中F	
	64-136-1イ⑨					64-136-1イ⑨			
221	64-136-1イ⑩	-	472-500 間	B2-中F	237	64-136-1イ⑩	1330+	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ⑪					64-136-1イ⑪			
222	64-136-1イ⑫	-	472-500 間	B2-中F	238	64-136-1イ⑫	1412間	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ⑬					64-136-1イ⑬			
223	64-136-1イ⑭	1300	472-500 間	B2-中F	239	64-136-1イ⑭	1380+	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ⑮					64-136-1イ⑮			
	64-136-1イ⑯					64-136-1イ⑯			
	64-136-1イ⑰					64-136-1イ⑰			
	64-136-1イ⑱					64-136-1イ⑱			
224	64-136-1イ⑲	1300+	500-510間	B2-中F	240	64-136-1イ⑲	1330+	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ⑳					64-136-1イ⑲			
	64-136-1イ㉑					64-136-1イ⑲			
225	64-136-1イ㉒	1300+	300-330間	B2-中F	241	64-136-1イ㉒	1412+	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ㉓					64-136-1イ㉒			
	64-136-1イ㉔					64-136-1イ㉒			
	64-136-1イ㉕					64-136-1イ㉒			
	64-136-1イ㉖					64-136-1イ㉒			
226	64-136-1イ㉗	1320+1340 間	320-370間	B2-中F	242	64-136-1イ㉗	1412+	-	B2-中F
	64-136-1イ㉘					64-136-1イ㉗			
	64-136-1イ㉙					64-136-1イ㉗			
	64-136-1イ㉚					64-136-1イ㉗			
	64-136-1イ㉛					64-136-1イ㉗			
227	64-136-1イ㉜	1320+1340 間	320-370間	B2-中F	243	64-136-1イ㉜	1412+	-	B2-中F
	64-136-1イ㉝					64-136-1イ㉜			
	64-136-1イ㉞					64-136-1イ㉜			
228	64-136-1イ㉟	1320+1340 間	320-370間	B2-中F	244	64-136-1イ㉟	1413+	-	B2-中F
	64-136-1イ㊱					64-136-1イ㉟			
229	64-136-1イ㊲	-	320-370間	B2-中F	245	64-136-1イ㊲	1413+	610-635間	B2-中F
	64-136-1イ㊳					64-136-1イ㊲			
230	64-136-1イ㊴	1320+1340 間	320-370間	B2-中F	246	64-136-1イ㊴	1413+	-	B2-中F
	64-136-1イ㊵					64-136-1イ㊴			
	64-136-1イ㊶					64-136-1イ㊴			
	64-136-1イ㊷					64-136-1イ㊴			
	64-136-1イ㊸					64-136-1イ㊴			
231	64-136-1イ㊹	1320+1340 間	320-370間	B2-中F	247	64-136-1イ㊹	1413+	-	B2-中F
	64-136-1イ㊺					64-136-1イ㊹			
232	64-136-1イ㊻	-	320-370間	B2-中F	248	64-136-1イ㊻	1413+	-	B2-中F
	64-136-1イ㊼					64-136-1イ㊻			
233	64-136-1イ㊽	1300	-	B2-中F	249	64-136-1イ㊽	1413+	-	B2-中F
	64-136-1イ㊾					64-136-1イ㊽			
234	64-136-1イ㊿	1320	610-635間	B2-中F	250	64-136-1イ㊿	1413+	-	B2-中F
	64-136-1イ①					64-136-1イ㊿			
	64-136-1イ②					64-136-1イ㊿			
	64-136-1イ③					64-136-1イ㊿			
	64-136-1イ④					64-136-1イ㊿			

表 IV-2 遺構一覧

遺構ID	遺構名	位置	上層(遺り+幅)/下層(遺り+幅)の長さ(m)	内輪外輪	形状	説明備考	備考
遺IV-2 P-1	50134-2		0.144(3)×0.224(2)×0.15		凹型内側	遺構 IV-1	
遺IV-2 P-3	67138-1/2		0.40×0.20(2)×0.40(2)×0.20(2)×0.18(2)	84°	溝内側		
遺IV-2 P-4	67138-1/266138-E		-	-	溝内側		
遺IV-2 P-5	66138-2		0.26(2)×0.24(2)×0.14(2)	87°	溝内側		
遺IV-2 P-6	65138-2/66138-E		0.26(2)×0.40(2)×0.16(2)×0.10(2)		凹型内側		
遺IV-2 P-7	67138-2		0.40(2)×0.30(2)×0.20(2)×0.16		凹型内側		
遺IV-2 P-8	67138-2		0.38(2)×0.30(2)×0.20(2)×0.14		凹型内側		
遺IV-2 P-9	70137-2		0.24(2)×0.22(2)×0.10(2)×0.06		円形	遺構 IV-1	P-201 を参照
遺IV-2 P-27	68138-2/69137-7/F		0.28(2)×0.46(2)×0.40(2)×0.24(2)		不明	溝内側	P-295 を参照
遺IV-2 P-28	70138-2		0.26(2)×0.26(2)×0.14(2)×0.07		凹型内側	遺構 IV-1	
遺IV-2 P-29	67138-2		0.40×0.30(2)×0.24(2)×0.14	N 9°	溝内側		
遺IV-3 P-30	69138-2		0.36(2)×0.30(2)×0.44(2)×0.46		凹型内側	遺構 IV-1	P-279、611 を参照 P-281、612 を参照 P-282、613 を参照
遺IV-3 P-31	69138-2/F		0.64(2)×0.52(2)×0.42(2)		凹型内側		
遺IV-3 P-32	68138-1/F		0.22(2)×0.22(2)×0.14(2)×0.12		凹型内側		P-611、612 を参照
遺IV-3 P-33	69138-2		0.22(2)×0.20(2)×0.14(2)×0.12	84°	溝内側		P-379、612 を参照
遺IV-3 P-34	66138-2/68137-F		0.30(2)×0.26(2)×0.14(2)×0.10		円形	遺構 IV-2	P-375 を参照
遺IV-3 P-35	68138-2		0.40(2)×0.32(2)×0.24(2)×0.15		凹型内側	遺構 IV-1	P-384 を参照
遺IV-3 P-36	69137-F		0.30(2)×0.26(2)×0.14(2)×0.11	N 87°	溝内側		
遺IV-4 P-37	67138-2/68138-E		0.30(2)×0.22(2)×0.16(2)×0.13		不明	遺構 IV-1	
遺IV-4 P-38	68138-2		0.14(2)×0.40(2)×0.34(2)×0.30		円形	遺構 IV-2	P-30 に遺りがあるが、1層を参照
遺IV-4 P-39	68138-2		0.66(2)×0.58(2)×0.42(2)×0.40		凹型内側	遺構 IV-2	
遺IV-4 P-40	68138-2		0.64(2)×0.54(2)×0.24(2)×0.21		凹型内側	遺構 IV-2	P-611、612 を参照
遺IV-4 P-41	66138-E		0.72(2)×0.50(2)×0.42(2)×0.38		凹型内側	遺構 IV-2	P-609 の遺り物と推定
遺IV-4 P-42	65138-2		0.72(2)×0.50(2)×0.42(2)×0.38		凹型内側	遺構 IV-2	P-609 の遺り物と推定
遺IV-5 P-43	66138-E		0.64(2)×0.40(2)×0.42(2)×0.40		凹型内側		
遺IV-5 P-44	63138-2		1.12(2)×0.78(2)×0.64(2)×0.58		円形		
遺IV-5 P-45	65138-F		0.80(2)×0.60(2)×0.40(2)×0.22		円形		
遺IV-5 P-46	66138-F		0.84(2)×0.52(2)×0.44(2)×0.38		円形		
遺IV-6 P-47	65138-1/F		0.24(2)×0.20(2)×0.10(2)×0.06		円形		P-512 を参照
遺IV-6 P-48	66138-1/F		0.36(2)×0.32(2)×0.16(2)×0.12		円形	遺構 IV-3	
遺IV-6 P-49	67138-F		0.24(2)×0.20(2)×0.10(2)×0.06		不明	遺構 IV-3	P-490 を参照
遺IV-6 P-50	68138-1/E		0.66(2)×0.58(2)×0.42(2)×0.40		不明		P-448 を参照 P-513 を参照
遺IV-6 P-51	67138-F		0.28(2)×0.24(2)×0.14(2)×0.11		凹型内側		
遺IV-6 P-52	68137-E		0.40(2)×0.30(2)×0.24(2)×0.16		円形		
遺IV-6 P-53	66137-2/248138-F/F		0.80(2)×0.60(2)×0.32(2)×0.22	N 20°	溝内側		
遺IV-6 P-54	66138-1		0.24(2)×0.20(2)×0.10(2)×0.06	84°	溝内側		
遺IV-6 P-55	67138-2		0.24(2)×0.20(2)×0.10(2)×0.06		凹型内側		
遺IV-6 P-56	67138-2		0.24(2)×0.20(2)×0.10(2)×0.06		凹型内側		
遺IV-6 P-57	67138-2/68138-F		0.70(2)×0.46(2)×0.34(2)×0.28	N 21°	溝内側		
遺IV-6 P-58	68138-2		-	-	不明		
遺IV-6 P-59	70137-2/70138-F		0.44(2)×0.36(2)×0.26(2)×0.20		凹型内側		
遺IV-7 P-60	66138-F		0.43(2)×0.30(2)×0.20(2)×0.13		凹型内側		
遺IV-7 P-61	69138-F		0.33(2)×0.24(2)×0.16(2)×0.10		凹型内側		
遺IV-7 P-62	63138-F		0.44(2)×0.32(2)×0.24(2)×0.20	N 36°	溝内側		P-477、488 を参照 P-485 を参照
遺IV-7 P-63	67138-1/68138-F		0.60(2)×0.40(2)×0.30(2)×0.24	N 47°	溝内側	遺構 IV-3	
遺IV-7 P-64	68137-F		0.62(2)×0.38(2)×0.28(2)×0.20		円形		
遺IV-7 P-65	67138-F		0.34(2)×0.26(2)×0.16(2)×0.10		円形		P-62、F-488 を参照
遺IV-7 P-66	65138-1/68138-F		0.22(2)×0.16(2)×0.10(2)×0.06	N 26°	溝内側		
遺IV-7 P-67	65138-F		0.70(2)×0.40(2)×0.30(2)×0.24	N 20°	溝内側	遺構 IV-3	
遺IV-7 P-68	69138-F		0.76(2)×0.48(2)×0.34(2)×0.28	N 46°	溝内側		P-482 を参照
遺IV-7 P-69	67138-2/68137-F		0.30(2)×0.24(2)×0.14(2)×0.10		円形		
遺IV-8 P-70	69138-F		0.80(2)×0.60(2)×0.30(2)×0.24		凹型内側		
遺IV-8 P-71	67138-1/68138-2		0.81(2)×0.54(2)×0.35(2)×0.24	N 24°	溝内側	遺構 IV-3	
遺IV-8 P-72	68138-2		0.22(2)×0.16(2)×0.10(2)×0.06		凹型内側		
遺IV-8 P-73	66138-F		0.38(2)×0.28(2)×0.20(2)×0.13		凹型内側		
遺IV-8 P-74	69138-1/68138-F		0.50(2)×0.40(2)×0.30(2)×0.24		凹型内側		
遺IV-8 P-75	67138-F		0.67(2)×0.44(2)×0.34(2)×0.27	N 28°	溝内側		
遺IV-8 P-76	69138-2/68138-1/68138-2		0.80(2)×0.60(2)×0.30(2)×0.24		円形		
遺IV-8 P-77	68138-F		0.81(2)×0.54(2)×0.35(2)×0.24	N 45°	溝内側		P-338、530 を参照
遺IV-8 P-78	69138-2		0.66(2)×0.42(2)×0.30(2)×0.24	N 72°	溝内側		P-30、6379 を参照
遺IV-8 P-79	66138-1/68138-2		0.80(2)×0.60(2)×0.30(2)×0.24		不明		F-420 を参照
遺IV-8 P-80	65137-2/F		1.34(2)×0.90(2)×0.54(2)×0.38	N 49°	溝内側		
遺IV-8 P-81	65137-F		0.87(2)×0.60(2)×0.40(2)×0.34	N 20°	溝内側		付設の超円遺構を参照
遺IV-8 P-82	68138-2/68137-F		0.58(2)×0.40(2)×0.30(2)×0.24		円形		P-345、546 を参照
遺IV-8 P-83	69138-1/F		0.47(2)×0.36(2)×0.26(2)×0.20		凹型内側		
遺IV-8 P-84	66138-2		0.64(2)×0.50(2)×0.30(2)×0.24		凹型内側		
遺IV-9 P-85	65138-2/E		1.42(2)×0.94(2)×0.54(2)×0.38		不明		
遺IV-9 P-86	65138-2		0.84(2)×0.60(2)×0.40(2)×0.34	N 29°	溝内側		
遺IV-9 P-87	68138-E		1.04(2)×0.60(2)×0.50(2)×0.38	N 16°	溝内側		
遺IV-9 P-88	70138-1/F		0.24(2)×0.20(2)×0.10(2)×0.06	N 10°	溝内側		P-578、609 を参照
遺IV-9 P-89	70138-2		0.24(2)×0.20(2)×0.10(2)×0.06		凹型内側		P-607 を参照
遺IV-9 P-90	68138-F		-	-	不明		
遺IV-9 P-91	67138-F		0.70(2)×0.40(2)×0.30(2)×0.24		円形		
遺IV-9 P-92	68138-F		0.39(2)×0.28(2)×0.20(2)×0.13		凹型内側		P-615 を参照

表 IV-2 続き

品名	遺物名	位置	土層(柱上4層)の層(柱上)の層(柱上)の層(柱上)	長軸方向	方位	調査番号	備考
遺物 10	P-93	66-156-7の156-E	66.763 × 33.732	55-40 × 245.94	不明		F-408 全埋る
遺物 10	P-94	66-156-7	66.654 × 34.855	66.654 × 34.855	不明		F-420 全埋る
遺物 10	P-95	66-156-7	1.16 × 1.069	30.6 × 46.0	不明		
遺物 11	P-96	66-153-1	6.66 × 0.565	26.0 × 34.0	N-77° E		埋れる
遺物 11	P-97	66-153-1	6.62 × 0.460	32.0 × 25.0	N-77° E		埋れる
遺物 11	P-98	66-153-1	6.59 × 0.469	32.0 × 25.0	N-77° E		埋れる
遺物 12	P-99	66-156-7	6.76 × 0.609	34.0 × 34.0	N-41° E		埋れる
遺物 11	P-100	66-153-1	6.34 × 0.265	34.0 × 16.0	不明		
遺物 12	P-101	66-156-7	6.55 × 0.455	30.0 × 30.0	N-43° E		埋れる
遺物 12	P-102	66-156-7	6.55 × 0.661	34.0 × 32.0	不明		
遺物 11	P-103	66-156-7	6.54 × 0.561	34.0 × 30.0	N-43° W		埋れる
遺物 12	P-124	66-156-7のアイソグ	1.02 × 0.380	57.0 × 49.0	N-78° W		埋れる
遺物 11	P-105	66-156-7	6.51 × 0.465	34.0 × 30.0	N-43° W		埋れる
遺物 12	P-106	66-156-7	→ 6.72 × 0.360	→ 42.0	N-42° E		埋れる
遺物 11	P-107	66-156-7	6.94 × 0.647	42.0 × 33.0	不明		
遺物 12	P-108	66-157-1	6.72 × 0.685	36.0 × 34.0	不明		
遺物 12	P-109	66-156-7	6.56 × 0.561	34.0 × 34.0	不明		
遺物 12	P-110	66-154-7	6.26 × 0.460	36.0 × 34.0	不明		
遺物 12	P-111	66-157-1	6.63 × 0.496	32.0 × 25.0	不明		
遺物 12	P-112	66-156-7	6.98 × 0.549	32.0 × 36.0	不明		
遺物 12	P-113	66-156-7	→ アイソグ (埋れる)	→ アイソグ (埋れる)	不明		
遺物 12	P-114	66-156-7の157-1	6.55 × 0.460	34.0 × 32.0	不明		F-712 全埋る
遺物 13	P-115	66-156-7	1.23 × 0.536	34.0 × 30.0	不明		F-709 全埋る
遺物 43	P-116	66-156-7	6.53 × 0.536	32.0 × 27.0	不明		
遺物 13	P-117	66-156-7	6.48 × 0.460	36.0 × 36.0	不明		
遺物 13	P-118	66-156-7	6.45 × 0.420	→ 40.0	不明		
遺物 43	P-119	66-155-7	6.56 × 0.505	28.0 × 34.0	不明		
遺物 23	P-120	66-156-7	1.28 × 1.020	92.0 × 73.0	N-71° E		埋れる
遺物 34	P-121	66-157-1の埋れる	0.60 × 0.417	34.0 × 30.0	不明		
遺物 14	P-122	66-156-7	6.92 × 0.620	34.0 × 44.0	N-27° E		埋れる
遺物 14	P-123	66-156-7の埋れる	6.54 × 0.610	36.0 × 46.0	不明		埋れる
遺物 14	P-124	66-157-1の埋れる	6.10 × 0.420	→ 32.0	不明		
遺物 14	P-125	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		F-712 埋れる
遺物 14	P-126	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		F-712 埋れる
遺物 14	P-127	66-157-1	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		F-712 埋れる
遺物 14	P-128	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		F-712 埋れる
遺物 14	P-129	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		F-712 埋れる
遺物 14	P-130	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		F-712 埋れる
遺物 15	P-131	66-157-1	6.60 × 0.565	30.0 × 34.0	不明		
遺物 15	P-132	66-157-1	6.54 × 0.460	32.0 × 30.0	不明		
遺物 15	P-133	66-157-1	6.54 × 0.460	32.0 × 30.0	不明		
遺物 15	P-134	66-157-1	6.54 × 0.460	32.0 × 30.0	不明		
遺物 15	P-135	66-157-1	6.54 × 0.460	32.0 × 30.0	不明		
遺物 14	P-136	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		F-712 埋れる
遺物 16	P-137	66-157-1	6.60 × 0.565	30.0 × 34.0	不明		
遺物 17	P-138	66-141-1	1.76 × 1.381	88.0 × 69.0	不明		
遺物 17	P-139	66-141-1	1.308 × 1.120	67.0 × 52.0	不明		
遺物 17	P-140	66-141-1	1.02 × 0.620	44.0 × 30.0	不明		
遺物 17	P-141	66-141-1	1.05 × 0.605	44.0 × 30.0	不明		
遺物 16	P-142	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 16	P-143	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 16	P-144	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 16	P-145	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 16	P-146	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 16	P-147	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 16	P-148	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 16	P-149	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		
遺物 17	P-150	66-148-7	→ アイソグ (埋れる)	→ アイソグ (埋れる)	不明		
遺物 17	P-151	66-148-7	→ アイソグ (埋れる)	→ アイソグ (埋れる)	不明		
遺物 16	P-152	66-156-7	6.56 × 0.669	44.0 × 32.0	不明		

備考

遺物名	遺物名	位置	方位	調査番号	備考
遺物 10	P-12	66-156-7	不明		不明
遺物 10	P-73	66-156-7	不明		不明
遺物 10	P-77	66-156-7	不明		不明
遺物 10	P-81	66-156-7	不明		不明
遺物 25	P-34	66-156-7	不明		不明
遺物 25	P-35	66-156-7	不明		不明
遺物 26	P-36	66-156-7	不明		不明
遺物 26	P-40	66-156-7	不明		不明
遺物 30	P-41	66-156-7	不明		不明
遺物 30	P-42	66-156-7	不明		不明
遺物 30	P-43	66-156-7	不明		不明
遺物 34	P-44	66-156-7	不明		不明

表IV-2 続き

国庫ID	番付	品名	位置	中目	現地集約内容	注	備考
国IV-30	F-45	132	66-136-エ	宛地		○	
国IV-30	F-46	213	66-136-ア宛エ	宛地		○	
国IV-30	F-47	194	66-136-イ宛ウ	宛地	香川・ペンダウ	○	
国IV-29	F-48	189	66-136-イ宛ウ	宛地		○	
国IV-30	F-50	132	67-158-ウ	宛地	香川・タルミ	○	14C年代測定(国11)
国IV-31	F-51	195	70-158-エ	宛地	香川	○	
国IV-29	F-52	149	66-158-ウ(70-158-エ)	宛地	香川	○	
国IV-31	F-53	195	70-158-エ	宛地	香川	○	
国IV-30	F-54	194	66-158-ア宛エ	宛地	香川	○	
国IV-28	F-55	189	66-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-30	F-57	132	66-158-ア宛エ(1)	宛地	香川	○	
国IV-28	F-58	189	67-158-ウ(66-158-エ)	宛地	香川・高化タカミ	○	14C年代測定(国11)
国IV-31	F-59	195	70-158-ウ	宛地	香川	x	
国IV-30	F-60	193	66-158-ウ(70-158-エ)	宛地	香川	○	
国IV-32	F-61	193	67-158-ウ	宛地	x		
国IV-30	F-62	193	67-158-ウ(66-158-エ)	宛地	高化タカミ	○	
国IV-30	F-63	189	66-158-ウ(エ)	宛地	高化タカミ	○	
国IV-36	F-68	213	66-158-ウ(エ)	宛地		○	
国IV-30	F-69	193	67-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-30	F-70	193	66-158-エ	宛地	高化タカミ	○	
国IV-30	F-71	193	66-158-エ	宛地	香川	○	
国IV-28	F-75	189	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-30	F-74	194	66-158-ア宛エ(ウ)	宛地	香川	○	
国IV-30	F-75	194	67-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-30	F-76	194	66-158-エ	宛地	香川	○	
国IV-35	F-77	211	66-158-エ	宛地	香川	○	
国IV-31	F-78	195	66-158-ウ(ウ)	宛地	香川・高化タカミ	○	
国IV-31	F-79	195	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-30	F-80	213	66-158-ア宛エ	宛地	香川	○	小ピット1基
国IV-30	F-81	194	66-158-ウ(エ)	宛地	x		
国IV-30	F-82	193	66-158-ア宛エ(ウ)	宛地		○	
国IV-28	F-83	189	65-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-28	F-84	189	66-158-エ	宛地		○	
国IV-30	F-85	213	66-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-37	F-86	214	66-158-ウ(66-158-エ)	宛地	香川	○	
国IV-37	F-87	220	70-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-31	F-88	195	67-158-ウ	宛地		○	
国IV-30	F-89	194	66-158-ウ(66-158-エ)	宛地	高化タカミ	○	
国IV-31	F-90	195	67-158-ウ	宛地		○	
国IV-31	F-91	195	67-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-35	F-92	211	66-158-ウ(エ)	宛地	香川	○	
国IV-31	F-93	195	67-158-ウ	宛地	高化タカミ	○	
国IV-31	F-94	195	66-158-エ	宛地	香川	○	
国IV-37	F-95	214	66-158-ウ(エ)	宛地	香川	○	
国IV-37	F-96	214	66-158-ア宛エ(ウ)	宛地	香川	○	
国IV-37	F-97	220	70-158-ウ	宛地	香川	○	F-92とつながる
国IV-30	F-98	213	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-37	F-99	214	66-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-35	F-100	211	66-158-ア宛エ	宛地	香川	○	
国IV-30	F-102	194	66-158-ウ	宛地	高化タカミ	○	
国IV-30	F-103	194	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-35	F-104	211	66-158-エ	宛地	高化タカミ	○	
国IV-35	F-105	211	66-158-ア宛エ	宛地	香川・高化タカミ	○	
国IV-35	F-106	211	66-158-イ宛ウ(66-158-ア宛エ)	宛地	高化タカミ	○	F-97とつながっている
国IV-35	F-107	211	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-30	F-108	194	67-158-ウ	宛地		○	
国IV-35	F-109	211	66-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-35	F-110	211	67-158-エ	宛地	香川	○	
国IV-30	F-111	193	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-30	F-112	194	66-158-ウ	宛地	x		
国IV-30	F-113	194	67-158-イ宛ウ	宛地	香川	○	
国IV-30	F-114	194	66-158-イ宛ウ	宛地	香川	○	
国IV-22	F-115	211	67-158-ア宛エ(ウ)	宛地		○	
国IV-31	F-116	211	67-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-36	F-117	213	66-158-ウ	宛地	香川	○	
国IV-35	F-118	211	66-158-ウ(66-158-ア宛エ)	宛地		○	
国IV-35	F-119	211	66-158-ウ(66-158-ア宛エ)	宛地		○	
国IV-35	F-120	211	66-158-ウ(66-158-ア)	宛地	香川・高化タカミ	○	F-97とつながる1基(14C年代測定(国11))
国IV-35	F-121	211	66-158-ウ(エ)	宛地		○	
国IV-35	F-122	211	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-37	F-123	214	66-158-ア宛エ	宛地		○	
国IV-31	F-125	211	66-158-ウ	宛地		○	
国IV-37	F-126	214	66-158-ウ(エ)	宛地	香川	○	
国IV-37	F-127	214	66-158-ウ(エ)	宛地	香川	○	
国IV-37	F-128	213	66-158-ウ(エ)	宛地	香川	○	

表 IV-2 続き

遺構番号	遺構名	北経度	東経度	分類	現地調査内容	70-1-012	備考
遺 IV-27	F-135	40	53-142-47	礎石	1.66-145.7(2)①		
遺 IV-28	F-141	132	70-135-7①	瓦葺			
遺 IV-28	F-142	133	66-135-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-28	F-143	133	66-136-7①	瓦葺			
遺 IV-30	F-144	136	67-135-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-145	138	67-136-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-37	F-156	138	66-151-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-39	F-167	125	63-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-39	F-168	124	66-156-7②	瓦葺			
遺 IV-39	F-169	125	70-155-7②	瓦葺			
遺 IV-39	F-170	128	66-156-7①	瓦葺			
遺 IV-39	F-171	127	66-156-7②	瓦葺			
遺 IV-39	F-172	125	66-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-233	124	69-137-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-234	126	66-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-235	126	67-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-39	F-236	125	65-156-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-237	130	65-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-238	128	70-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-239	130	65-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-240	130	66-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-241	125	67-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-242	129	70-157-7②	瓦葺			
遺 IV-32	F-243	131	67-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-31	F-244	128	66-155-7②	瓦葺			
遺 IV-30	F-245	128	68-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-246	128	69-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-25	F-247	131	67-158-7②	瓦葺			
遺 IV-30	F-248	130	65-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-30	F-249	130	65-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-39	F-290	125	67-156-7②	瓦葺			
遺 IV-29	F-291	125	67-156-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-32	F-292	130	69-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-31	F-293	129	66-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-31	F-294	128	68-156-7②	瓦葺			
遺 IV-31	F-295	128	69-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-36	F-296	129	67-155-7②	瓦葺			
遺 IV-28	F-297	123	68-157-7②	瓦葺			
遺 IV-36	F-298	130	67-156-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-36	F-299	130	69-157-7②	瓦葺			
遺 IV-28	F-300	129	65-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-31	F-301	128	67-156-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-31	F-302	128	68-156-7②	瓦葺			
遺 IV-31	F-303	128	67-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-33	F-304	135	65-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-32	F-305	130	70-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-31	F-306	128	69-155-7(2)②	瓦葺			
F-307	土庫						
遺 IV-31	F-308	128	69-157-7②	瓦葺			
遺 IV-30	F-309	128	69-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-35	F-310	142	65-154-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-35	F-311	142	65-153-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-31	F-312	128	67-156-7②	瓦葺			
遺 IV-27	F-313	126	66-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-32	F-314	132	67-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-27	F-315	126	65-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-21	F-316	128	66-156-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-28	F-317	124	67-155-7②	瓦葺			
遺 IV-28	F-318	125	67-155-7②	瓦葺			
遺 IV-37	F-319	130	70-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-37	F-320	133	70-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-37	F-321	130	70-155-7②	瓦葺			
遺 IV-28	F-322	129	65-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-28	F-323	129	66-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-32	F-324	130	70-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-36	F-325	130	67-154-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-38	F-326	135	68-155-7②	瓦葺			
遺 IV-33	F-327	131	66-155-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-33	F-328	131	67-156-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-33	F-329	134	65-158-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-33	F-330	131	68-154-7②	瓦葺			
遺 IV-33	F-331	131	68-155-7②	瓦葺			
遺 IV-32	F-332	130	69-157-7②	瓦葺			
遺 IV-27	F-333	124	68-157-7(2)②	瓦葺			
遺 IV-32	F-334	130	69-157-7②	瓦葺			

表 IV-2 続き

西暦年	通帳番号	金額	記号	記号	取立内容	注(1)-(3)	備考
昭和17	F-135	192	68-155-7①		取立		○
昭和17	F-136	129	68-155-7②		取立		○
昭和17	F-137	188	68-155-7③		取立		○
昭和17	F-138	135	68-155-7④		取立		○
昭和17	F-139	198	68-155-7⑤		取立		○
昭和17	F-140	133	70-158-7①		取立		○
昭和17	F-141	133	70-158-7②		取立		○
昭和17	F-142	190	68-155-7⑥		取立		○
昭和17	F-143	134	67-156-7①		取立		○
昭和18	F-144	154	69-155-7①		取立		○
昭和18	F-145	153	69-154-7①		取立		○
昭和18	F-146	190	66-154-7①		取立		○
昭和18	F-147	189	66-155-7①		取立		○
昭和18	F-148	134	67-158-7①		取立		○
昭和18	F-149	189	66-157-7①		取立		○
昭和18	F-150	142	66-155-7②		取立		○
昭和18	F-151	181	65-156-7①		取立		○
昭和18	F-152	134	70-157-7①		取立		○
昭和18	F-153	186	67-158-7②		取立		○
昭和18	F-154	134	70-157-7②		取立		○
昭和18	F-155	138	68-157-7①		取立		○
昭和18	F-156	195	65-157-7②		取立		○
昭和18	F-157	190	65-157-7③		取立		○
昭和18	F-158	131	69-157-7①		取立		○
昭和18	F-159	134	69-157-7②		取立		○
昭和18	F-160	193	66-154-7②		取立		○
昭和18	F-161	151	67-154-7①		取立		○
昭和18	F-162	153	65-154-7①		取立		○
昭和18	F-163	133	65-154-7②		取立		○
昭和18	F-164	133	70-157-7③		取立		○
昭和18	F-165	134	69-157-7②		取立		○
昭和18	F-166	133	70-157-7④		取立		○
昭和18	F-167	134	69-157-7③		取立		○
昭和18	F-168	128	69-156-7①		取立		○
昭和18	F-169	134	68-157-7③		取立		○
昭和18	F-170	128	69-155-7①		取立		○
昭和18	F-171	134	67-157-7①		取立		○
昭和18	F-172	131	69-157-7②		取立		○
昭和18	F-173	134	69-157-7③		取立		○
昭和18	F-174	131	69-157-7④		取立		○
昭和18	F-175	131	69-157-7⑤		取立		○
昭和18	F-176	131	69-157-7⑥		取立		○
昭和18	F-177	131	69-157-7⑦		取立		○
昭和18	F-178	131	69-157-7⑧		取立		○
昭和18	F-179	131	69-157-7⑨		取立		○
昭和18	F-180	131	69-157-7⑩		取立		○
昭和18	F-181	131	69-157-7⑪		取立		○
昭和18	F-182	131	69-157-7⑫		取立		○
昭和18	F-183	131	69-157-7⑬		取立		○
昭和18	F-184	131	69-157-7⑭		取立		○
昭和18	F-185	131	69-157-7⑮		取立		○
昭和18	F-186	131	69-157-7⑯		取立		○
昭和18	F-187	131	69-157-7⑰		取立		○
昭和18	F-188	131	69-157-7⑱		取立		○
昭和18	F-189	131	69-157-7⑲		取立		○
昭和18	F-190	131	69-157-7⑳		取立		○
昭和18	F-191	131	69-157-7㉑		取立		○
昭和18	F-192	131	69-157-7㉒		取立		○
昭和18	F-193	131	69-157-7㉓		取立		○
昭和18	F-194	131	69-157-7㉔		取立		○
昭和18	F-195	131	69-157-7㉕		取立		○
昭和18	F-196	131	69-157-7㉖		取立		○
昭和18	F-197	131	69-157-7㉗		取立		○
昭和18	F-198	131	69-157-7㉘		取立		○
昭和18	F-199	131	69-157-7㉙		取立		○
昭和18	F-200	131	69-157-7㉚		取立		○
昭和18	F-201	131	69-157-7㉛		取立		○
昭和18	F-202	131	69-157-7㉜		取立		○
昭和18	F-203	131	69-157-7㉝		取立		○
昭和18	F-204	131	69-157-7㉞		取立		○
昭和18	F-205	131	69-157-7㉟		取立		○
昭和18	F-206	131	69-157-7㊱		取立		○
昭和18	F-207	131	69-157-7㊲		取立		○
昭和18	F-208	131	69-157-7㊳		取立		○
昭和18	F-209	131	69-157-7㊴		取立		○
昭和18	F-210	131	69-157-7㊵		取立		○
昭和18	F-211	131	69-157-7㊶		取立		○
昭和18	F-212	131	69-157-7㊷		取立		○
昭和18	F-213	131	69-157-7㊸		取立		○
昭和18	F-214	131	69-157-7㊹		取立		○
昭和18	F-215	131	69-157-7㊺		取立		○
昭和18	F-216	131	69-157-7㊻		取立		○
昭和18	F-217	131	69-157-7㊼		取立		○
昭和18	F-218	131	69-157-7㊽		取立		○
昭和18	F-219	131	69-157-7㊾		取立		○
昭和18	F-220	131	69-157-7㊿		取立		○

IV 遺構

表 IV-2 続表

遺構番号	遺構名称	坐落位置	分類	現地調査の有無	2017-2022	備考
遺 IV-24	F-410	166 70-154-7(7)70-155-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-25	F-411	169 70-155-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-26	F-412	166 66-154-7(7)67-1(1)67-2(2)	瓦葺	○		
遺 IV-27	F-413	131 70-157-1(1)70-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-30	F-414	184 69-158-1(1)69-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-22	F-415	162 65-154-9(9)65-155-1(1)65-156(154,3,3)	瓦葺	○		
遺 IV-27	F-416	216 65-157-1(1)65-158-1(1)65-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-28	F-417	123 67-153-2(2)	瓦葺	○		
遺 IV-30	F-418	194 67-158-1(1)68-151-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-38	F-419	189 67-157-2(2)工	瓦葺	○		
遺 IV-38	F-420	183 66-157-1(1)67-157-7(7)工	瓦葺	○		F-79に写る
遺 IV-30	F-421	194 66-158-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-422	213 65-157-2(2)65-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-423	213 66-157-1(1)66-158-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-24	F-424	187 66-153-3(3)66-154-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-31	F-425	195 69-158-7(7)工	瓦葺	○		撮影による確認あり・IAC 現地調査あり
遺 IV-32	F-426	195 70-158-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-32	F-427	196 70-157-1(1)70-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-428	125 67-153-3(3)	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-429	125 67-153-3(3)	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-430	125 67-153-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-431	125 67-154-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-28	F-432	189 66-157-2(2)67-157-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-28	F-433	189 66-157-2(2)67-157-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-28	F-434	189 67-157-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-27	F-435	189 66-156-1(1)67-156-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-27	F-436	189 66-156-7(7)67-156-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-437	125 67-153-7(7)68-153-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-438	213 70-157-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-439	213 69-158-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-440	123 68-153-3(3)	瓦葺	○		
遺 IV-30	F-441	194 69-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-31	F-442	193 70-158-7(7)工	瓦葺	○		小ピット 1 基
遺 IV-37	F-443	131 69-154-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-37	F-444	131 69-154-7(7)69-154-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-31	F-445	193 66-156-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-446	123 67-153-7(7)68-153-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-37	F-447	132 69-154-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-27	F-448	189 66-156-7(7)67-156-1(1)	瓦葺	○		F-78・79・186・186に写る
遺 IV-35	F-449	211 69-158-1(1)工	瓦葺	○		F-83に写る
遺 IV-31	F-451	195 63-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-32	F-452	196 68-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-32	F-453	196 63-158-1(1)68-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-35	F-454	211 67-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-455	213 69-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-28	F-456	123 69-153-3(3)69-154-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-35	F-457	191 65-152-1(1)66-152-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-27	F-458	116 66-151-2(2)	瓦葺	○		調査
遺 IV-36	F-459	211 69-157-2(2)69-158-1(1)69-157-2(2)	瓦葺	○		瓦葺 瓦化タタキ
遺 IV-25	F-460	168 69-154-7(7)69-155-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-461	125 69-153-2(2)	瓦葺	○		
遺 IV-35	F-462	218 69-157-1(1)69-158-1(1)69-158-7(7)	瓦葺	○		F-68に写る
遺 IV-34	F-463	137 68-153-7(7)69-153-7(7)69-154-7(7)	瓦葺	○		IAC 現地調査あり
遺 IV-27	F-464	186 67-151-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-32	F-465	110 68-151-1(1)より上	瓦葺	○		
遺 IV-38	F-466	217 69-157-2(2)69-158-1(1)70-157-2(2)70-158-7(7)	瓦葺	○		小ピット 2 基
遺 IV-29	F-467	121 66-157-1(1)67-157-7(7)68-157-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-29	F-468	125 70-153-2(2)	瓦葺	○		
遺 IV-28	F-469	217 69-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-35	F-470	211 69-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-471	213 69-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-35	F-472	211 68-157-7(7)工	瓦葺	○		瓦葺 瓦化タタキ
遺 IV-35	F-473	211 67-158-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-474	218 67-158-7(7)工	瓦葺	○		
遺 IV-37	F-475	220 70-157-2(2)70-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-31	F-476	193 67-157-7(7)67-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-31	F-477	193 67-157-7(7)67-158-1(1)	瓦葺	○		F-62に写る
遺 IV-30	F-478	126 66-155-1(1)より上	瓦葺	○		
遺 IV-27	F-479	126 68-152-1(1)68-153-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-480	218 68-158-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-24	F-481	166 65-153-1(1)66-153-7(7)より上	瓦葺	○		
遺 IV-36	F-482	218 69-158-1(1)	瓦葺	○		
遺 IV-37	F-483	220 70-157-7(7)	瓦葺	○		
遺 IV-34	F-484	186 69-154-7(7)工	瓦葺	○		

表IV-2 続き

調査号	調査名	調査期	対象	分析	関係機関等	注(1)-(2)	備考
国IV-07	F-482	270	09-154-7①	現地	県庁	○	F-40-481-73に併合
国IV-07	F-486	270	70-157-3③	現地		×	
国IV-27	F-487	188	06-157-7①	現地	県庁	○	
国IV-31	F-488	165	03-157-7①	現地	県庁	○	F-62-03-157併合
国IV-56	F-489	211	09-157-7①	現地		○	
国IV-06	F-490	218	07-158-7③	現地	国土庁・県庁	○	F-40に併合
国IV-06	F-491	218	08-157-7①	現地		○	
国IV-27	F-492	160	03-154-7①	現地		○	
国IV-23	F-493	164	06-154-7①	現地		○	
国IV-07	F-494	221	70-152-7①	現地		×	
国IV-06	F-495	170	06-153-7①	現地		×	
国IV-03	F-496	211	07-157-7①	現地		○	
国IV-07	F-497	220	70-154-7①	現地		○	
国IV-06	F-498	170	06-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-02	F-499	196	06-157-7①	現地	県庁	○	
国IV-31	F-500	200	07-157-7①	現地	県庁	○	
国IV-32	F-501	190	08-157-7①	現地		○	
国IV-32	F-502	196	06-157-7①	現地		○	
国IV-06	F-503	180	06-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-07	F-504	220	09-157-7①	現地		×	
国IV-07	F-505	222	09-157-7①	現地		○	
国IV-09	F-506	125	08-153-7①	現地		×	
国IV-07	F-507	222	30-157-7①	現地		○	
国IV-31	F-508	127	08-153-7①	現地		○	
国IV-34	F-509	127	03-152-7①	現地		×	
国IV-07	F-510	223	70-157-7①	現地		○	
国IV-04	F-511	137	08-154-7①	現地		○	
国IV-34	F-512	177	09-157-7①	現地		○	F-40に併合
国IV-07	F-513	189	08-156-7①	現地		×	F-40に併合
国IV-35	F-514	142	08-154-7①	現地		○	
国IV-03	F-515	142	08-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-03	F-516	159	09-157-7①	現地	県庁	○	F-77に併合
国IV-05	F-517	150	08-155-7①	現地		○	
国IV-36	F-518	150	08-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-36	F-519	50	08-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-02	F-520	147	08-153-7①	現地		○	
国IV-02	F-521	160	06-154-7①	現地		○	
国IV-05	F-522	142	08-156-7①	現地		○	
国IV-31	F-523	199	09-157-7①	現地		○	
国IV-03	F-524	142	08-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-04	F-525	137	08-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-34	F-526	207	09-157-7①	現地	県庁	○	F-77に併合
国IV-36	F-527	213	09-157-7①	現地	県庁	○	F-40に併合
	F-528	欠番					
国IV-34	F-529	117	08-153-7①	現地	県庁	○	
国IV-34	F-530	140	08-152-7①	現地		○	
国IV-22	F-531	180	08-154-7①	現地		×	
国IV-02	F-532	160	08-154-7①	現地		○	
国IV-02	F-533	160	07-157-7①	現地		○	
国IV-03	F-534	162	08-154-7①	現地		×	
国IV-22	F-535	160	06-154-7①	現地		○	
国IV-22	F-536	162	06-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-24	F-537	166	07-154-7①	現地		○	
国IV-31	F-538	193	08-156-7①	現地		○	F-40に併合
国IV-23	F-539	160	09-157-7①	現地	県庁	○	F-77に併合
国IV-30	F-540	212	08-154-7①	現地	県庁	○	F-40に併合
国IV-24	F-541	196	07-154-7①	現地		○	
国IV-34	F-542	167	08-154-7①	現地	県庁	○	
国IV-02	F-543	196	70-152-7①	現地		○	
国IV-07	F-544	188	08-153-7①	現地		×	
国IV-31	F-545	195	08-154-7①	現地	県庁	○	F-40に併合
国IV-31	F-546	195	08-154-7①	現地	県庁	○	F-40に併合
国IV-34	F-547	177	70-153-7①	現地		○	
国IV-07	F-548	176	08-152-7①	現地		×	
国IV-34	F-549	127	70-153-7①	現地		×	
国IV-31	F-550	200	07-157-7①	現地	県庁	○	
国IV-09	F-551	191	08-157-7①	現地		○	
国IV-36	F-552	213	09-157-7①	現地		○	
国IV-06	F-553	215	08-157-7①	現地		○	
国IV-27	F-554	177	08-156-7①	現地		×	
国IV-07	F-555	147	70-157-7①	現地		×	
国IV-31	F-556	142	70-152-7①	現地		×	
国IV-06	F-557	144	08-154-7①	現地		○	
国IV-04	F-558	167	09-153-7①	現地		○	
国IV-07	F-559	177	08-154-7①	現地		×	

IV 遺構

表IV-2 続き

図番	遺構名	位置	時期	規模・形状・内容	注
遺IV-28	F-568	227	88-152-1の2層	基礎	×
遺IV-29	F-561	111	87-149-2の2層	基礎	○
遺IV-21	F-562	154	86-153-1の2層	基礎	○
遺IV-35	F-563	141	86-153-1の2層	基礎	○
遺IV-24	F-564	185	86-153-1の2層	基礎	○
遺IV-56	F-565	219	89-137-7の2層	基礎	○
遺IV-34	F-566	207	88-153-7の2層	基礎	○
遺IV-34	F-567	207	88-153-7の2層	基礎	○
遺IV-24	F-568	186	86-153-1の2層	基礎	○
遺IV-24	F-569	166	86-154-1の2層	基礎	×
遺IV-22	F-570	180	76-154-1の2層	基礎	○
遺IV-27	F-571	121	76-152-1の2層	基礎	○
遺IV-27	F-572	121	76-152-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-573	186	76-156-1の2層	基礎	○
遺IV-28	F-574	186	67-156-1の2層	基礎	○
遺IV-28	F-575	179	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-576	186	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-25	F-577	112	69-159-1の2層	基礎	○
遺IV-24	F-578	107	69-149-1の2層	基礎	○
遺IV-34	F-579	108	69-149-1の2層	基礎	○
遺IV-27	F-580	116	70-151-1の2層	基礎	×
遺IV-27	F-581	122	70-152-1の2層	基礎	×
遺IV-27	F-582	148	68-158-1の2層	基礎	○
遺IV-27	F-583	148	68-158-1の2層	基礎	○
遺IV-27	F-584	122	70-152-1の2層	基礎	○
遺IV-36	F-585	212	65-151-1の2層	基礎	○
遺IV-36	F-586	212	65-156-1の2層	基礎	○
遺IV-35	F-587	212	65-156-1の2層	基礎	○
遺IV-25	F-588	112	68-158-1の2層	基礎	○
遺IV-25	F-589	113	66-158-1の2層	基礎	○
遺IV-25	F-590	113	68-158-1の2層	基礎	○
遺IV-26	F-591	128	70-157-1の2層	基礎	○
遺IV-27	F-592	122	70-152-1の2層	基礎	○
遺IV-28	F-593	114	65-150-1の2層	基礎	○
遺IV-28	F-594	114	65-150-1の2層	基礎	○
遺IV-28	F-595	114	66-150-1の2層	基礎	○
遺IV-28	F-596	113	68-153-1の2層	基礎	○
遺IV-25	F-597	111	68-149-1の2層	基礎	○
遺IV-25	F-598	111	68-149-1の2層	基礎	○
遺IV-37	F-599	215	68-158-1の2層	基礎	×
遺IV-37	F-600	188	68-127-1の2層	基礎	○
F-601 欠番					
遺IV-25	F-602	111	69-149-1の2層	基礎	○
遺IV-29	F-603	123	68-153-1の2層	基礎	○
遺IV-29	F-604	170	67-159-1の2層	基礎	×
遺IV-28	F-605	189	68-158-1の2層	基礎	○
遺IV-36	F-606	218	66-157-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-607	176	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-37	F-608	201	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-33	F-609	201	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-34	F-610	130	70-152-1の2層	基礎	○
遺IV-26	F-611	184	67-155-1の2層	基礎	○
遺IV-26	F-612	185	67-155-1の2層	基礎	○
遺IV-26	F-613	185	67-155-1の2層	基礎	○
遺IV-26	F-614	185	67-155-1の2層	基礎	○
遺IV-37	F-615	214	68-157-1の2層	基礎	○
遺IV-26	F-616	219	69-157-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-617	176	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-618	176	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-619	176	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-620	176	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-37	F-621	214	68-157-1の2層	基礎	○
遺IV-29	F-622	191	69-156-1の2層	基礎	○
遺IV-37	F-623	214	68-157-1の2層	基礎	×
遺IV-35	F-624	211	68-157-1の2層	基礎	×
遺IV-36	F-625	211	70-156-1の2層	基礎	○
遺IV-24	F-626	186	68-153-1の2層	基礎	○
遺IV-35	F-627	189	67-156-1の2層	基礎	○
遺IV-33	F-628	196	67-156-1の2層	基礎	○
遺IV-30	F-629	196	69-156-1の2層	基礎	○
遺IV-32	F-630	196	68-156-1の2層	基礎	○
遺IV-33	F-631	201	68-156-1の2層	基礎	○
遺IV-33	F-632	196	69-156-1の2層	基礎	○
遺IV-37	F-633	214	68-157-1の2層	基礎	○
遺IV-27	F-634	117	68-151-1の2層	基礎	○

表 IV-2 続き

票番号	連番	住所	氏名	性別	氏名読み	生年	死亡	備考
票 IV-22	F-633	186	66-156-10067-156-10067-157-700	男性	津井	○		
票 IV-23	F-636	217	66-156-10067-156-10067-157-700	女性	○		小ビット 1 票	
票 IV-27	F-637	121	70-152-10070-152-700	男性	○			
票 IV-34	F-638	396	69-150-100	男性	×			
票 IV-37	F-639	235	67-157-100	男性	○			
票 IV-38	F-640	213	68-156-10068-157-700	男性	津井	○		
票 IV-36	F-641	213	68-156-10068-157-700	女性	○			
票 IV-20	F-642	125	70-153-100	男性	津井	○		
票 IV-29	F-643	162	66-158-100	男性	×			
票 IV-27	F-644	126	68-152-100	男性	岡田タカシ	○		
票 IV-36	F-645	313	66-156-10066-157-700	男性	津井	○	小ビット 1 票	
票 IV-30	F-646	193	66-156-10066-157-700	男性	津井	○		
票 IV-34	F-647	139	70-152-10070-152-700	男性	○			
票 IV-28	F-648	124	69-156-700	男性	津内洋行	○		
票 IV-28	F-649	124	69-156-700	男性	津内洋行	○		
票 IV-37	F-650	216	67-156-10068-156-10068-157-700	男性	○			
票 IV-37	F-651	216	68-157-100	男性	○			
票 IV-37	F-652	216	68-157-10068-157-700	男性	○			
票 IV-38	F-653	124	66-156-700	男性	津井	○	土留	
票 IV-30	F-654	194	66-158-100	男性	○			
票 IV-36	F-655	218	67-156-10068-156-10068-157-700	男性	○			
票 IV-36	F-656	217	67-156-100	男性	×			
票 IV-37	F-657	216	67-156-10068-156-100	男性	○			
票 IV-36	F-658	216	68-157-10068-157-700	男性	×			
票 IV-28	F-659	124	68-149-700	男性	津井	○		
票 IV-34	F-660	127	69-153-700	男性	○			
票 IV-37	F-661	120	67-156-700	男性(7)	×		F-107に訂正される	
票 IV-31	F-662	128	70-156-100	男性	○			
票 IV-28	F-663	180	66-156-100	男性	×			
票 IV-31	F-664	124	69-155-10069-156-100	男性	津井	○		
票 IV-31	F-665	128	69-156-100	男性	○			
票 IV-31	F-666	128	68-156-100	男性	津井	○		
票 IV-30	F-667	128	68-157-100	男性	津井	○		
票 IV-38	F-668	154	68-155-100	男性	岡田タカシ	○		
票 IV-38	F-669	154	68-155-100	男性	○			
票 IV-23	F-670	112	70-148-700	男性	○			
票 IV-35	F-671	114	69-150-10070-150-700	男性	○			
票 IV-35	F-672	141	68-152-100	男性	○			
票 IV-38	F-673	124	66-156-10067-156-700	男性	津井	○	津井	
票 IV-31	F-674	120	66-156-700	男性	○			
票 IV-37	F-675	133	70-155-100	男性	○			
票 IV-31	F-676	128	70-154-100	男性	○			
票 IV-31	F-677	128	70-154-100	男性	○			
票 IV-31	F-678	128	70-154-100	男性	○			
票 IV-28	F-679	124	69-156-700	男性	津井	○		
票 IV-24	F-680	167	68-153-10069-153-100	男性	○			
票 IV-23	F-681	124	67-154-700	男性	○			
票 IV-27	F-682	153	70-156-100	男性	津井	○		
票 IV-27	F-683	153	70-156-700	男性	○			
票 IV-34	F-684	135	66-156-10067-156-700	男性	○			
票 IV-34	F-685	125	69-156-10067-156-700	男性	○			
票 IV-30	F-686	120	66-157-10069-100	男性	○			
票 IV-31	F-687	124	68-157-100	男性	津井	○		
票 IV-29	F-688	180	65-156-700	男性	○			
票 IV-31	F-689	130	69-156-100	男性	×			
票 IV-34	F-690	140	70-152-100	男性	○		小ビット 1 票	
票 IV-28	F-691	124	66-156-100	男性	津井	○	津井以上を訂正あり	
票 IV-31	F-692	128	68-156-700	男性	○			
票 IV-38	F-693	154	68-155-10070-153-100	男性	×			
票 IV-31	F-694	193	68-157-100	男性	○			
票 IV-31	F-695	200	67-156-100	男性	○		小ビット 1 票	
票 IV-35	F-696	141	70-152-100	男性	津井	○		
票 IV-27	F-697	180	66-157-100	男性	○			
票 IV-28	F-698	181	68-157-100	男性	○			
票 IV-34	F-699	125	65-152-10065-158-100	男性	タカシ	○	訂正物票 F-41-42 に訂正される	
票 IV-34	F-700	127	66-154-100	男性	○			
票 IV-24	F-701	167	68-153-10069-154-100	男性	○			
票 IV-27	F-702	163	66-154-10068-155-100	男性	×			
票 IV-24	F-703	167	68-154-100	男性	○			
票 IV-27	F-704	168	68-156-700	男性	○			
票 IV-31	F-705	201	68-156-700	男性	津井	○		
票 IV-31	F-706	208	68-157-100	男性	○			
票 IV-23	F-707	164	66-154-10066-155-100	男性	○			
票 IV-27	F-708	186	66-157-100	男性	×			
票 IV-25	F-709	180	66-156-100	男性	○		F-115に訂正される	

IV 沿革

表IV-2 続き

路線No.	路線名	車種	代車	区間	電線種類/内付物	70+1 寸法	備考
線IV-23	F-719	201	64-156-7①イ②		電線	縦書き	○
線IV-23	F-719	201	64-156-7①イ②		電線		○
線IV-26	F-712	219	64-156-7②665-137-イ②69-137-ア②		電線	横書	○ T-14に収められる
線IV-24	F-711	230	64-156-7②		電線	縦書き	○
線IV-24	F-714	206	67-156-7②		電線		×
線IV-29	F-715	191	66-156-7②665-137-イ②		電線		×
線IV-24	F-716	187	66-154-7②イ②イ②		電線		○ 小ピット1基
線IV-26	F-717	219	64-156-7②665-137-イ②		電線	縦書き	○ ベンチ下部半埋設あり
線IV-28	F-718	189	65-157-7②		電線	横書	×
線IV-27	F-719	230	64-156-7②		電線		×
線IV-29	F-720	190	66-156-7②665-137-イ②		電線		×
線IV-28	F-721	218	66-158-7②		電線		×
線IV-26	F-722	180	66-156-7②		電線		×
線IV-26	F-723	182	66-155-7②66-156-7②イ②		電線		×
線IV-26	F-724	182	66-156-7②		電線		○
線IV-24	F-725	155	66-156-7②イ②イ②		電線	縦書き	○
線IV-27	F-726	214	64-158-7②		電線		×
線IV-24	F-727	158	64-149-7①		電線		○
線IV-25	F-728	189	65-153-7②2②65-154-7②イ②		電線		○
線IV-25	F-729	173	65-154-7②66-154-7②		電線		○ 小ピット1基
線IV-25	F-730	198	63-153-7②		電線	横書き	○
線IV-19	F-731	9	64-133-7①		電線		○ 橋梁より前方
線IV-25	F-732	173	65-154-7②66-154-7②		電線		○ 小ピット4基
線IV-25	F-733	141	65-152-7② ②②②②		電線		○ 小ピット1基、40坪
線IV-19	F-734	9	64-133-7①66-133-7①		電線		○ 140坪埋設(6110)
線IV-19	F-735	9	65-133-7②②		電線		○
線IV-28	F-736	21	64-137-7②65-137-7②		電線		○ 140坪埋設(6110)
線IV-19	F-737	11	65-133-7②		電線		○
線IV-19	F-738	11	64-133-7②		電線		○
線IV-28	F-739	223	65-156-7②②65-137-イ②66-156-7②②66-157-7②		電線		○ T-84に収められる
線IV-28	F-740	223	65-156-7②②65-137-イ②66-156-7②②66-157-7②		電線		○ T-84に収められる
線IV-24	F-741	213	65-156-7②65-157-7②		電線		○
線IV-28	F-742	223	65-156-7②イ②イ②		電線		○
線IV-24	F-743	223	65-156-7②イ②イ②		電線		○
線IV-28	F-744	223	65-156-7②イ②イ②		電線		○ T-123に収められる
線IV-28	F-745	223	65-156-7②イ②イ②65-137-イ②66-156-7②②66-157-7②		電線		○
線IV-28	F-746	224	65-156-7②65-137-7②		電線	横書き	○ 小ピット1基
線IV-28	F-747	223	65-156-7②65-137-イ②66-156-7②②66-157-7②		電線		○
線IV-28	F-748	22	66-156-7②66-157-7②①		電線		○
線IV-19	F-749	226	65-136-7②		電線	横書き	○
線IV-29	F-750	226	65-156-7②		電線		○ 小ピット1基
線IV-29	F-751	226	65-137-7②		電線		×
線IV-29	F-752	228	65-156-7②		電線	横書き	×
線IV-25	F-753	173	65-154-7②		電線		○
線IV-19	F-754	7	65-133-7②66-133-7①		電線		○
線IV-28	F-755	145	66-152-7②		電線	横書き	○ 小ピット1基
線IV-19	F-756	1	66-113-7①②イ②イ②		電線		○ 140坪埋設(6110)
線IV-25	F-757	173	66-154-7②		電線		○
線IV-29	F-758	145	65-152-7②66-152-7②		電線		○
線IV-29	F-759	233	65-156-7②イ②		電線		○
線IV-29	F-760	233	65-156-7②		電線		×
線IV-29	F-761	233	65-157-7②66-157-7②		電線		○
線IV-29	F-762	2	65-157-7②		電線		○
線IV-25	F-763	173	66-154-7②		電線		○
線IV-22	F-764	28	65-141-7②65-142-7②イ②①①上		電線		○
線IV-23	F-765	230	66-156-7②66-137-7②		電線	横書き	○
線IV-22	F-766	242	65-157-7②66-157-7②		電線		○
線IV-24	F-767	24	65-146-7②66-146-7②		電線		○
線IV-23	F-768	66	66-146-7②		電線		○
線IV-25	F-769	96	65-147-7②		電線		×
線IV-26	F-770	184	66-155-7②		電線		×
線IV-26	F-771	212	66-156-7②		電線		○
線IV-22	F-772	245	65-146-7②		電線		×
線IV-19	F-773	12	66-133-7②66-134-7①		電線		×
線IV-25	F-774	96	66-147-7②		電線		○
線IV-26	F-775	212	66-156-7②		電線		○
線IV-28	F-776	158	64-153-7②		電線		○
線IV-19	F-777	10	65-134-7①		電線		○
線IV-19	F-778	11	65-134-7①		電線		○
線IV-19	F-779	11	65-133-7①		電線		○
線IV-22	F-780	39	65-141-7②65-142-7②イ②		電線		○
線IV-19	F-781	11	64-134-7②65-134-7①		電線		○
線IV-22	F-782	39	65-147-7②66-142-7②		電線		○
線IV-25	F-783	217	66-156-7②②66-137-7②イ②イ②		電線		○
線IV-25	F-784	217	66-156-7②②66-137-7②イ②イ②		電線		○

表 IV-2 続き

路線番号	道路番号	区画番号	位置	分類	現地確認内容	備考
区IV-22	F-381	45	66-142-7(1)2(2)2066-142-7(2)イ①	専断		○
区IV-19	F-376	3	66-118-7(2)①②	現地		○
区IV-58	F-387	223	66-155-イ(666-157-7)2④⑤	専断		○
区IV-22	F-378	42	66-142-7(2)イ①	専断		○
区IV-22	F-379	41	66-142-7(2)66-142-イ①	専断		○
区IV-34	F-376	217	66-156-ウ④(66-157-7)南④イ④の南	専断		○
区IV-38	F-376	223	66-153-イ④	専断	x	P-129 に併せられる
区IV-19	F-372	11	64-146-イ①	専断		○
区IV-23	F-370	32	66-143-イ(1)207-143-7	現地		○
区IV-38	F-374	158	65-133-イ④	専断		○
区IV-38	F-370	159	66-152-2(666-153-7)②	現地	併計	○
区IV-38	F-376	158	65-133-7(1)イ①	専断		○
区IV-23	F-370	32	66-143-イ①	現地		○
区IV-26	F-376	114	65-149-ウ④(66-149-イ①)ウ④(66-150-7)①	専断	x	
区IV-38	F-379	217	66-156-イ(666-157-7)南④イ④の南	専断	x	
区IV-58	F-400	225	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	専断		○
区IV-58	F-401	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地		○
区IV-58	F-401	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地		○
区IV-58	F-401	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地		○
区IV-58	F-401	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地		○
区IV-58	F-401	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地		○
区IV-58	F-401	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地		○
区IV-21	F-406	34	66-141-7(2)イ①ウ④	専断		○
区IV-22	F-407	42	66-142-イ(1)43-142-7(2)	専断		○
区IV-22	F-408	44	65-143-7(2)	専断		○
区IV-18	F-409	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	専断	x	
区IV-21	F-410	34	66-142-7(2)	専断		○
区IV-23	F-411	63	65-144-ウ④(1)43-144-7	現地		○
区IV-38	F-412	225	66-157-イ(66-157-7)②	現地		○
区IV-23	F-413	32	66-143-ウ④(66-144-イ①)67-143-3(67-144-7)	現地		○
区IV-23	F-414	33	66-143-イ①	専断		○
区IV-22	F-415	33	66-141-7(1)66-141-7(2)	専断		○
区IV-58	F-416	225	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	専断	x	
区IV-58	F-417	223	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	専断	併計	○
区IV-38	F-418	225	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	専断	併計	○
区IV-23	F-419	34	66-143-イ(2)43-143-7	専断		○
区IV-22	F-420	44	65-142-イ(2)43-142-7(2)イ④	専断		○
区IV-38	F-421	223	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	専断	併計	○
区IV-22	F-422	46	65-142-イ(2)43-142-7(2)	専断		○
区IV-32	F-423	130	70-138-ウ④イ①	専断		○
区IV-22	F-424	46	65-142-7(2)イ④	専断		○
区IV-22	F-425	47	65-142-7(2)イ④	専断		○
区IV-36	F-426	145	68-152-イ(686-152-7)①	専断		○
区IV-32	F-427	47	65-142-イ(2)43-142-7(2)イ④	専断		○
区IV-33	F-428	133	70-138-ウ④イ①	専断	x	
区IV-22	F-429	45	65-142-イ(66-142-7)②	専断		○
区IV-19	F-430	226	66-156-7(2)	専断	x	
区IV-23	F-431	53	66-143-ウ④(66-143-イ①)	専断		○
区IV-23	F-432	48	65-142-イ(66-142-7)②	専断		○
区IV-23	F-433	48	66-142-7(2)イ④	専断		○
区IV-23	F-434	48	66-142-イ①	専断	併計	○
区IV-22	F-435	35	66-141-イ①	専断		○
区IV-58	F-436	223	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	専断	併計	○
区IV-18	F-437	223	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	現地	併計	○
区IV-17	F-438	223	70-156-ウ④(70-157-イ①)	現地	併計	○
区IV-60	F-439	223	66-156-ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	専断		○
区IV-60	F-440	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-7)②	専断	併計	○
区IV-19	F-441	227	70-156-ウ④(70-157-イ①)	専断	x	
区IV-18	F-442	224	68-151-イ①	専断		○
区IV-25	F-443	121	69-154-イ①ウ④	専断	x	
区IV-25	F-444	120	70-154-7(2)イ①ウ④	専断	併計	○
区IV-25	F-445	120	70-154-7(2)イ①ウ④	専断	併計	○
区IV-22	F-446	44	65-141-ウ④(66-142)	専断		○
区IV-23	F-447	50	66-142-イ①	現地	併計	○
区IV-19	F-448	220	70-156-7(2)	専断		○
区IV-60	F-449	223	66-156-7(2)イ①ウ④(66-157-7)②	専断		○
区IV-23	F-450	57	65-142-ウ④(66-143-7)①イ④	現地		○
区IV-60	F-451	223	66-156-ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地		○
区IV-58	F-452	223	66-156-ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地	併計	○
区IV-58	F-453	223	66-156-ウ④(66-157-イ①)66-156-4(66-157-7)④	現地	併計	○
区IV-60	F-454	224	70-156-ウ④(70-157-イ①)	現地		○
区IV-58	F-455	225	66-156-ウ④(66-157-7)西④イ④	専断		○
区IV-60	F-456	224	70-156-ウ④(70-157-7)②イ④	専断		○
区IV-25	F-457	124	69-154-ウ④(69-154-7)②	専断	x	
区IV-36	F-458	211	81-158-ウ④	専断(1)	併計	○
区IV-24	F-459	25	66-145-ウ④	専断		○

IV 遺構

表 IV-2 続き

図番	遺構名	当該品	位置	分類	現地確認内容	70-71-72	備考
遺 IV-34	F-850	73	66-146-7⑤	礎石		○	
遺 IV-34	F-861	85	66-146-7①	瓦葺		○	
遺 IV-60	F-862	234	66-156-7②67-156-7②	小石		○	
遺 IV-61	F-863	235	66-156-7②67-156-7②	瓦葺	カキミ	○	
遺 IV-23	F-864	57	66-143-1①	瓦葺		○	
遺 IV-60	F-865	234	65-150-7②66-150-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-866	171	66-154-1②67-154-7②	瓦葺		○	
遺 IV-34	F-867	56	66-145-7②	瓦葺		○	
遺 IV-34	F-868	75	66-145-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-869	171	70-154-7②	礎石		×	
遺 IV-61	F-870	235	66-156-7②67-156-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-61	F-871	235	65-156-7②66-156-7②	瓦葺		○	
遺 IV-62	F-872	241	70-157-7②	礎石		○	
遺 IV-23	F-873	67	66-145-1②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-874	173	66-154-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-23	F-875	173	66-154-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-62	F-876	242	66-156-7②67-157-7②	小石		×	
遺 IV-23	F-877	72	66-145-1②7②	瓦葺		○	
遺 IV-36	F-878	229	66-156-1②	瓦葺		○	
遺 IV-62	F-879	242	70-157-7②	瓦葺	骨介、土葺	○	小ピット1基
遺 IV-23	F-880	73	66-145-1②	瓦葺		○	
遺 IV-62	F-881	243	70-157-7②	瓦葺	骨介	○	小ピット1基
遺 IV-36	F-882	183	65-157-7②	瓦葺		×	土葺
遺 IV-24	F-883	81	66-145-7②67-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-36	F-884	158	67-153-1②	瓦葺		×	
遺 IV-34	F-885	82	66-145-7②67-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-886	64	64-144-7②65-144-1②	瓦葺	骨介	○	14C年代測定(9410)
遺 IV-23	F-887	174	70-154-1②	瓦葺		×	
遺 IV-34	F-888	81	66-146-7②67-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-60	F-889	234	65-157-1②66-157-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-890	60	66-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-891	173	66-155-1②	瓦葺		×	
遺 IV-34	F-892	87	66-146-7②	瓦葺		○	14C年代測定(9410)
遺 IV-26	F-893	183	65-157-7②66-157-1②	瓦葺		○	
遺 IV-34	F-894	217	65-156-7②	瓦葺		×	
遺 IV-23	F-895	89	65-146-7②66-147-7②	瓦葺		○	骨介による破壊あり
遺 IV-23	F-896	89	66-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-897	91	65-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-36	F-898	217	65-156-7②	瓦葺		×	
遺 IV-36	F-899	223	67-156-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-58	F-900	223	67-156-7②	瓦葺		○	
遺 IV-26	F-901	114	66-149-7②	瓦葺		○	土葺
遺 IV-23	F-902	90	66-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-34	F-903	206	67-155-7②67-156-7②68-155-7②68-156-7②	瓦葺		×	
遺 IV-58	F-904	226	67-155-7②68-157-1②	瓦葺		○	
遺 IV-33	F-905	201	69-153-7②69-156-1②70-157-1②70-156-7②	瓦葺		○	
遺 IV-61	F-906	231	66-157-7②	瓦葺		○	
遺 IV-30	F-907	26	66-139-1①	瓦葺		○	
遺 IV-58	F-908	226	66-156-1②67-156-7②	瓦葺		○	
遺 IV-26	F-909	113	66-150-1②	瓦葺		×	
遺 IV-25	F-910	92	66-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-911	90	66-146-1②	瓦葺	(?)	○	
遺 IV-23	F-912	88	66-146-7②66-141-7②	瓦葺		○	
遺 IV-21	F-913	85	66-146-7②66-141-1②	瓦葺		○	
遺 IV-21	F-914	28	66-146-7②66-141-1②67-146-7②67-146-7②68-141-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-61	F-915	239	66-157-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-24	F-916	202	70-155-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-917	90	66-147-1②	瓦葺		○	
遺 IV-26	F-918	107	66-148-7②	瓦葺		○	
遺 IV-21	F-919	30	66-140-7②66-141-1②67-140-7②67-141-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-50	F-920	270	66-156-7②67-156-7②	瓦葺		×	
遺 IV-61	F-921	235	66-157-7②67-157-7②68-157-7②	瓦葺		○	小ピット1基
遺 IV-21	F-922	32	66-140-7②66-141-1②67-140-7②67-141-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-61	F-923	239	66-156-7②67-157-7②	瓦葺		○	P131に認められる
遺 IV-34	F-924	204	66-156-7②	瓦葺		×	
遺 IV-34	F-925	203	66-155-7②67-155-7②	瓦葺		×	
遺 IV-34	F-926	204	66-156-7②	瓦葺		×	
遺 IV-61	F-927	237	67-156-7②67-157-7②68-156-7②68-157-7②	瓦葺	骨介	○	
遺 IV-24	F-928	108	65-147-7②	瓦葺		×	
遺 IV-25	F-929	91	66-146-7②	瓦葺		○	
遺 IV-23	F-930	91	65-147-7②	瓦葺		○	
遺 IV-33	F-931	210	65-155-7②67-156-7②68-155-7②68-156-7②	瓦葺		×	土葺
遺 IV-23	F-932	92	65-147-7②	瓦葺		○	
遺 IV-58	F-933	225	66-156-7②67-157-7②68-156-7②68-157-7②	瓦葺		×	
遺 IV-21	F-934	119	69-151-7②70-151-7②	瓦葺		○	

表 IV-2 続き

図番号	遺構名	生活期	位置	分類	現地確認内容	コメント	備考
図 IV-18	F-935	223	66-136-ウ②E66-137-ア①イ②E66-136-ウ②E66-137-ア②イ②	礎礎	*		F-144 に移される
図 IV-20	F-936	223	66-139-エ①	礎礎	○		
図 IV-19	F-937	230	66-136-ウ②E66-137-ア②	礎礎	○		
図 IV-23	F-938	228	66-140-ア①イ②E66-141-イ②E66-141-ア②	礎礎	○		
図 IV-21	F-939	233	66-140-ウ②	礎礎	○		
図 IV-20	F-940	229	66-145-ウ②E66-141-イ②E66-140-エ②	礎礎	○		
図 IV-20	F-941	231	66-140-ウ②	礎礎	○		
図 IV-21	F-942	230	66-140-ウ②E66-141-イ②	礎礎	○		
図 IV-21	F-943	230	66-140-ウ②E66-141-イ②E66-140-エ②E66-141-ア②	礎礎	○		
図 IV-21	F-944	230	66-140-ウ②E66-141-イ②E66-140-エ②E66-141-ア②	礎礎	○		
図 IV-21	F-945	230	66-140-エ②	礎礎	○		
図 IV-40	F-946	234	66-151-ア②イ②	礎礎	○		中ビッドI基
図 IV-21	F-947	232	66-140-イ②イ②	礎礎	○		
図 IV-21	F-948	232	66-140-ア②イ②イ②	礎礎	○		
図 IV-40	F-949	224	66-151-イ②イ②E66-151-ア②E66-151-イ②	礎礎	○		中ビッドI基
図 IV-21	F-950	232	66-140-ウ②エ②	礎礎	○		
図 IV-15	F-951	144	70-152-ウ②	礎礎	*		
図 IV-14	F-952	225	66-155-ウ②E66-156-イ②E66-155-エ②E66-156-ア②	礎礎(1)	○		
図 IV-14	F-953	206	66-155-ウ②E66-156-イ②E66-156-ア②	礎礎	○		
図 IV-25	F-954	144	69-152-イ②イ②E66-152-ウ②	礎礎	○		
図 IV-25	F-955	144	70-152-エ②	礎礎	*		
図 IV-24	F-956	228	70-152-エ②E66-156-ア②	礎礎	*		
図 IV-26	F-957	145	70-152-ウ②	礎礎	○		
図 IV-23	F-958	231	66-140-ア②イ②イ②E66-141-イ②	礎礎	○		
図 IV-26	F-959	145	70-152-エ②	礎礎	*		
図 IV-15	F-960	220	66-155-ウ②E66-156-イ②E66-155-エ②E66-156-ア②	礎礎	*		
図 IV-25	F-961	210	66-155-ウ②E66-156-イ②E66-156-ア②	礎礎	○		
図 IV-25	F-962	210	66-155-ウ②E66-156-イ②E66-156-ア②	礎礎	○		
図 IV-62	F-963	230	66-157-イ②E66-156-ア②E66-157-ウ②	礎礎	*		
図 IV-37	F-964	226	66-156-イ②E66-156-ア②	礎礎	*		
図 IV-26	F-965	145	70-152-ウ②	礎礎	*		
図 IV-62	F-966	240	66-156-ウ②E66-157-ア②E66-157-ウ②	礎礎	*		
図 IV-24	F-967	110	66-140-イ②	礎礎	*		
図 IV-24	F-968	110	66-140-ア②	礎礎	*		
図 IV-26	F-969	221	66-138-イ②イ②E66-139-ア②E66-139-イ②	礎礎	○		
図 IV-62	F-970	241	66-157-ウ②E66-157-ア②	礎礎	*		
図 IV-62	F-971	241	66-157-ア②E66-157-ウ②E66-157-ア②	礎礎	*		
図 IV-26	F-972	244	66-155-ウ②E66-156-ア②	礎礎	*		

表 IV-3 遺構名・柱石番号・柱石位置

図番号	遺構名	柱石番号	柱石位置	柱石番号	備考
図 IV-63	S-4	69-159-ウ	189		礎石
図 IV-63	S-5	69-159-ア②E66-159-ア②	189		礎
図 IV-34	S-6	67-138-エ	135		礎石
図 IV-63	S-7	66-138-ウ	189		礎石
図 IV-23	S-15	67-138-ア②	134	70号 IV-16	礎・礎石
図 IV-63	S-16	70-137-ウ②	131	図 IV-16	礎・礎石
図 IV-63	S-17	70-137-エ②	131	図 IV-16	礎・礎石
図 IV-63	S-18	70-137-エ②	134	図 IV-16	礎・礎石
図 IV-63	S-19	66-141-ウ②	52	図 IV-16	礎
図 IV-63	S-20	66-141-イ②	96	図 IV-16	礎
図 IV-20	組付礎石	66-139-ア②	25		礎石
図 IV-20	組付礎石	66-139-ウ②	25		礎石
図 IV-24	組付礎石	66-140-イ②E66-140-ア②	82		礎石
図 IV-24	組付礎石	66-140-エ②	84		礎石
図 IV-29	組付礎石	66-146-ア②	125		礎石
図 IV-29	組付礎石	70-155-ウ②	125		礎石
図 IV-31	組付礎石	66-137-ア②	130		礎石
図 IV-62	組付礎石	66-155-ウ②	169		礎石
図 IV-62	組付礎石	66-153-エ②	169		礎石
図 IV-66	組付礎石	66-157-ア②	190		人ノウ (基礎)
図 IV-66	組付礎石 (F-970)	66-157-イ②E66-157-ア②	160		礎石
図 IV-26	組付礎石	66-157-ア②	207		F-971 付近
図 IV-62	組付礎石	66-157-イ②	210		
図 IV-62	組付礎石	66-157-ウ②E66-156-ア②	210		
図 IV-24	組付礎石	66-140-ア②	224		

IV 遺構

表IV-3 遺構土壌フローテーション成果一覧

遺構名	処理番号	底層土層 高さ[m]	2.0mm 粒径 数量[g]	内径 数量[g]	非常層 数量[g]	土層 数量[g]	土層 数量[g]	土層林 数量[g]	石層 数量[g]	磁器 数量[g]	石層等 数量[g]	ベンガラ・ 石灰等数量[g]	備考
土塊													
P-2	11-471	4.5	なし	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
P-4	11-493・497	13.0	2.1	22	0.3	4.7	1	1.0	0.6	0.6			
P-6	11-435	1.0	0.7	125	なし	なし	なし	なし	0.3	0.3			
P-6	11-435・492・493	20.4	4.8	2,066	0.1	5.2	0	なし	7.4	1.9	石炭1	石灰0.4	F101の名前で回収 層上1層
P-26	13-31	1.2	0.1	1	なし	0.2	0	なし	0.0	0.0			
P-27	13-51	3.7	0.5	10	なし	3.8	0	なし	0.0	0.0			
P-30	13-391	30.2	0.7	13	0.0	0.7	0	0.6	1.4	0.6			
P-35	13-435・426	30.6	3.0	20	なし	0.8	0	なし	0.2	0.2			
P-46	13-344	6.7	119.3	35	なし	1.1	0	0.0	なし	なし			
P-44	13-307	7.4	2.2	12	なし	2.8	0	なし	0.1	0.1			層上6層
P-49	13-275・278	20.8	9.4	119	1.8	15.5	0	0.0	3.5	2.4	石炭1	ベンガラ0.8	
P-54	13-392	1.1	2.4	23	なし	なし	なし	なし	0.0	0.0			
P-60	13-312	22.6	15.3	47	0.7	1.5	0	なし	3.6	2.8			ベンガラ0.3
P-80	13-384・383	9.8	16.8	322	なし	8.9	0	なし	6.1	0.8			石灰0.1
P-81	13-408	3.6	21.4	27	なし	6.5	0	なし	8.1	なし			
P-85	13-413	7.0	3.1	6	なし	なし	なし	なし	なし	なし			層上2層 層上6層
P-85	13-440	0.4	0.3	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
P-85	13-409	4.0	3.8	12	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
P-99	13-523	4.7	8.7	11	なし	なし	なし	なし	0.4	0.3			石炭1
P-101	13-541	10.9	0.4	1	なし	なし	なし	なし	0.0	0.0			
P-102	13-552	13.0	7.0	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
P-108	13-384	7.1	3.8	10	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
P-129	14-119	1.9	1.2	9	なし	なし	なし	なし	0.8	0.1			層上1層
塊土													
F-12	13-289	2.3	0.8	1	なし	なし	なし	なし	0.0	0.0			
F-23	13-502	10.0	0.6	1	なし	なし	なし	なし	0.0	0.0			
F-23.05	13-446	3.1	3.3	3	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-31	13-572	11.0	0.3	1	0.0	なし	なし	なし	なし	なし			
F-34	11-193	4.8	0.0	0	0.0	なし	なし	なし	なし	なし			
F-35	11-194	1.0	0.0	0	0.0	なし	なし	なし	なし	なし			
F-39	11-343	4.7	0.0	204	なし	なし	なし	なし	0.1	0.1			
F-41	11-381・13-185	3.5	0.1	2	0.6	なし	なし	なし	1.3	0.8			
F-42	11-341	3.8	0.0	110	なし	0.8	0	なし	0.8	0.8			
F-43	11-340	5.7	0.8	200	なし	7.4	0	1.7	3.6	3.6			
F-44	11-354・615	9.8	4.5	125	1.2	13.1	1	なし	3.0	1.0			
F-45	11-342	0.8	なし	12	なし	なし	なし	なし	なし	なし			石灰0.1
F-46	11-301	3.5	0.9	20	0.4	1.7	0	1.6	0.0	0.0			
F-47	11-318・396・13-283	23.4	1.9	444	0.6	3.9	0	なし	4.8	3.8			
F-48	11-379・13-173	7.7	0.5	7	0.0	1.9	0	なし	0.0	0.0			
F-50	11-345	0.3	なし	156	なし	なし	なし	なし	6.9	6.9			
F-51	11-382	3.2	0.6	10	0.0	3.7	0	なし	0.8	0.8			
F-52	11-383	1.6	0.2	5	なし	なし	なし	なし	0.0	0.0			
F-53	11-388	4.0	0.9	1	なし	なし	なし	なし	0.0	0.0			
F-54	11-377・398・13-196	8.8	1.1	15	0.0	0.1	0	なし	なし	なし			
F-55	11-361	4.8	2.3	13	0.0	なし	なし	なし	なし	なし			
F-57	13-47	13.0	1.1	98	0.9	0.8	0	0.4	0.0	0.8			石灰0.0
F-58	11-415・999	6.1	0.0	74	3.5	0.4	1	なし	0.7	0.6			
F-60	11-408	2.7	0.4	30	0.1	4.4	1	なし	0.6	0.0			
F-62	11-412・644	4.0	0.0	12	0.0	0.4	0	0.0	0.3	0.2			
F-63	11-607	3.8	1.8	136	2.8	14.7	3	なし	0.3	0.1			
F-64	11-426	0.7	0.0	1	0.0	なし	なし	なし	なし	なし			
F-69	11-423	4.1	0.6	18	1.7	3.6	0	なし	0.0	0.0			
F-70	11-431・456	4.1	2.8	57	0.0	4.1	1	なし	0.6	0.7			
F-73	11-411・654	3.8	0.8	84	22.7	4.3	0	0.7	0.7	0.7			
F-73	11-494	0.8	0.3	9	なし	0.8	1	なし	なし	なし			
F-74	11-430	7.1	0.9	39	2.3	3.6	0	なし	0.0	0.0			
F-75	11-422	4.4	0.2	147	30.7	1.0	0	0.3	0.3	0.4			
F-76	11-454	1.3	0.0	4	2.3	なし	なし	0.3	0.1	0.0			
F-77	11-403	7.5	2.2	86	1.4	2.9	0	なし	0.3	0.0			
F-78	11-441・13-287・288	15.8	2.3	460	3.9	71.6	0	なし	2.3	2.0			
F-79	11-455	0.1	なし	26	なし	なし	なし	なし	3.3	2.2			
F-80	11-446・13-380・381	27.8	7.3	1,098	33.9	164.4	1	17.2	4.6	3.1			ベンガラ0.8
F-82	11-420	0.8	0.2	17	0.2	なし	なし	なし	2.3	0.2			
F-83	11-486	4.2	1.3	30	3.4	3.5	0	なし	0.8	0.7			
F-84	11-410	1.8	0.0	21	0.0	なし	なし	なし	4.3	1.0			
F-85	11-401	4.1	0.3	5	0.0	1.8	0	なし	0.1	0.0			
F-86	11-480	0.2	0.2	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-87	11-450	0.0	なし	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-88	11-484	3.1	2.1	553	0.0	9.0	1	なし	1.0	なし			瓦器・ガラス・内蔵品など
F-89	11-416・434	13.5	0.0	105	7.0	1.4	0	なし	0.8	0.4			
F-90	11-479	2.3	0.1	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			

表 IV-3 続き

通称名	処理番号	処理全量 重量 kg	20mm 以下 物重量 g	残量 重量 g	有害量 g	ナリ 重量 g	上部 灰状 重量 g	生体類 重量 g	石類 重量 g	腐植土 重量 g	石灰等の類	ベンガラ・ 石灰質重量 g	備考
F-089	14-132	9.3	3.8	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-090	14-131	1.1	0.1	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-091	14-140	10.0	3.4	23	なし	7.4	1	なし	0.0	0.0			ベンガラ 0.0
F-092	14-140	0.8	0.2	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			ベンガラ 0.0
F-094	14-144	21.8	27.4	17	なし	1.4	0	なし	なし	なし			
F-095	14-153	22.1	35.1	28	なし	2.4	0	なし	0.0	0.0			
F-096	14-151	0.9	0.6	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-097	14-162	1.3	0.1	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-098	14-180	15.4	7.0	3	0.0	0.2	0	なし	なし	なし			石屑 0.0
F-099	14-185	3.2	0.4	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-091	14-186	1.0	1.9	3	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-092	14-188 + 199	8.6	80.1	10	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-093	14-194 + 202	2.5	1.5	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-094	14-193 + 197	94.6	18.0	8	0.1	なし	なし	なし	なし	なし			
F-095	14-175	0.6	0.2	1	0.0	0.2	0	なし	なし	なし			ベンガラ 0.0
F-096	14-176	8.2	1.3	1	0.0	なし	なし	なし	0.0	0.0			
F-097	14-180	8.7	4.7	4	なし	なし	なし	なし	1.0	1.0			
F-098	14-181	2.8	0.3	3	0.0	なし	なし	なし	なし	なし			石屑 0.1
F-099	14-177 + 207	26.7	20.1	9	0.0	なし	なし	なし	なし	なし			石屑 0.0
F-091	14-191	26.4	45	130	0.0	28.8	2	なし	18.8	0.0			ベンガラ 0.0
F-092	14-182 + 217	59.0	28.3	14	0.4	なし	なし	なし	なし	なし			
F-093	14-184	22.4	14.1	23	0.2	3.1	0	なし	1.8	0.0			
F-094	14-187	5.4	0.2	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-095	14-185	1.4	0.6	3	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-096	14-189	4.8	1.8	3	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-099	14-199	4.8	0.7	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-091	14-194	3.0	1.7	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-094	14-196	7.8	28.9	4	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-096	14-200	27.8	1.0	6	なし	なし	なし	なし	なし	なし			石屑 0.0
F-097	14-188	2.8	2.1	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-098	14-205	2.8	3.7	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-099	14-204	1.4	1.5	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-090	14-201	32.8	21	13	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-091	14-203	1.4	1.1	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-092	14-209	8.0	9.8	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-093	14-212	17.1	84.3	5	なし	なし	なし	なし	0.1	0.1			
F-094	14-214	35.3	19.0	9	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-095	14-206	3.4	0.3	4	なし	なし	なし	なし	なし	なし			石屑 0.0
F-096	14-208	10.7	2.3	7	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-097	14-201	2.4	8.9	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-098	14-210	16.0	31.9	4	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-099	14-203	1.7	0.1	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-090	14-218	10.9	2.9	7	なし	なし	なし	なし	0.7	0.7			
F-092	14-215 + 226	4.5	1.4	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-093	14-216	5.4	0.4	4	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-094	14-219	1.6	1.1	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-097	14-220	1.6	0.5	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-098	14-221	9.3	13.0	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
F-091	14-222	9.4	5.0	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし			石屑 0.0
F-092	14-223	15.2	13.8	131	0.0	7.1	0	0.9	0.2	0.2			
F-096	14-223	3.2	2.8	11	なし	4.0	0	なし	なし	なし			
F-099	14-227	11.7	29.9	6	0.0	なし	なし	なし	0.5	0.3			ベンガラ 0.0 増量色の納付 0.2g あり
計行番号													
計行番号	13-217	3.4	0.0	13	なし	なし	なし	なし	21.2	21.2	納付石屑 2		05-196 20 定形量 125
計行番号	13-241	0.5	0.2	6	なし	0.1	0	なし	4.2	4.2			07-157 20 定形量 130
計行番号	13-243	(4.1)	なし	99	なし	なし	なし	なし	89.8	なし			08-157 20 定形量 190
計行番号	13-101	10.1	0.0	37	なし	なし	なし	なし	55.7	55.7			10-155 20 定形量 125
連検合計		(7,412.1)	4,625.3	60,444	823.8	4,801.2	236	233.7	1,317.2	912.7			

V 遺物

1 土器

(1) 報告対象と記載の方法

a 報告の対象

今回の報告範囲では、平成11年度の発掘で10,686点、13・14年度の発掘で22,662点の土器が出土している。合計33,348点となるが、II章4節でも述べたとおり13年度以降一定以上の大きさの土器片のみ出土点数に数えているので、この総数には一定の留保が必要である。これらに隣接区域である71線トレンチの149-161線間（平成11年度発掘）および65-71・159-161線間の各方格（平成12年度発掘）出土の土器片を加えて整理をおこなった。

土器片の個体識別、接合を進めながらある程度接合した破片群ごとに整理番号として頭に13-を付した連番を与えて13-1から13-574まで設定した。このうち5件はその後の接合・個体識別によって他の整理番号ないしその付帯破片に統合し、23件は隣接区域の破片のみで構成されて今回の報告範囲の遺物を含まなかったため、結局546件の接合破片群が残った。このうち接合が進み本来の土器の概ね半分以上に達したと考えられるものは、他の破片群と同一個体である可能性がほぼなくなったとみて整理番号のほかに頭にNを付した個体番号を与え、N1からN87まで設定した。

本節では個体番号を与えた87件の全てと、整理番号のみ与えた資料のうち後述する分類への当てはめがある程度可能なもの244件の合計331件を報告の対象とし、整理番号のない破片は記載していない。ただしどの程度接合していれば整理番号を与えるか、また分類への帰属が不確定なものをどの程度掲載するかについて結局明確な基準を設けることができなかった。出土点数と土器片への注記件数を一致させた13・14年度の出土品のみで集計すると出土点数22,662点のうち5,786点を報告対象としていることになり、結果として約26%の報告率である。

b 土器の分類

当財団で土器の分類のために通常採用している体系は、かつて北海道教育委員会の発掘調査（道教委編1977の8-10頁）で用いられたものを基礎に修正を加えたものである。当遺跡の報告書でも3次にわたってこの体系を踏襲してきたが（財団道埋文編2000の45頁ほか）、この体系にいう「相当する」という言葉の意味するところは曖昧である。

この言葉が「年代上平行する」の意味で理解されている（財団道埋文編2002の58頁）場合が少なくないが、そうであるとすればこの分類は年代学上の体系であることになり、それを土器の分類に用いるのは倒錯であると思われる。例えばこれまで当遺跡の報告書でV群c類に分類されたものの中には通常V群b類土器とされるような資料が含まれている。報告者がそれらを年代上平行するものと考えていればそれを誤りとは言えないが、分類上の混乱を生じる傾向があることを否定できない。

またもし「相当する」が「類似する」の意味であるとした場合、さらにどのような点がどのように類似しているかの説明が必要である。体系登場後の早い時期にはそのような説明を体系に盛り込む努力がある程度払われたことがあるが（例えば道教委編 1978 の 9・10 頁）、その後この方向の整備は進んでおらず、実際の運用には当惑を覚える。

今回の報告ではこの体系を用いず、主に土器口部の形態・装飾にしたがって即物的な分類をおこなうことにした。このため整理番号つき資料でも口部破片を含まないものはほとんど報告していない。この分類は今のところ記載上の便宜であって他の資料に通用させる意図はないので、分類の具体的な内容も遺物の記述に合わせて後述する。

c 記述の要領・図の表現等

本文ではまず分類ごとに形態・装飾上の特徴と出土状況を述べ、その後各分類を通じた土の調査・成形等製作上の傾向について簡単に触れる。個別の資料に関する記述は一覧表とし、使用上の痕跡等についてはこの表で触れるのみとした。

すでに前項で用いたが、土器の部位を指示するために口部・体部・底部という表現を用いる。これは土器を高さ方向に機械的に三等分したときの上・中・下部を意味するもので、器形に配慮したものではない。昨年度の報告書で示された区分（財団道理文編 2002 の 59 頁）を踏襲し、概ね単純に上方へ向かって深く器形を深鉢（高さが口径の 5 分の 4 より大）・鉢（高さが口径の 5 分の 4 から 3 分の 2 まで）・浅鉢（高さが口径の 3 分の 2 より小）に区分する。体部から口部にかけてくびれる器形を壺と称する。上から見て楕円形・方形等を呈する土器が少なくないのでこれを不等径と表現する。

土器の装飾には縄の側面圧痕が多く用いられる。当遺跡の報告ではこれまで縄線文（財団道理文編 2000・2001）、縄痕・縄圧痕（同前編 2002）と呼んできたものであるが、本書では記述の簡便化のため山内清男（1979 の 13 頁）に従って原体符号の前に-（マイナス）を付すことで縄の側面圧痕を表すことにする。回転圧痕は同じく山内案に従い、原体符号の前に∞（無限符号）を付して表現する。なお縄の撻数は確認できたものがほとんどない。便宜的に L・R・LR・RL 等の符号を用いて前段の条数が不明の原体を表すことにした。-L は条数不明の r を L 方向に寄った 1 段縄の側面圧痕、∞LR は条数不明の R を L 方向に燃った 2 段縄の回転圧痕である。

土器を成形する際の土の継ぎ目を高橋 護に従い（高橋 1993 の 414-415 頁）接合面と呼ぶ。接合面は内傾したものと外傾したものと（佐原 1967 の 738 頁）とに分けることができ、実測図では土器の外面に露呈している内傾接合面を○、外傾接合面を●の記号で示した。接合面は凹凸の反転した一対の面として露呈するので、必要な場合には口部へと続く側の破片に現れたのを「下向きの接合面」、それと反対側に露呈したのを「上向きの接合面」と呼んで区別する。

図の縮尺は当遺跡の既刊報告書を踏襲し実測図・拓本とも 3 分の 1 とした。実測図の縦断面は側面図右端の位置で描き、欠損等の理由でそれ以外の位置の断面を代用した場合には▽の記号によって図化位置を示した。拓本に添えた断面の位置も▽の記号によって示した。部位により縦断面に変化の多い土器では複数の断面を添え、▼○●等の記号でその作図位置を示した。なお拓本は整理番号に属する全ての接合破片を掲載することを原則とし、破片が多ければ全破片を 6 分の 1 で図示した。

図化資料にはすでに整理番号または個体番号があるのでさらに本書のための図番号をつけることはやめた。ただし整理番号つきの接合資料に付帯する破片を参考のため図示した場合があり、この場合接合資料本体には整理番号の後に a、付帯破片には整理番号の後に bc 等を加えて表示した。以下の文中で図化資料を引用する際は混乱を避けるためすべて整理番号による。

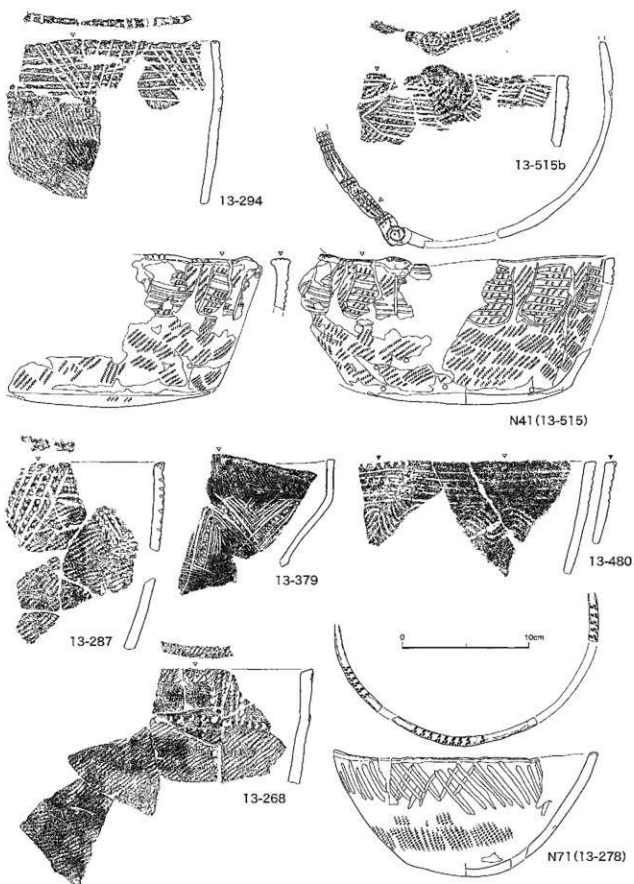


圖 V-1 繩文土器 (I)

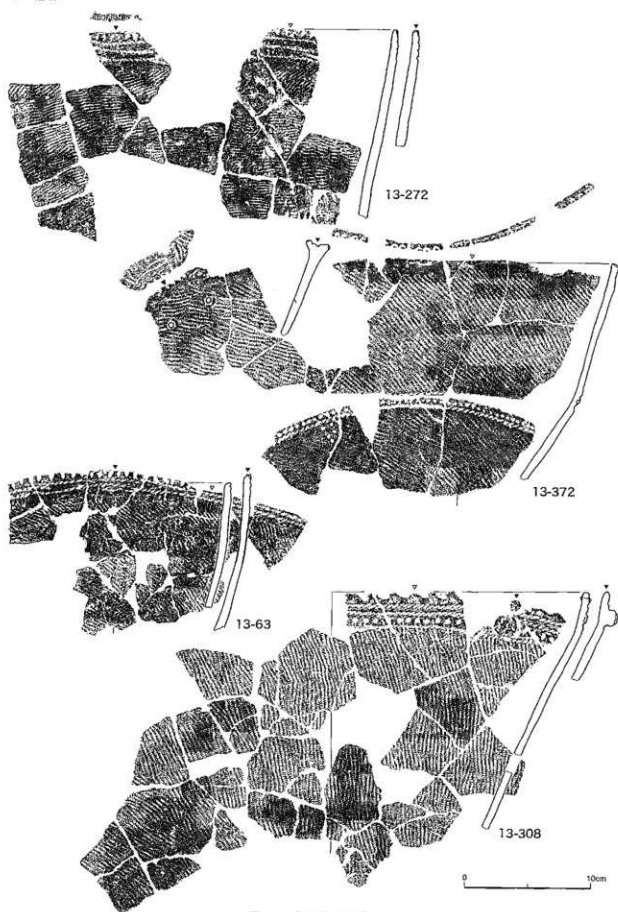
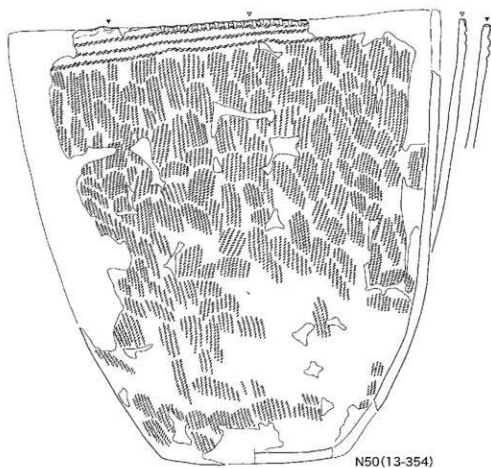
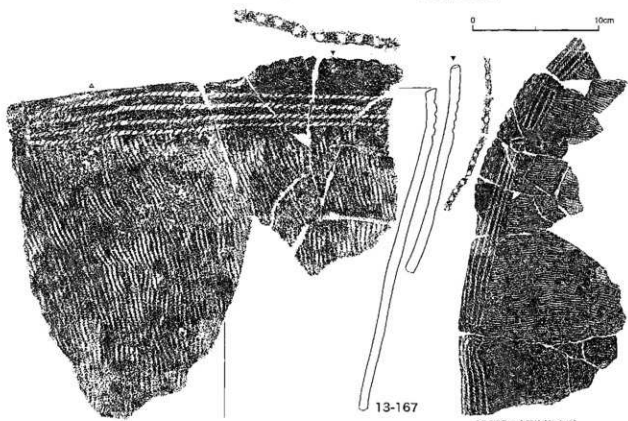


图 V-2 栉文土器 (2)



N50(13-354)



13-167

13-167の金銀片(S=1/6)

図 V-3 縞文土器 (3)

殷墟 13-322

13-520

V 漆器



图V-4 殷文土器 (4)



図 V-5 縄文土器 (5)

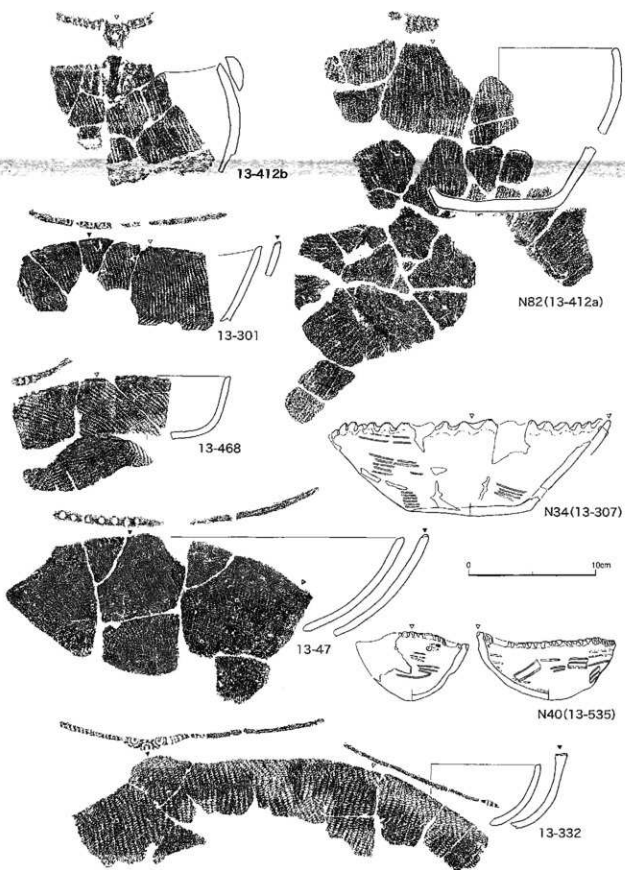


图 V-6 绳文土器 (6)



图 V-7 縄文土器 (7)

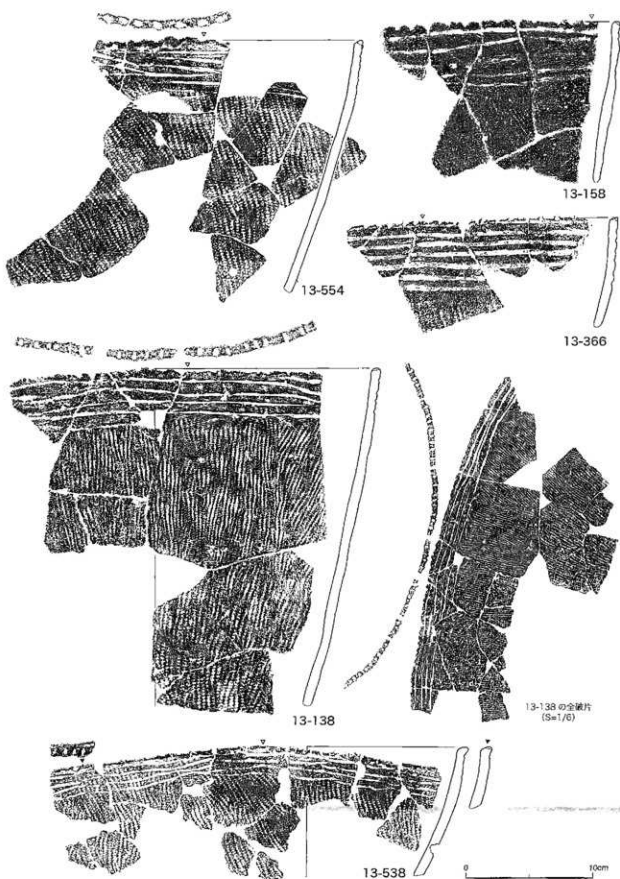
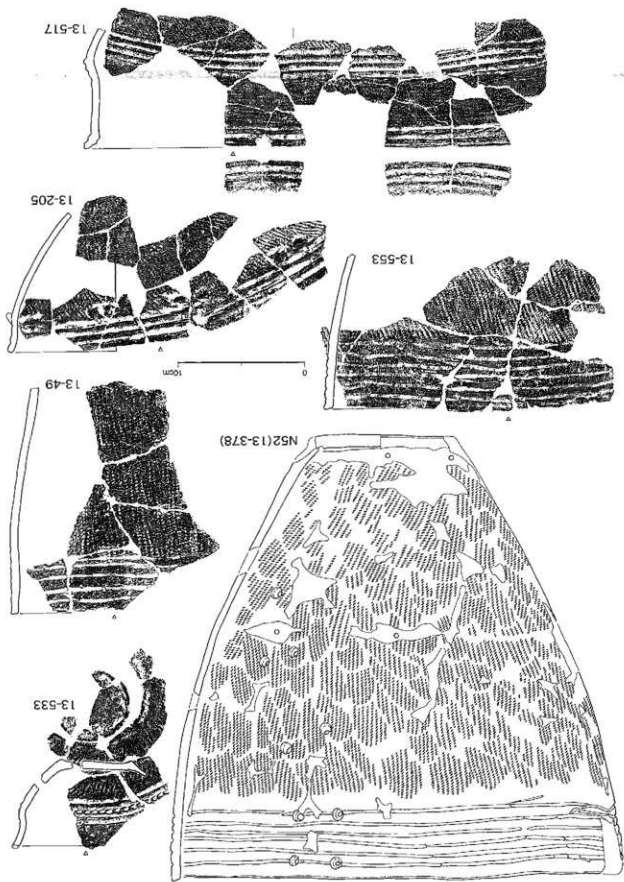
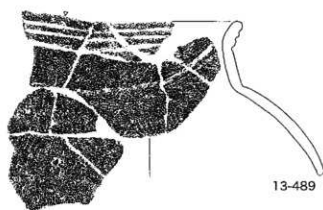


图 V-8 縄文土器 (8)

圖 V-9 織文土器 (9)





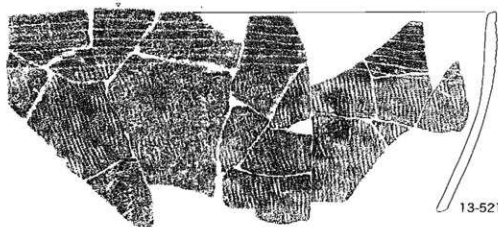
13-489



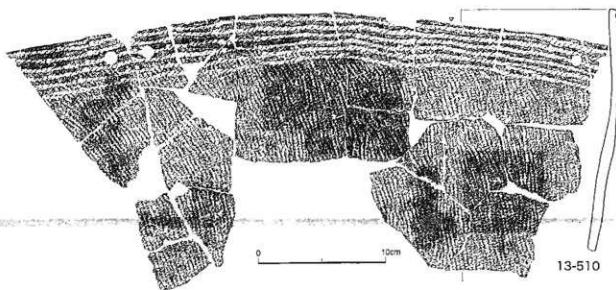
N83(13-532)



13-536



13-521



13-510

图 V-10 绳文土器 (10)



圖 V-11 縄文土器 (11)

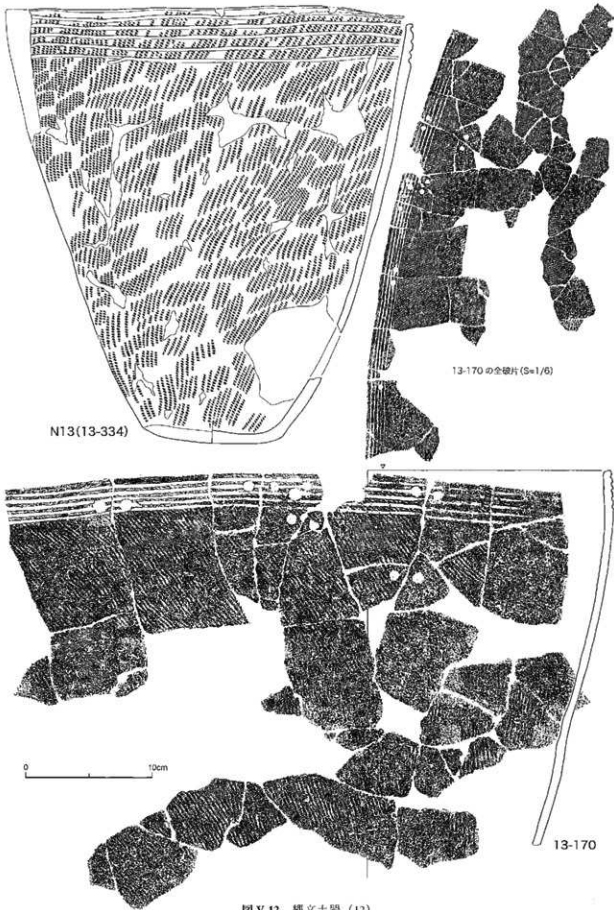


図 V-12 縄文土器 (12)



图 V-13 绳文土器 (13)

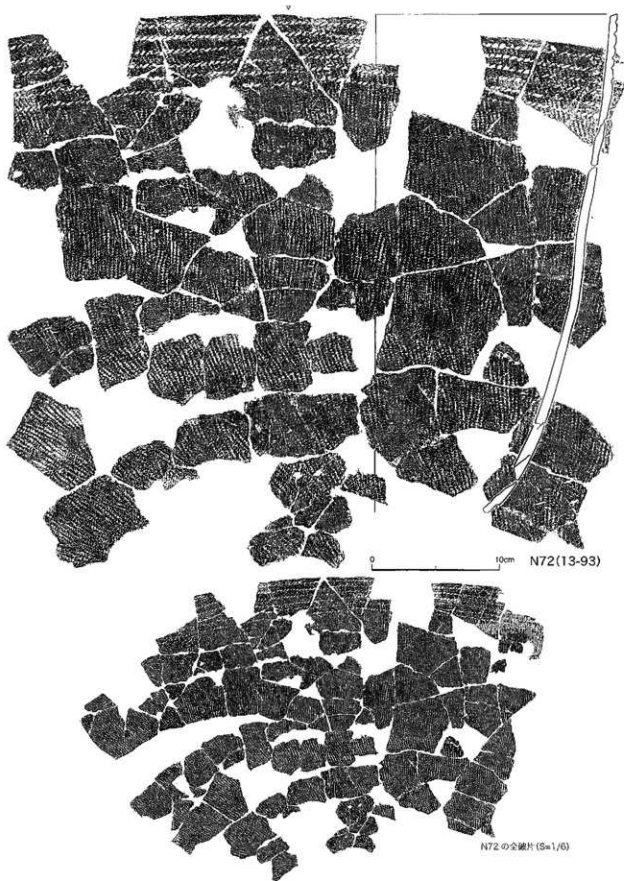


図 V-14 縄文土器 (14)

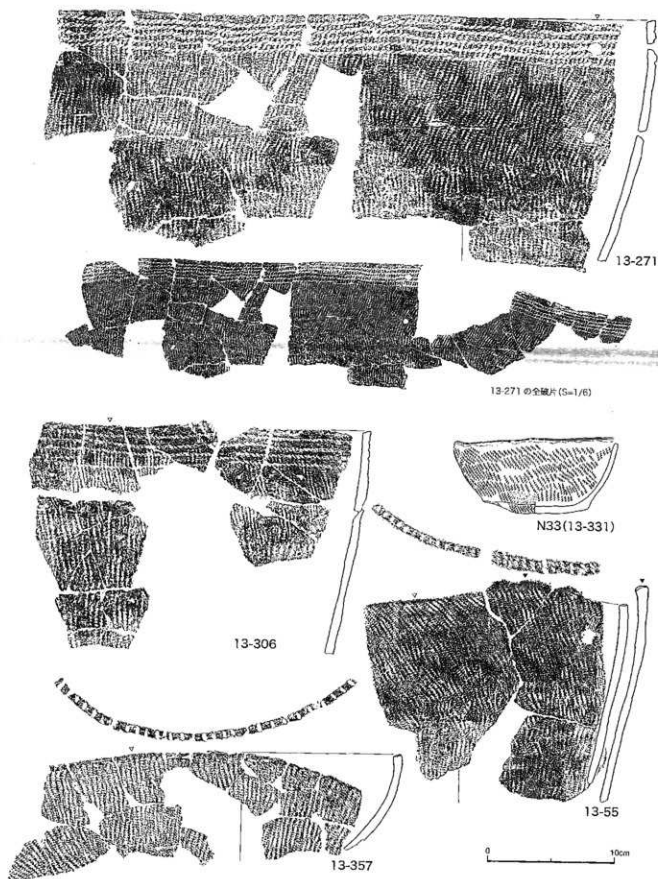


图 V-15 縄文土器 (15)

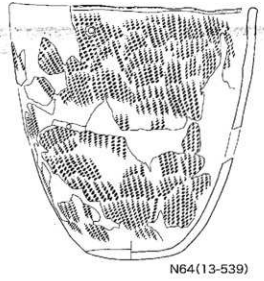
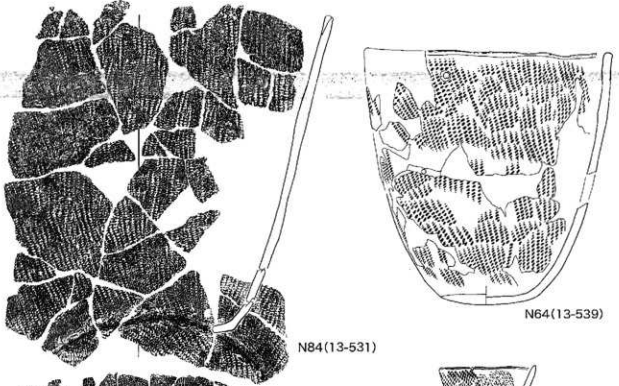
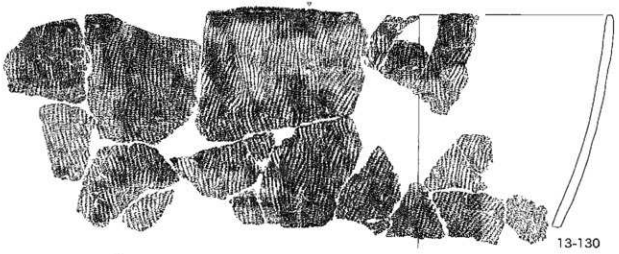


图 V-16 縄文土器 (16)

13-66

N12(13-352)



N45(13-514)

10cm

N51(13-415)

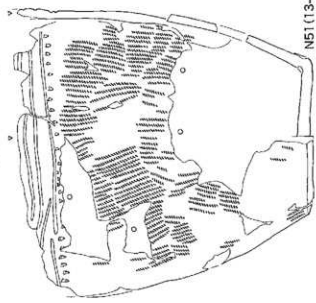
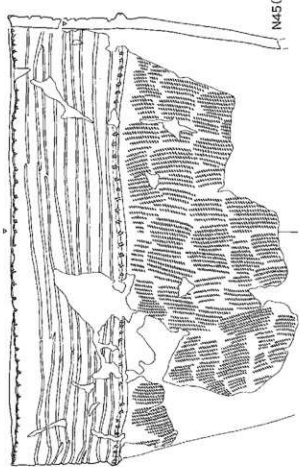
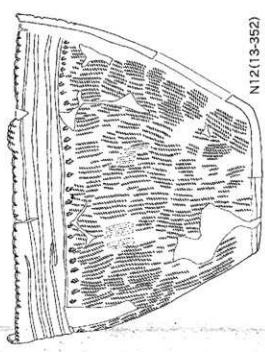


图 V-17 縄文土器 (17)



图 V-18 縄文土器 (18)

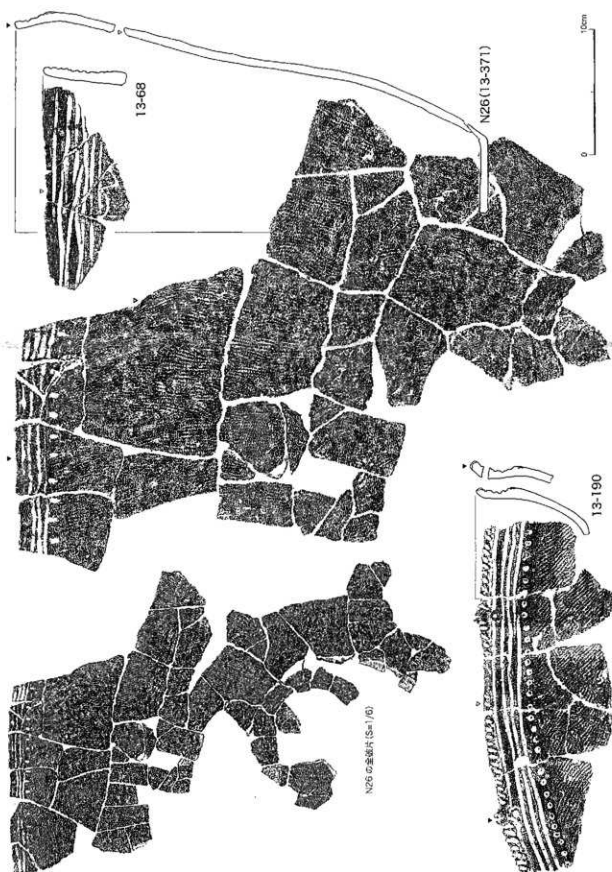
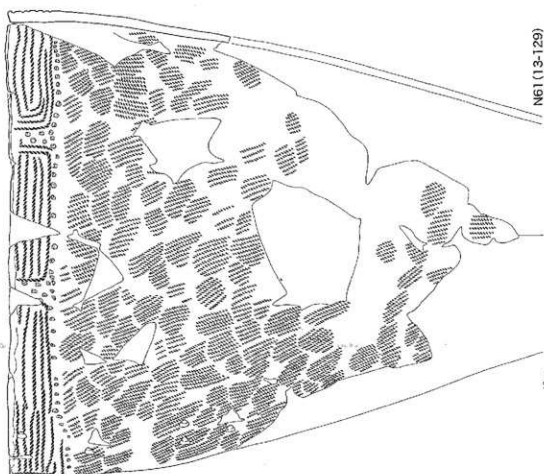


图 V-19 绳文土器 (19)

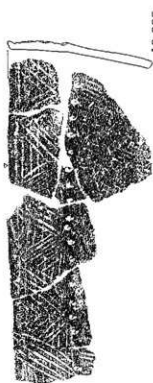


圖 V-20 縄文土器 (20)

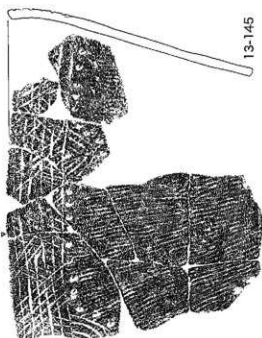


N61 (13-129)

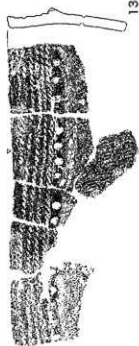
0 100m



13-295



13-145



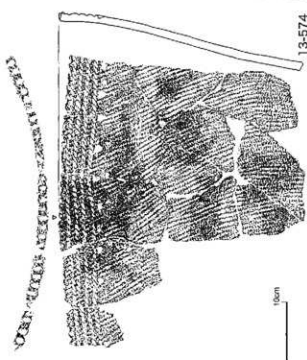
13-188

图 V-21 縄文土器 (21)

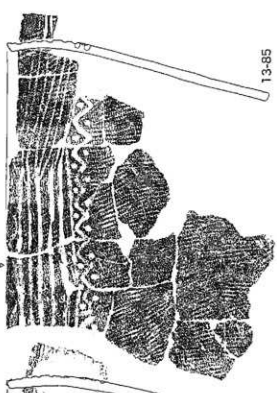


图 V-22 縄文土器 (22)

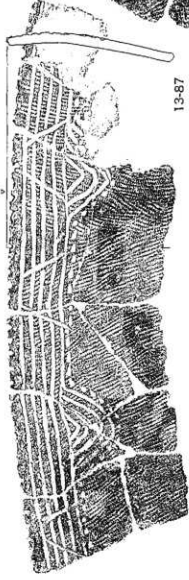
13-574



13-85



13-87



13-166

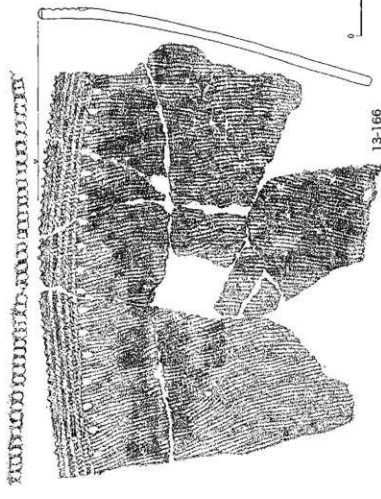
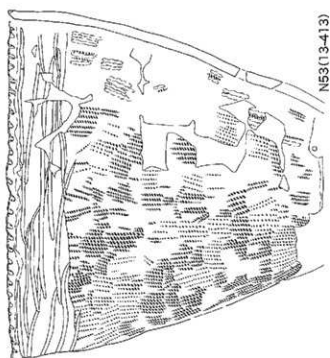


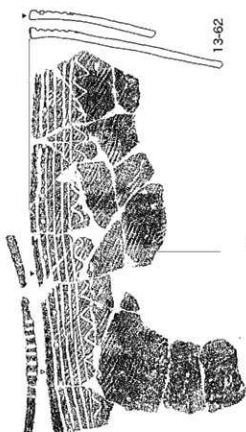
圖 V-23 陶文土器 (23)



N53(13-413)



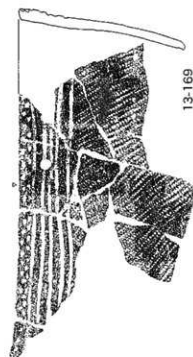
13-127



13-62



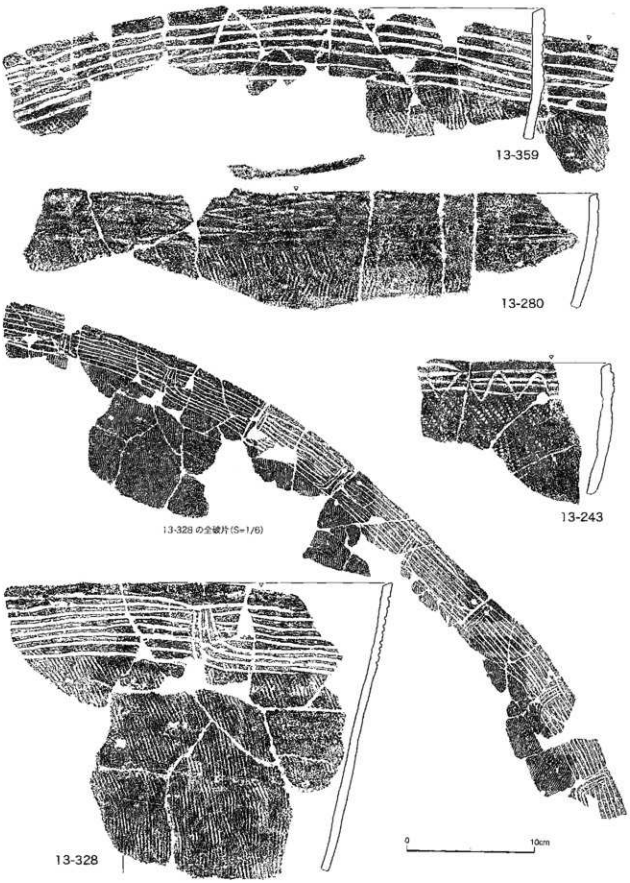
13-62 的全碎片 (S=1/6)



13-169



图 V-24 绳文土器 (24)



13-328の全破片(S=1/6)

13-328

13-359

13-280

13-243

図 V-25 縄文土器 (25)

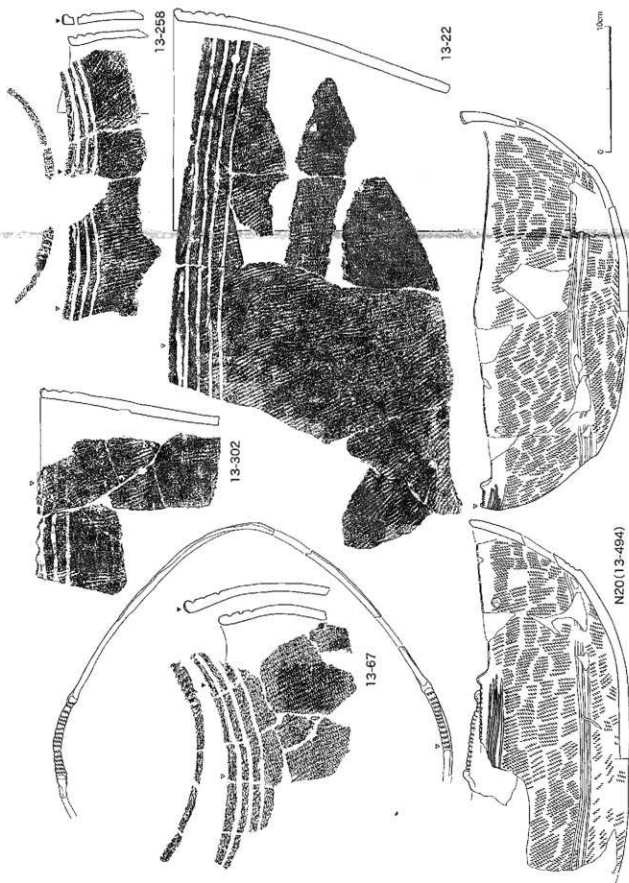


图 V-26 繩文土器 (26)

13-153

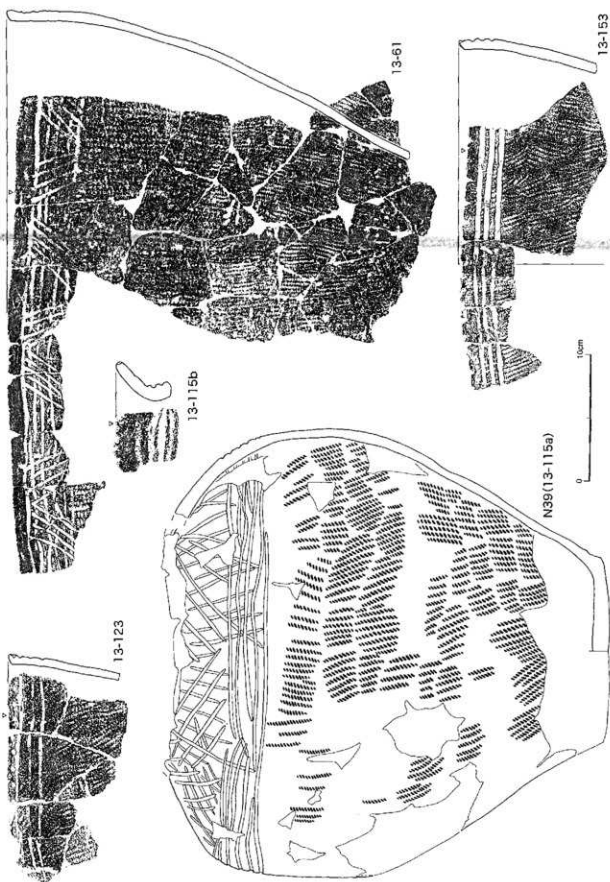
0 10cm

N39(13-115a)

13-61

13-115b

13-123



图V-27 网文土器 (27)



图 V-28 縄文土器 (28)

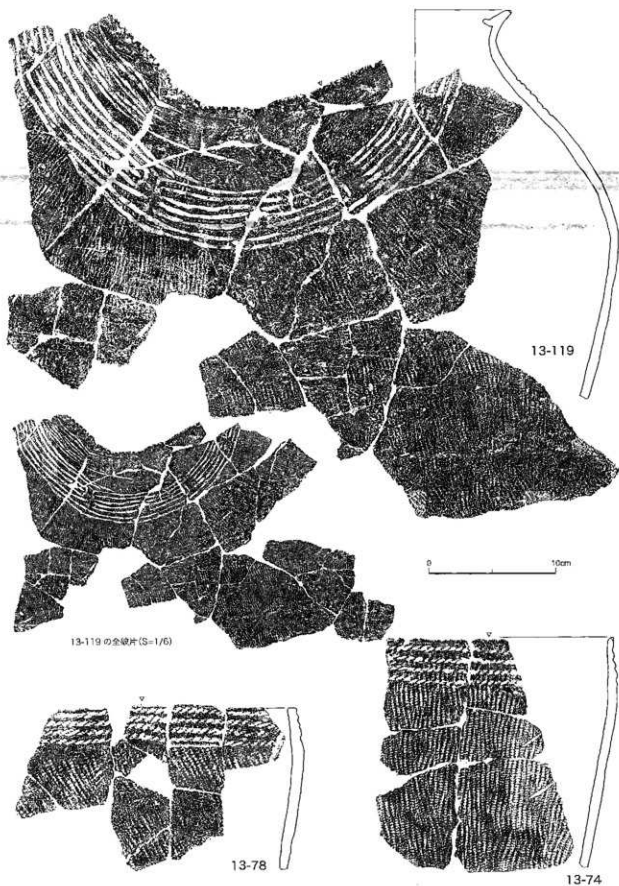


图 V-29 縄文土器 (29)

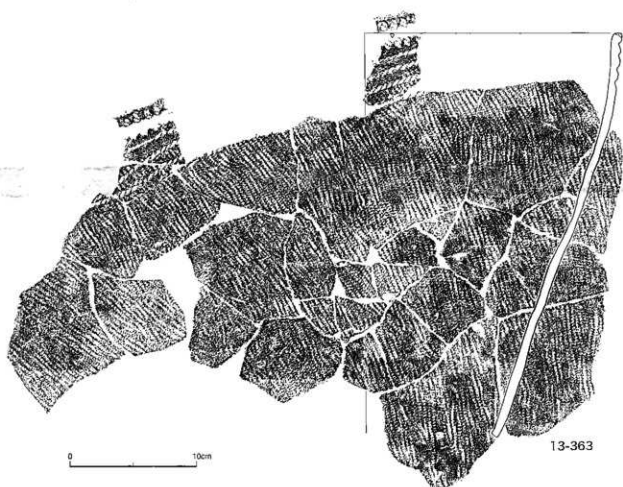


图 V-30 绳文土器 (30)

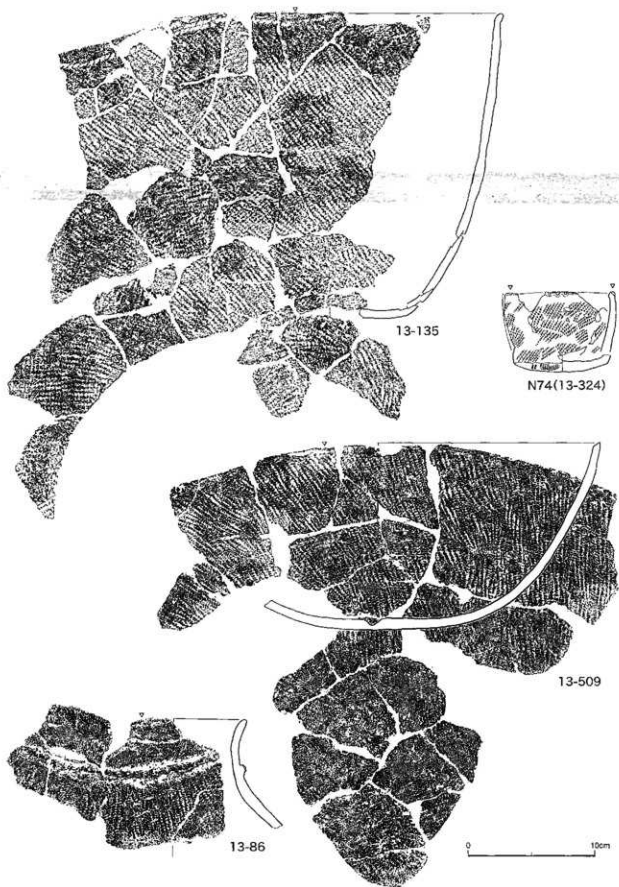


图 V-31 绳文土器 (31)



图 V-32 縄文土器 (32)

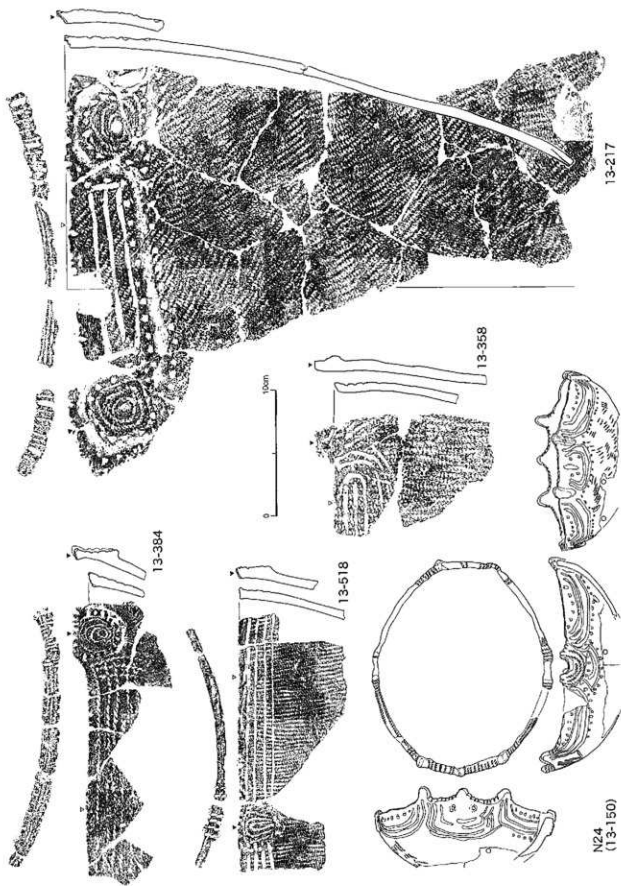


图 V-33 铜文土器 (33)

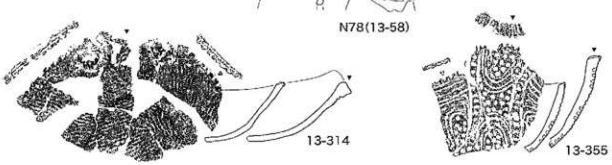
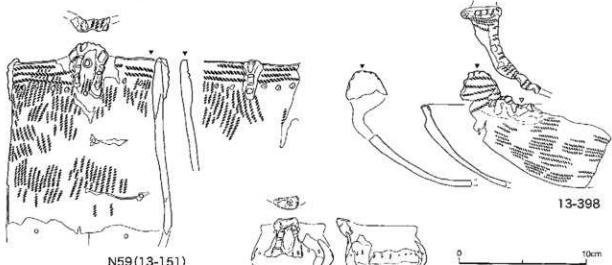
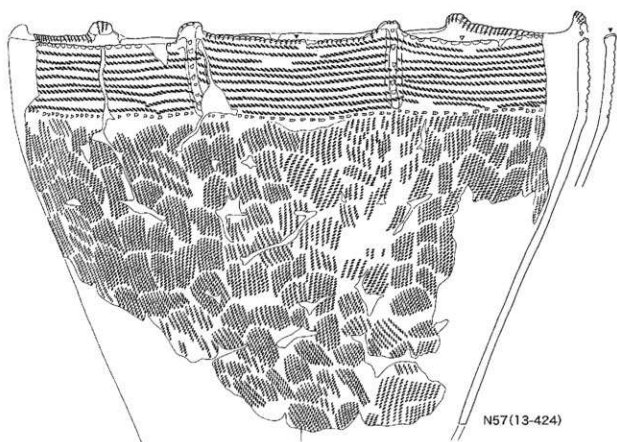
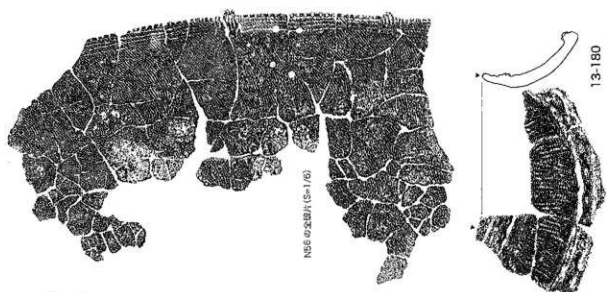


图 V-34 编文土器 (34)

13-180



N56の空面(5=1/6)

10cm

N56(13-149)

13-46



图 V-35 陶文土器 (35)

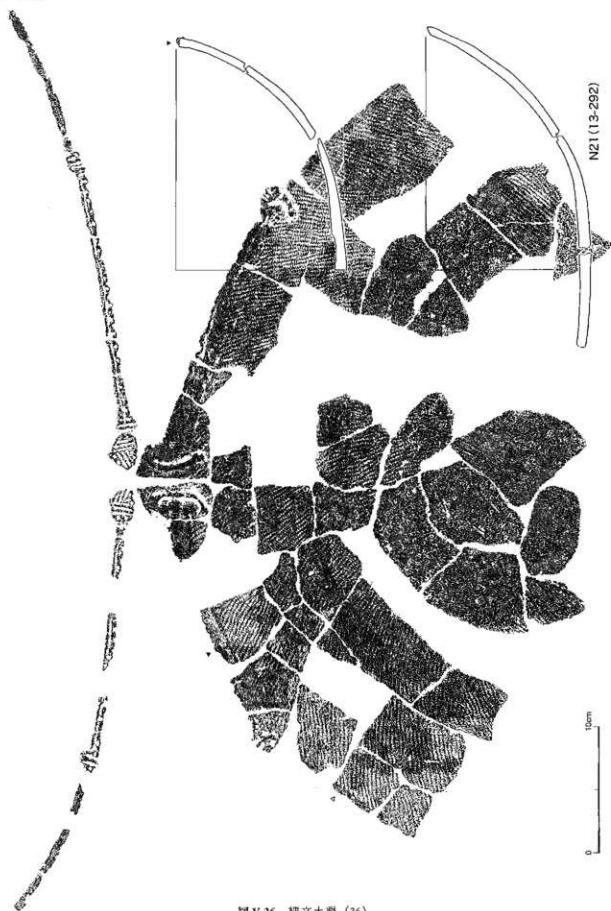


图 V-36 绳文土器 (36)

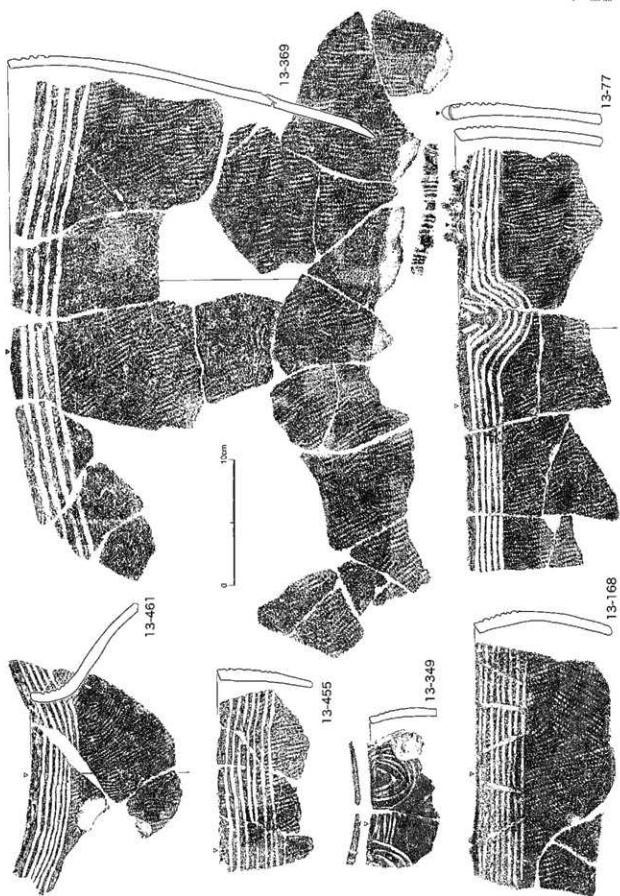


图 V-37 画文土器 (37)

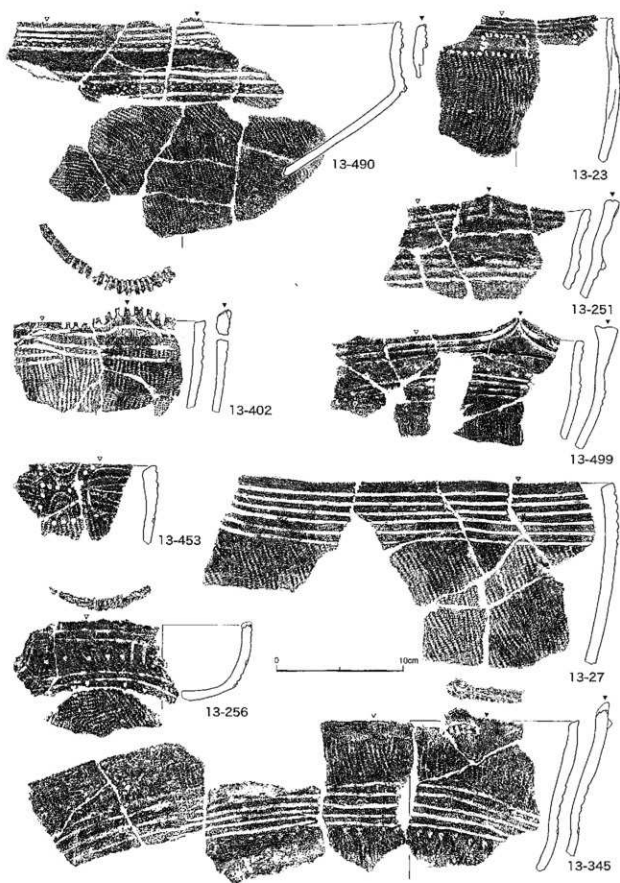


图 V-38 绳文土器 (38)

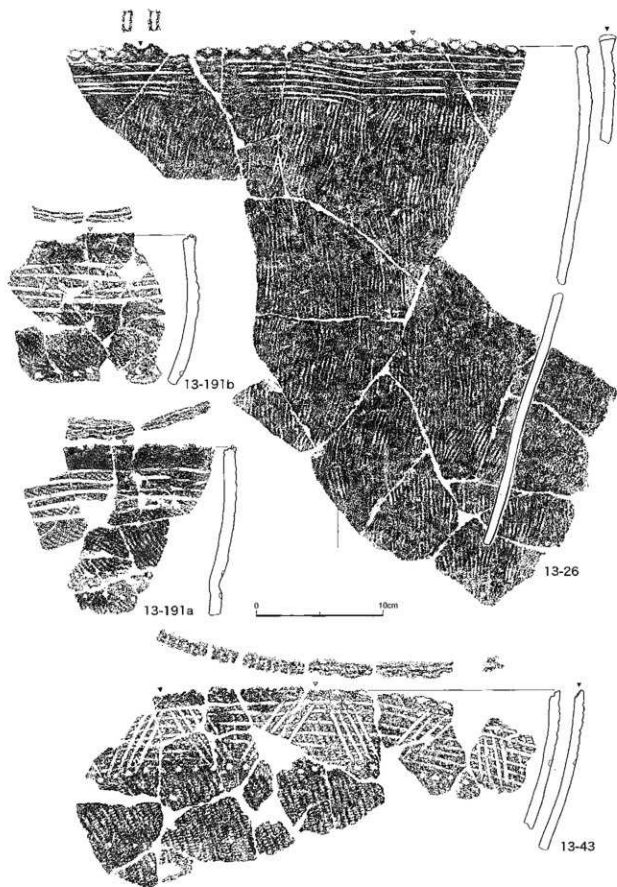
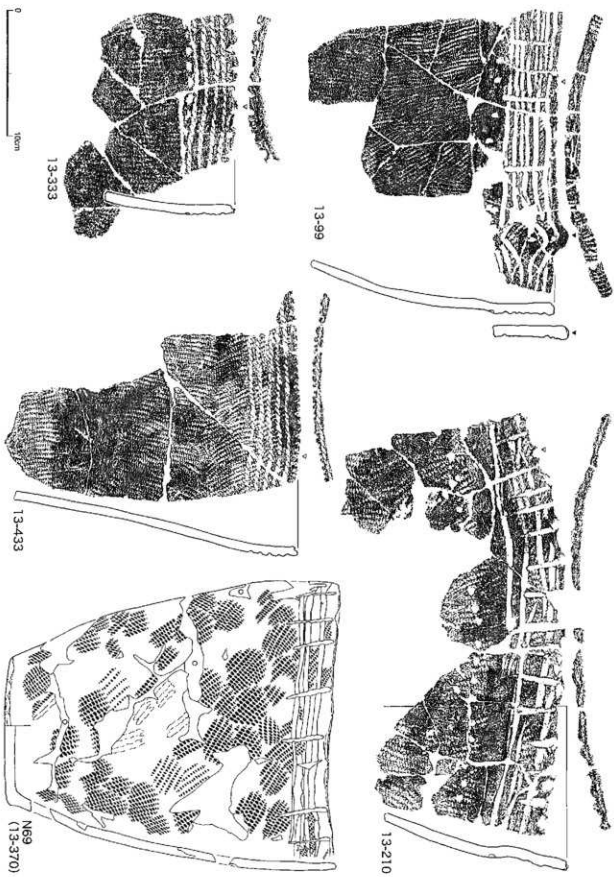


圖 V.39 繩文上器 (39)

图 V-40 绳文土器 (40)



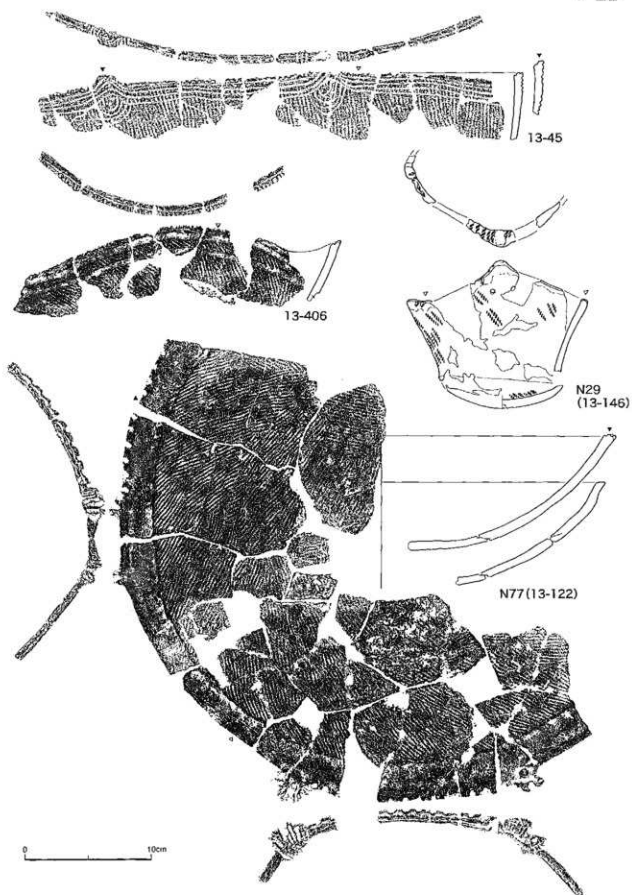


图 V-41 縄文土器 (41)

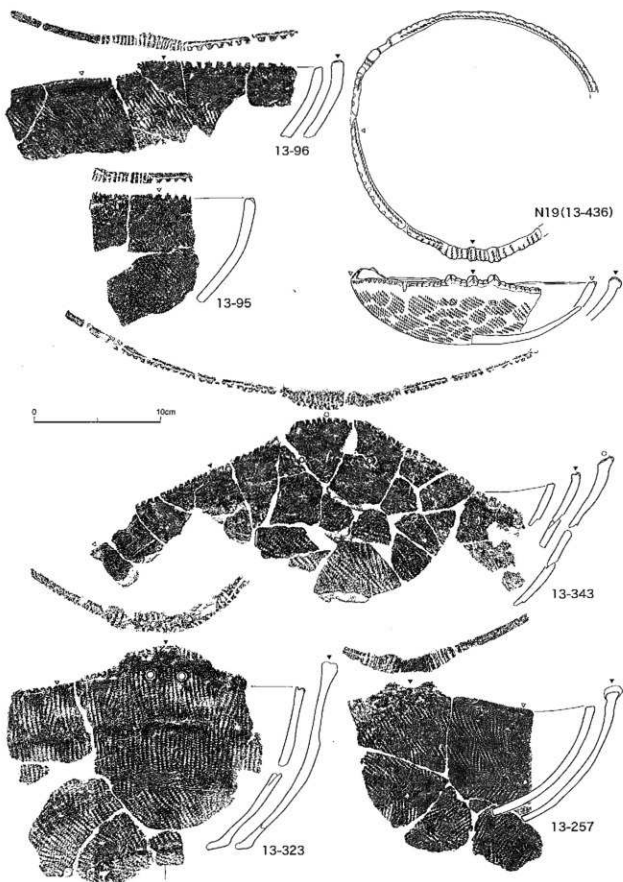


图 V-42 縄文土器 (42)

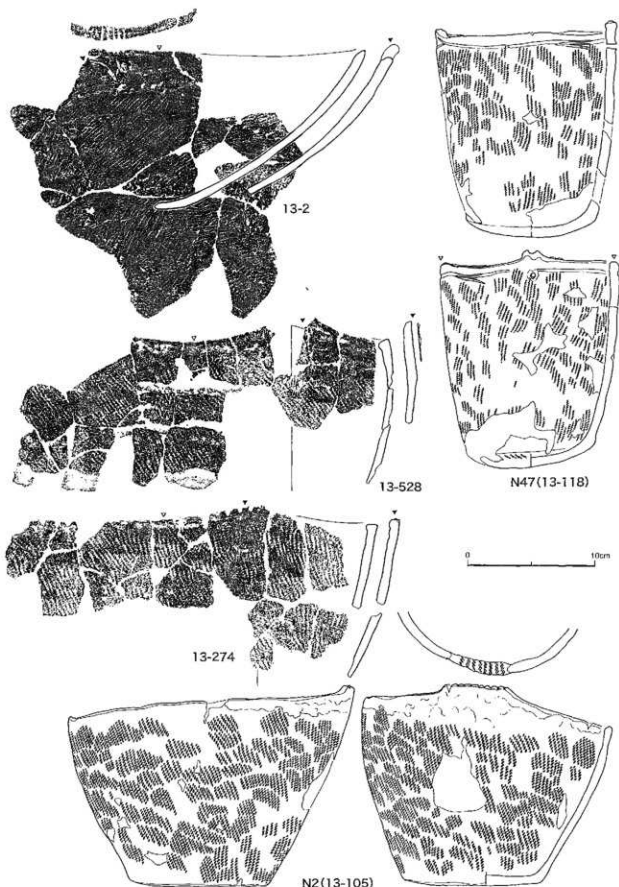


圖 V-43 繩文土器 (43)

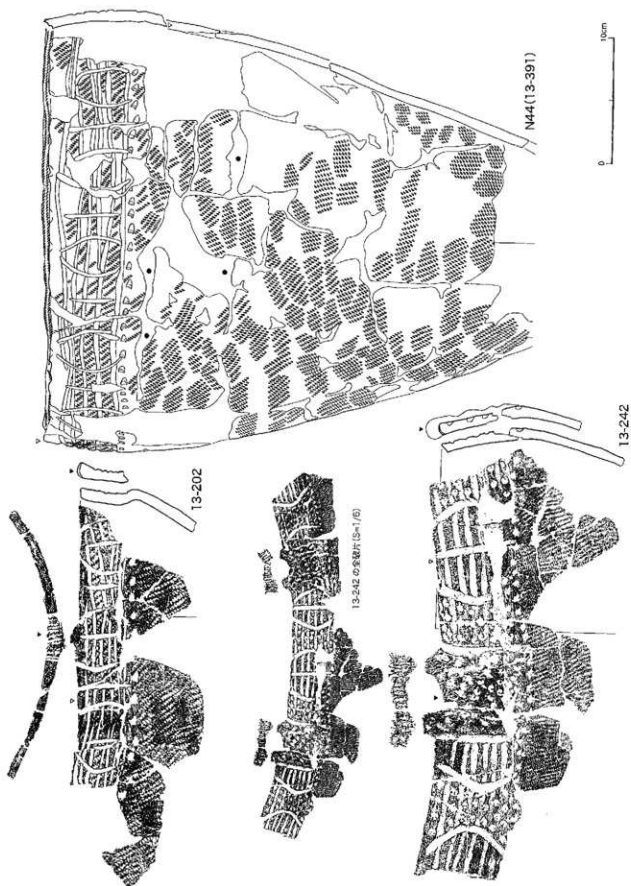


图 V-44 縄文土器 (44)

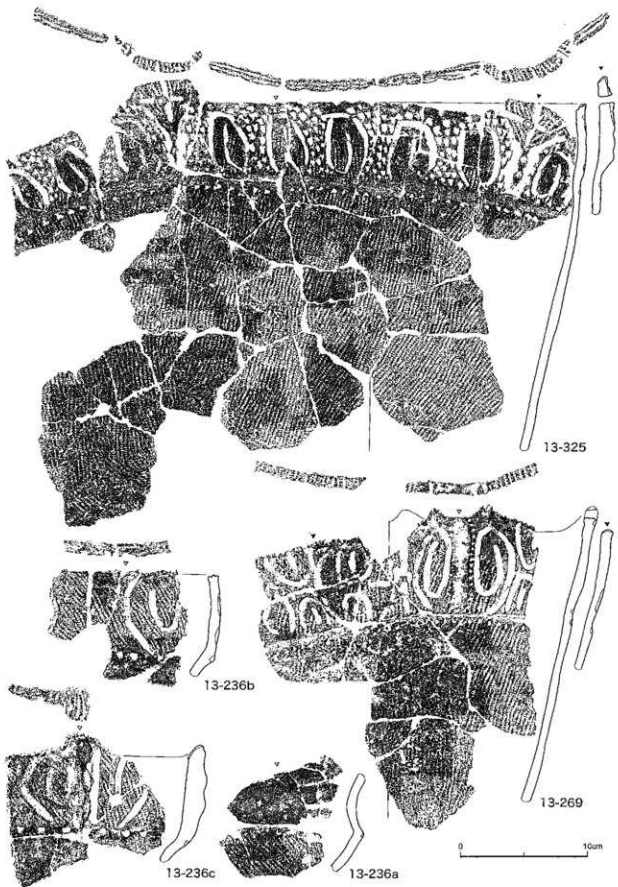


図 V-45 縄文土器 (45)

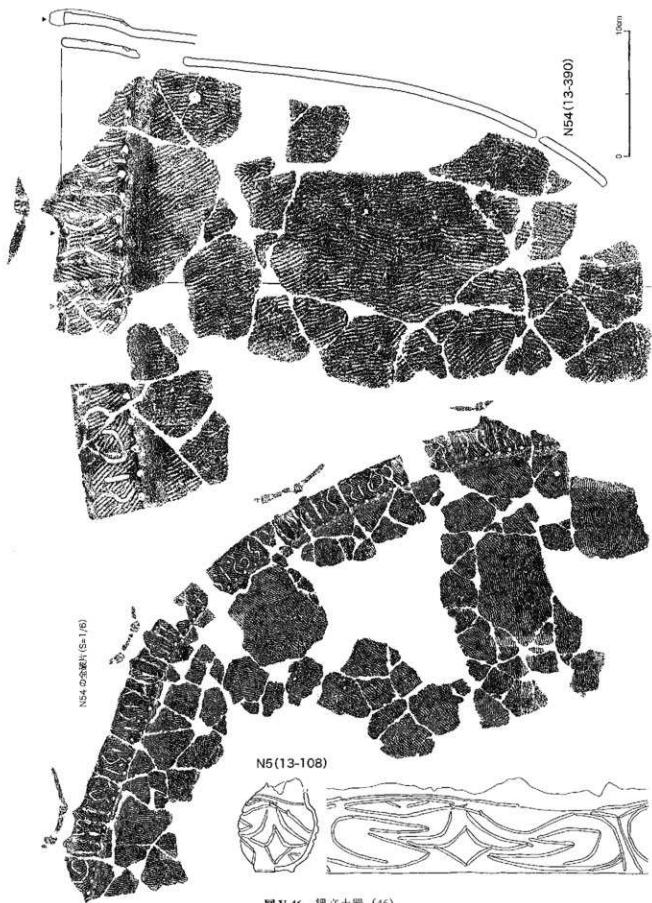


图 V-46 網文土器 (46)

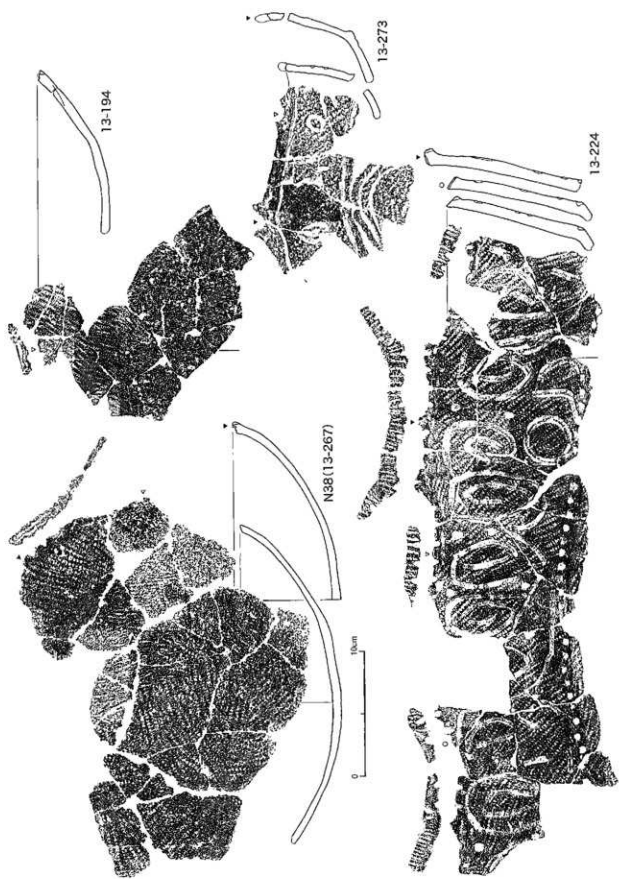


图 V-47 绳文土器 (47)

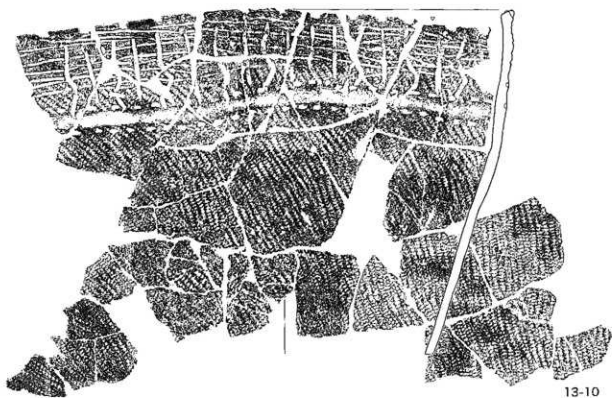
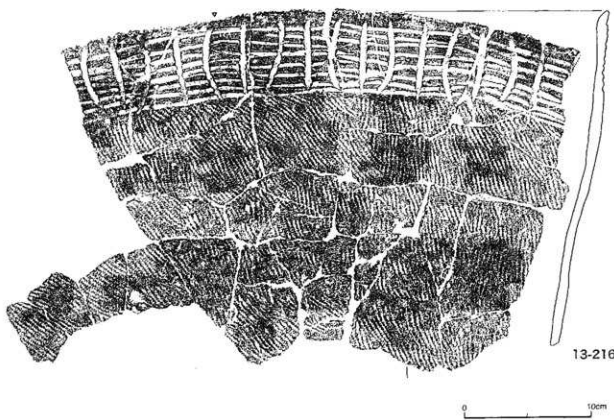


图 V-48 编文土器 (48)

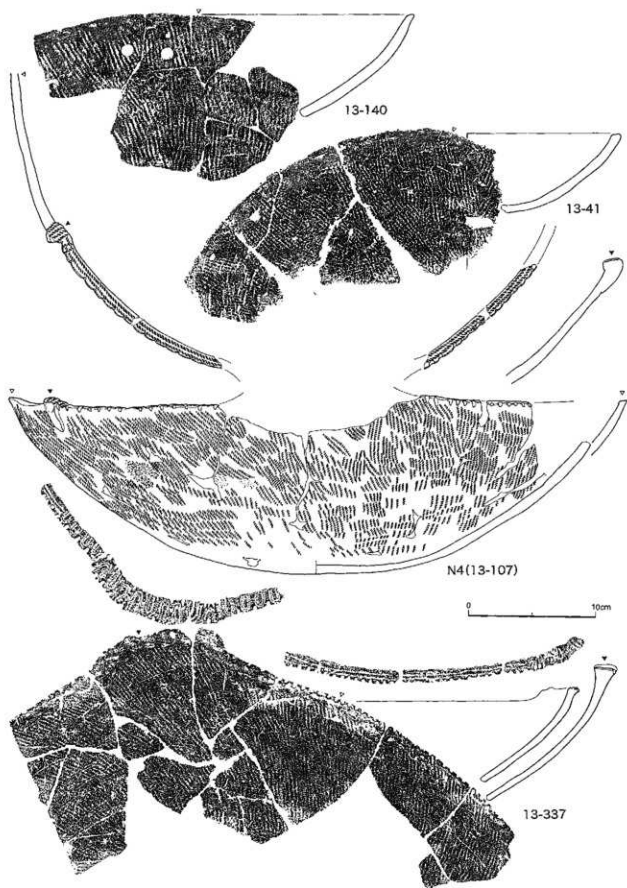


図 V-49 縄文土器 (49)

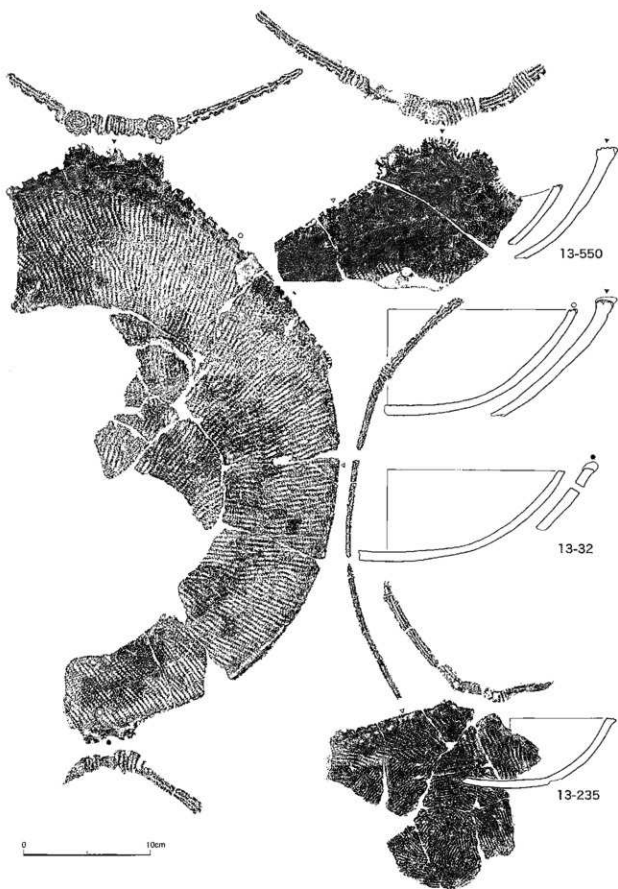


圖 V-50 編文土器 (50)

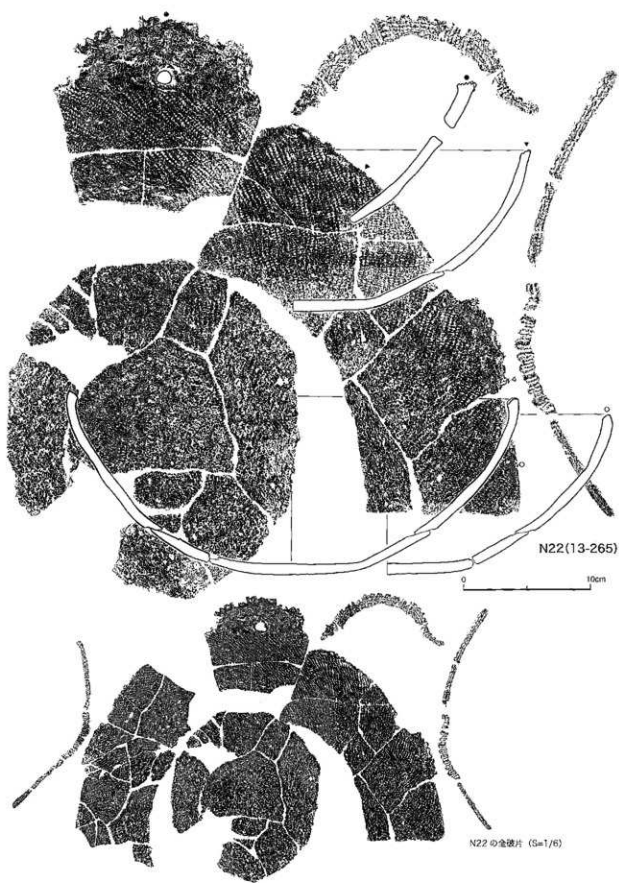


图 V-51 绳文土器 (51)

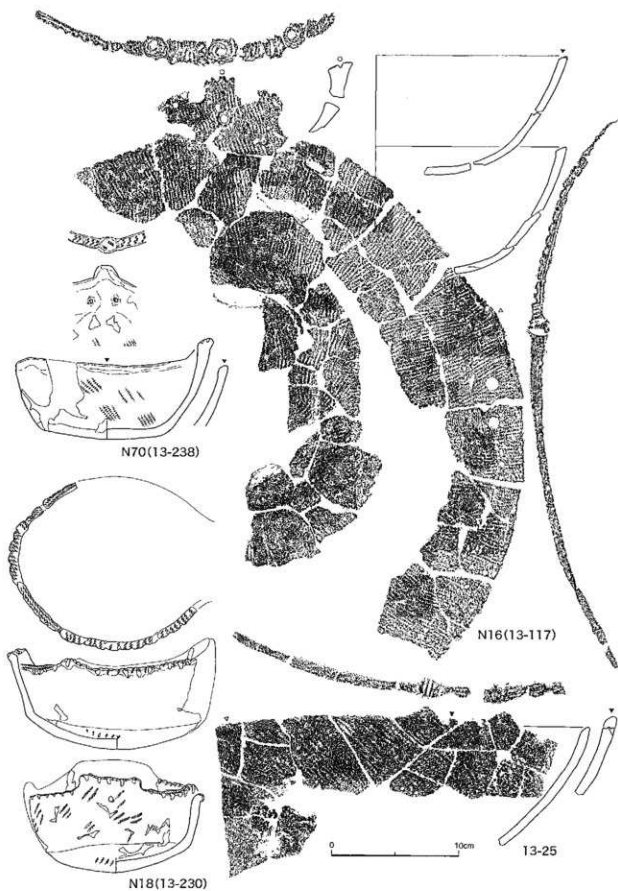


图 V-52 縄文土器 (52)

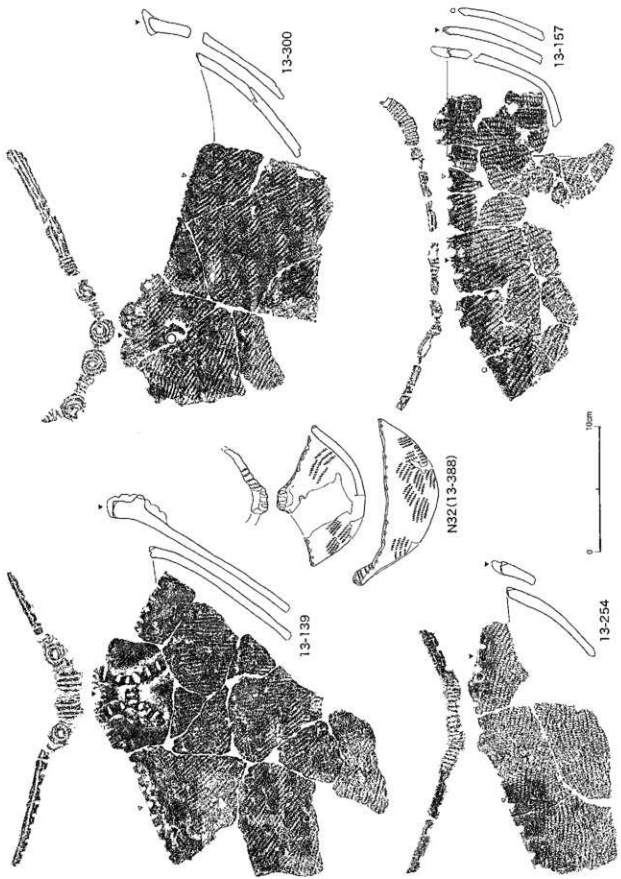


图 V-53 刻文土器 (53)

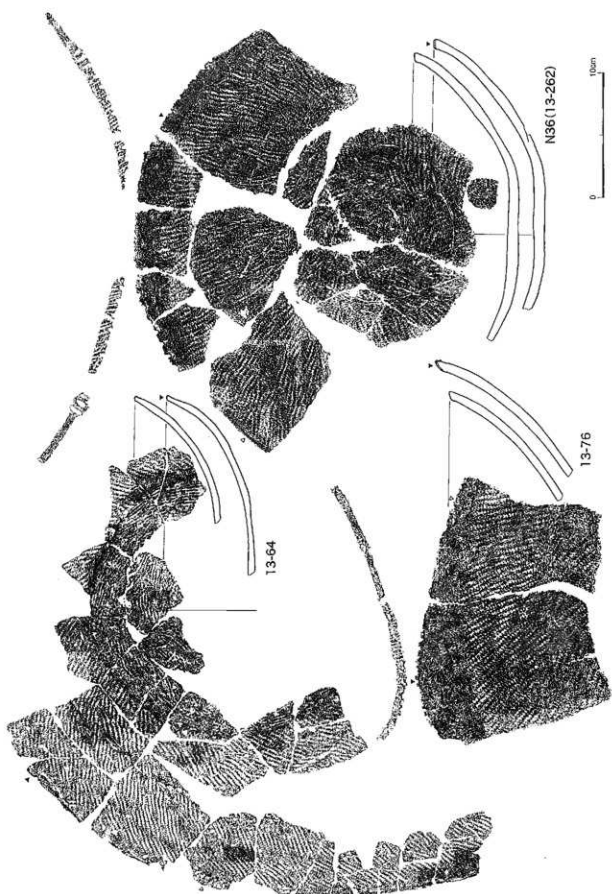


图 V-54 商义土器 (54)

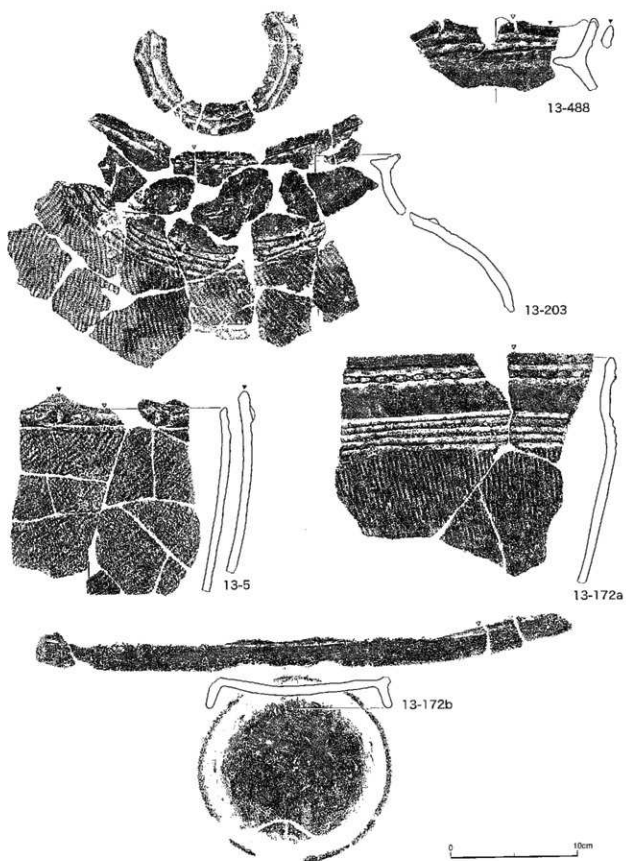


圖 V-55 縄文土器 (55)

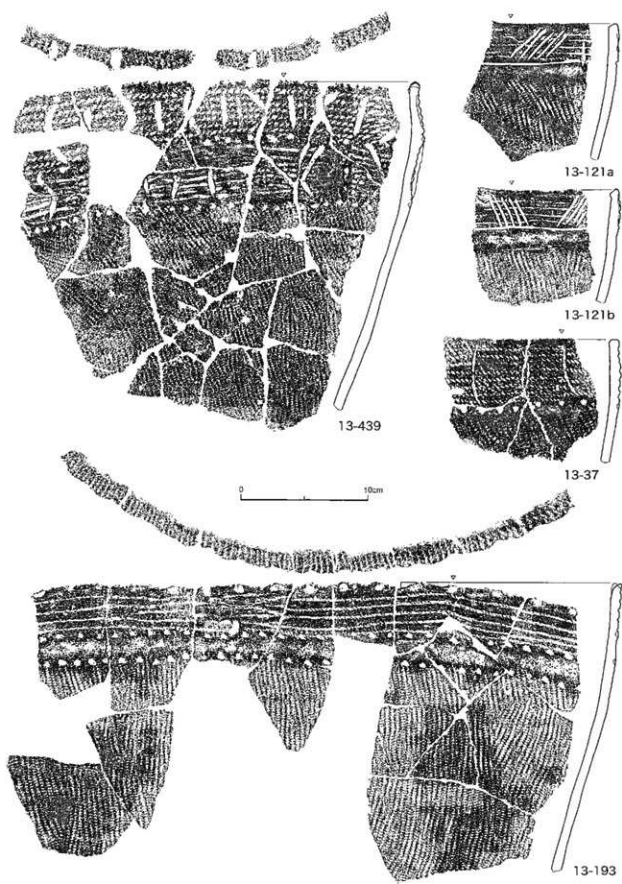
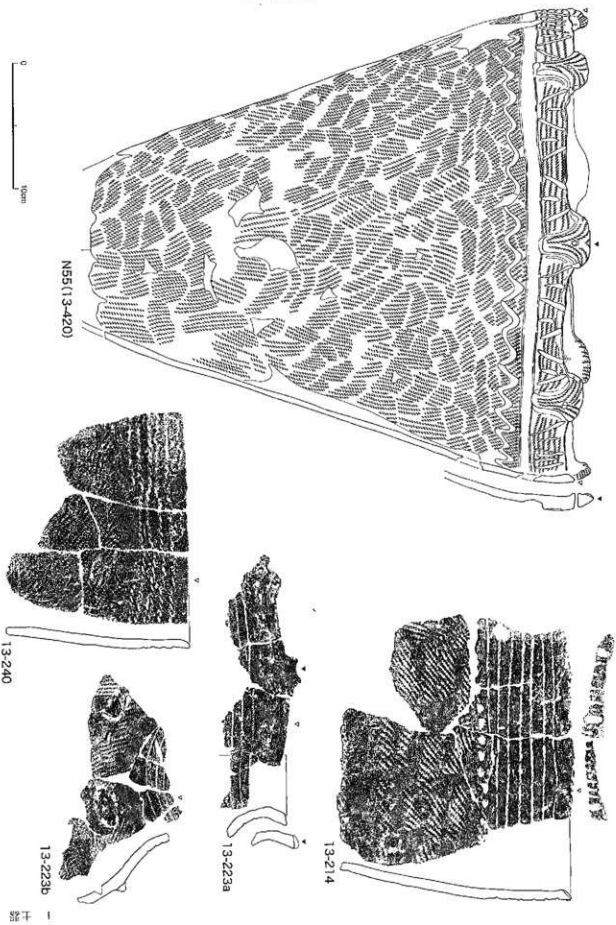


图 V-56 绳文土器 (56)

圖 V-57 繩文土器 (57)



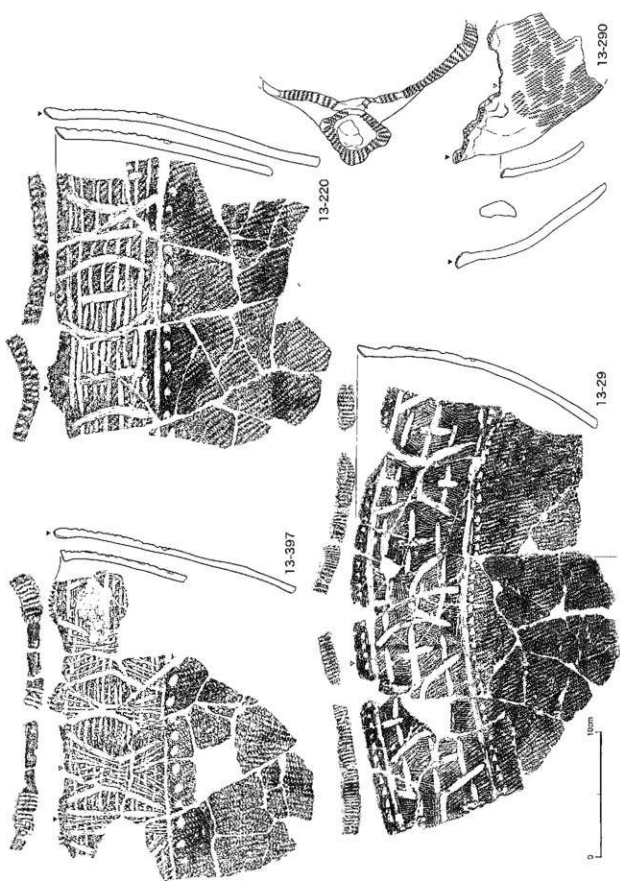


圖 V-58 網文土器 (58)

13-79

0 10cm

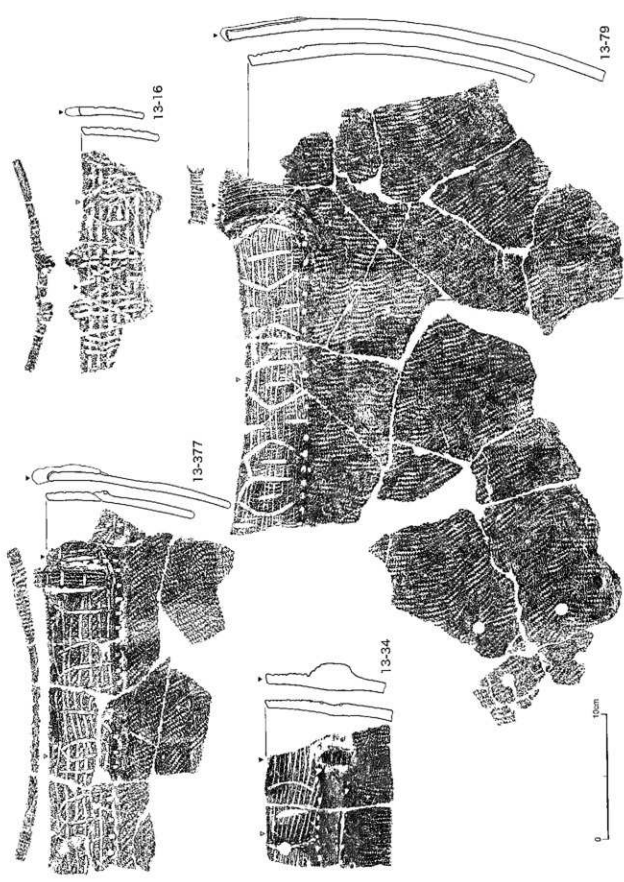


图 V-59 織文土器 (59)

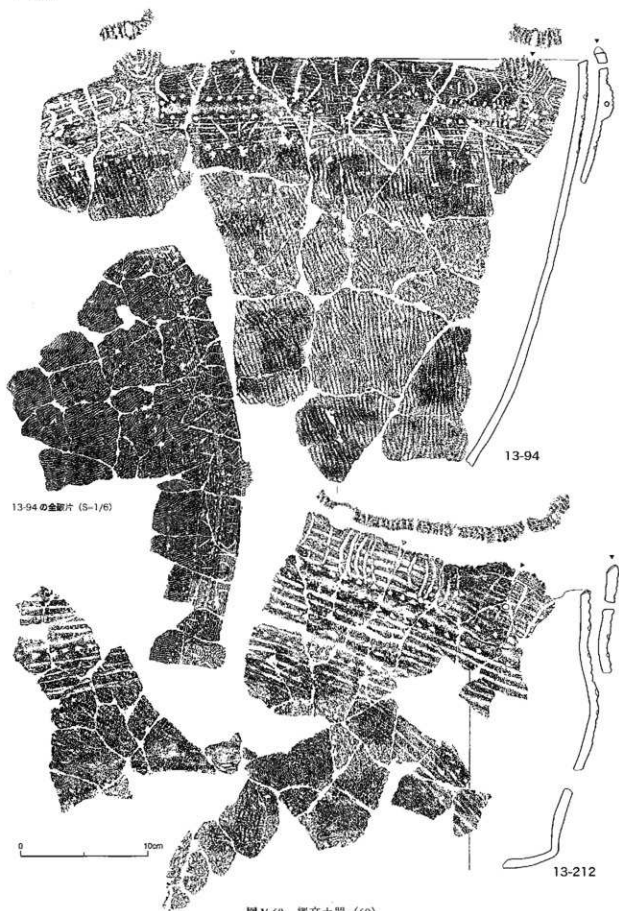


图 V-60 縄文土器 (60)

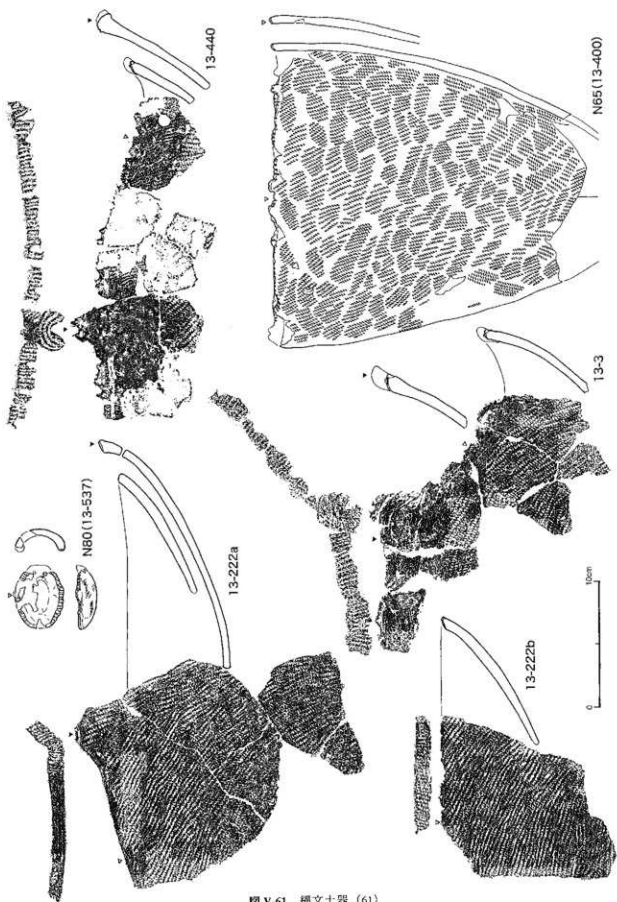


图 V-61 绳文土器 (61)

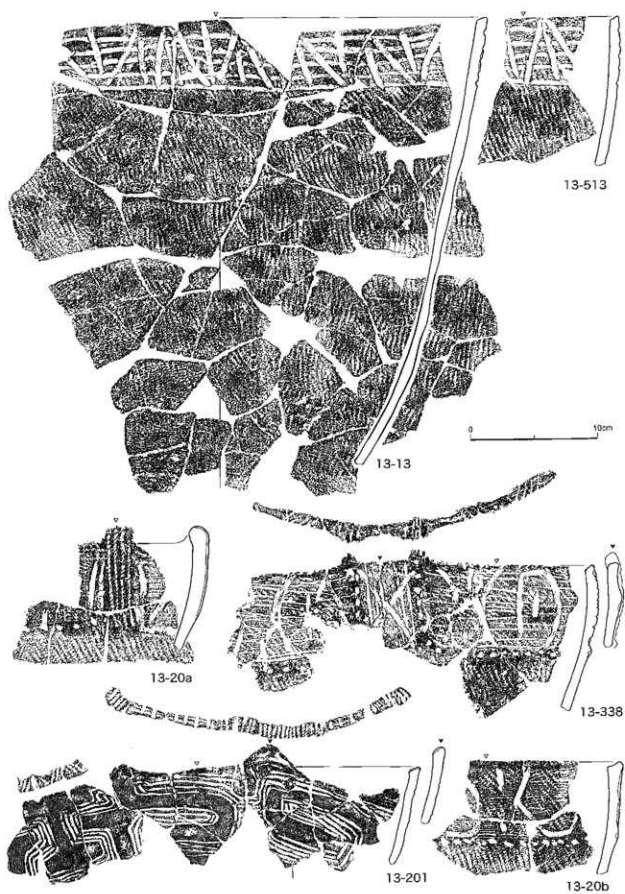


图 V-62 绳文土器 (62)

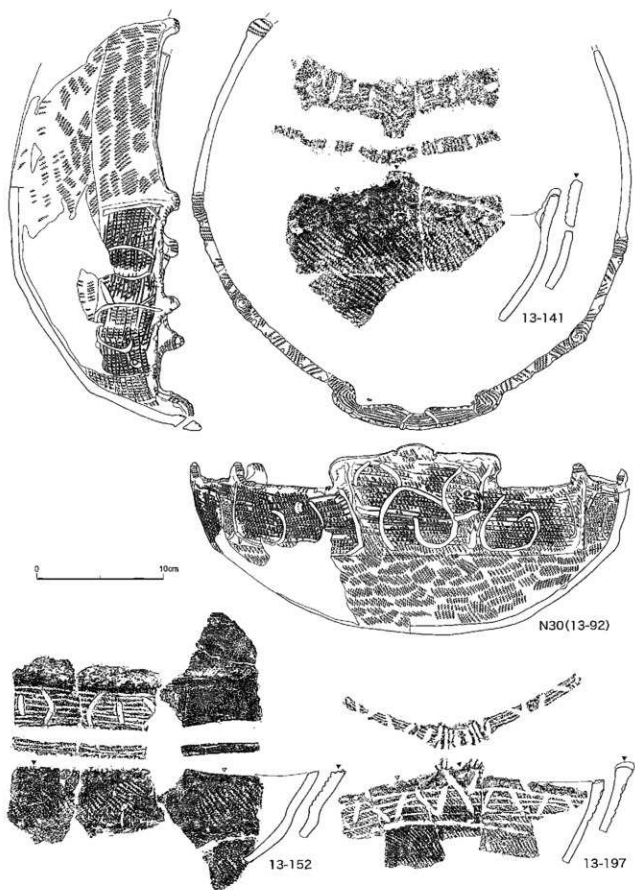


图 V-63 树文土器 (63)

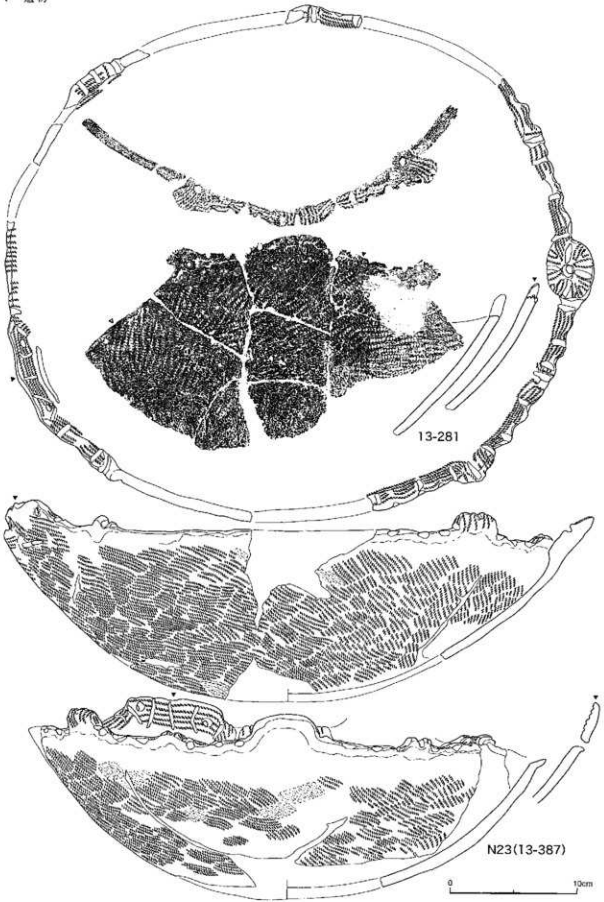


图 V-64 绳文土器 (64)

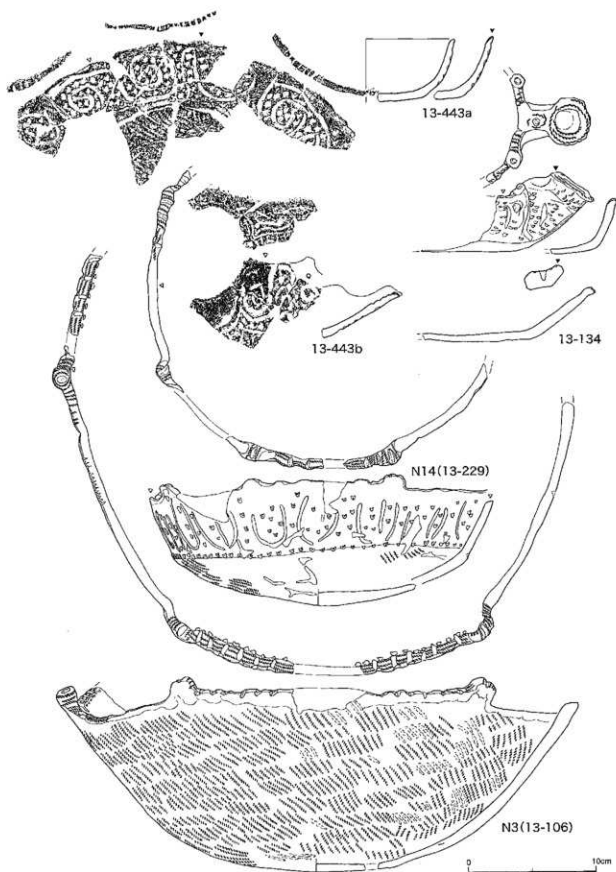


圖 V-65 繩文土器 (65)

V 遺物

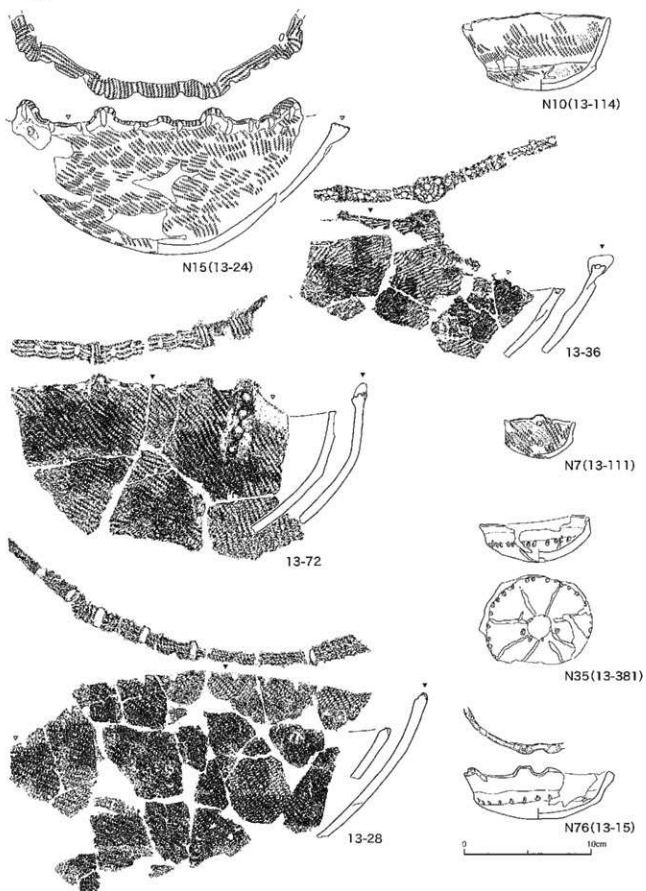


图 V-66 绳文土器 (66)

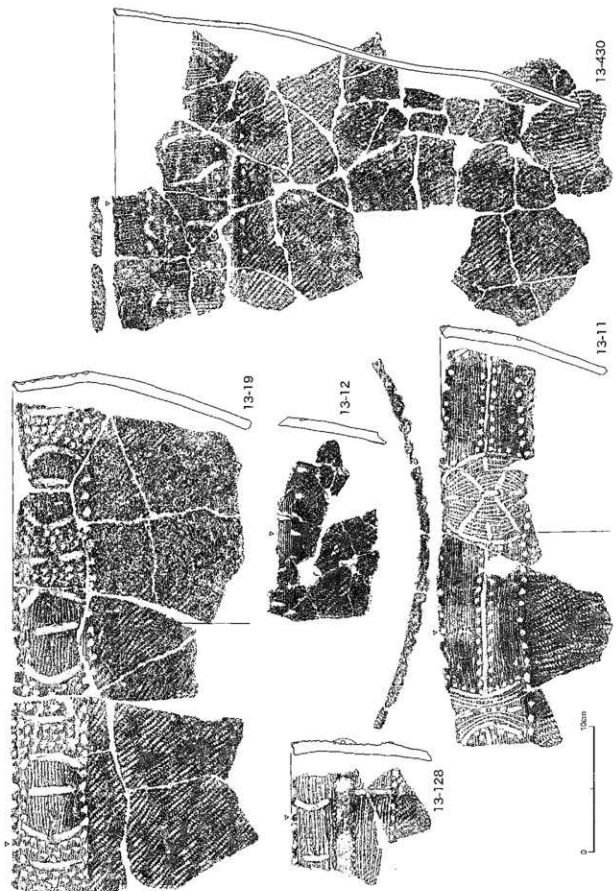


图 V-67 绳文土器 (67)

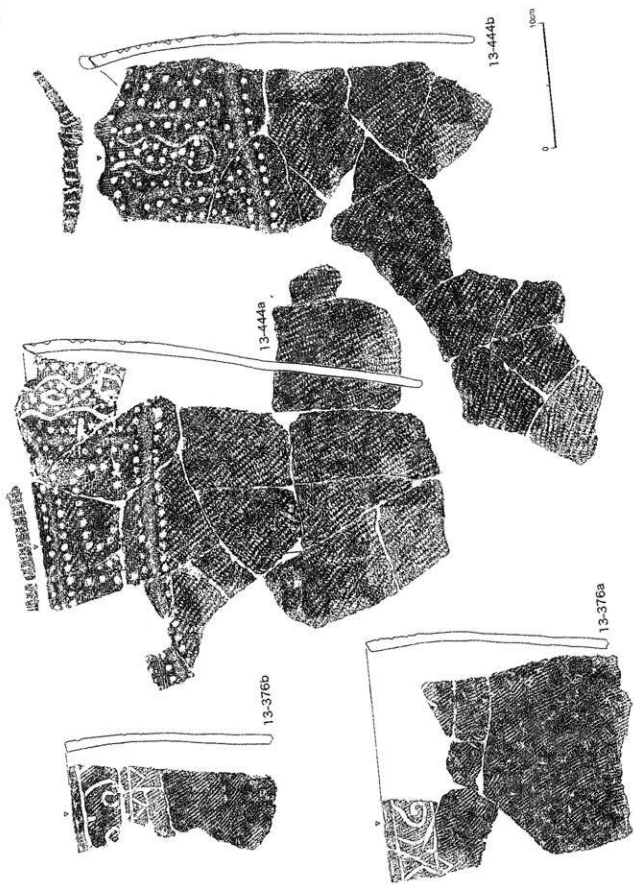
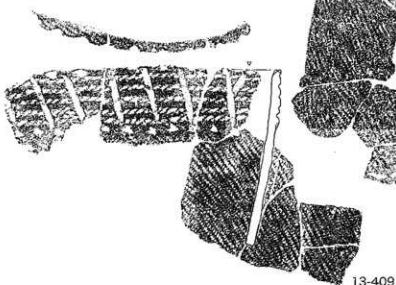
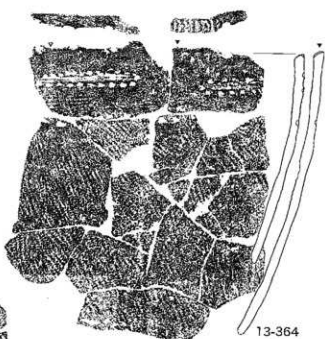


圖 V-68 陶文土器 (68)



0 10cm

圖 V-69 縄文土器 (69)

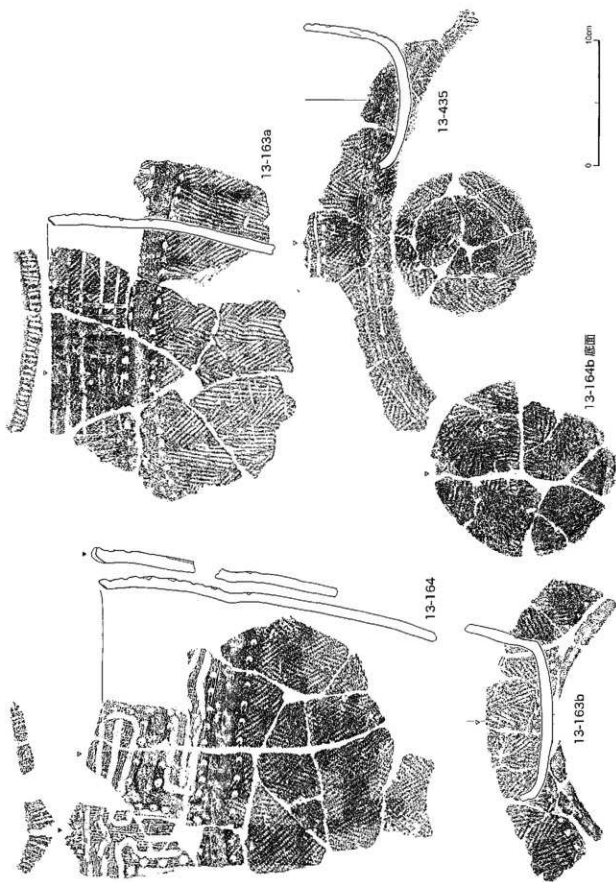


图 V-70 鳞文土器 (70)

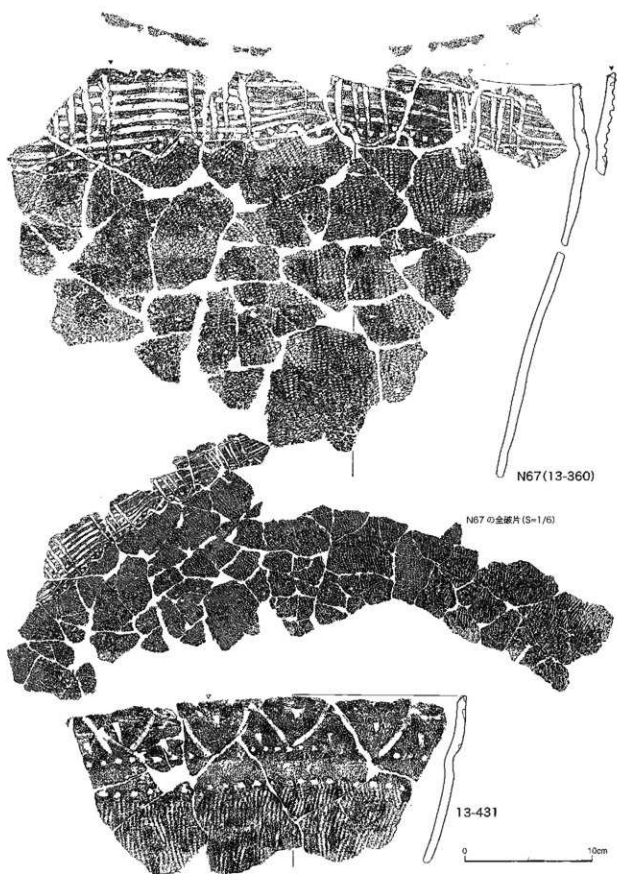


図 V-71 縄文土器 (71)



図 V-72 縄文土器 (72)

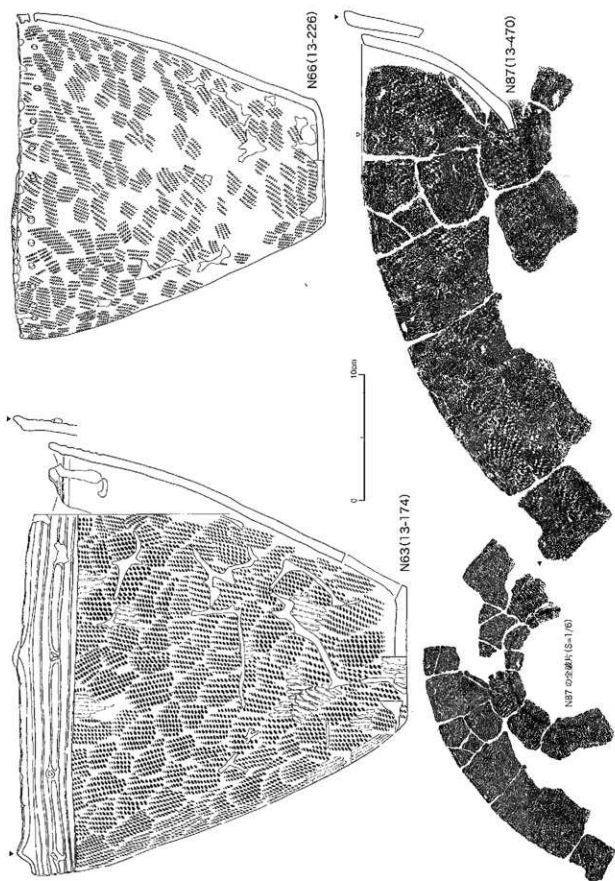


圖 V-73 繩文土器 (73)



図 V-74 縄文土器 (74)

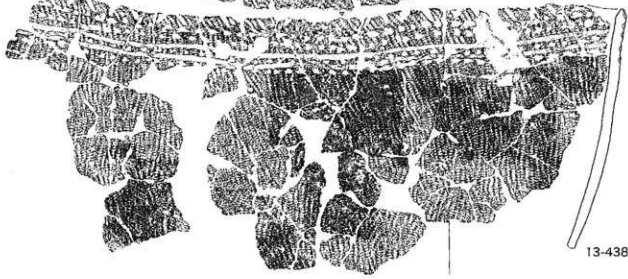
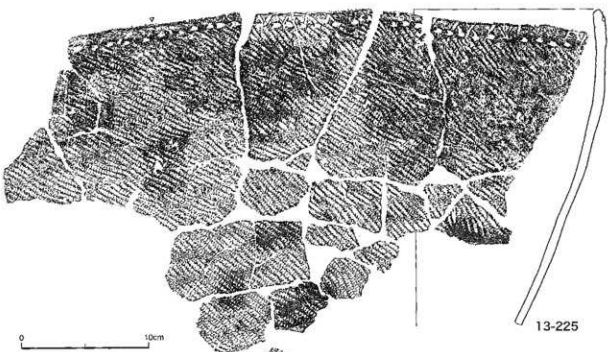


圖 V-75 網文土器 (75)

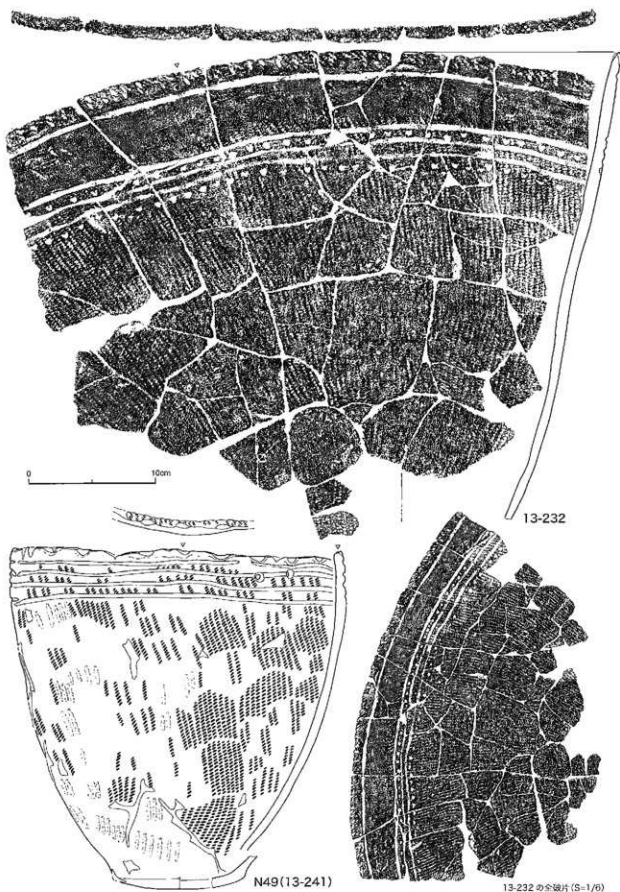


圖 V-76 絛文土器 (76)

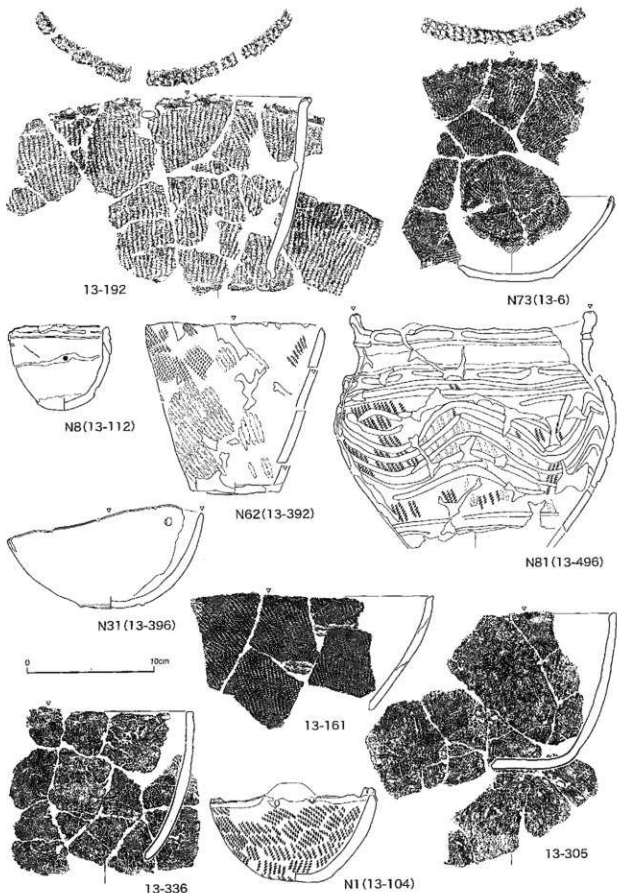


圖 V-77 繩文土器 (77)

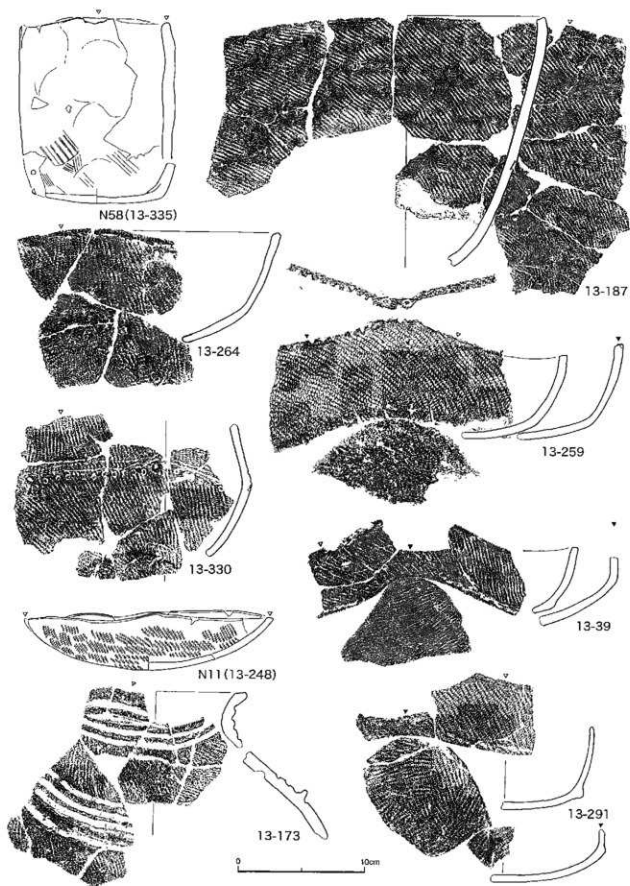


图 V-78 绳文土器 (78)

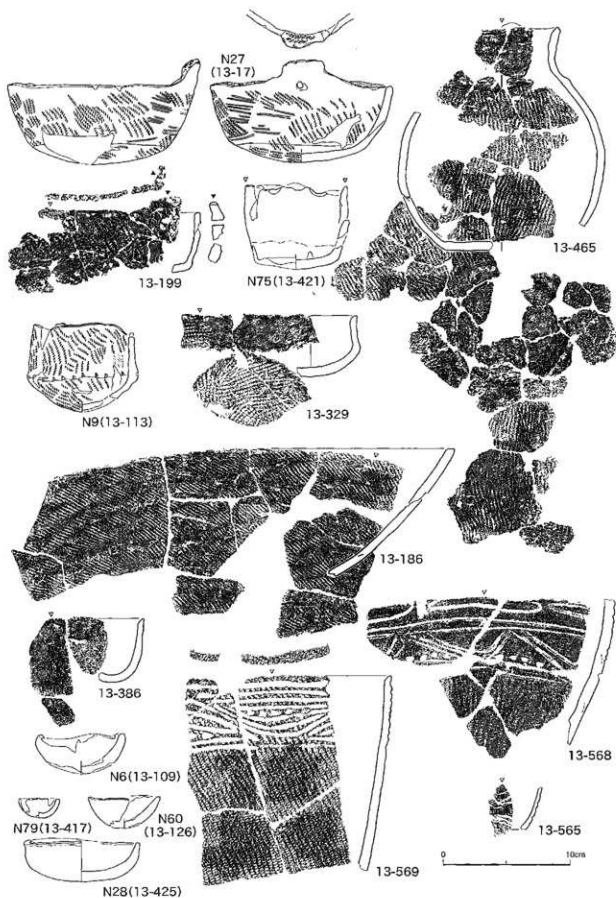


図 V-79 網文土器 (79)・絞縄文土器 (I)

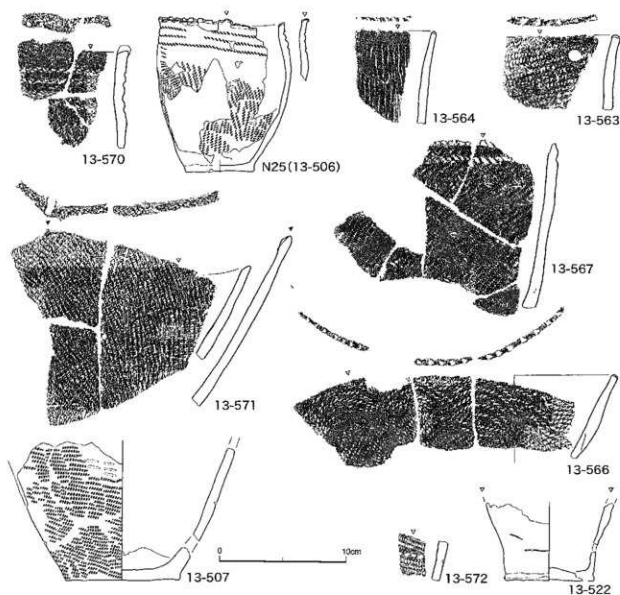


図 V-30 絞縄文土器 (2)

(2) 分類と出土状況

13-1類 図 V-1-6 に示した、厚さの変化の少ない単純な口部をもち、外面には4ないし多数条が平行する比較的細い沈線で水平線 (13-162) や交差する斜線 (278・379)、あるいはそれらの組み合わせ (287・294・480) が描かれ、稀には曲線が加わる (515) 類型と、類似の文様を-RL (63・162・167・208・308・354・368・520) -L (268・272・321) -R (322) など縄の側面圧痕で描く類型とがあり、ともに細い尖端の工具による刺痕が伴う場合がある (287・294・379・515)。縄による水平線は概ね4条以下である。沈線と縄の側面圧痕は同居する場合があり (162・515)、また-L・LRによる文様はときに拡張した口端に現れる (90・272・332・515)。稀に瘤状 (308) あるいは縦に孔の貫通する管状 (412) の浮文が見られる。

口辺には比較的低い突起 (13-63・167・332・372・535) が見られ、弱い波状線らしいもの (301・379・412・468) もある。372・535 では突起下に装飾的な孔の対がある。558 は口部を片口状に外へ引き出した箇所が複数あるらしい。口端にはしばしば浅い刻み (47・208・294) や口辺を波打たせる

ような大ぶりな刻み(167・307・308・322・354・368・526)、放射方向の-RL(278・412・468)または-L(321)、2段縄の閉端ともみなしうる馬蹄形の-L(272・372)または-R(13-301)があり、稀に極めて細かい刻み(272)や ∞ L(268)も見られる。また口端外角に垂直な短線(63・354・480・535)または-RL(162・372)を並べる例も特徴的である。これら口端の簡易な装飾はしばしば土器の全周に連続せず間歇的である(63・167・278・294・301・468・480)。簡易な装飾は屈折部の外面にも現れ、-RLに挟まれた円管による点列(308・372)、縦長の点列(321)や-RL閉端(162)の列が見られる。

口辺の狭い範囲を除いて ∞ LR・ ∞ RLで外面を覆う土器が多く、口辺に達する例もある。 ∞ LRの比率が小さくない。縦走条・斜行条がともに見られ、前者は大半が ∞ RLであるが13-301は ∞ LRによる珍しい例。横走部分の多い ∞ LR(272)も見られる。底面の縄文は有(278・354・468・558)無(412)の両者があり、縄文のない土器も少数ある(13-30・535)。

器形は深鉢(13-354・368ほか)、鉢(412)、浅鉢(278・307・515・535)が確認される。不等径の土器はあるが(535)多くないらしい。底部は丸底(278・535)と丸みのある平底(307・354・515)がある。N41は口縁に装飾のある部分の体側が突出しており、注口土器であった可能性がある。

平成13・14年度発掘では生活面181から240にかけて出土しており、同211-215で出土量が最も多い(表V-3)。11年度の158線半トレンチではII-2中(2)層からII-2下層にわたってある程度まとまった出土があり、中(3)・(4)層に出土量のピークがある。13-2類とともに今回の報告資料の範囲では最も下層部分から出土する。

本類は縄の側面圧痕を口部に水平にめぐらす資料を含む点など、千歳市美々3遺跡の平成3年度発掘品を標識とする美々3式(財団道埋文編1992の第1分冊66・67頁)にかなり共通する部分があるものの、口端に縄の回転押捺がほとんどなく、沈線文の内容も同一ではない。むしろ幕別町札内N遺跡の土壌25出土品(大矢編2000)などに類似の装飾の構成を見ることができる。これら水平にめぐらす沈線を装飾の主体としない段階の資料が本遺跡にも存在するであろうとの見通しに立って13-1類を編成したが、後述するように13-2類と層位的な差を確認することができず、なお分類の再考を要するようである。

13-2 ■ 図V-7-15に示した。やはり厚さの変化の少ない単純な口部であるが、口端がやや顕著に内傾するもの(13-93・206・270・418・554)、口端がやや厚いもの(356・524)が含まれ、外方に屈折する口部(489・517・532)も見られる。

口部外面に水平な沈線を3-7条めぐらせた装飾が中心で、特に比較的浅く太い沈線によるもの(13-49・138・158・246・270・309・366・524・538・553)がめだつ。この特徴は線を引いた後で線の内外に調整を加える手法(205・517・533)と近縁なものと思われる。同じく水平にめぐらす線を-L(521・536)-R(306)-RL(93・271・356・510・526)で表現する類型もある。縄による水平線は4-7条である。口部文様の下に浮文を施す場合がある(205・526)。

波状線は未確認、口辺の突起(13-55・306532・533)も顕著でなく、突起下に装飾的な孔をもつ例もない。ただし沈線に加工する類では口端に複雑な装飾がある場合があり(469)、これは口端外角に大ぶりな凹点を並べ上のはみ出しが浮線様に連なるもの(246・270・554)と関係するようと思われる。これ以外にも口端には外角(158・206・366・418・524)または上面(55・138・356・357・526)に刻みを加える場合があり、概して疎らに施される。538は全周に連続しない刻み、55は突起部分に放射方向の-RLを施す例である。

外面の大部分に ∞ RLを施すものが多く、 ∞ L(13-246) ∞ LR(334・533)の例は少ない。回転押

捺が概ね文様を避ける場合(図 V-7-10)と文様の下地となる場合(図 V-11-15)とがある。体部から口部にかけてくびれのある土器ではくびれから上に押捺が及ばない(489・517・532・533)。縦走条が優勢で、口部付近で条が斜行しても体部以下は縦走条となることが多い(55・170・206)。底面の縄文はやはり有(378・524)無(334・532・533)の両者が見られる。

深鉢(13-93・246・334・378・524ほか)と壺(532)が確認され、鉢と思われるもの(205・533)もあるが浅鉢は多くないらしい。不等径の土器は確認されない。底部は平底、稀には形骸化した揚底(532・533)で前者には丸みのあるもの(334)とないもの(378・524)が見られる。確実な丸底の例はないが丸底に浮線をめぐらしたようなもの(309)がある。

生活面 186 から 245 にかけて連続的な出土が見られ、生活面 211-225 で多い。13-1 類よりむしろ下位に出土の重心があるようでもある。11 年度トレンチでは主に II-2-上層から中(4)層で出土し、中(2)層で最多となるので 13-1 類より幾分上位にあるようにも見受けられるが、全体としては 13-1 類と 2 類の間にほとんど出土層位の差がないと言わなければならない。一方 13-4 類以降とはほぼ完全に出土層位が異なる(表 V-3)。

本類に近いものは早来町遠浅 I 遺跡(苫小牧市埋文編 1987)などで知られてはいたが、従来あまりまとまった類例のない資料である。水平な沈線を主な装飾とする本類のような資料が既知の晩期後葉土器の前に位置することが知られたのは本遺跡の調査成果の一つと言えよう。年代上美々 3 式等と平行する可能性がないとは言いきれないが、本類に含まれる亀ヶ岡式類似の上器の特徴から判断して概ね晩期後葉の範囲に入るものと考えられ、これまで水平な側面圧痕等を指標に晩期中葉のもののみなされていた資料から本類に相当する段階のものを分離する作業が今後必要となるように思われる。I 3-3 III 3~数条の水平な沈線または縄の側面圧痕を含む文様の下辺に点列があるもの(図 V-17-23)を主体に、これらと近縁らしいものを本類とし、図 V-17-31 に示した。

口端外角が外上方に突出(13-22・38・61・85・119・120・147・188・295・352・385・514・530)、または口端が顕著に内傾する(25・74・83・148・153・243・328・359・413・509・552)ものが多く、内方に屈折あるいは弱くくびれる口部(66・78・133・190・371・530)が稀でない。

口部の装飾は水平な沈線(13-22・62・67・68・83・120・123・127・147・148・153・165・169・190・258・302・352・359・371・413・415・494・514・530)または-RL(74・78・135・166・188・363・451・574)のほか、上下の水平線をつなぐ描線を含んだ文様が特徴的で、沈線(38・66・119・133・328・552)または-L(38・129)・-RL(116)で描かれる。これらの線描の間にはときに円形(62・123)・腎形(169・552)の点列や、斜めに突いた点列(129)が現れる。また水平線と鋸歯状の斜線が重なる沈線文(61・87・115・145・243・295)が見られ、その下にところどころ複線で描く谷形の文様が見れる場合がある(87・145)。

口辺にはしばしば突起(165・190・280・352・494)があり、一周 4 単位のもの(165・352)が確認される。突起下の装飾的な孔は単独のもの(165・190)と対をなすらしいもの(258)がある。波状線と呼べそうなものは稀で(67・258・494)、少なくとも同じ大きさの波頂部が周 3 箇所以上あるものは確認できない。口端外角にはしばしば短線状の刻み(13-74・87・115・119・120・127・133・147・153・165・190・302・324・413・530)または縦に押捺した-RL(52・363・514)の列がある。同様の簡単な装飾は口端上面に現れる(短線 62・166・574、-RL 38・67)場合もあるが突起・波頂部に限られる(67・258・494)か全周に連続しない(62・451)例が少なくない模様である。

口部文様の下辺にも口端のものに似た単純な装飾が現れるのは本類の特徴である。-RL 閉端(13-66・145・295・352・371・514)、下から(129・133・166・415・574)または横から(87)斜めに突い

た点列、円形の点列(85・120・147・188・190)のほか、鋸歯状の沈線(62・68・85・147・165)が特徴的で馬蹄形の-RLを並べる例(530)もこれと近縁のものと考えられる。これらの装飾は屈折(66・133・190・295・371・530)または浮線(188・514)の上に位置することが少なくない。文様下ではないが86の浮線上の点列(-RLか)も同様のものである。

大多数の土器が外面の大部分に∞RLを有する。稀に∞LRの個体(13-83・147・324)があるが、2段縄の回転押捺を欠く例は確認できない。口部文様と回転押捺は重複する場合としない場合の両者が見られる。底面にも不明瞭ながら縄文を施す例が多く(115・135・165・324・352・415・494・530)これを全く欠く例(371・509)は少ない。

深鉢(13-129・165・371・413・415・514・530ほか)・鉢(324・352)・浅鉢(494・509)・壺(86・115・119)が見られる。不等径の浅鉢(494)は屈折の上の弱いくびれに細く連続性の良くない沈線で描く体部文様が本類の口部文様の一部に似るのでここに分類したのであるが多少問題を残す。いずれにせよ等径の土器が多い。底部は平底で丸みのあるもの(115・135・165・324・352・494・509)とほぼ平坦なもの(371・415・530)が見られる。深鉢・鉢・壺では底面と体側との境に稜線が現れるが、浅鉢の一部では認められず(509)、丸底に接近する。

生活面181から225にかけて連続的な出土が見られ、同186-205付近で最も多い(表V-3)。13-1・2類より上位に出土の重心があるとみてよいが、生活面211-215や131-135でややまとまった出土があるのは分類が不十分であることを示すかもしれない。11年度トレンチではII-2中(1)層で最も出土点数が多い。

本類の一部に類するものは遠浅1遺跡、美々3遺跡遺跡の平成元年度発掘(財団道埋文編1991)や苫小牧市柏原5遺跡A区(同市埋文編1997)の出土品などに散見されたが、本遺跡の発掘で初めて注意されたと言ってよいものが中心となる。層位的にも型式学的にも水平な沈線文を特徴とする13-2類と立体的な装飾をもつ13-4類との間をつなぐ一群とみることができる。

13-4類 口部外面に水平方向以外の浮文をもつもの(図V-32-36)を主体に、これと関連が強いと思われるものを本類とし、図V-32-43に示した。

13-3類同様、口端外角が外上方に伸張する(13-45・122・149・191・210・217・384・406・424・433)、あるいは口端が顕著に内傾する(2・43・77・168・292・314・333・345・355・358)ものが多いほか、目立って厚い口端(26・402・453・455・528)や櫛状に段を作る口部(180・251・490・499)が見られるが、比較的単純で特徴に乏しい形態の口部も少なくない。口部から体上部に弱いくびれ(23・46・122・191・210・251・398・490・499)ないし太い凹溝(99・217)をもつものが出現する。13-3類と異なりこのくびれには文様が位置しない。

口部には水平な沈線(13-26・30・191・251・402・406・499・518)または-RL(333・433)・-L(23・46・151・424)、それらを上下に連絡した文様(沈線217、-RL149)、水平線と鋸歯状斜線の重複(43)、文様中の点群(355・453)など13-2・3類と区別しがたい装飾も見られるが、沈線が比較的深くて連続性が良く(27・369)水平線相互が密接する傾向(77・99・168・239・249・455・461・490)、縦横の描線が曲線的に移行する特徴ないし円弧の多用(沈線例77・99・150・349・358、-RLの例384、-L例45・355・453)、水平線と垂線列の重複(99・210・370)、文様が単純に並列・重畳せず魚鱗状の入り組みを見せる傾向(45・150・217・349・355・453)などは新しい様相と思われる。また口部外面に文様らしい文様を持たない土器の多さ(図V-41-43)が3類との差となる可能性があり、その多くが口部に無文帯を有する(2・95・96・105・122・257・274・343・436・528)。本類の特徴である浮文は原則として回転縄文を欠く代わり、多くは刻み(13-58・151・249・292・314・345

・355・384・398・518) 点列 (217・424) または短線列 (30) を有し、また-L (30・46・150・217・384・398・424・518) -LR (149) で装飾するものが多い。46では凹溝を跨ぐ橋状把手となり、528の浮文は縦に孔が貫く。これら浮文上の口辺は例外なく突起ないし波頂を形成する。

突起は多いが、周に2箇所の高まりを持つもの (150・528、およびおそらく239・274) を除けば波状線と形容できそうなものはない。突起下の装飾的な孔は珍しくなくやはり単独のもの (118・151・239・402) と対をなすもの (146・323・335・343・398・436) が見られる。浮文上のものを含め突起口端には主に-L (13-30・45・46・77・95・96・99・122・146・150・217・239・256・257・292・323・343・345・384・355・398・402・436) 稀に-RL (105・149・518) -R (2) や深い点 (58・249)、沈線 (26・118・168・217) が施される。また突起以外の口端に縄の側面圧痕を円周方向に1 (35・36・95・96・257・343・323・406・433・436) 2 (43・45・46・99・122・150・210・314・333・345・355) ないし3条 (191・217・384) 施すものが現れるのは本類の特徴であって多く-Lによる。稀に-LR (149) -RL (433) がある。この円周方向の側面圧痕を施した後、多くの場合口端外角に刻み (46・95・96・149・217・256・257・292・314・323・333・343・384・436) あるいはより大ぶりで浅い押え (43・191・210) -L (45・406・436) -RL (433) の列が加わる。292ではさらに外角の刻みと-Lの間に点列、384は口端内角にも刻みがある。円周方向の側面圧痕をもたない例もときに口端外角に刻みないし押えを有するが (26・249・424) 多くはない。刻みの範囲が突起付近に限定される事例がある (239・402・528)。

口部文様下に右または下から突いた点列 (13-30・43・150・151・180・256・333・424・453・490) や沈線による簡単な装飾 (249) のある例を見ることは13-3類と同様で、さらに文様下というより前述のくびれ・凹溝に沿って点列が施される例 (23・99・191・210・217) が出現する。従って点列は弱い稜上に位置することが多く、ときに強い稜ないし浮線上 (180・490) に現れる。口端外角のそれに似た浅い押えの列 (180) が見られ、また体部文様下に点列 (256・490) や-RL閉端列 (345) が見られることがある。

回転縄文は圧倒的に∞RLが多く、∞Lらしいものがごく稀にある (13-2)。口部文様を完全に避けて押捺するものは少ないかわり前述のように口辺下に押捺しないものもかなりある。縦走条の比率は13-3類より落ちるように思われる。やはり底面に押捺するもの (2・30・118・122・146・149・256・257・292・323・436) が少ないもの (105・370) より多いらしい。回転縄文を欠く資料 (58・349・499) はかなり少なく、499には体部に工具で描いた縦方向の浅い条がある。

深鉢 (30・118・149・151・217・370・424ほか) ・鉢 (105・146・323) ・浅鉢 (150・256・292・436ほか) があり、壺とみられるもの (180・461)、体側の一方が突出して注口がつく可能性のあるもの (398) もある。比較的小型で浅い土器に明らかな不等径の作例 (105・150・314・355) がある。径の大きい浅鉢は概ね等径であるらしい。底面はほぼ平坦なもの (105・370) から丸みのあるもの (30・292)、丸底 (118・146・256) まで変化がある。浅鉢の一部は体側との境界のない顕著な丸底となる (122・257・436)。

生活面121から200にかけて概ね連続して出土し、その上限に近い生活面126-135付近に出土量の重心がある。13-3類より上位で出土する傾向があることは問題ないが、生活面176以下の出土例は分類を再考すべきであるかもしれない。11年度トレンチでもII-2上層からII-2中(3)層まで分散した出土状況を示す(表V-3)。

型式学的には13-3・5類の間に位置すると考えられる。概ね対応しそうなものが千歳市キウス5遺跡A地区(財団道理文編1997・1998)や苫小牧市柏原5遺跡C・D区(同市教委・同市埋文編1997)

などで少量出土しているが、なお断片的である。江別市大麻3遺跡平成9年度発掘の土壌131出土品(同市教委編1999)は、やや特殊な組成であるが本類に相当する段階の一括資料であろう。

13-5類 図V-44-55に示した。口部に括弧状の沈線文様のある土器(図V-44・48)、およびそれに近縁と思われるものを本類としている。

口端外角が外上方に伸張する(13-267・325・391)、あるいは口端が内傾する(5・10・41・76・107・117・140・157・216・242・254・265・267・300・330・550)ものが多いことは13-3・4類と同様であるが、鋭角ではあるものの口端は外傾気味であったり(32・230・235・337・388)、外角を尖らせる傾向のないもの(64・139・172・202・224・236・238・262・269・273・390・488)が増える。突起部を除けば口部の厚さの変化は少なく、襟状の口部(172・203・488)は段が顕著でない。やはり体上部から口部にかけてくびれ(172・236・390)や凹溝(10・269・325)を有する例がある。

口部には水平な沈線を背景に弧線と垂線を描くものが典型的で(13-202・216・242・391)、同じく水平線地に屈曲のある縦線を描くもの(10)、水平線がなく弧線と垂線を「の」字状に続けて描いたもの(224・236・269・325)、おそらくこれらをもとにさらに変容の加わった曲線文様(273・390)などの変異がある。文様中に点(224・325・390)や-RL閉端(242)が入り込む例が見られる。単純な水平線の口部文様(5・172・488)は少ないと考えられる。108は体・底部に曲線の描かれるもので、疑問もあるが上下幅の広い曲線文様に共通するところがあるとみて本類に含めておく。

13-4類と同じく刻み・押え・沈線・-L等の加わる浮文(13-139・242・236・325)があるがその頻度は下がる模様で、円形の浮文は確認されない。回転縄文のある浮文(390)は4類に見られないものである。口部外面にほとんど文様のない土器(図V-47の一部と図V-49-54)は4類以上に多く、浅く口部の開いた土器の大半がそうであると考えられる。口辺直下が無文となる例(41・76・107・140・157・262・388・550)があるが概して13-4類ほど顕著でなく、突起下のみ無文となるもの(32・262・265)が見られる。

口部は突起に富むが、浅い器形で2箇所が反り上がる(32・230・388)のを除いて被状縁と呼ぶべきものはないらしい。突起下の焼成前穿孔は単独のもの(32・117・230・265・273・300・388)が対をなすもの(238)より多い。突起とその付近の口端に放射方向、その他の部分では円周方向の縄の側面圧痕があるもの(13-25・32・107・117・139・157・230・235・236・254・265・300・325・337・550)または突起付近のみ放射方向の側面圧痕を施すもの(76・202・224・238・242・262・269・388・390)が多く、側面圧痕はほとんど-Lで稀に-R(157・194)-RL(238)が用いられること、突起上に沈線(117・262・269・325・388・488)や深い点(32・117・139・235・300)が現れることも13-4類と共通するが、突起口端に渦状(32・117・139・300)・馬蹄形ないしU字状(337・550)の側面圧痕が見られる点は新しい傾向と考えられる。これらは13-4類の口部外面、特にその浮文に見られた(30・45・46・150・217・355・384・518等)のち本類では前述のとおり口部外面から失われた装飾であり、施文位置の変化が生じたことを意味するとみられる。4類の一部の口部文様(251・499)に似たものが拡張した口端に出現する事例(203)も同様に解釈できよう。

口端外角に刻み(13-107・139・194・235・267・300・325・388)や疎らな押え(10・25・391)があるのも4類の特徴を引き継ぐが、それが円周方向圧痕のない突起部分にも一様に及ぶ(50・76・117・157・224・254・262・265・337)事例が4類より多いようである。口部文様下(172・224・236・390)と凹溝沿い(10・269・325)の点列・押え列は13-4類と大差ない。

回転縄文皆無の土器は13-108以外にはない。やはり∞RLが卓越し、0段多糸原体とおぼしき∞LR(5・194)が少数見られる。口部文様に及ばない例(216・242)、その半ばまで押捺する例(10・269

・325)、完全に文様の地をなす例(202・224・236・273・390・391)がいずれも見られ、文様のない例でも前述のとおり無文部の現れ方が多様である。235は上部に粗、下部に精の2種の原体を用いる。底面にも押捺する例が多いがしなないものもあり(107・172・194)やはり一定しない。

深鉢(13・325・390・391ほか)より浅鉢(32・107・194・230・238・262・265・267・388ほか)が多いという印象を受けるが、13・2・3・4類と次第に浅鉢が顕著になる傾向からみて分類の失敗とばかりも言えないように思われる。鉢と思われるもの(224・157)、壺(108・203)もある。小型の土器に不等径のもの(230・273・388)がめだつほか比較的大きい浅鉢にも明らかに不等径のものがある(265)。底部は依然として丸底(32・107・230・235・267・388)と平底に近いもの(64・238・262・265)が並存し上げ底(108・172)も知られる。体制との境界の有無も一様でない。

出土生活面は121から195までと範囲が広く、出土量のピークもはつきりしない。13-1-3類よりは上層に分布するが13-4類との層位差は顕著でなく、分類の不成功を示唆するようでもある(表V-3)。11年度トレンチでも13-4類と大差ない地層で出土している。13-4類までによく見られた口部外面に平行な沈線のみをもつ土器はほとんど本類に残留しないとの前提で編成しているが、この点なども再検討を要するかもしれない。

本類に比較できる資料はやはりキウス5遺跡A地区の出土品中に見られるほか、苫小牧市美沢東6遺跡(同市埋文編1998)でややまとまって出土している。同市柏原5遺跡C・D区(同前編1997)、由仁町川端遺跡(同町教委編1996)などにも散見され、13-4類よりは普遍的な存在と言えそうである。今のところ13-4類と層位的によく分離できないがあえて別類としたのはそのような事情にもよる。

13-6類 図V-56-61とV-62の一部に示した。口部に縄の側面圧痕を背景に括弧状の沈線を描く土器(37・439)と、これに類似の資料と思われるものを本類とした。

口端は単純に内傾するもの(13-3・13・16・34・79・94・121・212・377・440・513)のほか、むしろ内角に厚みがつく印象のもの(29・214・220・222・397・400・420・439)、内角が不明瞭で丸く内面へ移行するもの(193・240・290)がめだつ。あまり複雑な形状の口部はなく、口部・体上部に凹溝のあるもの(34・94・121・193・420)のほか襟状に段のつくもの(377)、文様の上下限に弱い稜のあるもの(79・439)等が注意される。

口部には水平な-L(37・121・420)-RL(439)を背景に弧線と垂線(439)弧線(37)斜線と垂線(420)斜線(121)を描くもの、水平な-L(193・214・223)-RL(240)のみのもののほか、13-5類と同様な水平沈線の背景に弧線を含む文様(16・34・79・94・212・220・377・397)または斜線と垂線(13・94・513)を描くものがある。背景の水平線は数が増えるとともに弧線等より細くなることが多く(34・94・220・377・397・439)、また水平線以外に弧線の間を細い沈線で埋めたもの(29・397)が現れる。異なる文様が凹溝・点列を挟んで上下に重畳する例(94・212・439)が注意され、212では体部にかけて3段の文様がある。口部の浮文(377・420・439)も5類と大差なく、凹溝を跨ぐ浮文(34・94)があるが、橋状把手と呼ぶにはいかにも小さい。口部外面に文様のない土器(290、および図V-61)があり、その突起・注口下は無文となる(3・290・440)場合がある。

口辺に突起はあるが波状縁と確認できるものはない。浮文に伴うものを含めて台状の突起(13-79・94・212・220・397・420)や対をなすもの(16・223・400)のほか小さく高い突起があつて13-5類に現れた馬蹄形の-Lがここに見られる(3・440)。突起下の装飾的な孔は単独のもの(94・212・420)と対をなすもの(537)がある。222のそれはどちらとも断定しかねるがごく小さい孔。212には口辺を半円形に切り欠いた箇所がある。口端には放射方向の-L(3・16・29・79・94・212・214・222・290・377・400・420・440)または-RL(220・439)、時にその両者(193)や-R(397)があ

り、それらと並んで太い沈線 (94・214・439) も見られるが、13-4・5 類に特徴的な円周方向の側面圧痕は失われる。口端外角に刻み (3・440) 押え (193) または-L (222) が並ぶ例はかなり少ない。口部文様下・凹溝沿いの右または下から突いた点列はあるもの (29・34・37・79・94・193・212・214・220・377・397・439) とないもの (121・223・240・420) があり、文様の上限 (29) や重畳する文様の境界 (439) にも施される場合がある。34 は文様の弧線沿いにも凹溝沿いのそれより細かい点列がある例。420 には文様下に 13-3 類に見られたのと同様な鋸歯状の沈線がある。

13-16 を除く全ての図化資料に回転縄文があり、214 が∞LR であるのを除いて∞RL である。やはり口部文様を避ける場合 (34・121・193・214・223・240・420・439) と文様の背景となる場合 (29・37・79・94・212・220・377・397) があり、後者には口辺直下の押捺を避ける例 (29・212) が含まれる。440 は精粗 2 種の原体を口部とそれ以下に使い分けている。212 は底部体側の押捺を避けている。確認できる事例の範囲では底面にも縄文がある (212・222・537)。

深鉢 (13-13・94・193・212・400・420 ほか) と浅鉢 (222・537) が確認され注口のつく土器 (290) もある。壺形風のものではあるが不等径の上器が見られる (537)。丸底の土器 (212・222) があることは確かである。

平成 13・14 年度発掘では生活面 121 から 170 にかけて概ね連続的に出土した。出土量のピークが生活面 121-125 と 146-150 に分かれており、分類、もしくは生活面の編成に問題があることを示すようでもある。13-1-4 類とは中心的な出土層位が異なるとみて可であろう。11 年度 158 線半トレンチで全く出土していない点も 13-1-4 類と異なる (表 V-3)。しかし 13-5 類とは出土層位に差が認められない。

13-1-4 類の場合とは異なり、13-5・6 類は類似の口部文様をもつ土器を縄の側面圧痕の有無によって区別した。この試みは今のところ層位的に正当化できないが、両者の間には上述のとおり細部の特徴にかなりの差が認められ、個々の資料の按分によっては出土層位の差が見出される可能性をなお否定できない。13-1-4 類についても、沈線文をもつ類と縄の側面圧痕で裝飾する類の間に年代差が存在する可能性を検討する作業が今後必要とされるように思われる。

主に本類と 13-7 類に相当するものからなる良好な資料が由仁町川端遺跡 (同町教委編 1996) で知られている。ママチ遺跡の昭和 52 年度発掘 (財団道埋文編 1983) で II 群、同 60・61 年度発掘で 2 類土器とされた資料 (同前編 1987) も多少 13-5 類相当の資料を交えるが大半が本類と 13-7 類に相当するであろう。

13-7 類 図 V-63-73 の全て、及び V-62・74 の一部が本類で、口部内面・口端に 13-6 類のそれに似た文様のあるもの (図 V-62-66)、およびこれらと近縁とみられるものを集めた。

口端の形状は 13-6 類と同様、内角に厚みのあるもの (13-11・20・128) 内角の不明瞭なもの (134・443) があるほか、外角が鋭く (164・431・444) あるいは外上方へ張り出して (19・144・227・228) むしろ 13-4・5 類に似たものも含まれる。依然として口・体上部に凹溝 (82・163・430・444・447) またはくびれ (164・431) があるほか、口部から体部にかけて比較的顕著な稜のある例 (19・72・92・152・229・360) が目につく。また内面に襟状の段差をもつ口部 (36・92・141・152・360) は本類に特徴的なものである。

口部外面には細く、一部は櫛状の工具による沈線を背景に弧線と垂線 (13-11・19・128・338) 弧線 (430) 曲線 (20・92・164・444) 鋸歯状 (197) などの沈線を描くものが代表的で、細線の上に文様を加わらない例 (201)、逆に背景の細線のないもの (229・376・431・443) もある。またこれらと別に水平な沈線または-RL を背景として同様の太さの弧線と垂線 (447) 垂線・斜線 (163・227・360・409) 等を描く例があると思われ、さらに顕著な沈線文様のないもの (82・231・364) も見られる。

文様が上下に重畳していることの明瞭なもの(128)は少ないが、13-6類で重畳する文様を隔てていた凹溝または太目の沈線とそれに沿う点列が口部装飾の中に認められる(11・164・201・231・364・444)のが注意される。430では通常文様下に見られる鋸歯状の沈線が口部文様中にある。口部に点列または点群が多い(11・19・134・164・231・360・443・444)のはある程度こうした文様の重畳に由来するように思われる。外面の浮文(20・72・92・128・134・144・231・338・447)の内容は13-5・6類と大差がなく、浮文上の口辺が突起となることも同じである。浅い器形を中心に目立った文様のない土器(図V-66・74および13-106・141・226・152・387・470)があり、その口辺下に無文帯を生じる場合(13-15・38・106・144・152・387・470)がある。

突起には対をなすもの(13-76・197・231・338・444・470)二分されるもの(36・106・164・229・387・447)二尊式(92・141・201・281)深く突いた点のある小さく高い突起(36・92・106・134)その他ほぼ13-6類同様の変異がある。弱い波状縁らしいもの(152・360・444)が認められるのは新しい傾向かもしれない。突起下の装飾的な穿孔は単独の例(24・111・141)対(134・201・281・387)またはその両者(92)が見られる。387には対をなす穿孔の下に横長の隙間が開いており、土器の長軸に対称の位置にも同様の突起があったことが隙間の下辺の残存によって知られる。

突起の口端には多くの場合放射方向、小さく高い突起では渦状に-Lを施す。13-6類と異なるのは突起周辺の、口辺の高まりの中心部で口端を拡張し、円周方向に2-4条の-Lを押しつけた上に放射方向の沈線・-Lや点を加えるもの(28・36・106・197・201・229・281・387)が多いことで、これは口辺の高まりの中心から外れて位置する傾向のある13-4・5類の円周方向側面圧痕とは一応区別される。突起部以外の口端には放射方向(163・164・430・444・447)や鋸歯状(92・201・338)の-Lが施され、前者ではやや疎らな押捺(164・444・447)が目につくほか、円周方向に回転押捺した∞RL(227・231・228・360・409)または∞LR(226)の出現が特徴的である。口端外角には刻み(11・19・92・152・166・218・281・387)ないし押え(72・128・226・229・360・364・409・431・447)のある場合とない場合があり、短い縦線状の刻みを疎らに施すもの(24・231)が注意される。

本類に特徴的な口部内面の文様は、平行する-L(443)またはそれを背景に弧線・垂線を加えたもの(13-92・141・152・387)で、13-6類の指標となる文様と同一であるが、それが内面に移行している点に13-4・5類間に推定されたのと同様な施文位置の変化を認めうる。亀ヶ岡式類似の作例(174)の口部内面にも簡単な文様が施される。

口部外面の文様下や凹溝沿いにある点列、および同じ位置に現れる鋸歯状の沈線(13-360)は13-6類と変わるところがないが、これを欠くもの(13-92・197・227・228・231・376)が少なくない一方、内面の文様や突起部口端の文様にもその内面側の限界に沿って点列が現れることがある(92・106)。突起のない口辺下に焼成前の穿孔が並ぶ226は、内外面に一度に点列を施そうとする試みとみることができよう。また体・底部の屈折(15・111・163)に点列が伴うのは本類以前には稀だったものであって、底部に文様が出現する(38・435)ことも相関するとみられる。

雛形風のもの(15・38)を除くと回転縄文を欠く土器はない。やはり∞RLが大半を占め、稀に∞LR(226)・∞L(36)を見る。∞RL・∞LRを併用し縦位に回転押捺する(163・231)あるいは∞RLの押捺方向を変える(164・435)ことで羽状縄文としたものが少数あって注意される。口部の押捺の有無に変異があることは従前同様である。底辺直上の押捺を避けるもの(114・168・218・443)が少なくない。底面にも押捺するもの(15・92・106・114・144・163・218・226・229・281・435・443)が多数を占め、しないもの(174)は稀である。

深鉢(144・174・226・360ほか)鉢(470)浅鉢(15・24・38・92・106・114・229・281ほか)が

あり、注口のつく浅い器形(134)も確認される。浅鉢は比較的数量が多い印象で、不等径のものを含む(106・387)。底部は多数の丸底と少数の平底(174・226)を見る。丸底の底面中央に凹みのあるもの(11・38)が見られる。

生活面121から155にかけて連続的な出土がある。同156以下に僅かしか見られない点で13-1-3類よりほぼ完全に上層にあり、13-4-6類の一部より上位に偏る傾向も認めてよいと思われる(表V-3)。13-4・5類間では検証できなかった年代による装飾位置の変化は、13-6類と本類との間ではある程度階層的に立証される可能性があると言えよう。

先に述べたとおり本類に相当する良好な資料が川端遺跡やママチ遺跡で知られている。千歳市美々2遺跡(財団道埋文編1986)では本類に似た資料は少量見られるが13-6類に相当するものが欠落しており、両者を区別した根拠の一つとなっている。

13-8類 図V-75・76の全て、およびV-74・77の一部は本類土器である。弧線や垂線中心の文様はなく、水平な沈線と点列で装飾する土器が主体となる。

口端に内傾した面を作るもの(13-112・192・225・232・241・438・445)が依然多いと同時に、口端外角に外傾面があるもの(225・428)あるいは口端が薄くなるもの(6・232・392・396)が特徴的である。13-7類までに見られた口・体上部のくびれ・凹溝は壺の頸部(89・496)を除いて失われる。

口部の文様は初めにも述べたとおり水平な沈線と点列による比較的単純なもので(112・232・241・438・445・496)、むしろ口部に顕著な文様のない土器(6・89・192・225・392・396)のほうが多いようにも思われる。縄の側面圧痕による水平線は姿を消す。浮文・突起(496)も壺以外の器形の口部には認められず、従前ほどには振るわない。確実な波状線も認めたいが、口辺が不整に上下する例(396・438)がある模様。高く小さい突起の口端には点があり(496)、突起下に単独の穿孔がある(496)。突起に伴わないやや横長の単独穿孔(192)も見られる。壺の体上部には水平線と浮文による簡単な文様があり(89・496)、その下の体部に回転縄文を背景として三角形・波状の沈線文を描く場合がある(496)。

口端ないし口辺内面には13-7類にも見られた ∞ RL(13-232・438)のほか放射方向の-RL(6・192・241)または短線(445)を並べたものがある。口端外角には押え(6・192・241・445)の列があるほか、鋸歯状に斜線が並ぶもの(225・438)が特徴的である。232では-RLの列が見られ、これは周囲の ∞ RLの部分とともに半回転の手法で押捺される。口端外角の装飾と口部外面の境に稜を生じ、ここに点列が位置する事例が注意される(225)。一方口部文様の下に現れる点列(232・438)や鋸歯状の沈線(445)にはこのような稜を伴わない。

大半の土器に ∞ RLの押捺がある。13-6は口部に ∞ RL、体部以下に ∞ LRを用いる。口端外角(438)あるいは無文帯上の口辺に(232)回転押捺が見られるのは13-7類以前にほとんどない現象である。回転縄文のない土器もある程度存在するらしい(112・396)。

深鉢(13-241・392ほか)・浅鉢(6・396)・壺(89・496)が確認され、壺形ふうの小さいもの(112)もある。丸底(89・241)があるほか、弱く突出した底面の周囲に低い隆起がつく特徴的な底部(6・392・396)を見る。

平成13・14年度発掘では生活面101から150にかけて出土し、13-4-7類が同120から上に全く出土しないのと異なる一方、縄文土器とは完全に上下関係にある。11年度トレンチでも数は少ないながら13-4・5・7類より上位に出土量の重心をもつ(表V-3)。

千歳市美々2遺跡では住居跡H-5・7・9・23・29などで本類の一部に相当する良好な資料が出土しており(財団道埋文編1986)、また同市ママチ遺跡昭和52年度発掘のIV群土器(同前編1983)

および同 60・61 年度発掘の 3 類土器（同前編 1987）の中に類例がある。いずれも襟前 c 降下軽石層（曾谷・佐藤 1980）より上位のものとされている。なお本類にはママチ遺跡の V 群または 4 類土器に相当するものをも含み、本遺跡でも今後さらに細別が必要となるとみられる。

不明縄文土器 図 V-16・78 の全て、及び図 V-15・77・79 の一部は以上の分類に比定することのできなかった土器である。以下概ね図示の順に分類の可能性について簡単に触れておく。

図 V-15・16、13-130・331・523・539 は単純な口部の形態から 13-1 または 2 類に属する可能性がある。531 も体・底部を見る限り 1・2 類に似ているが口部が欠損して不明である。

図 V-77、13-161、内傾した口端、単純な口部形状は 13-1-3 類に近い。305・336、特徴のない口部で 13-1・2 類に似ているかも知れない。104、口端外角に狭い傾斜面がある点は 13-8 類に似る。

図 V-78、13-335、弱い丸みのある底部から急角度で立ち上がる体側は 13-3・4 類に近い。187、口端が内傾し上部が内湾する口部は 13-3・4 類の一部に似る。264、丸みのある口端で 13-1 類に似るようにも思われる。259、 ∞ RL のある口端は 13-7 または 8 類か。330、円管で垂直に突いた点列と浮文から 13-3・4 類に近い可能性がある。248、外角の尖る口端がやや外を向く状況は 13-5 類あたりか。39 と 291、ともに顕著な不等径の土器で 13-4 類以降であろう。173、沈線の感じは 13-4 または 3 類に似たものがある。

図 V-79、13-17、突起口端に円周方向の RL があり 13-4-7 類か。199、底辺直上に凹溝状の無文帯があるので 13-4-7 類であろう。421、口端が薄くなる点は 13-6-8 類の一部に似るか。13-465、見当がつかない。113、体下部の稜に点列があって口端薄く 13-7 類に近い。329 と 386、外角が尖り内角の曖昧な口端は 13-6・7 類に似る。186、口部の開きが大きい 13-4-7 類の浅鉢と思われ、厚さの変化なく無文帯を欠く口部は 13-5 類前後か。109・126・417・425、浅鉢を模した罐形とみられる小さな土器で分類困難である。

縄文土器 図 V-79 の一部と V-80 の全ては縄文土器と思われる。今のところ出土量少なく、本遺跡でどのような分類が可能かは今後の課題である。変形工字文に類似の沈線文(13-565・568・569) や水平な縄の側面圧痕(506・567・566・570)をもつ例は縄文土器の最も古い部分に位置し、口端に ∞ RL のあるもの(569・570・571)、 ∞ LR を用いるもの(563・566・507)と R 条による燃糸文をもつもの(564)もこれらに近いと思われる。572 は新しい縄文土器である後北 C₁・D 式(大沼 1982)と考えられ、底部に装飾のない 522 はさらに年代が降る可能性がある。

平成 14 年度に発掘した生活面 6 から 90 にかけて出土し、縄文土器より確実に上層にある(表 V-3)。11・13 年度に発掘した 149 線以東での分布は確認されない。

(3) 製作技術

a 土

砂礫の混和 土器を構成する土には例外なく砂が含まれ、時には細礫を含んでいる。これらの多くは所要の土質を得るため意図的に混和したものと考えられるので表 V-2 に観察の結果を記載した。兵庫県小森岡遺跡出土土器の整理で採用された方法(千葉・大下編 1990 の 62 頁)に倣い、発掘現場近傍の石狩川岸で砂を採取し、これを篩い分けて用意した極粗粒砂と粗粒砂を体積比で 10・30% 配合した粘土版 4 個を作り、これと遺物を比較して最も目立つ粒径の別、及び配合の多少を記述した。「中」は中粒砂、「粗」は粗粒砂、「極」は極粗粒砂の略で、「少」は 10% 前後、「極多」は 30% 前後、「多」はその中間を意味する。またこれと別に細礫を観察されればその旨を記入した。図示した資料の範囲では中～粗粒砂を中心に 10-20% 前後混和するのが普通の配合と考えられる。

注意を引いたのは細礫を含む土が13-1・2類土器にかなり普遍的にあり、13-5・7類にもしばしば見られる(図版V-12)こと、整齊な沈線で装飾する亀ヶ岡式類似の土器には人為的に破砕した可能性の高い角礫を含む土が往々用いられ、砂礫全体の配合も多いことなどである。砂礫を多く含む土器では必然的に土の固結が弱くなり、整理に際してアクリル樹脂で硬化処理したものが多くなった。処理したものは表V-2に記入している。

土塊の混和 土の塊を砕いて配合したと思われる例(図版V-15下段)が相当多いことが注目され、例えば個体番号を与えた87個体中の31個体に土塊を、さらに4個体にそれらしいものを観察した。13-1類から8類まで各級の縄文土器にあり、13-4類以降増加して特に13-5・8類では土器の半数からそれ以上になるとみられるが、今のところ縄文土器には確認されず、また上述した角礫混和の土とは重複しない。単なる乾燥土塊であるのか焼成したものか、また土でなく軟質の堆積岩ではないかといった問題に答える用意がないが、ときに平坦な人為面を含み土器片と考えるとよさそうなもの(図版V-15右上)が観察される。道内の晩期土器に土器片を配合した例があることについては千歳市イヨマイ6遺跡IIIH-18 堅穴(同市教委編1990の68頁)の報告で指摘され、本遺跡でも昨年度報告した「土器集中3」(財団道埋文編2002)の資料で注意されている。

海綿骨針等 概ね長さ2mmからそれ以下の白色の細長い棒状の粒子が土中に観察される場合がある。これは海綿骨針と考えられ、海成層の露出する地域での土の採取を示すものとみられている(花園・長沼1990)ので、肉眼で注意された範囲で表V-2に記載した。概ね亀ヶ岡式類似の土器に限って少数認められる。また土の中に腐り礫と思われる赤褐色の粒が見られる場合がある。13-2・5・7類、縄文土器に少数見られ、これも土の採取地の地質を示す可能性があるため表V-2に記載したが、特定の出現傾向を認めることができなかった。なお腐り礫は粒子の質の表現であって、粒径の点では砂と呼ぶべきものを含む。

このほか主に土器の内面で土中の繊維が消失した痕跡を観察する場合がある。これは主に土の採取地の植生を反映したものとみてほとんど記述していないが、特に顕著と思われる例のみ表V-2に記載してある。13-6・8類にこれが見られた。

b 成形

接合面の有無 土器の表面に似て砂粒が沈んでいるが、土器が破損するまで器壁の内部にあったと考えられる面を上器の成形に際して土を継ぎ合わせた面、つまり接合面とみなして表V-2に記載した。珍しいものではなく、例えば個体番号を与えた87個体のうち46個体にこれを認めた。個体番号のある土器のうち土を継ぎ合わせる必要の少ないであろう錐形状のものを母数から除いて考えれば、接合面を露呈する個体の比率はさらに上昇するとみられる。

長く連続する事例で観察する限り、接合面は器を横にめぐって概ね水平に続いており、螺旋状に上昇・下降するものは確認できない。そこで直接上下関係になくても出現する高さの異なる接合面を全て別件、横に並ぶ接合面を連続の有無に関わらず全て1件として数えた場合、上記と同じ46個体中に延べ127件、1個体に最大12件の接合面を観察した。こうした事情から表V-2では接合面の数を段数として記載している。その出現位置は口部30段、体部48段、底部49段となり、口部にやや少ない傾向がある。接合面の露呈は成形の休止を反映し、休止は土器の変形を防ぐためにおこなわれる(佐原1967の737頁)という一般的な理解に立てば、これは口部よりも体部・底部に土の荷重による変形への配慮がみられることを意味する可能性があり、従って土器を成立させた状態で底部から口部へ向かって成形を進めるのが普通であったと想定してよいかもしれない。

内傾・外傾 佐原 真(1967の738頁)に倣って、土器を正立させたときに土器の内面側が高く外面側が低くなる接合面(図版V-17上段)を外傾、その逆に傾く接合面(図版V-16ほか)を内傾と表現すると、上記の延べ127段の接合面のうち外傾接合面が4段、どちらとも断定しかねるものが1段ある以外は全て内傾接合面である。個体番号のない資料も内傾接合面が圧倒的に多いことは変わらない。ただしこれは晩期縄文土器各類を通じての傾向であり、続縄文土器の古い部分では外傾接合面のほうが多い(表V-2)ことに注意すべきであろう。13-391(N42、図版V-17)と13-112(N8)は連続性のよい外傾接合面を観察できる晩期土器としては稀な例である。

接合面の加工 露呈した接合面に規則的な凹凸が見られる場合があり、上向きの接合面では概ね浅い凹み、特に明瞭なものでは僅かに左に傾いた縦長の凹みが横に並んだものとして観察される(図版V-17中段、V-18左上)。これはおそらく土器製作者の指痕と思われ、これが接合面に直接遺されたものであれば上向きの接合面が擬口縁(佐原1967の737頁)、下向きの接合面はその逆形(同前738頁)であり、土器は底部から口部に向かって成形されていることが確実となる。今のところ指紋を確認できた例は上記46個体のうち1個体(13-530、N42)に過ぎず、土の接合後に土器内面から力を加えても接合面に同様の凹凸が生じるのではないかという疑問もあるので確信が持てない。しかしこうした凹凸に伴ってときに出現する接合面上端の規則的な波うち(図版V-17下段、V-18右上)は上向き接合面の形成される時点でその上端が自由に圧延できたことを示すように思われ、少なくともこうした例では底部側より先に成形されているとみてよいであろう。

このほか注意を引くものとして、接合面に小さな圧痕を横に並べて弱い段を作る例が見られる。概して上向きの接合面に残る圧痕がそれに対応する下向き接合面にある反転像より鮮明(図版V-18左右下)であるので、これは上向きの接合面に直接印象されたものであり、土の接合後に内面から突いた結果ではないと考えられる。しかしその目的は理解しかねる。あるいは接合面に積み上げた上段の粘土がずり落ちるのを防ぐ意図に出たものであろうか。例外なく略円形の圧痕で、管で突いた輪・弧状のものの中実の工具によるものがある。図示した331件の資料のうち13-1~5類と分類不明縄文土器に計9件見られ、接合面の露呈した46個体中では4個体、延べ127段の接合面のうち7段に観察された。

c 内面の調整

表V-2には一応土器表面における砂粒の現れ方、調整の方向性および工具の移動の向き、調整を免れた成形段階の凹みの有無等について記載したが、調整技術の理解が不十分で体系的な欠いたものになっている。晩期縄文土器各類を通じて概ね無難に指摘できそうな点を列挙しておく以下のようなものとなる。

調整で砂粒が沈んでいる例が大半で、砂の動きが見られる場合でも器面に浮き出す傾向はない。顕著な光沢は生じていない。調整は水平方向に行われる場合が多く、砂の動きから確認される例では多くが反時計回りに工具を動かしている。調整の始点とみられるものがしばしば観察され、直線状を呈する場合と弧線状とがあって前者が多い。口部には成形時の規則的な凹みと思われるものが十分消えずに残ることが多い。顕著に条を残す調整は稀であるが皆無でなく、調整の過程で消されている可能性が残る。

2 石器等・石製品・土製品

(1) 出土状況等

石器等・石製品・土製品(焼成粘土塊を除く)は平成11年度に1,968点、平成13年度に7,924点、平成14年度に9,278点、合計19,170点が出土している。分類は石鎌・石錐・スクレイパー・つまみ付きナイフ・石斧・たたき石・台石・すり石・砥石・石核・加工痕のある礫・Rフレイク・Uフレイク・剥片・礫・礫片・石製品・土製品が出土している。その遺物の半分以上、もしくは機能部が欠損していると考えられるものは破片として扱っている。

出土分布の傾向は153線付近以東から増え始め、156線付近以東では急激に増加する。また、145-148線からも多く出土する。これを生活面から見ると121-135面・146-155面・186-200面において出土点数が多くなる。この傾向は焼土の分布状況ともほぼ共通するものである。器種別の傾向は、スクレイパーが552点、たたき石が284点、石鎌が291点と多く、すり石・石皿はほとんど出土していない。これは平成12年度の報告とほぼ同様の傾向だが、この他に石製品・土製品の出土があり、カンラン岩製の玉・土製の玉・勾玉・クマと見られる土製品などが出土している。

石材は、剥片石器などではそのほとんどを黒曜石が占め、その他には頁岩・玉髓(メノウ・メノウ質頁岩含む)・安山岩などが少量見られる。礫石器などでは砂岩・安山岩が多数を占め、他には片岩・泥岩・珪岩などが見られる。小さな泥岩礫を除くと遺跡内の包含層から自然に出土するものではないため、目的を持って遺跡に運び込まれたものであると考えられる。

遺物の図は土坑・集石出土の遺物(図V-81-83)は遺構番号別に、焼土・包含層出土の遺物(図V-84-88)は1-61が平成11・13年度着手部分(149-158線)で出土したもので、62-69が平成14年度着手部分(110-148線)で出土したもので並べた。また、周囲の状況から判断して1-61は縄文晩期後葉頃、62-69は縄文初葉頃にあたるものと考えられる。

なお、表内における出土小発掘区は平成14年度から表記の変更を行ったため2つの表記が混在する。小発掘区表記はa=ア、b=イ、c=ウ、d=エ、である。計測値の括弧内は欠損部分からの数値である。点数は破片を含むものである。図の縮尺は剥片石器・石斧・石製品・土製品は2分の1、礫石器3分の1で掲載している。また、17のアスファルト付着部分、P-49-1・P-56-1・P-107-1・S-15-1・S-17-2の被熱部分は網掛けでその範囲を示した。

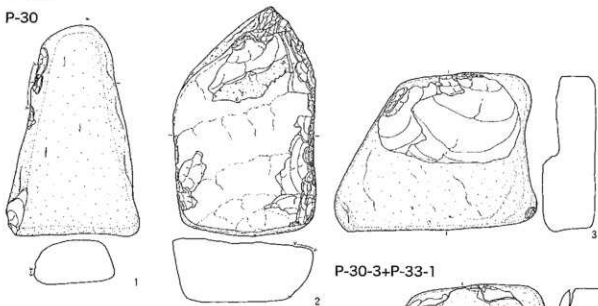
(2) 石器

石 ■ 平成11年度67点・13年度198点・14年度26点、合計291点が出土している。有茎鎌が277点とほとんどを占め、三角形礫5点、菱形礫3点、破片6点である。大きさは平均すると長さ2.07cm・幅1.21cm・厚さ0.33cm・重さ0.65gとなる。各最大値は長さ4.0cm・幅1.7cm・厚さ0.7cm・重さ2.5g、各最小値は長さ1.2cm・幅0.8cm・厚さ0.2cm・重さ0.3gである。平均値付近に数量が集まる。分布の傾向としては154線以東から多く出土している。使用される石材は黒曜石が284点でほとんどを占め、頁岩・チャート・玉髓が7点である。

P-48-1・P-53-1・P-63-1・P-98-1/1-17・63・64は有茎鎌である。1-9・63は基部の返しが見えないもの。1・2・63は刃部側縁がやや内湾する。3-9は刃部側縁が直線的である。9は両側縁下部に挟りが入る。10-17は基部の返しが見えないもの。17は基部にアスファルトによる接着痕が残存する。64は基部が太く石鋸に分類されるものかもしれない。18は菱形のもの。62は三角形で平基のもの。石材は16が白色のチャート、17は頁岩、その他は黒曜石である。

V 遺物

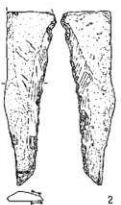
P-30



P-33



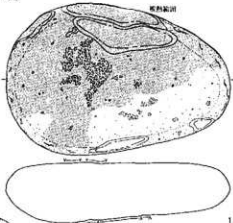
P-37



P-41



P-49



P-48

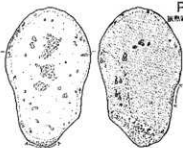


P-53



0 5cm

P-56



P-63



0 5 10cm

図 V-81 上坑の石器等 (I)

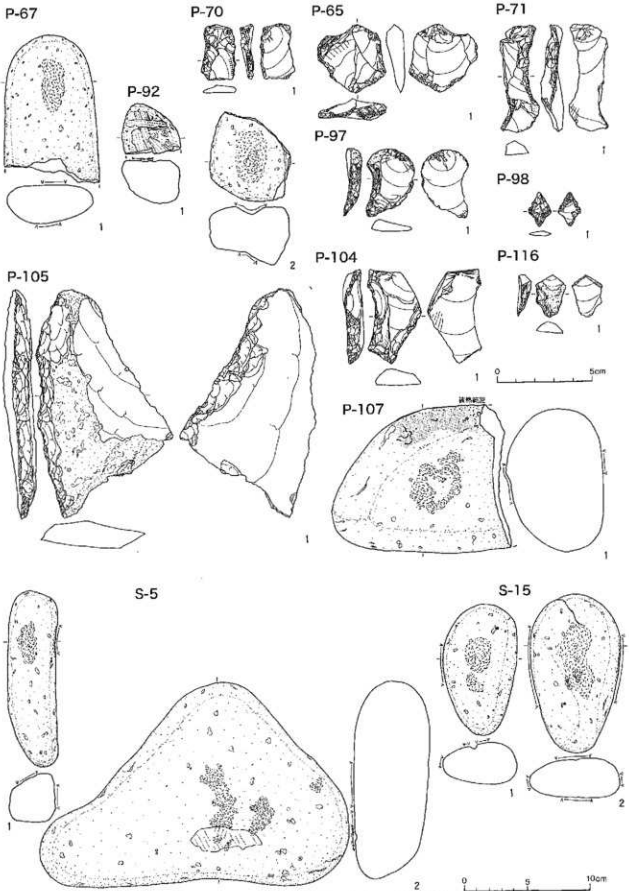
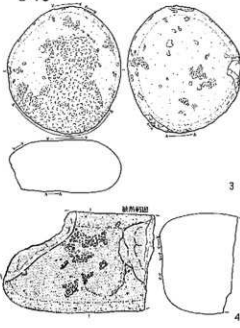


図 V-82 土坑の石器等 (2)・集石の石器等 (1)

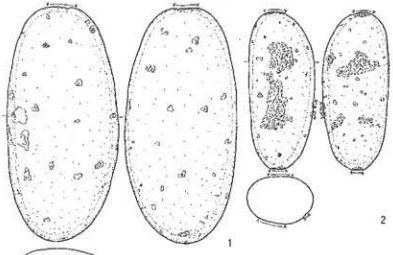
S-15



3

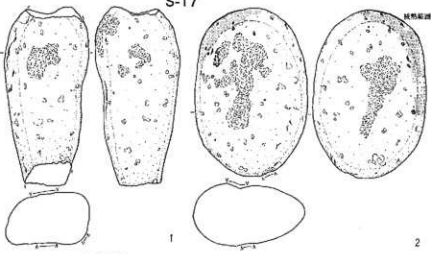
4

S-16



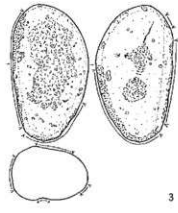
2

S-17



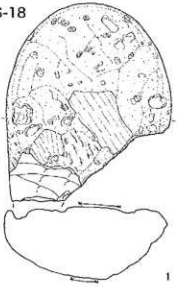
1

2

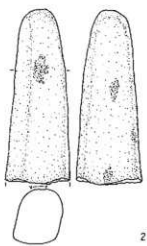


3

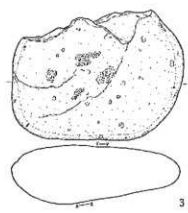
S-18



1



2



3

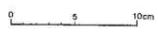


図 V-83 集石の石器等 (2)

149~158 線

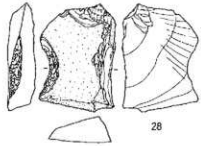
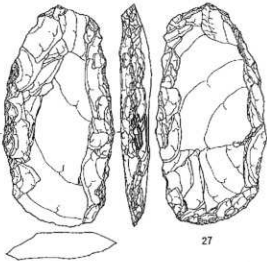
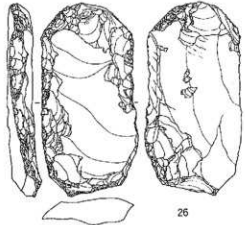
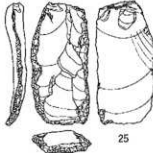
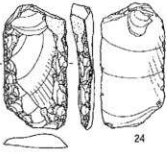
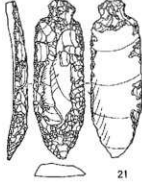
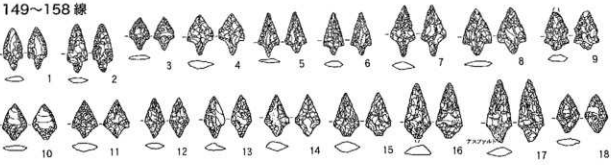


図 V-84 族土・包含層の石器等 (1)

V 遺物

石 鏃 平成13年度に2点出土している。19は棒状のもの。刃部中央付近以下に使用痕と見られる磨耗が見られる。20は刺突部を作り出したもの。先端部を欠損している。石材は黒曜石。

ナイフ 類 平成11年度1点・13年度5点・14年度2点、合計8点出土している。両面調整によって刃部を作出したものである。全て破片であったため掲載はしていない。

つまみ付ナイフ 平成11年度1点・13年度4点・14年度1点、合計6点出土している。縦形の片面調整のもの5点、縦形の両面調整のもの1点である。石材は黒曜石5点、玉髄1点である。

21は縦形の片面調整によるもの。65は縦型の両面調整によるもの。太いつまみ部がある。石材は21が黒曜石、65が玉髄。

スクレイパー 平成11年度72点・13年度447点・14年度35点、合計552点出土している。剥片の形状を生かしてその縁辺部の一部分に刃部を作出しているものが298点と最も多く、縦長の剥片の側縁部に直線的な刃部を作出しているものが98点で続く。その他にも円形剥片の円弧状縁辺部を用いて刃部を作出しているもの50点、三角形の形状をしたもの24点、挟りの入っているもの21点、縦長の剥片の下端部に刃部のあるもの5点、破片55点が確認されている。石材は黒曜石がほとんどを占め、その他には安山岩・頁岩などがある。安山岩の剥片を利用したものが42点出土している。剥片の形状を生かして刃部を作出しているものが多い。黒曜石の棒状原石の側縁を利用して刃部を作出しているものが2点出土している。

22は円形剥片の周縁部分に刃部を作出したもの。P-70-1・P-71-1・P-104-1/23-28・66は縦長の剥片の側縁に直線的な刃部を作出したもの。P-97-1/29-31は逆三角形の剥片の側縁に刃部を作出したもの。P-37-1・P-65-1・P-105-1・P-116-1/32・67は剥片の形状を生かして刃部を作出したもの。P-53-2は黒曜石の棒状原石の側縁に刃部を作出したもの。石材はP-105-1/27・29が安山岩、その他は黒曜石。

石 斧 平成11年度に7点・13年度に41点・14年度に1点、合計49点出土している。途中から折れたり欠けたりしているものが多い。未製品と考えられる刃部を作出していないものがある。短冊形のもの15点、楕形のもの3点・乳棒状のもの3点、破片13点、未製品と思われるもの15点である。整形の方法としては全面を研磨によるもの3点、刃部のみを研磨によるもの2点、敲打によるもの10点、打ち欠きによるもの7点が見られる。刃部は全て両刃で、直刃3点・円刃21点である。石材は泥岩・片岩が多い。

33は短冊形のもの。全面を研磨により整形し、刃部は両刃の直刃である。鑿が明瞭に見られる。34は楕形のもの。研磨によって刃部を作出している。両刃の円刃である。刃部には使用痕と見られる細かい縦方向の痕跡が見られる。35・36は乳棒状のもの。全面を敲打により整形し、刃部を研磨により作出している。両刃の円刃である。石材は33が片岩、34・35が緑色泥岩、36がカンラン岩である。

たたき石 平成11年度に62点・13年度に196点・14年度に26点、合計284点出土している。礫の腹背部・端部・周縁部、もしくは複数部所に敲打痕のあるものである。扁平礫で腹背部が使用されているもの63点・周縁部が使用されているもの5点・複数部所5点、棒状礫の腹背部が使用されているもの60点・端部が使用されているもの13点・複数部所24点、円礫を使用しているもの16点、破片98点である。使用される石材は砂岩・安山岩が多い。使用痕付近から折れたり欠けたりしているものが多く見られた。たたき石と台石については礫の形状・使用部所・重さを基準に分類した。重さは500g位を目安に軽いものをたたき石、重いものを台石とした。しかし、扁平礫の腹背部のみ使用しているものに関しては軽いものでも台石として使用された可能性を否定できない。

40は礫の上半を敲打により整形し腹背部を使用したもの。P-56-1・S-15-1-3・S-17-1は扁平礫

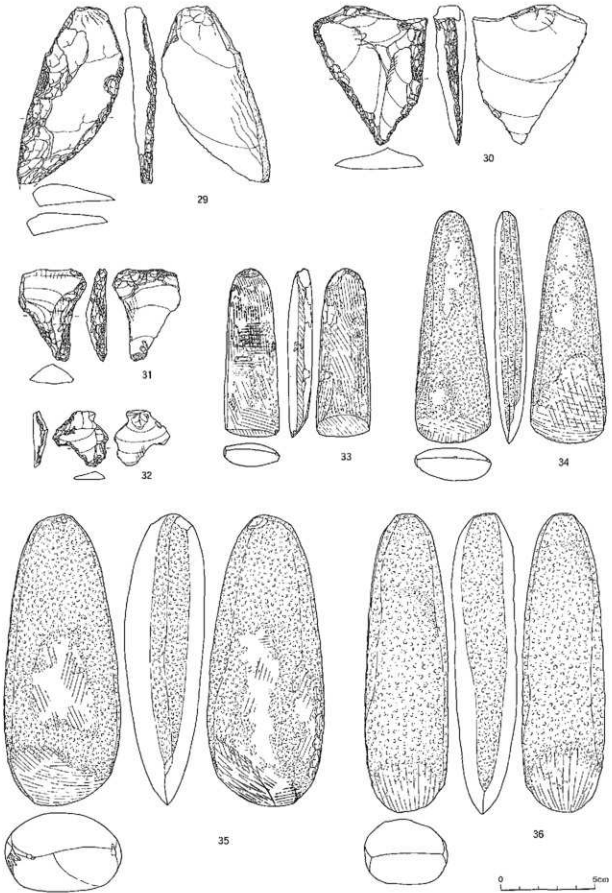


図 V-85 焼土・包含層の石器等 (2)

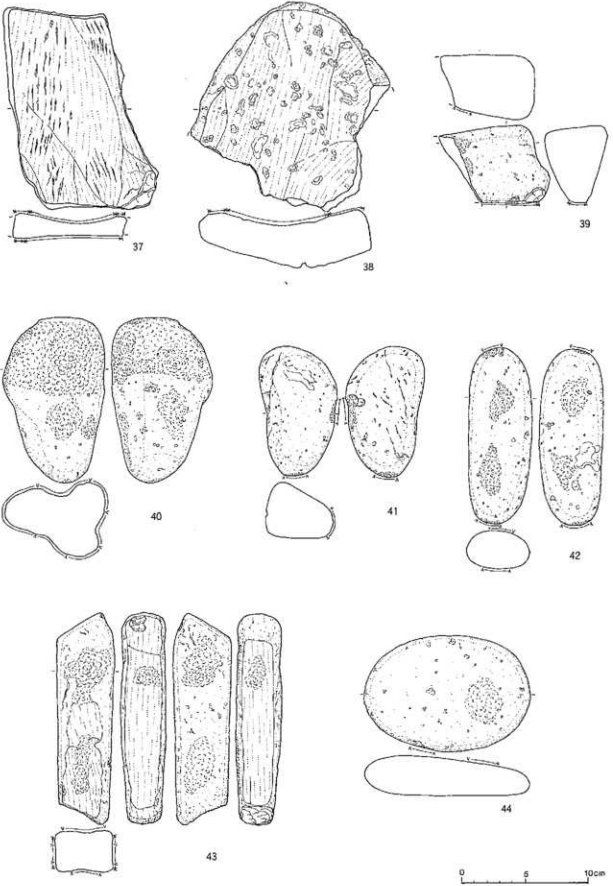


図 V-86 焼土・包含物の石器等 (3)

の腹背部と周縁を使用したもの。P-30-1/41は扁平礫の周縁を使用したもの。S-16-1は棒状礫の端部を使用したもの。S-16-2・3/42は棒状礫の腹背部・端部の両方を使用したもの。P-41-1・S-5-1/43・68・69は棒状礫の腹背部を使用したもの。P-63-2・P-67-1・S-18-2は破片。P-56-1には被熱した痕が見られる。石材はP-63-1/40・43・69が砂岩、41が珪岩、P-56-1・P-67-1・S-15-1-3・S-17-1・S-16-2・3/42が安山岩、P-30-1・P-41-1/68が泥岩である。

台石 平成11年度6点・13年度28点・14年度20点、合計54点が出土している。礫の平坦面に敲打による使用痕が見られるもの23点、破片31点である。石材は砂岩・安山岩である。

P-49-1・P-56-2・P-107-1・S-5-2・S-18-3/44・45は扁平礫の平坦面に敲打痕のあるもの。45は礫の4ヶ所に打ち欠きが見られる。打ち欠かれた部分は磨耗が激しいため、以前に打ち欠かれた礫を搬入して台石として使用した可能性がある。一部にすり面に見える研磨痕がある。P-70-2・S-15-4は破片。P-49-1・P-107-1・S-15-4は被熱した痕が見られる。石材はP-49-1・P-56-2・P-70-2・S-18-3/44が安山岩、P-107-1・S-15-4/45が砂岩である。

すり石 平成13年度1点出土している。対蹠2遺跡では初めての出土である。

39は断面三角形の礫の腹にすり痕があるもの。礫の腹背部に敲打痕が見られることから、たたき石として使われていた可能性が考えられる。礫として遺跡に持ち込まれたものかもしれない。石材は砂岩である。

砥石 平成11年度7点・13年度25点・14年度1点、合計33点が出土している。破損していて破片として扱っているものが多いが、細い溝状の研磨痕のあるもの4点・広い研磨面のあるもの29点が見られる。石材は軽石・泥岩・凝灰岩である。細い溝状の研磨痕のあるものは軽石製のものに見られる。

P-92-1は細い溝状の研磨痕のあるもの。S-18-1/37・38は広い研磨面のあるもの。石材はP-92-1が軽石、37が泥岩、S-18-1/38が凝灰岩である。

石槌 平成13年度116点・14年度5点、合計121点が出土している。特に図示は行わなかった。ピエス・エスキューが13年度72点・14年度3点、合計75点出土している。石材は黒曜石が多く、他に頁岩・チャート等が少量見られる。

Rフレイク 平成11年度48点・13年度2点・14年度3点、合計53点が出土している。特に図示は行わなかった。剥片に加工痕の見られる剥離のあるものをこれとした。

Uフレイク 平成11年度59点・14年度3点、合計62点が出土している。特に図示は行わなかった。剥片に使用痕と見られる微細な剥離が見られるものをこれとした。

加工痕のある礫 平成11年度5点・13年度11点・14年度1点、合計17点が出土している。特に使用された痕跡が見られず、打ち欠き等が見られるものをこれとした。P-30-2は礫に打ち欠きが見られるもの。P-30-3は頂部から打ち欠かれている。この際の剥片がP-33-1であり、この2点が接合する。石材はP-30-2が片岩、P-30-3が泥岩である。

(3) 石製品

平成13年度8点出土している。玉が7点・その他1点である。石製の玉の出土は初めてである。

46-48は玉である。全て研磨により成形が行われ、両面からの穿孔により孔部を作出している。46は両面の一部に刻線により放射状の模様が施されている。48は平玉状の形状をしている。風化が激しく脆くなっている。46・47はカンラン岩製、48は滑石製である。

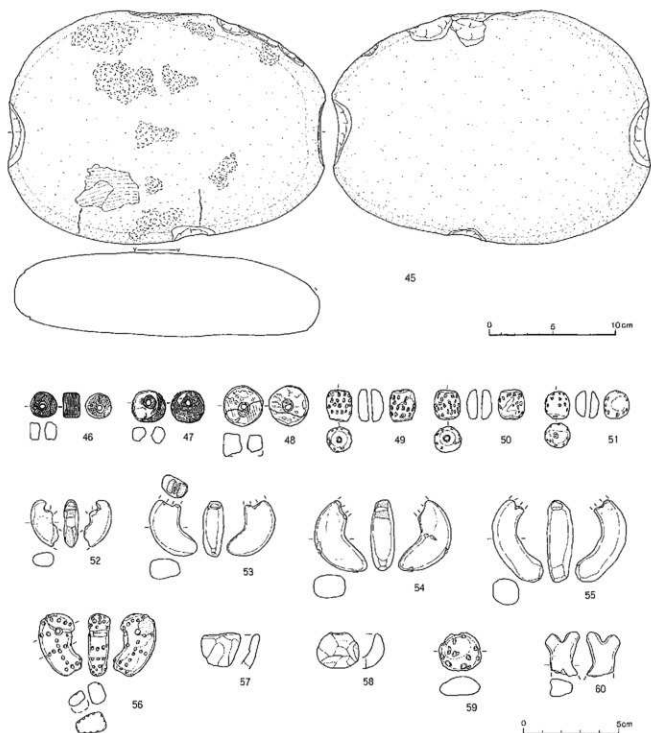


図 V-87 焼土・包含層の石器等 (4)

(4) 土製品

焼成粘土塊以外の土製品は 11 年度 1 点・13 年度 12 点、合計 13 点出土している。玉 3 点・勾玉 5 点・クマと見られる土製品 1 点・その他 4 点である。勾玉は平成 12 年度調査においてカンラン岩製のものが 1 点出土している (財団道埋文編 2001 の図 V-2-3-48) が、土製のものは玉とともに初めての出土である。なお、クマと見られる土製品については平成 11 年度の報告書 (財団道埋文編 2000 の

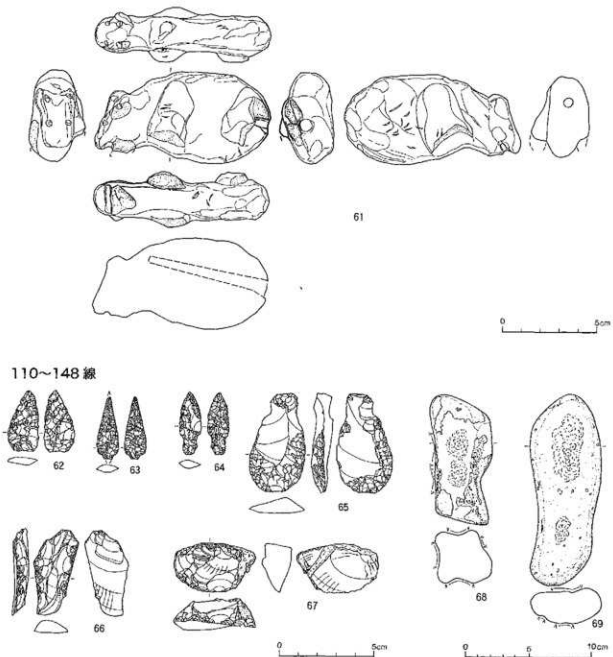


図 V-88 焼土・包含屑の石器等 (5)

図 V-9) において報告済みのものであるが再掲載する。

49-51 は玉である。貫通孔があり、側面に断面山形の器具を用いた刺突による模様が施されている。52-56 は勾玉である。52-55 は頂部付近に貫通孔があったと見られるが、孔の上部は欠損している。無紋である。52 は下端部も欠損する。56 は上部に貫通孔が1ヶ所、表面には円形の刺突による模様が施されている。57・58 はミニチュア土器の一部とも考えられる。施文等はされていない。59 は半球状のもので上面に円形の刺突による模様が施されている。60 は下部が欠損し頂部が二股になっている。土器の装飾部分の可能性はある。61 はクマと見られる土製品である。長さ9.3cm・高さ4.8cm・厚さ3.0cm・重さ91.0gを測る。四肢・下顎部・左耳を欠損している。円形の刺突に

よって目・耳の穴が表現されている。髷部から首の付け根付近まで直径 0.8-0.4cm・長さ 6.4cm の穴が開いている。

3 焼成粘土塊

不定形の土塊が焼けて固化したいわゆる焼成粘土塊は、発掘中に掘り出されたものが平成 11 年度に 32 点、13・14 年度に 238 点の合計 270 点ある。またフローテーション処理した遺構土塊から選別された洗い出し遺物の分量は表 IV-3 で示した。主に平滑に調整された表面をもたないこと、成形の意図が明瞭でないことによって土器および定形的な土製品と区別されるが、断片での区別は困難で、上記は概ね当初の形状・表情と思われるものを保っている事例の数量である。

掘り出し遺物（図版 V-32 上）は最も大きな径をもつもの（図版右端下から 3 番目）で長径 55mm、最も重いもの（図版最下段中央）で 33g。表面の大半が比較的滑らかで砂粒も沈んでおり、人間の手で形をなしたらしいものと、細かい凹凸に富み土や草の中で圧迫されて塊状となったかと思われるものがあり、前者が多いが確実な判別はできない。扁平な板状に圧延されたもの（図版左端付近）・棒状に伸びるもの（図版右端）・球状に近い塊（図版最下段）などは人為を反映した形状とみてよいのであろう。オニグルミの殻の内面の圧痕をもつものが 1 点ある（図版中央右寄り）。

洗い出し遺物（図版 V-32 下）は比較的多くの焼成粘土塊が選別された遺構を選んで単一処理番号から選別されたものの全てを写真で示した。F-80 は処理番号 13-280 で最大の遺物の長径 31mm。以下同様に F-96 は 13-460 で 12mm、F-304 は 13-79 で 10mm、F-367 は 13-558 で 28mm、F-420 は 13-606 で 23mm、F-540 は 13-520 で 22mm、F-611 は 13-571 で 21mm。細かい遺物の存在、特に微細な紡錘形のそれは土で汚れた手をこすり合わせた結果かと思われ、遺跡現地で土を加工する行為が行われたことを示唆しているが、確実には土器や遺構内外でしばしば発見された白色の粘土、遺跡の自然堆積物等との間で粒度や鉱物組成を比較したうえで再検討する必要があると思われる。

表 V-1 続き

Table with multiple columns representing various metrics and rows listing items with their corresponding values. The table includes a '分類' column on the left and a '合計' row at the bottom. The '合計' row shows values like 133481, 283, 13637, 799, etc.

3 生活関係(地上)建築物

Table with multiple columns representing various metrics and rows listing items with their corresponding values. The table includes a '合計' row at the bottom showing values like 7, 15, 10, 16, etc.

V 遺物

表 V-2 続き

品名	数量	備考	用途	品名	数量	備考	用途	品名	数量	備考	用途
13-208	33-153-d	212,283,291	中 3								
192-71	33-153-b	299	216	2							
	33-153-c	294	216	1							
V-1	13-413	30-153-a	637	126	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-72	30-153-b	637	126	3						
V-2	13-412a	30-153-a	407,641	196	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-73	30-153-b	407,641	196	3						
V-3	13-364	30-153-a	112	49	2	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-74	30-153-b	112	49	2						
V-4	13-468	30-153-a	243	31	2	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-75	30-153-b	243	31	2						
V-5	13-27	30-153-a	218	3	1	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-76	30-153-b	218	3	1						
V-6	13-47	30-153-a	819	191	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-77	30-153-b	819	191	3						
V-7	13-513	30-153-a	684	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-78	30-153-b	684	218	3						
V-8	13-353	30-153-a	1,133	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-79	30-153-b	1,133	218	3						
V-9	13-264	30-153-a	474,629	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-80	30-153-b	474,629	218	3						
V-10	13-270	30-153-a	669	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-81	30-153-b	669	218	3						
V-11	13-354	30-153-a	932	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-82	30-153-b	932	218	3						
V-12	13-406	30-153-a	541	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-83	30-153-b	541	218	3						
V-13	13-270	30-153-a	669	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-84	30-153-b	669	218	3						
V-14	13-354	30-153-a	932	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-85	30-153-b	932	218	3						
V-15	13-366	30-153-a	224,629	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-86	30-153-b	224,629	218	3						
V-16	13-114	30-153-a	21	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-87	30-153-b	21	218	3						
V-17	13-358	30-153-a	813	218	3	無 少	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年	1	内務省資料 1 冊 見本	明治 6 年
	192-88	30-153-b	813	218	3						

表 V-2 続き

頁	番号	和名	漢名	漢字	品名	成分	作用の分類	分類	製法	用法	備考	
13.518	68-136-1	68-137-1	68-138-1	68-139-1	68-140-1	68-141-1	68-142-1	68-143-1	68-144-1	68-145-1	68-146-1	
V 9	13.519	69-137-1	69-138-1	69-139-1	69-140-1	69-141-1	69-142-1	69-143-1	69-144-1	69-145-1	69-146-1	
	69-147-1	69-148-1	69-149-1	69-150-1	69-151-1	69-152-1	69-153-1	69-154-1	69-155-1	69-156-1	69-157-1	
	69-158-1	69-159-1	69-160-1	69-161-1	69-162-1	69-163-1	69-164-1	69-165-1	69-166-1	69-167-1	69-168-1	
	69-169-1	69-170-1	69-171-1	69-172-1	69-173-1	69-174-1	69-175-1	69-176-1	69-177-1	69-178-1	69-179-1	
	69-180-1	69-181-1	69-182-1	69-183-1	69-184-1	69-185-1	69-186-1	69-187-1	69-188-1	69-189-1	69-190-1	
	69-191-1	69-192-1	69-193-1	69-194-1	69-195-1	69-196-1	69-197-1	69-198-1	69-199-1	69-200-1	69-201-1	
	69-202-1	69-203-1	69-204-1	69-205-1	69-206-1	69-207-1	69-208-1	69-209-1	69-210-1	69-211-1	69-212-1	69-213-1
	69-214-1	69-215-1	69-216-1	69-217-1	69-218-1	69-219-1	69-220-1	69-221-1	69-222-1	69-223-1	69-224-1	69-225-1
	69-226-1	69-227-1	69-228-1	69-229-1	69-230-1	69-231-1	69-232-1	69-233-1	69-234-1	69-235-1	69-236-1	69-237-1
	69-238-1	69-239-1	69-240-1	69-241-1	69-242-1	69-243-1	69-244-1	69-245-1	69-246-1	69-247-1	69-248-1	69-249-1
V 9	13.520	70-137-1	70-138-1	70-139-1	70-140-1	70-141-1	70-142-1	70-143-1	70-144-1	70-145-1	70-146-1	
	70-147-1	70-148-1	70-149-1	70-150-1	70-151-1	70-152-1	70-153-1	70-154-1	70-155-1	70-156-1	70-157-1	
	70-158-1	70-159-1	70-160-1	70-161-1	70-162-1	70-163-1	70-164-1	70-165-1	70-166-1	70-167-1	70-168-1	
	70-169-1	70-170-1	70-171-1	70-172-1	70-173-1	70-174-1	70-175-1	70-176-1	70-177-1	70-178-1	70-179-1	
	70-180-1	70-181-1	70-182-1	70-183-1	70-184-1	70-185-1	70-186-1	70-187-1	70-188-1	70-189-1	70-190-1	
	70-191-1	70-192-1	70-193-1	70-194-1	70-195-1	70-196-1	70-197-1	70-198-1	70-199-1	70-200-1	70-201-1	
	70-202-1	70-203-1	70-204-1	70-205-1	70-206-1	70-207-1	70-208-1	70-209-1	70-210-1	70-211-1	70-212-1	70-213-1
	70-214-1	70-215-1	70-216-1	70-217-1	70-218-1	70-219-1	70-220-1	70-221-1	70-222-1	70-223-1	70-224-1	70-225-1
	70-226-1	70-227-1	70-228-1	70-229-1	70-230-1	70-231-1	70-232-1	70-233-1	70-234-1	70-235-1	70-236-1	70-237-1
	70-238-1	70-239-1	70-240-1	70-241-1	70-242-1	70-243-1	70-244-1	70-245-1	70-246-1	70-247-1	70-248-1	70-249-1
V 9	13.521	71-137-1	71-138-1	71-139-1	71-140-1	71-141-1	71-142-1	71-143-1	71-144-1	71-145-1	71-146-1	
	71-147-1	71-148-1	71-149-1	71-150-1	71-151-1	71-152-1	71-153-1	71-154-1	71-155-1	71-156-1	71-157-1	
	71-158-1	71-159-1	71-160-1	71-161-1	71-162-1	71-163-1	71-164-1	71-165-1	71-166-1	71-167-1	71-168-1	
	71-169-1	71-170-1	71-171-1	71-172-1	71-173-1	71-174-1	71-175-1	71-176-1	71-177-1	71-178-1	71-179-1	
	71-180-1	71-181-1	71-182-1	71-183-1	71-184-1	71-185-1	71-186-1	71-187-1	71-188-1	71-189-1	71-190-1	
	71-191-1	71-192-1	71-193-1	71-194-1	71-195-1	71-196-1	71-197-1	71-198-1	71-199-1	71-200-1	71-201-1	
	71-202-1	71-203-1	71-204-1	71-205-1	71-206-1	71-207-1	71-208-1	71-209-1	71-210-1	71-211-1	71-212-1	71-213-1
	71-214-1	71-215-1	71-216-1	71-217-1	71-218-1	71-219-1	71-220-1	71-221-1	71-222-1	71-223-1	71-224-1	71-225-1
	71-226-1	71-227-1	71-228-1	71-229-1	71-230-1	71-231-1	71-232-1	71-233-1	71-234-1	71-235-1	71-236-1	71-237-1
	71-238-1	71-239-1	71-240-1	71-241-1	71-242-1	71-243-1	71-244-1	71-245-1	71-246-1	71-247-1	71-248-1	71-249-1
V 10	13.522	72-137-1	72-138-1	72-139-1	72-140-1	72-141-1	72-142-1	72-143-1	72-144-1	72-145-1	72-146-1	
	72-147-1	72-148-1	72-149-1	72-150-1	72-151-1	72-152-1	72-153-1	72-154-1	72-155-1	72-156-1	72-157-1	
	72-158-1	72-159-1	72-160-1	72-161-1	72-162-1	72-163-1	72-164-1	72-165-1	72-166-1	72-167-1	72-168-1	
	72-169-1	72-170-1	72-171-1	72-172-1	72-173-1	72-174-1	72-175-1	72-176-1	72-177-1	72-178-1	72-179-1	
	72-180-1	72-181-1	72-182-1	72-183-1	72-184-1	72-185-1	72-186-1	72-187-1	72-188-1	72-189-1	72-190-1	
	72-191-1	72-192-1	72-193-1	72-194-1	72-195-1	72-196-1	72-197-1	72-198-1	72-199-1	72-200-1	72-201-1	
	72-202-1	72-203-1	72-204-1	72-205-1	72-206-1	72-207-1	72-208-1	72-209-1	72-210-1	72-211-1	72-212-1	72-213-1
	72-214-1	72-215-1	72-216-1	72-217-1	72-218-1	72-219-1	72-220-1	72-221-1	72-222-1	72-223-1	72-224-1	72-225-1
	72-226-1	72-227-1	72-228-1	72-229-1	72-230-1	72-231-1	72-232-1	72-233-1	72-234-1	72-235-1	72-236-1	72-237-1
	72-238-1	72-239-1	72-240-1	72-241-1	72-242-1	72-243-1	72-244-1	72-245-1	72-246-1	72-247-1	72-248-1	72-249-1

V 遺物

表 V-2 続き

号	番号	単位	産物番号	産物	数量	面積	形状	産物の調査	分類	注記	備考	備考	
12-204	遺跡7	35-120-F	35-120-F-011	189	1								
			35-120-F-011	189	1								
			35-120-F-023	195	1								
			35-120-F-015	201	1								
V-11	15-208	遺跡8	35-121-F-198	19	1	銅, 少, 細	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。		
			35-121-F-198	19	1	銅, 少, 細	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	漆器の付着部(棺蓋)の表面に付着。内部の調査により棺蓋の裏面に付着した。付着部は、内部の調査により、棺蓋の裏面に付着した。	
V-11	15-209	遺跡9	35-122-F-063	200	1								
			35-122-F-064	212	1								
			35-122-F-021	220	1								
			35-122-F-068	222	1								
V-11	15-210	遺跡10	35-123-F-061	221	1								
			35-123-F-017	226	1								
			35-123-F-012	227	1								
			35-123-F-020	228	1								
			35-123-F-021	228	1								
			35-123-F-017	229	1								
			35-123-F-012	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			35-123-F-015	232	1								
			V-11	15-211	遺跡11	35-124-F-015	232	1					
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
35-124-F-015	232	1											
V-11	15-212	遺跡12				35-125-F-015	232	1					
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			35-125-F-015	232	1								
			V-11	15-213	遺跡13	35-126-F-015	232	1					
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											
35-126-F-015	232	1											

表 V-2 続き

区分	表	冊	種別	通	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊		
V-9	15-03	D913	65-132-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
			65-132-2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
			65-132-3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
V-9	15-03	D913	65-132-4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
			65-132-5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
			65-132-6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
V-9	15-03	D913	65-132-7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
			65-132-8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
			65-132-9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

V 遺物

表 V-2 続き

種	群	種名	標本数	種数	個体数	性別	年齢	採集地	調査期間	調査方法	調査者	備考
V-13	13-30 (雑草)	13-30.1	118	1	118	♂	1
		13-30.2	119	1	119	♂	1
		13-30.3	120	1	120	♂	1
		13-30.4	121	1	121	♂	1
		13-30.5	122	1	122	♂	1
		13-30.6	123	1	123	♂	1
		13-30.7	124	1	124	♂	1
		13-30.8	125	1	125	♂	1
		13-30.9	126	1	126	♂	1
		13-30.10	127	1	127	♂	1
V-14	14-81	14-81.1	128	1	128	♂	1
		14-81.2	129	1	129	♂	1
V-15	15-16	15-16.1	130	1	130	♂	1
		15-16.2	131	1	131	♂	1
		15-16.3	132	1	132	♂	1
V-16	16-27	16-27.1	133	1	133	♂	1
		16-27.2	134	1	134	♂	1
		16-27.3	135	1	135	♂	1
		16-27.4	136	1	136	♂	1
		16-27.5	137	1	137	♂	1
V-17	17-43	17-43.1	138	1	138	♂	1
		17-43.2	139	1	139	♂	1
		17-43.3	140	1	140	♂	1
		17-43.4	141	1	141	♂	1
		17-43.5	142	1	142	♂	1
		17-43.6	143	1	143	♂	1
		17-43.7	144	1	144	♂	1
		17-43.8	145	1	145	♂	1
		17-43.9	146	1	146	♂	1
		17-43.10	147	1	147	♂	1
V-18	18-66	18-66.1	148	1	148	♂	1
		18-66.2	149	1	149	♂	1
V-19	19-117	19-117.1	150	1	150	♂	1
		19-117.2	151	1	151	♂	1
		19-117.3	152	1	152	♂	1
		19-117.4	153	1	153	♂	1
		19-117.5	154	1	154	♂	1
		19-117.6	155	1	155	♂	1
		19-117.7	156	1	156	♂	1
		19-117.8	157	1	157	♂	1
V-20	20-135	20-135.1	158	1	158	♂	1
		20-135.2	159	1	159	♂	1
		20-135.3	160	1	160	♂	1
V-21	21-241	21-241.1	161	1	161	♂	1
		21-241.2	162	1	162	♂	1
		21-241.3	163	1	163	♂	1
		21-241.4	164	1	164	♂	1
		21-241.5	165	1	165	♂	1
		21-241.6	166	1	166	♂	1
		21-241.7	167	1	167	♂	1
		21-241.8	168	1	168	♂	1
		21-241.9	169	1	169	♂	1
		21-241.10	170	1	170	♂	1
V-22	22-297	22-297.1	171	1	171	♂	1
		22-297.2	172	1	172	♂	1
		22-297.3	173	1	173	♂	1

表V-2 続き

区	番付	地区	遺跡名	種類	層位	土質	説明	出土品	分析	注	図面番号	写真	備考
V-29	12-10	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-11	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-12	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-13	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-14	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-15	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-16	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-17	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-18	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-19	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-20	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-21	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-22	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-23	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-24	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-25	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-26	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-27	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-28	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-29	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-30	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。
V-29	12-31	162	69-154-4	68	12	4 中, 少	鎌倉前期瓦葺 弥生石, 古銅土器。	古銅土器	なし。				中世前期, 弥生石。

V 遺物

表 V-3 各類土器の出土層位

分類	13-1 類	13-2 類	13-3 類	13-4 類	13-5 類	13-6 類	13-7 類	13-8 類	不明縄文	最終文
生活土										
1-5										7
6-10										
11-15										
16-20										
21-25										3
26-30										
31-35										
36-40										
41-45										
46-50										18
51-55										
56-60										2
61-65										
66-70										6
71-75										6
76-80										
81-85										
86-90										8
91-95										
96-100										
101-105								46		
106-110										
111-115								16		
116-120								48		
121-125				89	268	137	414	151	13	
126-130			11	145	56	93	159	30	53	
131-135			51	204	47	48	112		29	
136-140			2	8	5	67	29	28	2	
141-145					2	6	23			
146-150				46	43	161	56	8	1	
151-155				1	81	26	33			
156-160				2	3	3	1			
161-165				3	4		2			
166-170				24	19	14				
171-175										
176-180		1		27	1	1	3		1	
181-185	1		69	12						11
186-190	2	29	164	48	103	4	3		20	
191-195	30	40	369	33	95		2		22	
196-200	20	8	61	9		1	2			
201-205		1	144		3		5			
206-210		7	44			1	4		3	
211-215	196	107	102			5			15	
216-220	60	121	28	6					3	
221-225	39	136	25						1	
226-230			21							1
231-235	38	73							6	
236-240	20	16							101	
241-245		7								8
平成 11 年度トレンチ 158 c, d 区(生活面の発見するものを除く)										
H-1		2	11	5	27		6	14		
H-2-上	1	21	46	59	43		18	6	22	
H-2-中		1	6							
H-2-中(1)	1	19	104	18	5				28	
H-2-中(2)	13	66	19	5	1				7	
H-2-中(3)	42	24	21	25					3	
H-2-中(4)	32	12	7						3	
H-2-中(5)	16								4	
H-2-中(6)										
H-2-下	14	2	7							
H-3		4								
生活面・地層不明(土坑・根瓦・1層など)										
不 明	40	141	127	146	27	19	51	20	22	28
合 計	570	857	1,414	915	833	586	923	367	379	78

表 V-4 掲載石器等一覧

1 土坑・集石の遺物												
図番号	名 称	遺構名	発掘区	遺物番号	生活面	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図章番号	備 考
図 V-81-1	たたき石	P-30	69-156-d	025		16.8	10.5	3.5	922.7	花岩	図版 IV-5	
図 V-81-2	加工痕のある礫	P-30	69-156-d	024		18.2	11.2	6.4	1925.5	片岩	図版 IV-5	
図 V-81-3	加工痕のある礫	P-30	69-156-d	026		12.7	15.9	4.2	1352.6	花岩	図版 IV-5	P-33-1 と接合
図 V-81-1	礫片	P-33	69-156-c	013		6.9	9.8	1.4	107.3	花岩	図版 IV-5	P-30-3 と接合
図 V-81	複合図	P-30-3 P-33-1				12.7	15.9	4.2	1459.9	花岩	図版 IV-5	
図 V-81-1	スクレイパー	P-37	68-156-d	066		2.2	1.8	0.6	2.5	黒曜石	図版 IV-7	
図 V-81-1	たたき石	P-41	66-155-d	011		(8.3)	(4.6)	(4.4)	(85.0)	花岩	図版 IV-6	
図 V-81-1	石礫	P-48	66-158-ア	059		1.4	1.2	0.3	0.5	黒曜石	図版 IV-6	
図 V-81-1	台石	P-49	67-158-b	105		(12.0)	17.6	4.6	(1443.0)	安山岩	図版 IV-6	焼熟
図 V-81-1	石礫	P-53	68-157-c	028		1.9	(1.2)	0.2	(0.4)	黒曜石	図版 IV-7	
図 V-81-2	スクレイパー	P-53	68-157-c	024		(9.2)	2.7	0.7	(15.1)	黒曜石	図版 IV-7	
図 V-81-1	たたき石	P-56	67-157-d	037		11.0	6.7	3.8	319.2	安山岩	図版 IV-7	焼熟
図 V-81-2	台石	P-56	67-157-d	036		8.6	17.2	6.1	1359.9	安山岩	図版 IV-7	
図 V-81-1	石礫	P-63	67-158-a	054		2.3	1.2	0.3	0.7	黒曜石	図版 IV-7	
図 V-81-2	たたき石片	P-63	67-158-a	083		(8.2)	(5.6)	(3.9)	(298.3)	砂岩	図版 IV-7	
図 V-81-1	スクレイパー	P-65	67-157-a	032		3.6	3.6	1.0	9.6	黒曜石	図版 IV-7	
図 V-81-1	たたき石片	P-67	67-158-b	147		(11.8)	(7.5)	(3.2)	(455.9)	安山岩	図版 IV-7	
図 V-81-1	スクレイパー	P-70	69-157-b	057		2.9	1.7	0.8	3.0	花岩	図版 IV-8	
図 V-81-2	台石片	P-70	69-157-b	054		(6.4)	(6.3)	(4.5)	(235.0)	砂岩	図版 IV-8	
図 V-81-1	スクレイパー	P-71	67-158-b	159		5.7	2.0	1.1	7.7	黒曜石	図版 IV-8	
図 V-81-1	礫石	P-92	68-158-b	037		(4.0)	(4.7)	(3.4)	(13.3)	礫石	図版 IV-8	
図 V-81-1	スクレイパー	P-97	66-158-b	047		3.6	2.5	0.7	5.2	黒曜石	図版 IV-8	
図 V-81-1	石礫	P-98	66-158-b	044		1.8	1.2	0.3	0.4	黒曜石	図版 IV-8	
図 V-81-1	スクレイパー	P-104	68-156-b	022		5.0	2.8	1.0	12.5	黒曜石	図版 IV-8	
図 V-81-1	スクレイパー	P-105	68-156-a	059		12.1	7.2	1.4	100.5	安山岩	図版 IV-8	
図 V-81-1	台石	P-107	67-156-a	016		(14.1)	(11.7)	(7.8)	(1660.6)	砂岩	図版 IV-8	焼熟
図 V-81-1	スクレイパー	P-116	66-158-b	060		2.2	1.6	0.6	1.9	黒曜石	図版 IV-8	
図 V-81-1	たたき石	S-5	69-158-a	068	189	13.9	4.0	3.8	342.8	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-2	台石	S-5	69-158-d	001	189	16.2	24.4	5.7	2974.1	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-1	たたき石	S-15	67-158-a	016	134	10.3	5.8	3.5	280.8	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-2	たたき石	S-15	67-158-a	017	134	10.1	(8.9)	4.1	(548.3)	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-3	たたき石	S-15	67-158-a	018	134	12.6	7.2	3.7	430.8	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-4	台石片	S-15	67-158-a	019	134	(8.0)	(11.3)	(6.1)	(926.7)	砂岩	図版 IV-17	焼熟
図 V-81-1	たたき石	S-16	70-157-c	017	131	12.5	5.2	4.1	412.8	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-2	たたき石	S-16	70-157-c	018	131	18.7	8.8	5.3	1336.7	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-3	たたき石	S-16	70-157-c	019	131	10.8	6.1	4.3	386.8	安山岩	図版 IV-17	
図 V-81-1	たたき石	S-17	70-157-d	030	134	(14.1)	6.7	4.2	(582.8)	安山岩	図版 IV-18	焼熟
図 V-81-2	たたき石	S-17	70-157-d	032	134	13.3	8.9	5.1	786.8	安山岩	図版 IV-18	
図 V-81-1	礫片	S-18	70-157-d	033	134	(15.8)	(13.0)	(5.7)	(796.9)	凝灰岩	図版 IV-18	
図 V-81-2	たたき石片	S-18	70-157-d	034	134	(13.8)	(5.2)	(4.5)	(443.5)	安山岩	図版 IV-18	
図 V-81-3	台石	S-18	70-157-d	035	134	(10.3)	13.5	4.9	(1009.1)	安山岩	図版 IV-18	

2 土土・包含層の遺物											
図番号	名 称	発掘区	遺物番号	生活面	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図章番号	備 考
図 V-84-1	石礫	69-155-9②	004	150	2.2	1.0	0.2	0.4	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-2	石礫	68-154-6①	002	150	2.5	1.1	0.3	0.7	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-3	石礫	68-156-7⑤	047	223	1.2	1.0	0.2	0.3	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-4	石礫	69-158-9③	010	128	2.2	1.3	0.4	0.7	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-5	石礫	70-155-9③	001	150	(2.2)	1.1	0.2	(0.4)	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-6	石礫	68-158-9③	003	131	2.1	1.1	0.3	0.5	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-7	石礫	69-157-②	010	128	2.7	1.3	0.4	0.9	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-8	石礫	65-156-①	007	128	2.5	1.5	0.3	0.9	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-9	石礫	68-158-②	042	189	(2.0)	1.3	0.4	(0.8)	黒曜石	図版 V-19	図例録に換り
図 V-84-10	石礫	66-156-7⑤	019	237	1.9	1.3	0.2	0.5	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-11	石礫	67-158-①	119	195	2.0	1.9	0.4	0.8	黒曜石	図版 V-19	

V 遺物

表 V-4 続き

図番号	名称	発掘区	遺物番号	生産品	長さ (cm)	幅・厚 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	採取番号	備考
図 V-84-12	石鏃	69-158-b②	079	195	2.1	1.0	0.3	0.5	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-13	石鏃	67-156-c③	015	128	2.2	1.1	0.4	0.7	黒曜石	図版 V-19	被熱
図 V-84-14	石鏃	66-157-d①	009	181	2.2	1.3	0.5	0.6	花岩	図版 V-19	
図 V-84-15	石鏃	67-157-a①	004	134	(2.3)	1.3	0.5	(1.2)	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-16	石鏃	67-157-a③	013	189	2.9	1.9	0.5	1.8	山輝石	図版 V-19	
図 V-84-17	石鏃	70-158-b④	059	133	3.3	1.3	0.5	1.9	頁岩	図版 V-19	F341・アスファルト被熱品
図 V-84-18	石鏃	69-158-c⑤	049	225	2.1	1.2	0.4	0.7	山輝石	図版 V-19	被熱
図 V-84-19	石鏃	68-156-c①	002	124	(3.0)	0.9	0.5	(1.0)	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-20	石鏃	66-154-c②	011	149	(2.0)	(2.7)	0.7	(3.3)	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-21	つまみ付きナイフ	69-155-b②	002	150	8.4	2.7	0.7	21.4	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-22	スクレイパー	66-155-c①	003	123	2.9	3.6	0.8	8.2	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-23	スクレイパー	67-156-d④	025	131	5.7	2.4	0.7	8.8	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-24	スクレイパー	70-157-a②	016	130	6.6	3.4	0.8	25.3	黒曜石	図版 V-19	被熱
図 V-84-25	スクレイパー	65-155-c④	006	187	6.4	3.0	1.0	18.2	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-26	スクレイパー	69-154-a①	002	123	10.2	5.1	1.4	92.8	黒曜石	図版 V-19	
図 V-84-27	スクレイパー	66-158-a⑤	019	189	11.8	5.9	1.4	123.3	安山岩	図版 V-19	
図 V-84-28	スクレイパー	69-156-b②	004	124	5.8	4.0	1.4	31.1	閃輝石	図版 V-19	
図 V-85-29	スクレイパー	66-152-d①	001	139	9.4	5.6	1.1	52.6	輝石安山岩	図版 V-19	
図 V-85-30	スクレイパー	70-157-a②	003	129	7.4	6.0	1.1	49.1	頁岩	図版 V-19	
図 V-85-31	スクレイパー	67-156-c④	020	131	4.9	3.6	1.0	12.6	黒曜石	図版 V-19	
図 V-85-32	スクレイパー	66-156-c⑤	031	235	2.9	3.0	0.8	4.0	山輝石	図版 V-19	
図 V-85-33	石斧	69-156-d①	001	124	8.9	2.9	1.3	62.6	片岩	図版 V-19	
図 V-85-34	石斧	68-157-c③	053	134	12.3	4.0	1.6	124.4	緑色泥岩	図版 V-19	
図 V-85-35	石斧	68-157-d②	055	195	15.4	6.2	4.3	647.5	緑色泥岩	図版 V-19	
図 V-85-36	石斧	67-158-A⑦	045	194	15.8	4.4	3.2	417.3	カンラン岩	図版 V-19	F396
図 V-86-37	硯石片	69-157-b②	041	213	16.0	(10.7)	2.1	(432.3)	砂岩	図版 V-19	
図 V-86-38	硯石片	66-156-a③	006	124	16.6	(15.7)	4.3	(530.0)	凝灰岩	図版 V-19	
図 V-86-39	すり石片	68-157-d⑤	057	218	(8.7)	6.2	4.7	(318.0)	砂岩	図版 V-20	
図 V-86-40	たたく石	66-158-a②	011	132	13.1	8.0	6.4	659.1	砂岩	図版 V-20	
図 V-86-41	たたく石	69-158-b③	014	128	10.4	6.2	4.3	353.2	頁岩	図版 V-20	
図 V-86-42	たたく石	69-155-a②	003	150	14.0	5.0	3.0	366.0	安山岩	図版 V-20	
図 V-86-43	たたく石	70-157-A⑥	043	227	16.6	4.6	3.3	441.5	砂岩	図版 V-20	
図 V-86-44	かき	70-158-U④	007	131	9.1	12.9	3.1	543.2	安山岩	図版 V-20	
図 V-87-45	かき	69-157-b③	028	130	18.5	24.9	6.6	3420.0	砂岩	図版 V-20	いかり石
図 V-87-46	石製品	68-154-d①	008	150	1.3	1.4	0.9	2.9	燧石	図版 V-21	玉
図 V-87-47	石製品	70-157-a②	038	196	1.6	1.7	0.9	(3.0)	カンラン岩	図版 V-21	玉
図 V-87-48	石製品	67-154-a②	001	125	2.1	2.1	1.2	2.9	カンラン岩	図版 V-21	玉・風化寸すむ
図 V-87-49	土製品	70-157-a②	010	129	1.7	1.4	1.3	2.9	図版 V-21		玉
図 V-87-50	土製品	67-156-a⑤	011	134	1.6	1.4	1.4	2.8	図版 V-21		玉
図 V-87-51	土製品	69-156-c①	018	124	1.4	1.3	1.2	1.9	図版 V-21		玉
図 V-87-52	土製品	70-158-b⑥	033	196	(2.5)	(1.2)	0.7	(1.9)	図版 V-21		勾玉
図 V-87-53	土製品	69-156-a①	003	124	3.3	3.5	1.1	(5.7)	図版 V-21		勾玉
図 V-87-54	土製品	66-158-a①	031	123	(4.0)	1.6	1.2	(5.7)	図版 V-21		勾玉
図 V-87-55	土製品	67-158-b④	007	132	4.5	1.3	1.4	(9.1)	図版 V-21		勾玉
図 V-87-56	土製品	65-158-A⑥	003	245	3.3	2.1	1.1	6.2	図版 V-21		勾玉
図 V-87-57	土製品	66-156-A⑥	033	217	(1.8)	(2.1)	(0.5)	(2.0)	図版 V-21		
図 V-87-58	土製品	66-156-A⑥	023	217	(1.9)	(2.2)	(0.7)	(3.5)	図版 V-21		
図 V-87-59	土製品	67-155-c③	017	177	2.0	2.2	1.1	3.3	図版 V-21		
図 V-87-60	土製品	70-157-B①	003		(2.3)	(1.8)	0.9	(2.6)	図版 V-21		
図 V-88-61	土製品	66-158-d	P-120-2	211	9.3	4.8	3.0	91.0	図版 V-21		クマと見られる土製品
図 V-88-62	石鏃	66-138-E①	001	25	3.2	1.6	0.4	2.0	黒曜石	図版 V-20	一向線平品
図 V-88-63	石鏃	65-138-U①	001	25	3.3	1.1	0.4	1.2	黒曜石	図版 V-20	
図 V-88-64	石鏃	65-141-U②	001	43	3.3	1.1	0.4	1.5	黒曜石	図版 V-20	太い基部がある
図 V-88-65	つまみ付きナイフ	66-135-U①	001	16	5.2	2.9	0.9	12.8	玉髓	図版 V-20	
図 V-88-66	スクレイパー	66-148-E①	001	106	4.7	2.0	0.8	6.3	黒曜石	図版 V-20	
図 V-88-67	スクレイパー	66-148-U①	001	105	4.2	2.6	1.5	18.8	山輝石	図版 V-20	
図 V-88-68	たたく石	66-118-A①	001	1	9.5	4.4	4.1	138.3	花岩	図版 V-20	
図 V-88-69	たたく石	65-138-U①	009	25	14.7	5.5	2.6	376.7	砂岩	図版 V-20	

VI 自然科学的分析

1 年代測定結果

本節では平成14年度に当財団が株式会社地球科学研究所に委託した年代測定の成果として提出された「放射性炭素年代測定結果報告書」(平成15年2月17日付け)の中から対蹠2遺跡関係部分を掲載する。測定の対象となった試料TK2-41・42の採取位置・内容などは表VI-1のとおりである。

2試料とも付近に土器を伴わない焼土から採取しており考古学上の相対年代を確定しがたいが、TK2-41は縄文時代前葉の土器が出土した67-62-63面より確実に上位、またTK2-41は従来発掘した範囲でもっとも上位の地層に形成された焼土からの採取であり、当遺跡の年代の新しい部分を代表するものである。(酒井)

表VI-1 年代測定試料一覧(地球科学研究所実施分)

試料名	地区	層面	生活面	遺構名	試料採取方法	試料内容	備考
TK2-41	65-137-ア	67-59hと59.1の間	生活面21	F-736	比較的大型の炭化木材を現場で固定、取り上げ。	炭化木片 0.07g(乾)	実体顕微鏡を用いて2年輪位を切り取り
TK2-42	66-113-ア・イ	67-3,24,2より上	生活面1	F-756	比較的大型の炭化木材を現場で固定、取り上げ。	炭化木片 0.08g(乾)	実体顕微鏡を用いて2年輪位を切り取り

放射性炭素年代測定結果報告書

株式会社地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

^{14}C age (y BP)	: ^{14}C 年代 “measured radiocarbon age” 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。半減期はリビーの5568年を用いた。
補正 ^{14}C age (y BP)	: 補正 ^{14}C 年代 “conventional radiocarbon age” 試料の炭素安定同位対比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。 試料の ^{13}C 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。 暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。
$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	: 試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。 この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372 である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al., 1998, Radiocarbon 40 (3)) により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg. 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP.

Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that the future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法	AMS	: 加速器質量分析
	Radiometric	: 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法
処理・調整・その他		: 試料の前処理、調整などの情報
前処理	acid-alkali-acid	: 酸-アルカリ-酸洗浄
	acid washes	: 酸洗浄
	acid etch	: 酸によるエッチング
	none	: 未処理
調整・その他		
	Bulk-Low Carbon Material	: 低濃度有機物処理
	Bone Collagen Extraction	: 骨、歯などのコラーゲン抽出
	Cellulose Extraction	: 木材のセルロース抽出
	Extended Counting	: Radiometric による測定の際、測定時間を延長する
分析機関	BETA ANALYTIC INC.	
	4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A.	33155

別表 C14年代測定結果

試料データ	C14年代 (y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	補正C14年代 (y BP) (Conventional C14 age)
Beta-174540 試料名 (21746) TK2-41 試料種、前処理など charred material, acid/alkali/acid	2290 \pm 40	-26.0	2270 \pm 40
	測定方法、期間	AMS-Standard	
Beta-174541 試料名 (21747) TK2-42 試料種、前処理など charred material, acid/alkali/acid	1760 \pm 40	-26.1	1740 \pm 40
	測定方法、期間	AMS-Standard	

年代値はRCYBP (1950A.D.を0年とする) で表記。モダンリファレンススタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ (68%確率) である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=26.1‰, msi(=1))

Laboratory number: Beta-174540

Conventional radiocarbon age: 2270 ± 40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal BC 390 to 360 (Cal BP 2340 to 2290) and
Cal BC 220 to 210 (Cal BP 2270 to 2160)

(95% probability)

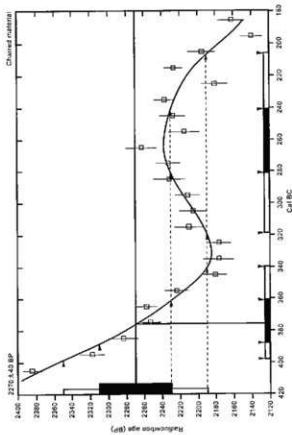
Intercept data

Intercept of radiocarbon age

with calibration curve: Cal BC 380 (Cal BP 2320)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 390 to 360 (Cal BP 2340 to 2310) and
Cal BC 280 to 240 (Cal BP 2230 to 2190)

(68% probability)



References:

Numbers used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., & Reimer, P. M., 1993, *Radiocarbon* 46 (3), p.401-410

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., & Reimer, P. M., 1998, *Radiocarbon* 40 (3), p.1041-1053

Meinhardt

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Tolins, A. S., Vogel, J. C., 1991, *Radiocarbon* 33(2), p.117-122

Beta Analytic Inc.

495 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667-5107 • Fax: (305) 667-8964 • E-Mail: beta@betanalytic.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=26.1‰, msi(=1))

Laboratory number: Beta-174541

Conventional radiocarbon age: 1740 ± 40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal AD 228 to 400 (Cal BP 1730 to 1550)

(95% probability)

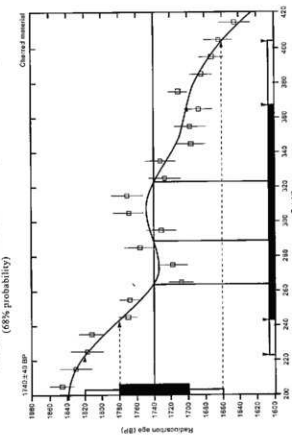
Intercept data

Intercept of radiocarbon age

with calibration curve: Cal AD 260 (Cal BP 1690) and
Cal AD 290 (Cal BP 1660) and
Cal AD 320 (Cal BP 1630)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 240 to 370 (Cal BP 1710 to 15 80)

(68% probability)



References:

Numbers used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., & Reimer, P. M., 1993, *Radiocarbon* 46 (3), p.401-410

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., & Reimer, P. M., 1998, *Radiocarbon* 40 (3), p.1041-1053

Meinhardt

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Tolins, A. S., Vogel, J. C., 1991, *Radiocarbon* 33(2), p.117-122

Beta Analytic Inc.

495 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667-5107 • Fax: (305) 667-8964 • E-Mail: beta@betanalytic.com

2 対雁2遺跡の自然科学分析

平成13年度に対雁2遺跡の古環境調査の目的でおこなった自然科学分析の報告を本節に掲載する。調査は当財団の委託によりバリノ・サーヴェイ株式会社が実施したものであり、分析試料は同社職員が現地調査にともなって採取したが、年代測定用試料の一部のみ当財団が採取し、同社に送付した。その内容を表VI-2に示す。

この報告により縄文晩期の古環境については一定の自然科学的知見が得られ、遺跡が河成層中に形成されているとの判断がある程度裏付けられたものと考えている。なお平成14年度には調査方格149線以西を対象に同社に委託して同様の調査をおこなっており、統縄文時代の古環境についても来年度以降自然科学的知見を報告できる見込みである。

(西脇)

表VI-2 年代測定試料一覧(バリノ・サーヴェイ実施分)

遺構名	地区	層面	生活面	採取方法	試料内容
F-598	69-149-a,d	69-1.4	生活面 111	フローテーション試料13-435の浮遊物から肉眼で検出。	ヤマブドウ種子、5個体以上、0.10g
F-463	68-153-c	69-21.3より上	生活面 137	フローテーション試料13-431の残渣から肉眼で検出。	オニグルミ種子、単一個体、0.11g
F-622	69-156-d	69-36.1より上	生活面 191	バリノ・サーヴェイ報告参照	同左
F-425	69-158-a	69-34.3と36.1の間	生活面 195	フローテーション試料13-219の残渣から肉眼で検出。	オニグルミ種子、単一個体、0.18g
F-527	69-157-a	69-43bと45bの間	生活面 213	フローテーション試料13-393の残渣から肉眼で検出。	オニグルミ種子、単一個体、0.25g

対雁2遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

対雁2遺跡は、石狩川左岸の河川敷内にあり、旧豊平川との合流点よりも上流側で、標高8mほどの微高地に立地する。これまでの発掘調査によって、縄文時代晩期末の遺構、遺物が検出されているが、特に焼土が多く確認されている。本遺跡内の堆積物は、基本的には石狩川ならびにその支流の豊平川によってもたらされた河川性の氾濫堆積物であるとみられ、遺跡形成当時は微高地であったと推定されている。今回は、焼土が作られた時期を確認する目的で、放射性炭素年代測定を行う。また、本遺跡が展開されていた当時の古環境を推定する目的で、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行う。さらに、検出された焼土について、微細遺物分析と植物珪酸体分析を行うことにより、燃料材や植物質食糧など当時の生業に関する情報を得る。

(1) 試料

放射性炭素年代測定は、調査区の5遺構(F-598・F-463・F-622・F-425・F-527)から採取された炭化したオニグルミやヤマブドウの種実を用いる(図1)。遺構・試料の詳細については、結果とあわせて表1に示す。

古環境推定に用いる試料は、69ラインメインセクションから採取されたもので、2つの地点(第1地点、第2地点)を設定し試料を採取した(図1・2)。この中から目的を考慮して各分析資料の選択

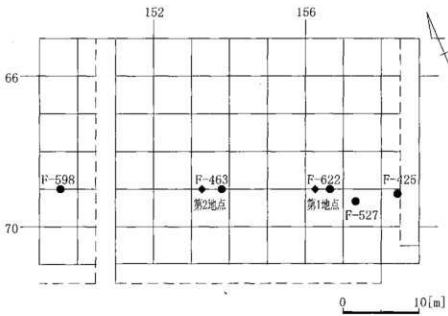


図1 年代測定用試料採取位置

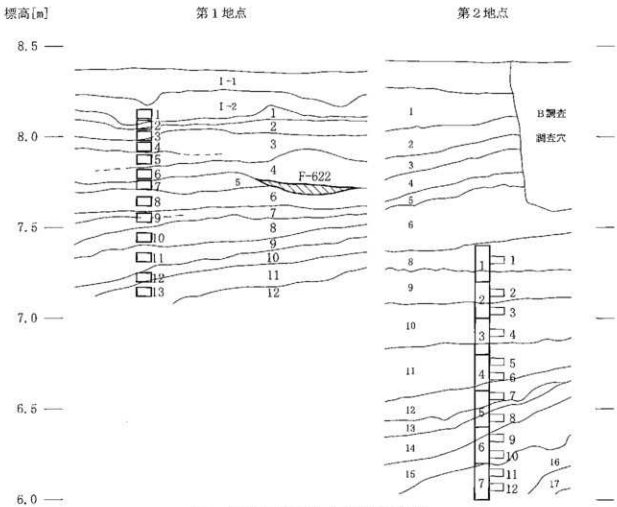


図2 各地点の断面図および試料採取位置

VI 自然科学的分析

を行った。第1地点より採取した試料は、試料番号1-13の13点である。珪藻分析は全点(13点)、花粉分析は試料番号2・10・13の3点、植物珪酸体分析は試料番号2・4・7・10-13の7点の分析を行った。第2地点からは、長さ20cmのブロック状に試料を7点採取した。これを室内にて層位を考慮しながら12点(1-12)の試料を採取し、これを分析に用いる。珪藻分析は全点(12点)、花粉分析は試料番号2、3、5、7、10の計5点、植物珪酸体分析は、1、2、3、5、7-11の計9点について分析を実施する。また1地点脇の焼土遺構(F-622)から検出された焼土混じりの土壌は、植物珪酸体分析・微細遺物分析を実施する。

(2) 分析方法

a 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

b 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)などを参照する。

同定結果は、海水生種、汽水生種、淡水-汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水-汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe(1995)の環境指標種を参考とする。

c 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

d 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、

表1 放射性炭素年代測定結果

遺構名	遺構標高 m	試料内容	重量 g	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ ‰	補正年代 BP	Code No.
F-598	7.58-62	ヤマブドウ種子 (板数個体)	0.10	2420±30	-23.75±0.90	2450±30	IAAA-10387
F-463	8.02-10	オニグルミ殻 (単一殻体)	0.11	2460±30	-24.15±1.04	2480±30	IAAA-10388
F-622	7.70-76	オニグルミ殻	0.10	2550±30	-28.25±0.94	2500±30	IAAA-10389
F-425	7.64-71	オニグルミ殻 (単一殻体)	0.18	2580±30	-26.17±0.90	2560±30	IAAA-10390
F-527	7.33-37	オニグルミ殻 (単一殻体)	0.25	2520±30	-28.02±1.12	2470±30	IAAA-10391

(1) 測定年代および補正年代は、1950年を基点に何年前であることを示した値。

(2) 誤差は、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代。

ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

なお、F-622試料では珪化組織片の産出に注目した。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社1993)。そのため、珪化組織片の産出により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

e 微細遺物分析

試料を湿重量で約1kg採取し、数%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置、試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種類を同定する。

(3) 結果

a 放射性炭素年代測定

測定結果を表1に示す。F-598遺構から採取された炭化物は約2450年前、F-463遺構から採取された炭化物は約2480年前、F-622遺構から採取された炭化物は約2500年前、F-425遺構から採取された炭化物は約2560年前、F-527遺構から採取された炭化物は約2470年前の測定年代値を示す。なお、 $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}C/^{12}C$)を測定し、標準試料PDB(白亜紀のペレムナイト類の化石)の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差(‰;パーミル)で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

b 珪酸分析

結果を表2、図3に示す。1地点の13試料全てと2地点の試料番号1は珪酸化石が少なかったが、それ以外の2地点の11試料(試料番号2-12)は産出する。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、70%前後である。産出分類群数は、合計で43属142種類である。地点別に珪酸化石群集の特徴を述べる。

1 地点 1地点は、珪酸化石の産出が極めて少なく、産出種のほとんどは壊れたり溶解していた。主な産出種は、*Achnanthes lanceolata*、*Cymbella sinuata*、*Cocconeis placentula* var. *lineata*などの流

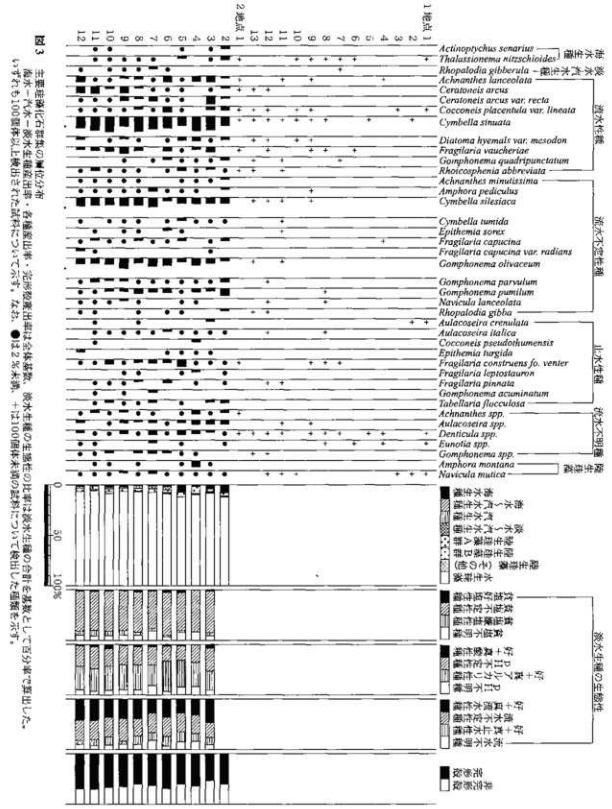
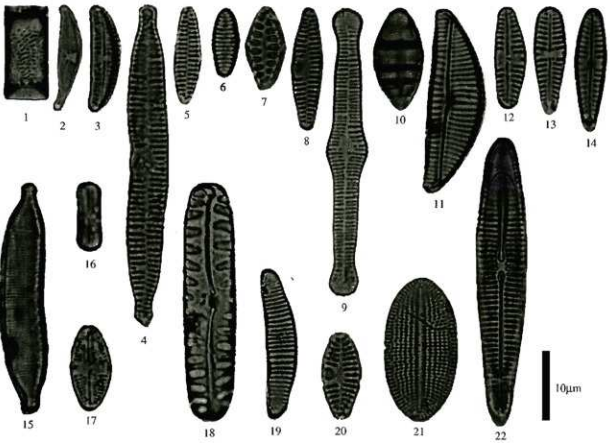


図3 主要な藻類化石群集の属位分布

淡水一汽水一海水性環境出所・各種原出所・汽水環境出所は全体採取。海水性藻類の生着性の比較は海水性藻類の合計を基數として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された属位について示す。なお、●は25米水深、+は100個体未満の属位について検出した環境を示す。



- | | |
|--|---|
| <p>1. <i>Aulacoseira crenulata</i> (Ehr.) Krummer (2地点: 3)
 2. <i>Amphora monstana</i> Krause (2地点: 4)
 3. <i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.) Grunow (2地点: 5)
 4. <i>Ceratoneis arcus</i> var. <i>recta</i> (Cl.) Krause (2地点: 3)
 5. <i>Fragilaria constrans</i> fo. <i>venet</i> (Ehr.) Hustedt (1地点: 7)
 6. <i>Fragilaria exigua</i> Grunow (1地点: 7)
 7. <i>Fragilaria planum</i> Ehrenberg (1地点: 12)
 8. <i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petenert (1地点: 12)
 9. <i>Talellaria flocculosa</i> (Roth) Kuetzing (2地点: 2)
 10. <i>Diatoma hyemale</i> var. <i>mesodon</i> (Ehr.) Kriehner (2地点: 2)
 11. <i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch (1地点: 12)</p> | <p>12. <i>Cymbella sinuata</i> Gregory (1地点: 10)
 13. <i>Gomphonema olivaceum</i> (Lyngb.) Kuetzing (2地点: 3)
 14. <i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot (2地点: 2)
 15. <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow (1地点: 2)
 16. <i>Navicula contesa</i> Grunow (1地点: 1)
 17. <i>Navicula musica</i> Kuetzing (1地点: 1)
 18. <i>Pinnularia borealis</i> var. <i>scalaris</i> (Ehr.) Rabenhovst (1地点: 7)
 19. <i>Eumotia pectinella</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhovst (1地点: 8)
 20. <i>Achnanthes lanceolata</i> (Ehr.) Grunow (1地点: 9)
 21. <i>Cocconeis placundula</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.) Cleve (1地点: 10)
 22. <i>Rhizosolenia abbreviata</i> (Ag.) Lango-B. (2地点: 2)</p> |
|--|---|

図版1 珪藻化石

水域に生育する種類や *Cymbella silesiaca* 等の流水域にも止水域にも生育する流水不定性種、それに *Thalassionema nitzschioides* 等の海水生種などがみられる (図版1)。

2 地点 試料番号 2-12 から淡水生種が多く産出する。淡水性種の生態性 (塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能) の特徴はいずれの試料とも近似しており、貧塩不定性種 (少量の塩分には耐えられる種)、真+好アルカリ性種 (pH7.0 以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種) と pH 不定性種 (pH7.0 付近の中性水域に最もよく生育する種)、流水不定性種 (流水域にも止水域にも普通に生育する種) と真+好流水性種 (流水域に最もよく生育する種) が多産する。産出種の特徴は近似しており、好流水性で中-下流性河川指標種群の *Cymbella sinuata*、*Achnanthes lanceolata*、*Ceratoneis arcus*、*Diatoma hyemale* var. *mesodon*、*Fragilaria vaucheriae*、流水不定性の *Cymbella silesiaca*、*Gomphonema olivaceum*、*G. pumilum* 等が産出する (図版1)。なお中-下流性河川指標種群とは、河川中-下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種群である (安藤 1990)。

表3 花粉分析結果

種 類	1地点			2地点				
	試料番号2	10	13	試料番号2	3	5	7	10
木本花粉								
マツ属椎葉管束形属	-	1	-	-	-	-	1	-
カバノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	1	-	-	-	-	1	1	-
ブナ属	1	-	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	1	-
クロウメモドリ科	-	1	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	1	-
草本花粉								
オミナエシ属	-	-	-	-	1	-	-	-
オナモミ属	-	-	-	-	-	-	1	-
不明花粉	-	1	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子								
シダ植物胞子	3	-	-	-	2	38	6	4
合 計								
木本花粉	2	2	0	1	0	2	4	0
草本花粉	0	0	0	0	1	0	1	0
不明花粉	0	1	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	3	0	0	0	2	38	6	4
総計 (不明を除く)	5	2	0	1	3	40	11	4

表4 植物珪酸体分析結果

種 類	1地点							2地点											P-622 覆土
	試料番号2	4	7	10	11	12	13	試料番号1	2	3	5	7	8	9	10	11			
イネ科葉部短細胞珪酸体																			
タケ亜科	4	1	-	-	1	1	2	2	1	-	1	1	-	-	-	1	2		
ヨシ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イチゴツナギ亜科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
不明ヒゲシバ型	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
不明ダンチク型	3	-	1	-	1	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-		
イネ科葉身横細胞珪酸体																			
タケ亜科	9	2	-	1	1	-	8	4	1	1	3	3	2	1	6	5	2		
不明	1	1	1	-	2	-	3	3	-	1	-	-	1	1	-	1	1		
合 計																			
イネ科葉部短細胞珪酸体	11	1	1	0	3	2	3	3	1	1	2	1	0	0	0	2	2		
イネ科葉身横細胞珪酸体	10	3	1	1	3	0	11	7	1	2	3	3	3	2	6	6	3		
総 計	21	4	2	1	6	2	14	10	2	3	5	4	3	2	6	8	5		

c. 花粉分析

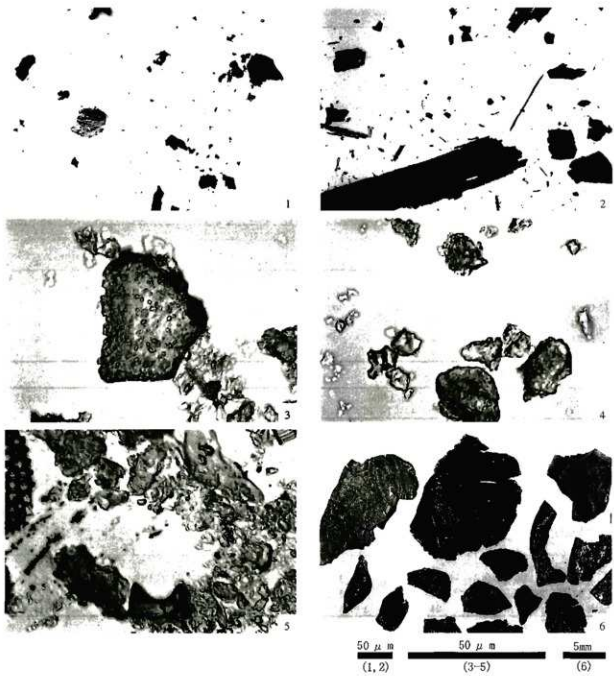
結果を表3に示す。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、そのほとんどが、花粉外膜が壊れている状態で産出していた。プレバート内の状況写真を図版2に示す。

d. 植物珪酸体分析

結果を表4に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、いずれの試料もタケ亜科をはじめ、ヨシ属やイチゴツナギ亜科がわずかに認められるにすぎない。また、検出された植物珪酸体には表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる（図版2）。

e. 微細遺物分析

炭化したオニグルミの破片、微細な炭化材、種類、部位ともに不明な炭化物片が微量検出されたの



- 1.花粉分析プレパラート内の状況写真 (1地点; 13)
- 2.花粉分析プレパラート内の状況写真 (2地点; 2)
- 3.タケ逆科微生物細胞珪酸体 (2地点; 10)
- 4.植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真 (F-622; 覆土)
- 5.植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真 (1地点; 13)
- 6.オニグルミ (F-622; 覆土)

図版2 花粉・植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真および種実遺体

みである。オニグルミの破片は数mm以下と小さく、木質で堅い。表面にみられるしわ状模様や、内側の複雑な窪みによってかろうじてオニグルミと判別できる程度である (図版2)。

(4) 考察

a 堆積環境

平成12年度の調査報告書(西田ほか2001)によれば、遺跡の土層は水平に堆積するI・II層と、西方向に向けて傾斜するIII層があり、これらの層界は不整合面となっている。今回の調査地点に当てはめると、1地点がI・II層の、2地点がIII層の試料を採取し分析対象としていることになる。

珪藻化石群集をみると、1地点と2地点では群集組成が異なり、堆積環境の違いを反映しているものとみられる。

2地点では、III層が分布する。平成12年度の調査報告書(西田ほか2001)や今回の断面図をみると、石狩川の流路方向(西側)に向かってトラフ構造を示すが、このような構造は河川敷内の洪水堆積物にはよくみられる構造である(鈴木2001)。このことから、2地点で分析を行った堆積層は石狩川の影響を強く受けている堆積物であるといえる。珪藻化石群集をみても、ほとんどの試料で中-下流性河川指標種群を含む流水性種が多産することで特徴付けられている。このことから、流水域で堆積した河川堆積物と考えられるが、これは堆積構造からみても調和的な結果である。

一方、1地点はI・II層にあたる部分の分析を行っている。細粒の堆積物が平行に堆積し、遺構・遺物など生活の痕跡が認められるようになる。河川で小規模な氾濫が起こると、流路の中心ではトラフ構造を示す斜交葉理が発達するが、奥に向かって薄く細粒となり、さらに奥では植生が破壊されないほどの薄い泥層へと変化する(鈴木1994)。このことから、遺跡周辺では流路変更などに伴って河川の中心部から外れ、本流(石狩川)の影響を受けにくくなったため微高地化し、地表面が安定したと思われる。このように洪水によって冠水する期間が短くなると、地表面が好氣的状況下になる。1地点の分析結果をみると、珪藻化石が極めて少なく、また産出種の多くは壊れたり溶解している。この傾向は花粉化石や植物珪酸体でも同様である。好氣的状況下では、花粉化石は風化し分解されやすいといわれている(中村、1967など)。また、植物珪酸体などの珪酸分は、土壌化の比較的早い段階で、粘土化のサイクルに組み入れられるなどして消失する可能性が指摘されている(近藤1988)。これらのことから、当時の環境を示す微化石は、土壌化等の作用によって大部分が失われたものと考えられる。なお、微量産出する珪藻化石の中には、流水環境を指標する中-下流性河川指標種群が産出することから、縄文時代晩期の遺構・遺物が認められるI・II層になっても、洪水の影響は受けていたと考えられる。しかし冠水後の乾燥化等により、微化石の保存が悪くなったと考えられる。

なお、花粉化石や植物珪酸体は2地点においても保存状態が悪い。堆積する際に花粉や植物珪酸体の量が少なかったり、好氣的状況下に置かれたときの影響が下位の層にも及んだ可能性などが推測されるが、はっきりしたことは不明である。

b 古植生変遷

今回の結果をみると、花粉分析・植物珪酸体分析双方ともに化石の保存が悪いため、当時の古植生に関する情報を得ることは難しかった。現在の石狩川氾濫源にみられる植生調査の結果によれば、下流部にはミゾソバ、ガマ、セリ、ヨシ、マコモなどの草本類や、エゾノカワヤナギ林、タチヤナギ林、ハンノキ林などが分布している(菊池2001)。また、宮脇(1988)によると、現在の石狩川流域で残存する植物群落は、ヤナギ、ハンノキ、ヤチダモ、ハルニレなどを中心とする河畔林や湿地林とされる。おそらくIII層が堆積する河川堆積の中心にあったころは、植生が貧弱であったと思われるが、生活の痕跡が認められるI・II層堆積時になると、付近には上記のような河畔林や草地が作られるようになったと思われる。

c 焼土の年代と燃料材

焼土から出土した炭化物の年代測定結果をみると、ほぼ 2500 年前前後に値が収束しており、縄文時代晩期に焼土遺構が作られたと考えられるが、発掘所見とも矛盾しない結果である。また、平成 12 年度の調査成果において行われた、当時の生活面から検出された炭化物の年代測定結果でもほぼ同様な値が得られており（西田ほか 2001）、調和的である。

焼土の微細物同定を行った結果、少量の炭化材とともにオニグルミの破片が検出された。オニグルミは、生食可能で保存が利き、収量も比較的多いことから、古くから植物質食糧として利用されてきた種類である。おそらく、利用後の残渣を燃料材の一部として利用したと考えられる。オニグルミは、氾濫の影響を受けるような河畔にも生育可能であることから、本遺跡の立地からすれば、比較的得やすい種類であったといえる。また、植物珪酸体分析も合わせて実施したが、若干の植物珪酸体が見られた程度で、燃料材として利用された可能性が高い珪化組織片（組織内に植物珪酸体が配列するもの）が全く認められなかったため、燃料材として利用されたイネ科草本類の種類を明らかにすることは困難であった。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42，p.73-88。
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌，6，p.23-45。
- 菊池多賀夫（2001）地形植生誌。220p. 東京大学出版会。
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究，27，p.1-20。
- 近藤隼三（1988）植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壌と年代。ペドロジスト，32，p.189-202。
- 近藤隼三・佐藤 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用。第四紀研究，25，p.31-64。
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaeae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaeae, Bacillariaeae, Surirellaeae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 宮脇昭編著（1988）日本植生史 北海道。563p. 至文堂。
- 中村 純（1967）花粉分析。232p. 古今書院。
- 西田 茂・三浦正人・鈴木 信・吉田裕史洋・酒井秀治（2001）北海道埋蔵文化財センター調査報告第160集 江別市対産2遺跡（2）一石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一。財団法人北海道埋蔵文化財センター
- パリオ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（1）。慶應義塾横浜校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」，p.347-370，慶應義塾。
- 鈴木一久（1994）1993年9月9日野洲川洪水氾濫堆積物の3次元形態と堆積構造：1回の洪水氾濫で形成された複数の逆炭化構造ユニット。地質学雑誌，100，p.867-875。
- 鈴木一久（2001）洪水氾濫の堆積学。地研研報，48，69p. 地学団体研究会。

引用文献

- 上屋 真一
 1990 『柏木川 11 遺跡における浮遊選別法（フローテーション）による微細遺物採取方法について』 恵庭市教育委員会編『柏木川 11 遺跡』 同委員会 95-99 頁
- 江別市教育委員会
 編 1979 『江別太遺跡』 同市文化財調査報告書 IX 同委員会
 編 1999 『大麻 3 遺跡（7）』 同市文化財調査報告書 92 同委員会
- 大沼 忠春
 1982 『道央地方の土器』 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編『縄文文化の研究』第 6 巻 続縄文・南島文化 雄山閣出版 75-93 頁
- 大矢 義明
 編 2000 『札幌 N 遺跡』 農地改良に伴う発掘調査報告書 幕別町教育委員会
- 小山 正忠・竹原 秀雄
 編 1967 『新版標準土色帖』 日本色研事業
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター
 編 1983 『ママ子遺跡』 北埋調報 9 同センター
 編 1986 『美沢川流域の遺跡群 IX』 北埋調報 24 同センター
 編 1987 『千歳市ママ子遺跡 III』 北埋調報 36 同センター
 編 1990 『余市町栄町 5 遺跡』 北埋調報 66 同センター
 編 1991 『美沢川流域の遺跡群 XIV』 北埋調報 69 同センター
 編 1992 『美沢川流域の遺跡群 XV』 北埋調報 77 同センター
 編 1997 『キウス 5 遺跡（3）』 北埋調報 115 同センター
 編 1998 『キウス 5 遺跡（5）』 北埋調報 125 同センター
 編 2000 『江別市対雁 2 遺跡（1）』 北埋調報 147 同センター
 編 2001 『江別市対雁 2 遺跡（2）』 北埋調報 160 同センター
 編 2002 『江別市対雁 2 遺跡（3）』 北埋調報 177 同センター
- 札幌市埋蔵文化財センター
 編 1995 『H317 遺跡』 同市文化財調査報告書 46 同市教育委員会
 編 1996 『H37 遺跡 丘珠空港内』 同市文化財調査報告書 50 同市教育委員会
 編 1998 『H37 遺跡 栄町地点』 同市文化財調査報告書 57 同市教育委員会
 編 1999 『K499・K500・K501・K502・K503 遺跡』 同市文化財調査報告書 61 同市教育委員会
- 佐原 真
 1967 『山城における弥生式文化の成立—畿内第 I 様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—』 『史林』 第 50 巻第 5 号 733-757 頁
- 曾谷 龍典・佐藤 博之
 1980 『千歳地域の地質』 地質調査所
- 大丸 裕武
 1989 『完新世における豊平川扇状地と下流氾濫原の形成過程』 『地理学評論』 第 62 巻第 8 号 589-603 頁
- 高橋 禮
 1993 『器塚中の接合痕跡について』 坪井清足さんの古稀を祝う会編『論苑考古学』 天山会 415-436 頁
- 千歳市教育委員会
 編 1990 『イヨマイ 6 遺跡における考古学的調査（2）』 同市文化財調査報告書 XIV 同委員会

引用文献

- 千葉 豊・大下 明
編 1990 『小森阿遺跡』竹野町文化財調査報告書第8集 同町教育委員会
- 梅坂 恭代
1989a 『フローテーションの方法』『PROJECT SEEDS NEWS』No.1 6-7頁 (『PROJECT SEEDS NEWS』No.2の16頁に訂正・追加あり)
1989b 『浮遊選別装置の紹介』『PROJECT SEEDS NEWS』No.2 14頁
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター
編 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』同センター
編 1997 『柏原5遺跡』同センター
編 1998 『美沢東遺跡群』同センター
- 花岡 正光・長沼 孝
1990 『栄町5遺跡出土土器の胎土分析』財団遺文欄1990の170-173頁
- 伏島祐一郎・平川 一臣
1996 『北海道大学構内で観察された液状化跡—先史地蔵と液状化構造形成過程の解説—』『活断層研究』14 9-18頁
- 北海道開発局石狩川開発建設部
編 1979a 『石狩川治水地形分類図(6-2) 千歳川治水地形分類図(4-1)』同部
編 1979b 『豊平川治水地形分類図(2-1)』同部
- 北海道教育委員会
編 1977 『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』同委員会
編 1978 『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』同委員会
- 山内 清男
1979 『日本先史土器の編紋』先史考古学会
- 山田 悟郎
1995 『H317遺跡の古植生について』札幌市埋蔵文化財センター編1995 254-264頁
1998 『H37遺跡栄町地点の古環境について』札幌市埋蔵文化財センター編1998 116-127頁
- 由仁町教育委員会
編 1996 『川端遺跡・川端2遺跡』同委員会

財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 193 集

江別市 ^{ついで} 対雁 2 遺跡 (4)

—石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 平成 15 年 3 月 28 日

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌 685 番地 1

電話 (011) 386-3231

FAX (011) 386-3238

E-mail mail@domaibun.or.jp

印刷 山藤印刷株式会社

〒063-0051 札幌市西区宮の沢 1 条 4 丁目 16 番 1 号

電話 (011) 661-7161

FAX (011) 661-7173

E-mail mail@sando-sapporo.co.jp